

中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション
埋蔵文化財発掘調査報告書

石子原遺跡 山本西平遺跡
辻原遺跡 赤羽原遺跡

2007.3

中日本高速道路株式会社
長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション
埋蔵文化財発掘調査報告書

石子原遺跡 山本西平遺跡
辻原遺跡 赤羽原遺跡

2007.3

中日本高速道路株式会社
長野県埋蔵文化財センター

ホルンフェルス



花崗岩



チャート



下呂石



水晶



黒曜石



砂岩



緑色凝灰岩





布拵大 (25倍)

一分金拵大 (25倍)



サイコロ拵大 (25倍)



布拵大 (25倍)

はじめに

長野県南西部に位置する飯田市周辺は、穏やかな気候に恵まれた天竜川の流に沿った南アルプスを望む盆地で、西の文化との接点が多く見られる地域です。飯田市を含む伊那谷は交通の要所とされ、古くは稲が伝えられた道の一つと考えられています。古代には西は美濃国、東は上野国へと続く当時の幹線道路であった東山道が通っており、原始古代の人や物の動きを考える上で重要な地域です。また、現代でも中央自動車道が、物資流通の重要な路線になっています。この地に残された人々の活動の痕跡は、旧石器時代から近世にわたり、これまでも多くの先達によって発掘調査がなされ、数々の成果が報告されてきました。

今回報告をする石子原・山本西平・辻原・赤羽原遺跡は飯田市山本地区に所在し、中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション（仮）建設にかかわる発掘調査として平成12年度から17年度にかけておこなわれました。中央自動車道建設のために実施された昭和47年の調査遺跡に隣接するため、その時に残された課題を究明するための目的をかかげて調査にあたりました。

山本西平・辻原・赤羽原遺跡では、遺跡中心部の調査とならなかったため、遺構・遺物とも多くをとらえることができませんでしたが、今回の調査の中心となった石子原遺跡では、いくつかの成果を得ることができました。具体的には、旧石器時代の新たな石器資料、縄文時代早期立野式土器の良好な資料と石材による石器の使い分けの様子、古墳時代では墓域としての土地利用と6基の方形周溝墓の変遷、江戸時代の埋葬のあり方などがあげられます。また、旧石器時代の年代観を得るために地層の年代測定、江戸時代の墓に埋葬された人の血縁関係にせまるDNA分析、ほかにも黒曜石の産地同定や手鏡付着繊維の分析などをおこない、理化学的観点からも遺跡や地域の歴史にせまりました。今回の私たちの調査結果が、地域の歴史探求の一助になれば幸いです

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行にいたるまで深いご理解とご協力をいただいた中日本高速道路株式会社、国土交通省飯田国道工事事務所、飯田市・同教育委員会など関係機関、地元の地権者・関係者の方々、直接ご指導・ご助言いただいた長野県教育委員会文化財・生涯学習課、また発掘・整理作業に携わっていただいた多くの方々に敬意と感謝を申し上げます。

例 言

- 1 本書は、中央自動車道西宮線（以下「中央道」という）（仮称）飯田南ジャンクション（以下「飯田南JCT」という）の建設にかかわる飯田市山本および阿智村に所在する山本西平（やまもとにしだいら）遺跡、石子原（いしこばら）遺跡、辻原（つじはら）遺跡、赤羽原（あかばねはら）遺跡の発掘調査報告書である。

なお、本書で報告する内容は、すでに財団法人文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）「年報 17・21」および埋文センターニュース「みすずかる」等で調査概要を示してあるが、本書をもって最終報告とする。

- 2 発掘作業および整理作業は、埋文センターが中日本高速道路株式会社（以下「ネクソコ中日本」という）の委託を受けて実施したものである。
- 3 本書で使用した地図類は、飯田市遺跡分布図、飯田市都市計画図（1:2,500）、国土交通省作成の地形図（1:500、1:1,000）、国土地理院発行の地形図（1:25,000、1:50,000）をもとに作成した。
- 4 発掘調査、整理作業の分担は第 1 章にまとめて掲載した。
- 5 本書の執筆から刊行までの業務は、次の分担でおこなった。

原稿執筆、図・表・写真作成：

- | | |
|-----------------------|--------------------------------------|
| 第 3 章第 1 節 4 項 (1) | 市澤英利、長友恒人・小畑直也（奈良教育大学）、下岡順直（日本学術振興会） |
| 第 3 章第 1 節 4 項 (2) | 平林 彰、株式会社加速器分析研究所 |
| 第 3 章第 3 節 3 項 (7) 以外 | 鶴田典昭 |
| 第 3 章第 3 節 3 項 (7) | 平林 彰、望月明彦（沼津工業高等専門学校） |
| 第 3 章第 6 節 3 項 | 鶴田典昭 |
| 第 3 章第 6 節 6 項 | 茂原信生（奈良文化財研究所）、姉崎智子（群馬県立自然史博物館） |
| 第 3 章第 6 節 7 項 | 篠田謙一（国立科学博物館人類研究部） |
| 上記以外のすべて | 石上樹蔵 |

編集校正：平林 彰、校正：寺内貴美子、校閲：市澤英利

- 6 発掘作業及び整理作業の各段階で以下の委託事業を実施した。なお、出土繊維の分析鑑定については、信州大学繊維学部院生後藤卓真・新田勇紀の協力を得た。

- | | |
|-------------|------------------------|
| 測量・航空写真撮影 | ：日本空間情報技術株式会社、株式会社アイシー |
| 遺物撮影・報告書編集 | ：有限会社アルケールサーチ |
| C 14 炭素年代測定 | ：株式会社加速器分析研究所 |
| 熱ルミネッセンス分析 | ：株式会社古環境研究所 |
| 人骨鑑定 | ：京都大学霊長類研究所 茂原信生 |
| DNA 分析 | ：国立科学博物館人類研究部 篠田謙一 |

- 7 発掘調査にあたっては、次の方がたにご指導・ご協力をいただいた。（所属、職名、敬称略）

姉崎智子 安藤政雄 市村時雄 稲田孝司 岡村道雄 小畑直也 片山 透 後藤卓真 惟村志志 茂原信生
篠田謙一 下岡順直 鈴木次郎 早田 勉 竹尾 進 田中久男 土本 匡 寺平 宏 長佐古信也
長友恒人 新田勇紀 原山 智 牧野麻子 宮澤恒之 望月明彦 山内尚巳
中日新聞社 南信州新聞社 信濃毎日新聞社 信州日報社 長野県遺跡調査指導委員会（戸沢充則 樋口昇一
桐原 健 永峯光一 宮坂光昭 工桑善通 小野 昭 笹沢 浩 丸山敏一郎）竹佐中原遺跡等調査指導委
員会（戸沢充則 松島信幸 神村 透 小野 昭 佐川正敏 佐藤宏之）三遠南信道対策委員会 淨玄寺
白隠石堂園管理組合 国土交通省飯田国道事務所 県教育委員会文化財・生涯学習課（廣瀬昭弘 出河裕典
上田典男）飯田市生涯学習課（小林正春 馬場保之 渋谷恵美子 下平博之 坂井勇雄 吉川金利 羽生俊
郎）・山本支所・国県関連事業課・環境課・市民課

- 8 本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は飯田市教育委員会に引き渡される予定である。

凡 例

1 本書に掲載した実測図の縮尺は、特に断りのある場合を除いて以下のとおりである。

- (1) 主な遺構図 竪穴住居跡 1:60 住居内施設、土坑 1:40 墓坑 1:40 (一部 1:20)
方形周溝墓 1:80 古墳 1:100
- (2) 主な遺物実測図 土器 1:3 金属製品 1:2 土器拓影 1:2~1:3 銭貨拓影 2:3
石器(石鏃など) 2:3 石器(打製石斧、横刃型石器、磨石など) 1:2
石器(石皿、台石) 1:4

2 遺物写真の縮尺は以下のとおりである。

土器 1:2-1:6 陶器 1:4 石器 2:3-1:2 金属製品 1:2 銭貨 2:3

3 遺物実測図の番号は次のようにつけてある。






- (1) 石子原遺跡 土器(縄文早期、縄文中期、古墳) 時代ごとに1から通し番号
石器(旧石器、縄文早期) 1から通し番号
石器(縄文中期) 1から通し番号
石製品、金属製品、銭貨ほか(江戸) 1から通し番号
陶器(江戸) 1から通し番号
- (2) 山本西平・辻原・赤羽原遺跡
土器、石器ごとに1から通し番号

4 遺構番号は以下の通りである。

竪穴住居跡(SB) 土坑(SK) 集石炉、集石をともなう墓坑(SH) 焼土址(SF) 溝(SD)
方形周溝墓、古墳、墓坑(SM) 遺物集中区(SQ)

基本的には遺跡ごとに01より番号をつけている。ただし、石子原遺跡の「SM」については中央道西宮線調査時の続き「03」から番号をつけている。土坑については重複などを直したほかは、発掘時の番号をそのまま用いた。ただし、墓坑と明らかに判断できるものについては、墓坑の項で記述した。SK、SF、SMなどは調査地当初と性格が異なっていることがある。

5 掲載図中のスクリーンパターンや記号は、特に断りのある場合を除いて以下の事象を示している。

- (1) 遺構 焼土 地山赤変部分 
- (2) 遺物 胎土繊維含有  須恵器  赤彩  黒色 

目次

巻頭図版
はじめに
例言
凡例

第1章 遺跡調査の経過、目的および方法	1
第1節 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業の経過	1
3 整理作業の経過	3
第2節 調査の目的と方法	3
1 過去の調査について	3
2 発掘作業目的と方法	4
3 整理作業目的と方法	6
4 遺物の収納方法	8
第2章 遺跡の位置と環境	9
第1節 遺跡の位置	9
第2節 遺跡の環境	9
1 地理環境	9
2 地形・地質環境	10
3 歴史環境	12
第3章 石子原遺跡	17
第1節 遺跡と調査の概要	17
1 遺跡の概観	17
2 調査範囲と調査経過	17
3 基本層序	19
4 遺跡の年代測定	27
(1) 地層のルミネッセンス年代測定	27
(2) 炭化物のC14年代測定 AMS	30
第2節 縄文時代の遺構	36
1 縄文早期の遺構	36
(1) 竪穴住居跡	36
(2) 遺物集中区	41
(3) 土坑	45
(4) 焼土址・焼土坑	53
(5) 集石炉	59
2 縄文中期の遺構	63
(1) 竪穴住居跡	63
(2) 土坑	63
第3節 縄文時代の遺物	65
1 縄文早期の土器	65
(1) 押型文土器の分類	65
(2) 住居跡出土の土器	66
(3) 遺物集中区出土の土器	80

(4) 土坑出土の土器	80
(5) 焼土址出土の土器	82
(6) 集石炉出土の土器	82
(7) 遺構外出土の土器	87
2 縄文中期の土器	87
(1) 遺構出土の土器	87
(2) 遺構外出土の土器	87
3 旧石器・縄文時代の石器	98
(1) 器種分類と石器群の概要	98
(2) 縄文時代石器の各器種の概要	98
(3) 住居跡出土の石器	101
(4) 遺物集中区出土の石器	118
(5) 土坑・焼土址・集石炉出土の石器	118
(6) 遺構外出土の石器	118
(7) 黒曜石の産地同定について	131
第4節 古墳時代の遺構と遺物	139
1 竪穴住居跡	139
2 方形周溝墓	139
3 古墳	147
4 古墳出土の土器	148
第5節 近世の遺構と遺物	150
1 墓坑	150
(1) 素掘りの墓坑	150
(2) 集石をとまなう墓坑	160
(3) 馬埋葬の墓坑	163
2 土坑	164
3 溝址	166
4 遺構出土の遺物	166
5 遺構外出土の遺物	171
第6節 成果と課題	176
1 縄文時代早期の遺構と集落について	176
(1) 住居跡	176
(2) 集石炉と焼土坑	176
(3) 集落の分布	176
2 石子原遺跡の押型文土器群について	178
3 石子原遺跡の石器群について	180
(1) 旧石器時代の石器群	180
(2) 押型文土器群にとまなう石器群	180
(3) 押型文土器にとまなう石器群の石材組成について	181
(4) 周辺地域の押型文土器にとまなう石器の器種組成について	183
(5) 今後の課題	185
4 古墳時代の方形周溝墓	186
5 近世墓群について	188
(1) 墓坑の形態	188
(2) 埋葬形態	189
(3) 墓坑群の時期	189
(4) 墓坑の変遷	192

(5)SM17の被葬者と墓坑群の性格	192
6 長野県飯田市の石子原遺跡から出土した人骨と馬骨	193
(1)人骨について	193
(2)馬骨について	196
(3)まとめ	196
7 長野県飯田市石子原遺跡出土近世人骨のDNA分析	198
(1)はじめに	198
(2)研究方法	198
(3)結果および考察	199
第4章 山本西平遺跡	204
第1節 遺跡の概観と調査の概要	204
1 遺跡の概観	204
2 調査の概要	205
第2節 遺構と遺物	207
1 自然流路	207
2 出土遺物	207
第3節 小結	208
第5章 辻原遺跡	209
第1節 遺跡の概観と調査の概要	209
1 遺跡の概観	209
2 調査の概要	210
第2節 遺構と遺物	211
1 土坑	211
2 遺構出土の遺物	211
3 遺構外出土の遺物	212
第3節 小結	213
第6章 赤羽原遺跡	215
第1節 遺跡の概観と調査の概要	215
1 遺跡の概観	215
2 調査の概要	216
第2節 遺構と遺物	217
1 土坑	217
2 遺構外出土の遺物	217
第3節 小結	218
第7章 結 語	219

写真図版

引用・参考文献

抄録

奥付

挿 図 目 次

第 1 図	国道 474 号 (飯喬道路) の路線および調査遺跡	2	第 28 図	石子原遺跡縄文土坑遺構図 2	48
第 2 図	中央自動車道西宮線にかかる遺跡範囲	5	第 29 図	石子原遺跡縄文土坑遺構図 3	50
第 3 図	山本西平・石子原・辻原・赤羽原遺跡の調査区・グリッド配置図	7	第 30 図	石子原遺跡縄文早期焼土址・焼土坑遺構図 1	54
第 4 図	山本西平・石子原・辻原・赤羽原遺跡の周辺地質図	10	第 31 図	石子原遺跡縄文早期焼土址・焼土坑遺構図 2	56
第 5 図	石子原・辻原・竹佐中原遺跡の基本土層	11	第 32 図	石子原遺跡縄文早期焼土址・焼土坑遺構図 3	58
第 6 図	飯田市山本地区および周辺遺跡	14	第 33 図	石子原遺跡縄文早期集石炉遺構図	60
第 7 図	石子原遺跡の調査範囲	18	第 34 図	石子原遺跡縄文中期竪穴住居跡 S B 08 遺構図	64
第 8 図	石子原遺跡の地形図 (1:800) および土層断面図 (1:60)	19	第 35 図	押型文の模式図	65
第 9 図	石子原遺跡全体図	20	第 36 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 01 出土土器 1	67
第 10 図	石子原遺跡割付図 1	21	第 37 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 01 出土土器 2 S B 02 出土土器 1	68
第 11 図	石子原遺跡割付図 2	22	第 38 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 02 出土土器 2	69
第 12 図	石子原遺跡割付図 3	23	第 39 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 02 出土土器 3 S B 03 出土土器 1	70
第 13 図	石子原遺跡割付図 4	24	第 40 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 03 出土土器 2 S B 03・04 切り合い出土土器 S B 03・05 切り合い出土土器	72
第 14 図	石子原遺跡割付図 5	25	第 41 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 04 出土土器 1	74
第 15 図	石子原遺跡割付図 6	26	第 42 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 04 出土土器 2	75
第 16 図	第 IV 層等価線量の測定結果と解析	29	第 43 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 04 出土土器 3 S B 05 出土土器 1	76
第 17 図	第 IV 層スプラニリアリティー補正の測定結果と解析	29	第 44 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 05 出土土器 2 S B 06 出土土器 1	77
第 18 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 01 遺構図	36	第 45 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 06 出土土器 2	78
第 19 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 02 遺構図	37	第 46 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 06 出土土器 3 遺物集中区出土土器 土坑出土土器 1	79
第 20 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 03 遺構図	38	第 47 図	石子原遺跡縄文早期土坑出土土器 2	81
第 21 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 04 遺構図	39	第 48 図	石子原遺跡縄文早期土坑出土土器 3 焼土址・焼土坑出土土器 集石炉出土土器	83
第 22 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 05 遺構図	40	第 49 図	石子原遺跡縄文早期遺構外出土土器 1	84
第 23 図	石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 S B 06 遺構図	40	第 50 図	石子原遺跡縄文早期遺構外出土土器 2	85
第 24 図	石子原遺跡縄文早期遺物集中区 S Q 02 遺構図および遺物分布図	42			
第 25 図	石子原遺跡縄文早期遺物集中区 S Q 03 遺物分布図	43			
第 26 図	石子原遺跡縄文早期遺物集中区 S Q 04 遺物分布図	44			
第 27 図	石子原遺跡縄文土坑遺構図 1	46			

第 51 図	石子原遺跡縄文早期遺構外出土土器 3	86	第 78 図	石子原遺跡古墳時代方形周溝墓 S M 04 遺構図	142
第 52 図	石子原遺跡縄文中期整穴住居跡 S B 08 出土土器 遺構外出土土器	88	第 79 図	石子原遺跡古墳時代方形周溝墓 S M 05 遺構図	143
第 53 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 01 出土土器 1	103	第 80 図	石子原遺跡古墳時代方形周溝墓 S M 06 遺構図	144
第 54 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 01 出土土器 2	104	第 81 図	石子原遺跡古墳遺構図	145
第 55 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 02 出土土器	105	第 82 図	石子原遺跡古墳時代整穴住居跡 S B 07 出土土器	148
第 56 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 03 出土土器 1	106	第 83 図	石子原遺跡古墳出土土器	149
第 57 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 03 出土土器 2	107	第 84 図	石子原遺跡江戸時代墓坑 S M 07 遺構図 および遺物出土状況図	151
第 58 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 04 出土土器 1	109	第 85 図	石子原遺跡江戸時代墓坑 S M 08・18 遺構図および遺物出土状況図	152
第 59 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 04 出土土器 2	110	第 86 図	石子原遺跡江戸時代墓坑 S M 15 遺構図 および遺物出土状況図	153
第 60 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 04 出土土器 3	111	第 87 図	石子原遺跡江戸時代墓坑 S M 17 遺構図 および遺物出土状況図	155
第 61 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 05 出土土器	112	第 88 図	石子原遺跡江戸時代墓坑遺構図 1	157
第 62 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 06 出土土器 1	113	第 89 図	石子原遺跡江戸時代墓坑遺構図 2	159
第 63 図	石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 S B 06 出土土器 2	114	第 90 図	石子原遺跡江戸時代墓坑遺構図 3	161
第 64 図	石子原遺跡縄文中期整穴住居跡 S B 08 出土土器	115	第 91 図	石子原遺跡江戸時代馬墓遺構図	163
第 65 図	石子原遺跡縄文早期遺物集中区出土土器	116	第 92 図	石子原遺跡江戸時代土坑遺構図	165
第 66 図	石子原遺跡縄文土坑・焼土址・焼土坑 出土土器	117	第 93 図	石子原遺跡江戸時代出土遺物 1	168
第 67 図	石子原遺跡 1 区旧石器時代遺物分布	119	第 94 図	石子原遺跡江戸時代出土遺物 2	169
第 68 図	石子原遺跡旧石器時代の石器 1	121	第 95 図	苧麻の赤外吸収スペクトル	170
第 69 図	石子原遺跡旧石器時代の石器 2	122	第 96 図	大麻の赤外吸収スペクトル	170
第 70 図	石子原遺跡遺構外出土土器 1	123	第 97 図	手鏡付着繊維の赤外吸収スペクトル	170
第 71 図	石子原遺跡遺構外出土土器 2	124	第 98 図	石子原遺跡江戸時代出土遺物 3	172
第 72 図	石子原遺跡遺構外出土土器 3	125	第 99 図	石子原遺跡江戸時代出土遺物 4	174
第 73 図	石子原遺跡遺構外出土土器 4	126	第 100 図	石子原遺跡全体図	177
第 74 図	黒曜石産地分布	133	第 101 図	方形周溝墓形態別変遷図	188
第 75 図	産地原石判別図	133	第 102 図	埋葬形態分類図	190
第 76 図	石子原遺跡古墳時代整穴住居跡 S B 07 遺構図	140	第 103 図	石子原遺跡 5 区遺構配置図	191
第 77 図	石子原遺跡古墳時代方形周溝墓 S M 03 遺構図	141	第 104 図	ミトコンドリア DNA の増幅部位	200
			第 105 図	現代日本人と石子原江戸時代人のハブ ログループ頻度の比較	203
			第 106 図	山本西平遺跡の遺跡範囲図	204
			第 107 図	山本西平遺跡の調査範囲図	205
			第 108 図	山本西平遺跡の遺構全体図および自然流 路	206
			第 109 図	山本西平遺跡の自然流路土層断面図	207
			第 110 図	山本西平遺跡遺構外出土土器	207
			第 111 図	辻原遺跡の調査範囲図	209

第112図	辻原遺跡の土層断面図	210	第118図	辻原遺跡出土石器	214
第113図	辻原遺跡の遺構全体図 1	211	第119図	赤羽原遺跡の調査範囲図	215
第114図	辻原遺跡の遺構全体図 2	211	第120図	赤羽原遺跡の遺構全体図 1	216
第115図	辻原遺跡 S K 02 遺構図	212	第121図	赤羽原遺跡の遺構全体図 2	217
第116図	辻原遺跡 S K 03 遺構図	212	第122図	赤羽原遺跡 S K 01 遺構図	217
第117図	辻原遺跡出土土器	213	第123図	赤羽原遺跡出土遺物	218

挿 表 目 次

第 1 表	年度ごと遺跡別の調査面積	3	第13表-3	石器観察表	129
第 2 表	年度ごとの調査体制	3	第13表-4	石器観察表	130
第 3 表	中央自動車道西宮線関連遺跡の位置	9	第14表	出土黒曜石産地組成	131
第 4 表-1	山本西平・石子原・辻原・赤羽原遺跡 周辺の遺跡一覧	15	第15表	産地原石判別群 (SEIKO SEA-2110L 蛍 光 X 線分析装置による)	132
第 4 表-2	山本西平・石子原・辻原・赤羽原遺跡 周辺の遺跡一覧	16	第16表-1	出土黒曜石産地推定結果	134
第 5 表	測定結果と IRSL 年代	30	第16表-2	出土黒曜石産地推定結果	135
第 6 表-1	石子原遺跡土坑出土炭化物の C14 年代 測定	33	第16表-3	出土黒曜石産地推定結果	136
第 6 表-2	石子原遺跡土坑出土炭化物の C14 年代 測定	34	第16表-4	出土黒曜石産地推定結果	137
第 7 表	石子原遺跡出土土器に付着した炭化物 の C14 年代測定	35	第16表-5	出土黒曜石産地推定結果	138
第 8 表	縄文早期焼土址・焼土坑一覧	61	第17表	方形周溝墓一覧	147
第 9 表-1	縄文土坑一覧	62	第18表	江戸時代墓坑一覧	162
第 9 表-2	縄文土坑一覧	63	第19表	江戸時代陶器出土数一覧	167
第10表-1	縄文早期実測土器一覧	89	第20表	遺構別出土銭貨一覧	167
第10表-2	縄文早期実測土器一覧	90	第21表	出土銭貨一覧	173
第10表-3	縄文早期実測土器一覧	91	第22表	江戸時代墓坑出土骨一覧	175
第10表-4	縄文早期実測土器一覧	92	第23表	押型文期の竪穴住居跡覆土出土石器組 成	181
第10表-5	縄文早期実測土器一覧	93	第24表	押型文期の竪穴住居跡覆土出土の器種 別石材組成	182
第10表-6	縄文早期実測土器一覧	94	第25表	出土地点別石材組成	182
第10表-7	縄文早期実測土器一覧	95	第26表	押型文期の石器器種組成	183
第10表-8	縄文早期実測土器一覧	96	第27表	出土人骨概要一覧	194
第10表-9	縄文早期実測土器一覧	97	第28表	実験に用いたサンプルと部位	198
第11表	器種別石材組成	99	第29表	プライマーの配列とアニーリングの温度 ……………	199
第12表	遺構別器種組成	102	第30表	D-loop の HV1 領域の塩基配列	200
第13表-1	石器観察表	127	第31表	D-loop の HV2 領域の塩基配列	202
第13表-2	石器観察表	128	第32表	mDNA10360-10485 領域の塩基配列	202
			第33表	各個体のハプログループ	203

写 真 目 次

PL1	石子原遺跡 1 区全景	層断面	
PL2	石子原遺跡 4 区全景 石子原古墳土層断面 5 区土	PL3	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (S B 01・02・

	03・04)	PL22	石子原遺跡 縄文早期集石炉 (SH 01)、遺構外出土土器
PL4	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 06)、遺物集中区 (SQ 02・03・04)、焼土址・焼土坑 (SF 53・57・88)	PL23	石子原遺跡 遺構外出土土器
PL5	石子原遺跡 縄文早期集石炉 (SH 01・02)、土坑 (SK 84・85・86)	PL24	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 01) 出土土器
PL6	石子原遺跡 縄文中期竪穴住居跡 (SB 08)、土坑 (SK 51)、古墳時代竪穴住居跡 (SB 07)	PL25	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 02・03) 出土土器
PL7	石子原遺跡 方形周溝墓 (SM 03・04・05・06)、石子原古墳	PL26	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 03) 出土土器
PL8	石子原遺跡 石子原古墳 周溝	PL27	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 04) 出土土器
PL9	石子原遺跡 江戸時代墓群 墓坑 (SM 07・08・09・11・12・21)	PL28	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 04) 出土土器
PL10	石子原遺跡 江戸時代墓坑 (SM 13・14・15・16・17)	PL29	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 05・06) 出土土器
PL11	石子原遺跡 江戸時代墓坑 (SM 18・19・20・22・23・24・SH 03・04・05)	PL30	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 06) 出土土器
PL12	石子原遺跡 江戸時代墓坑 (SH 06)、馬墓 (SM 10)、溝 (SD01)、溝出土遺物	PL31	石子原遺跡 縄文遺物集中区 (SQ 02・03・04)、土坑 (SK 01・02・67・70)、集石炉 (SH 01) 出土土器
PL13	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 01・02) 出土土器	PL32	石子原遺跡 縄文焼土址・焼土坑 (SF 04・83・90・94・95)、旧石器時代の石器
PL14	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 02) 出土土器	PL33	石子原遺跡 遺構外出土土器
PL15	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 03) 出土土器	PL34	石子原遺跡 縄文中期竪穴住居跡 (SB 08)、古墳周溝出土土器
PL16	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 03・04・05) 出土土器	PL35	石子原遺跡 縄文中期竪穴住居跡 (SB 08) 出土土器
PL17	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 04) 出土土器	PL36	石子原遺跡 江戸時代墓坑出土銭貨
PL18	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 05・06) 出土土器	PL37	石子原遺跡 江戸時代墓坑・遺構外出土銭貨
PL19	石子原遺跡 縄文早期竪穴住居跡 (SB 06) 出土土器	PL38	石子原遺跡 江戸時代墓坑出土鉄・銅製品、木製品
PL20	石子原遺跡 縄文遺物集中区 (SQ 02・04) 焼土址・土坑 (SK 01・03) 出土土器	PL39	山本西平遺跡 全景、自然流路、出土土器
PL21	石子原遺跡 縄文土坑 (SK 04・10・30・31・42・43・59・65)、焼土址・焼土坑 (SF 29・61・93) 出土土器	PL40	辻原遺跡 全景、土層断面
		PL41	辻原遺跡 土坑 (SK 02・03)、出土土器
		PL42	赤羽原遺跡 全景、トレンチ、土坑 (SK 01)
		PL43	赤羽原遺跡 トレンチ、出土土器・石器・礫

第1章 遺跡調査の経過、目的および方法

第1節 調査の経過

1 調査に至る経緯

山本西平遺跡、石子原遺跡、辻原遺跡、赤羽原遺跡の4遺跡は、中央道と国道474号飯橋道路（以下「飯橋道路」という。）の分岐飯田南JCT建設に関わる遺跡として調査された。

飯橋道路は、長野県と静岡県を結ぶ三遠南信自動車道の県内部分、中央道との分岐である飯田南JCTから（仮称）飯田東インターまでの約15km区間として平成2（1990）年に基本計画が決定され、平成9（1997）年に事業化が決定した。基本計画の決定を受けて、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）は、飯橋道路事業予定地内の遺跡を確認するため、平成6（1994）年度に飯田市教育委員会の協力を得て踏査を実施した。対象地は山林や荒廃した耕作地等が多いため踏査だけでは遺跡の実態を把握することができず、したがって試掘調査が必要であると判断した（県教委2000）。平成6年から13年の踏査および試掘調査などによって、石子原遺跡については、事業用地内に旧石器・縄文・弥生・古墳時代および江戸時代の遺構・遺物の存在が予想された。その他の遺跡についても、さらなる試掘調査の必要性が認められた。

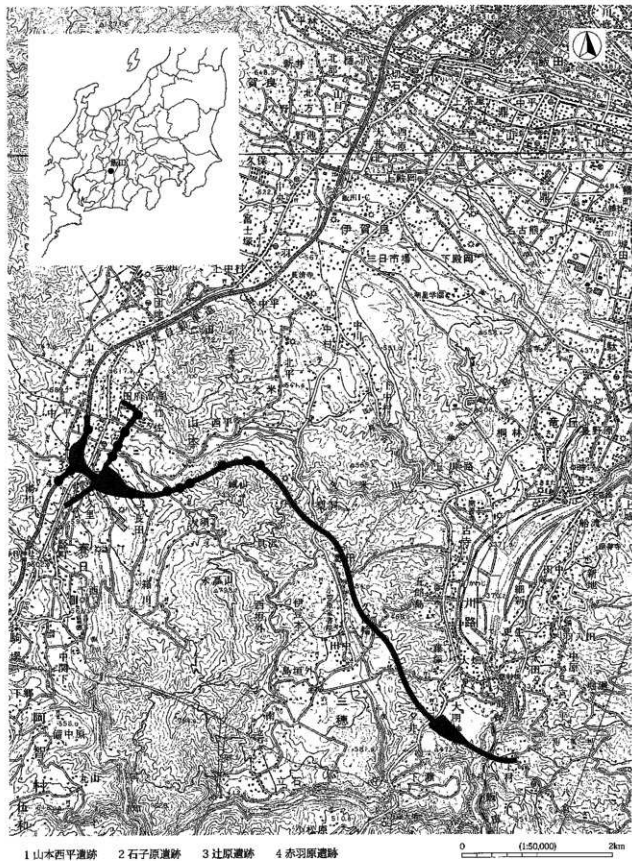
この結果を受け、建設省中部地方整備局、県教委、飯田市教育委員会、長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）の四者が協議を重ね、関連遺跡について記録保存のための発掘調査をおこなうことが確認された。さらに、飯田南インターチェンジの出入り口と一般国道153号への接続のため、総延長約1.4kmのバイパス（以下「アクセス道路」という。）も事業化され、このアクセス道路事業用地内にも埋蔵文化財発掘調査の対象となった。

平成12（2000）年度に調査に入ったが、事業主体は、建設省中部整備局で、平成13年からは国土交通省中部地方整備局と名称変更された。17年度から飯田南JCT関連の4遺跡に関わる部分は日本道路公団中部支社へと移行し、さらに、同年10月、中日本高速道路株式会社へと変遷している。

2 発掘作業の経過

発掘調査は、用地買収の終了した場所から着手することとなり、いくつかのブロックに分けての調査が余儀なくされた。そのため、調査期間は平成12（2000）年から17年まで、6年間継続することになった。3章から6章で遺跡ごとに調査状況を述べるが、概要は次の通りである。

- 平成12年： 石子原遺跡1・2区本調査……縄文時代早期住居跡6、古墳時代方形周溝墓3、石子原古墳を検出
石子原遺跡3区試掘調査
辻原遺跡JCT部分試掘調査
赤羽原遺跡JCT部分試掘調査
- 平成13年： 山本西平遺跡試掘調査、本調査（一部拡張区のみ）
辻原遺跡試掘調査
赤羽原遺跡試掘調査
- 平成14年： 辻原遺跡アクセス道路部分本調査、JCT部分B区本調査
- 平成15年： 赤羽原遺跡アクセス道路部分試掘調査
- 平成16年： 赤羽原遺跡アクセス道路部分試掘調査
石子原遺跡4・5区本調査……縄文早期遺物集中区3、同中期住居跡1、江戸時代墓坑群を検出
- 平成17年： 辻原遺跡D・E区本調査



第1図 国道474号(飯橋道路)路線および調査遺跡

年度	石子原遺跡		赤羽原遺跡		辻原遺跡		山本西平遺跡			
	契約面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	契約面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	契約面積 (㎡)	調査延べ面積	契約面積 (㎡)	調査面積 (㎡)		
H12	20,000	15,000	760	760	2,700	2,700	800	800		
H13									200	900
H14									230	600
H15									330	
H16		5,000								
H17										1,200
H17										
合計	20,000	20,000	760	760	2,700	2,700	800	800		

第1表 年度ごと遺跡別の調査面積

また、年度ごとの調査体制は第2表にあり、発掘調査補助員は次の通りである。

伊藤 和恵 伊東 裕子 井ノ口隆勇 牛山きみ系 大田 沢男 神戸 鶴三 北原 裕 北澤 兼男
 金沢勢津子 金田 都 木下 貞子 木下 力弥 木下 義男 木下由紀子 胡桃澤庄治 嶺山 修三
 所沢ちづ子 瀬古 郁保 高橋セキ子 谷村 悦子 竹村 和子 竹村サダエ 竹村 定満 竹村 訓一
 中野 充夫 中野満里子 中島 俊明 中村 信 中村地香子 中山 健次 林 伸好 原 浩子
 羽生 俊郎 福岡 勝利 古田 雅彦 牧内 修 牧内 福一 牧ノ内昭吉 松井 明治 水野 明子
 箕島 正三 森本 和宏 山田 康夫 吉地 武虎

	所長	調査部長	担当課長	担当調査研究員
平成12年度	佐久間敏四郎	小林秀夫	百瀬長秀	上田 真・大竹憲昭
平成13年度	深瀬弘夫	小林秀夫	百瀬長秀	大竹憲昭・青木一男・西嶋力・若林卓
平成14年度	深瀬弘夫	小林秀夫	百瀬長秀	大竹憲昭・青木一男・西嶋力・若林卓
平成15年度	深瀬弘夫	市澤英利	平林 彰	若林卓
平成16年度	小沢哲夫	市澤英利	平林 彰	石上重隆・若林卓・大竹憲昭・土屋哲樹
平成17年度	仁科松男	市澤英利	平林 彰	石上重隆
平成18年度	仁科松男	市澤英利	平林 彰	若林卓・寺内貴美子

第2表 年度ごとの調査体制

3 整理作業の経過

遺物台帳の作成や写真アルバムの整理など、基礎的な整理作業は各調査年度の冬期間におこなった。報告書に向けた本格的な整理作業は平成17(2005)年、報告書の編集刊行は18年度におこなった。

平成17年度の整理作業は石上周蔵があたり、石器実測については町田勝則、鶴田昭典が担当した。18年度は平林 彰が編集、若林 卓が編集補助および移管手続き等をおこなった。

平成17年度・18年度の整理作業補助員は次の通りである。

遺構図面：浅井とし子 稲玉美紀子 倉沢より子 高橋 康子 柳原 澄子 山下 千幸
 土器・金属製品・木製品実測・拓本：浅井とし子 飯島 公子 倉沢より子 柳原 澄子
 石器実測・トレース：市川ちづ子 大林久美子 鳥羽 仁美 佐藤志津子 高橋 康子 渡辺恵美子

第2節 調査の目的と方法

1 過去の調査について

今回の調査は、中央道の飯田南JCT建設ということで、昭和47(1972)年に実施された中央道建設に伴う発掘調査地点の隣接地でおこなった。そこで、簡単に当時の調査状況について振り返っておきたい。なお、山本地区の調査報告は昭和48年刊行の「中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一飯田市内その2、その3ー」としてまとめられている。

石子原遺跡

昭和47年6月1日～6月29日、8月17日～9月21日に調査した。

旧石器時代のブロック3、縄文時代早期から中期にかけての土坑23、縄文時代中期の配石遺構1、弥生時代の方形周溝墓3などを検出し、石子原古墳を調査した。

ことに、A・B地点から出土した旧石器は、当時、「前期旧石器存否論争」の焦点となり注目を集めた。なかでもA地点の石器は10×12mの範囲から167点の石器がまとまって出土しており、報告書では「前期旧石器末」という年代的な位置付けられた。数多い長野県の旧石器時代遺跡の中にあつて、最古級の評価が与えられたのである（県教委1973）。一方、B地点および古墳のマウンドから出土したホルンフェルス製石器は、旧石器時代のもか縄文時代か、判断に苦しむ資料である。

方形周溝墓は3基調査した。2号方形周溝墓の主体部からは木炭が出土した。上郷黒田垣外遺跡の木炭棺と同様な埋葬施設であった可能性が考えられる。また、1号周溝墓からはガラス小玉が出土している。

山田遺跡（現 辻原遺跡）

現在の辻原遺跡である。当時は山田遺跡として昭和47（1972）年6月1日～3日まで調査した。遺構は検出できず、遺物は縄文中期後半の土器と打製石斧、石鏃などが出土している。

柳田遺跡（現 湯川遺跡）

現在の湯川遺跡である。当時は柳田遺跡として昭和47（1972）年6月3日～13日まで調査した。赤羽原遺跡と湯川を挟んで対岸に位置する。竪穴住居跡2、土坑10、溝状遺構1を検出した。住居跡はいずれも縄文時代中期後半のものである。

2 発掘作業目的と方法

山本地区の発掘調査の目的

山本地区の発掘調査は、JCT、インターチェンジ、自動車道本線、アクセス道路が対象で、隣接遺跡を広く調査する状況にあつた。そこで遺跡相互の関係や一帯の開発過程の解明に向けて発掘調査にあつた。特に石子原遺跡は、昭和47年の調査で明らかとなっていることがある一方で、多くの課題も残されており、以下の目的に沿って調査した。

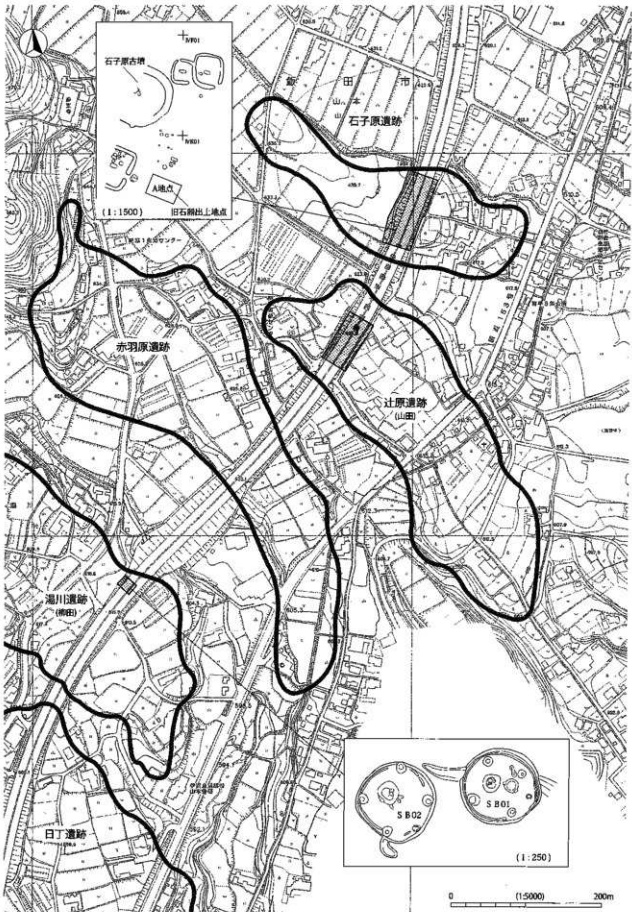
- 1 石子原遺跡A地点の旧石器の性格をつかむため、同時期の遺物の広がりをつかむ。特に未発見の遺跡の発見に努める。
- 2 遺跡の形成過程を統一的に明らかにするため、科学分析を有効に利用して土層の対比をおこなう。
- 3 地形的に丘陵部と谷部があり、国道より西の一段高い部分とそれより低い部分における土地利用の変遷の違い、古墳や方形周溝墓と集落などの関係をつかむ。そのために、周辺部の低地にも試掘トレンチを入れ、旧地形の復元に努める。

実際の調査方法については、埋文センター「調査の方針と手順」に準じておこなった。その方法は以下の通りである。

遺跡名称と遺跡記号

遺跡名は、県教委作成の遺跡台帳に記載されている名称とし、調査記録の便宜を図るために大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を用いた。遺物の注記などはこの記号を用いている。1文字目は飯田地区の「I」、2・3文字目は遺跡の呼称からとっている。また、遺跡名の読み方は、県遺跡台帳によつているため、地元での呼称とやや異なるものがある。本書にかかわる遺跡記号は以下のとおりである。

赤羽原 (AKABANEHARA) IAB 石子原 (ISHIKOBARA) IIK
辻原 (TSUJIHARA) ITJ 山本西平 (YAMAMOTONISHIDAIRA) IYN



第2図 中央自動車道西宮線にかかる遺跡範囲

遺構名称と遺構記号

遺構の名称は検出時に決定するために、遺構の種類や性格に適合しなかったり、その名称をつけることができなかつたりする場合があります。そのため、遺構の形状および特徴で区分した。記録・注記には次の記号を用いた。本書では、略号をそのまま使用した。そのため、墓坑には、S M、S K、S Hの三者が、集石炉にはS H、S Kが混在している。埋文センターでは以下のように遺構記号を用いている。

S B 竪穴住居跡 S K 土坑 S H 集石炉・配石 S M 墳墓
S F 屋外炉・火を炊いたあと S D 溝跡・堀跡 S Q 遺物集中区

調査区の設定

調査区は、国土地理院の平面直角座標系の第Ⅷ系（ $X = 0.0000$ 、 $Y = 0.0000$ ）を基準に、200の倍数値で $200 \times 200\text{m}$ の区画を設定して大々地区とした。北西から南東方向にⅠ・Ⅱ・Ⅲのローマ数字を与えた。飯田南JCT関連の遺跡は近接しているため、統一してⅠからX地区まで設定した。Ⅰ区は $X = -58,800$ 、 $Y = -67,200$ を基準点としている。ただし、大々地区のⅧ区・Ⅸ区は竹佐中原遺跡のⅠ区・Ⅴ区にあたる。

大々地区の中は $40 \times 40\text{m}$ の25区に分割して大地区とした。北西から南東へAからYのアルファベットを与えた。

さらに、大地区を $8 \times 8\text{m}$ の25区に分割して中地区とした。中地区は、北西から南東へ1～25までの番号を与えた。この中地区は、測量や遺構外から出土した遺物などの取り上げの基準とした。

旧石器面の調査のために、小地区を設定した。小地区は大地区をX軸に合わせてA～T、Y軸に合わせて01～20の番号を与えて40地区に分割した。出土地点を表せなかつた遺物を戻せるようにした。

座標値については、調査が日本測地系から世界測地系への変換の年度と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

3 整理作業目的と方法

整理作業は、複数の遺構を検出し、数時代にわたる遺物が出土した石子原遺跡が中心になった。基礎資料の提示に主眼を置き、全点の計測、観察をおこなった。おもな内容は次のとおりである。

- ・ 立野式期の土器・石器ならびに同期の遺構に関する基礎資料の提示と分析
- ・ 江戸時代の遺構・遺物の基礎資料の提示と分析
- ・ 旧石器関連については、ブロック等の検出がなかつたことから基礎資料の提示にとどめ、総合的な考察については竹佐中原遺跡の分析の中で考えることとした。

基礎整理

平成12年度～平成16年度は、冬期間に遺跡ごとの基礎整理をおこなった。遺物の洗浄、注記、遺物台帳の作成、写真の整理、台帳作成、遺構図面の修正、所見の整理などである。

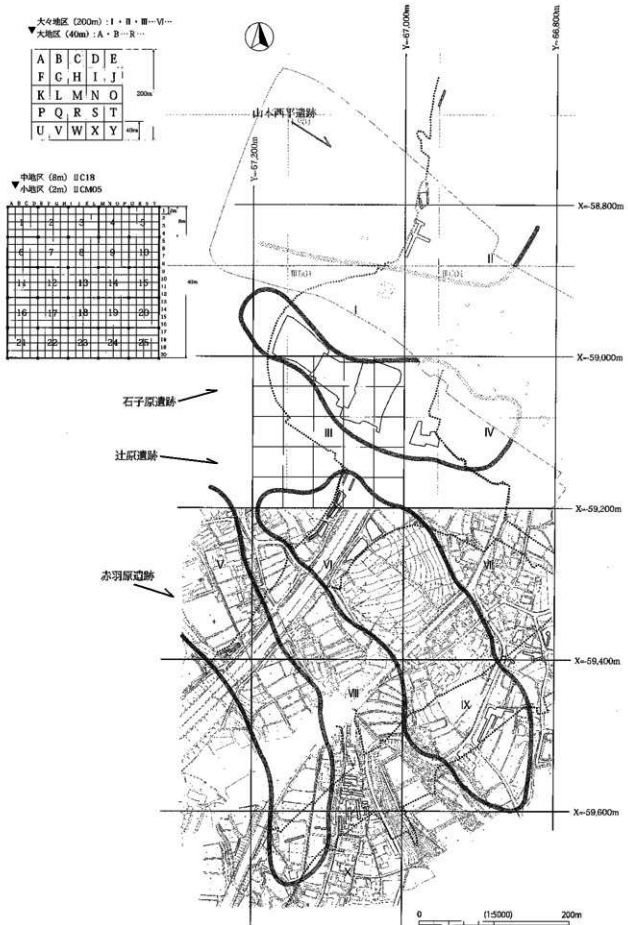
報告書作成に向けた整理作業

平成17・18年度におこなった。方法は次の通りである。

遺物は、まず土器・石器・金属製品など材質ごとに分類した。

土器は、遺構またはグリッド単位に接合を試みたが、磨耗が激しくて接合するものはほとんどなかつた。土器は全点の重量を計測し、分類をおこない、実測図等資料提示遺物を抽出した。抽出した押型土器は、鉱物の含有率が高いものが多く非常に脆いため、TO T土と石の補強材（株式会社田中地質コンサルタント）を含まれて補強した。なお、計測重量は含浸前の重さである。

石器は剥片から破片にいたるまで、大きさ、重さなどを計測することができた。しかし、本報告ではそ



第3図 山木西平・石子原・辻原・赤羽原遺跡の調査区・グリッド配置図

の一部しか図化報告することができなかった。

鉄製品、銅製品については錆落とし、脱塩、樹脂の含浸などの処理を長野県立歴史館の施設を利用しておこなった。

実測図は、遺構関係について2次原図を元にデジタルトレースでおこなった。土器は、拓本が中心となったが、実測は手実測とした。石器も手実測で行い、小形石器については2倍、中・大形石器については実大でトレースした。

写真は、業者に委託して撮影および版組をおこなった。

これら作業に並行して、原稿の執筆をおこなった。

4 遺物の収納方法

遺物・実測図面・写真は、報告書刊行後県教育委員会から飯田市教育委員会へ譲与の上、保管される予定である。

遺物は、報告書掲載遺物について報告書図版ごとに収納し、報告書番号と管理番号を照合できるようにしてある。

実測図面については、遺構関係の全体図、土層図、個別遺構図、割付図、委託測量図について、通し番号を付し遺構台帳と照合できる。遺物関係も管理番号を付し、報告書番号と照合できるようにしてある。

写真は、35mmモノクロ、6×6モノクロ、スライドをそれぞれアルバムに収納し、写真台帳と対照できるようにしてある。



第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

今回報告する4遺跡は、日本列島のほぼ中央、北緯35度、東経137度前後に位置し、県南部、飯田市山本中平から阿智村春日地籍に所在する(第1図、第3表)。山本地区は、飯田市街地から南西10kmほどの郊外にあり、北は飯田市伊賀良地区、東は三穂地区、南は阿智村、西は梨野峠を挟んで清内路村に境を接し、周囲を山に囲まれた独立した地形環境にある。

飯田市街地から国道153号線で南西方向に向かい、二ツ山を越えると程なく山本地区の集落に入る。その集落の西側の丘陵地帯に調査遺跡は広がっている。北から順に山本西平遺跡、石子原遺跡、辻原遺跡、赤羽原遺跡と続いている。

遺跡名	番地	緯度	経度
山本西平遺跡	飯田市山本西平 3423-1	35° 28' 03"	137° 45' 42"
石子原遺跡	飯田市山本 4092-1	35° 27' 55"	137° 45' 40"
	飯田市山本 4083-1	35° 27' 53"	137° 45' 42"
辻原遺跡	飯田市山本 3895-1	35° 27' 49"	137° 45' 40"
	飯田市山本 3899-1	35° 27' 49"	137° 45' 37"
	飯田市山本 97-2	35° 27' 42"	137° 45' 47"
赤羽原遺跡	飯田市山本 4882-1	35° 27' 44"	137° 45' 33"
	阿智村春日 1294-5	35° 28' 03"	137° 45' 42"

第3表 中央自動車道西宮線関連遺跡の位置

第2節 遺跡の環境

1 地理環境

中央アルプス(木曾山脈)と南アルプス(赤石山脈)にはさまれた天竜川流域の南北に長く広がる盆地を伊那谷(伊那盆地)と呼んでいる。伊那谷は段丘と氾濫原、支流の扇状地および田切地形からなり、南北の長さが約60km、幅が4~10kmほどある。段丘面によって気候も異なり、また、天竜川に注ぐ大きな支流によって、地域的・文化的にも分断されている。

山本地区は、町村合併により現在は飯田市に編入されているが、かつての山本村にあたる。伊那谷南西端部に位置し、伊那盆地の一角を形成するが、標高700~800m前後の二ツ山、城山、水晶山などによって隔てられ、ひとつの小さな盆地を形成している。天竜川との標高差は300m近くあり、石子原遺跡周辺一帯は、標高630mほどもある高原状の地理的環境にあたる。

微地形的には、扇状地が小河川によって開析され、谷と馬背状の細長い丘陵と低地部が交互に続く地形である。小河川は、直接天竜川に下る久米川水系、阿知川に注いでから天竜川に下る湯川などの水系に大きく分かれる。その分水嶺はちょうど石子原遺跡と白山遺跡を結ぶ幹原台地となる。

一帯は高鳥屋山の山麓から東に傾斜してきており、国道付近で緩やかな傾斜に変換するが、逆に両側の谷は深くなる。傾斜は、山麓部で3~5度、国道の東側では2~3度に減衰するが、変換点では12~15度の傾きになる。4つの遺跡は比較的緩やかな斜面に展開し、国道付近で急速に落ち込み、国道の東側では緩やかな斜面に遺跡が展開するようになる。

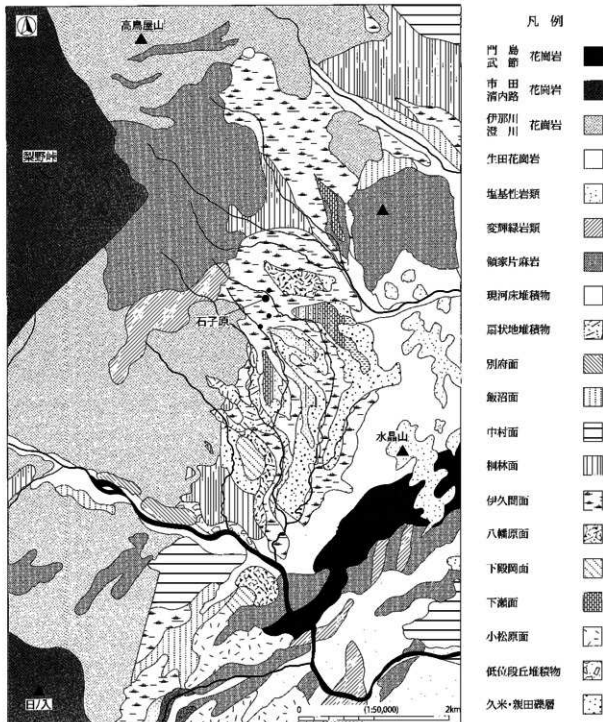
現在、遺跡の周辺は主に丘陵地帯は畑地に、谷部は水田として利用され、その多くは構造改善事業によって姿を変えている。

2 地形・地質環境

地形・地質

国道474号に関わる山本地区の遺跡は近接しており、複数の遺跡の堆積状況を比較検討することができた。遺跡相互を統一的に対比できるようにし、地形形成の面からも統一的に捉えようと調査にあたった。特に、石子原遺跡は旧石器時代の遺跡として重要であり、堆積環境を統一的に理解することは意義のあることと考えた。

一帯の地形形成過程は、古扇状地上に新しい扇状地が形成されるとともに、下流部から開析され、いく筋かの丘に分断され、馬の背状の丘陵地形となったと考えられている(第4図、松島1972)。さらに上部で



第4図 山本西平・石子原・辻原・赤羽原遺跡の周辺地質図

は新しい礫が供給されるといった状況である。所謂ローム（赤土）層は、扇状地性堆積物に火山灰の降灰があり、それらが浸食堆積の過程で混ざり合ったと考えられる。そのため小礫を含み、砂質傾向にある。

中央道西宮線の調査の石子原古墳の土層の所見は、1層＝黒色土、2層＝黒褐色土、3層＝褐色土（押型文を含む）、4層＝茶褐色ローム（新期ローム）、5層＝黄褐色ローム（中期ローム）、6・7層＝赤褐色ローム（赤色風化古期ローム）、8・9層＝扇状地礫層（くさり礫）古期扇状地礫層とし、Pm-1層類は5層と6層の境に考えている。今回の土層区分でも基本的にはこれを踏襲している。

基本土層

石子原遺跡周辺の土層は、丘陵の安定した部分では礫面の高低などの差は見られるが、基本的には共通性がある（第5図）。ただし、低地部については出水などで十分に記録をとることができなかったため、明らかではない部分がある。

I層：現表土である耕作土層。

II層：黒色土。この層が確認できるところはほとんどなく、古墳の墳丘や周溝などでわずかに見られる以外ではすでに失われている。古墳盛土中の炭化物の年代測定の結果（1972）、B、P 1750 ± 85 という年代があり、弥生時代から古墳時代の地表面と考えることができる。

III層：褐色土。赤みを帯びるソフトローム層。縄文早期押型文などの土器を包含する。IV層の漸移層と考えられる。全面に分布するのではなく、丘陵中央部の最も残りのよいところで見られる。

IV層：ソフトローム層。黄褐色～褐色土。下層になるにしたがって、非常に硬いV層ブロックが入る。ブロックの混入の有無や量によって上層と下層に分かれる。旧石器が出土するのは、IV層上部である。

V層：ハードローム層。褐色土層。非常に硬く、しまりがよい。白色の礫片2～5mm大が散見される。

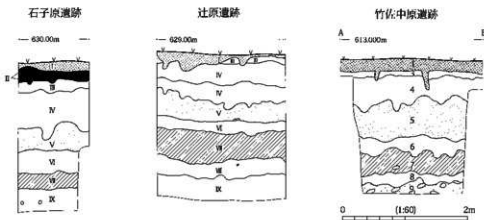
IV層とV層の層理面は平坦ではなく、波状である。

VI層：赤色風化帯ハードローム層。風化した白色岩粒を含む。褐色土層にVII層の赤褐色土ブロックが入る。

VII層：赤色風化帯赤褐色土。非常に硬くしまりがある。5cm前後の亜角礫を含む。風化した白色岩粒を多量に含む。

VIII層：扇状地性の風化礫層。西側の山地から供給されたホルンフェルスと花崗岩の混じった礫層。上層にホルンフェルス、下層に砂岩起源のホルンフェルス・花崗岩が多くなる傾向にある。礫の混入は一様ではなく、厚く堆積した部分もあれば、ほとんど堆積が見られない場所もある。

IX層：明黄褐色土層。砂質が強くなる。赤変した風化礫が見られる。



第5図 石子原・辻原・竹佐中原遺跡の基本土層

3 歴史環境

旧石器時代

山本地区の旧石器は、昭和47(1972)年、中央自動車道建設に伴う発掘調査で発見された石子原遺跡の旧石器時代石器群(A地点)から始まる。その後、辻原遺跡の東に広がる竹佐中原遺跡ではナイフ形石器文化を遡ると考えられる石器群(A地点、C地点)が発見された(埋文センター2005、2006)。後期旧石器の遺跡としては、ナイフ形石器が出土した竹佐中原遺跡に隣接する森林遺跡、水晶山の山頂(市橋1995)、槍先形尖頭器が出土した阿智村の中原遺跡、池の平遺跡などがある。箱川原遺跡では出土遺物の中に珪質凝灰岩の縦長剥片が含まれおり、石刃の可能性はある。

一帯はこのように石子原遺跡、竹佐中原遺跡を中心として、旧石器時代の遺跡が多数分布している地区である。

縄文時代

山本地区の中で縄文時代として最も古い遺跡は石子原遺跡で、立野式の押型文土器が出土している(県教委1972)。このほかに山本地区では押型文土器と早期末の土器の出土が記録されている山本大明神原遺跡がある。範囲を広げて立野式土器が出ている遺跡をみると、伊賀良立野遺跡、山口遺跡、座光寺の美女遺跡、上久壁の北田遺跡、阿智村にカヤハラ遺跡などがある。これらの遺跡は10kmほどの間隔をもって点在している。

前期は、白山遺跡などで土器が確認されているが、様相ははっきりしない。一方、阿智村では京田原・京田・中関・日向原遺跡などで遺物が発見されている。

中期になると、遺跡数が格段に増え、調査された住居跡も増加する。箱川原遺跡は工場建設に伴って調査され、縄文時代中期後半の住居跡が発見されている(飯田市教委1970)。調査範囲は狭く、全体像は明らかになっていないが、範囲外に多数の住居跡の存在が予想される。白山遺跡は、小学校建設に伴って調査され、縄文時代中期中葉の住居跡4軒が検出されている(飯田市教委1981)。山本西平遺跡では縄文中期の炉跡が発見されている(飯田市教委1998)。国道474号関連事業の発掘調査でも、下り松遺跡で竪穴住居跡6軒、竹佐中原遺跡で竪穴住居跡1軒、森林遺跡でも小竪穴2基が調査され(埋文センター2003、2004)、中期の資料が蓄積されてきた。

後期から晩期にかけては、山本大明神原遺跡、山本西平(金堀塚)遺跡、箱川中尾遺跡などで土器が採取されているものの遺跡数は少ない。中期に比べると遺跡数が減少する一般的傾向にある。一方、阿智地域では京田原・京田・前田・中関遺跡などがあり、標高が下るにつれて後期の遺跡が展開している。

縄文時代の特徴として、阿知川流域、特に山本・阿智地域では大形石器の素材の一部にホルンフェルスを使うことがあげられる。この傾向は、天竜川から離れ阿知川を遡るにしたがって顕著になる。

弥生時代

前・中期にさかのぼる遺跡は確認されていない。

後期前半の遺跡としては、竹佐の森林遺跡がある。後半になると、遺跡は遺跡数も増加し広がりをもつようになる。それは、水田可耕地を越えた広がりをもち、山本大明神原遺跡や青木遺跡などのように800mを越えるような高冷な山ろく地帯にも広がる。しかし、調査は進んでおらず、山本地区では近年まで発見されることはなかった。最近、小規模ながら住居跡の発見が相次いでいる(森林・竹佐中原・白山遺跡など)。いずれも住居跡1~2軒程度の小規模な集落である。

古墳時代

古墳は山本地区で煙滅した古墳も含め11基確認されているが、いずれも円墳で規模も小さい。立地から見ると、金堀塚古墳や石子原古墳とそれより一段低いところにある孤塚古墳、森の塚古墳とに分ける

ことができる。現存するのは、狐塚古墳、森の塚古墳2基のみである。調査されたり、遺物が確認されたりしている古墳は、狐塚・金堀塚・石子原・森の塚古墳である。

石子原古墳は、南北16.8m、東西13.8m、高さ0.9mで、石棺状の主体部等を有する6世紀初頭の築造であることが調査によって明らかになっている。また、森の塚古墳からは直刀と甲残片が出土している。さらに、最も標高の高い金堀塚古墳では内行花文鏡、勾玉、環頭柄頭などが出土している。

古墳時代の住居跡が発見されているのは伊賀良富の平遺跡（飯田市教委1996）で、屈折高杯が共存する古墳時代前期後半の住居跡がある。一方、隣接する阿智村では、中原遺跡や京田遺跡で5世紀から6世紀にかけてのまとまった集落が見つまっている。また、中間遺跡では石製模造品がまとめて出土している。

古墳の分布や住居跡の分布などから、山本地区は大規模な集落が営まれた痕跡がなく、かなり開発途上の地が広がっていたことが予想され、阿智村や三種地区の様相とは異なる。このことは古東山道のあり方とも関連があるのかもしれない。

古代

調査の事例が少なく考古学的成果は明らかになっていない部分が多い。竹佐中原遺跡で平安時代の住居跡が発見され、ようやく調査の手が入ったといった状況である。阿智村では、奈良・平安時代の遺跡が広く分布しており、京田遺跡で奈良時代の住居跡が、内垣外遺跡では平安時代の集落が発掘されている。また木戸脇遺跡では建物跡が検出された。この地域は東山道の阿知駅にあたり、律令制度の基点のひとつとなるところである。阿知駅の運営には経済的な負担が大きいため、山本地区まで含めた広範囲で、駅域を想定する必要があるだろう。

久米地区の真言宗の古利光明寺には、「保延六年」（1140年）の銘をもつ薬師如来坐像があり、それ以前の創建と考えられる。

中世

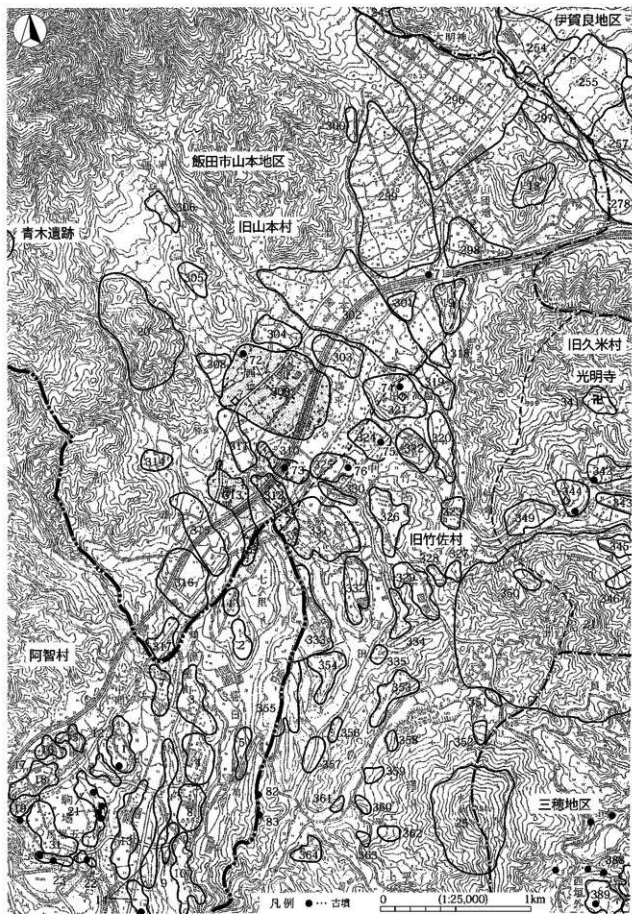
山本西平遺跡で掘立柱建物跡・榭5棟、竪穴状遺構2基が検出されている。山本地区に隣接する富の平遺跡では掘立柱建物跡8棟が検出されている。山本大塚古墳の調査（飯田市教委1969）が行われ、中世火葬墓群が発見されている。また、箱川神社（御堂寺遺跡付近）で備蓄銭が発見され、唐銭から元銭まで3,124枚が出土している。城郭関連では、久米ヶ城、西平城などの城郭が築かれている。飯田市の西部地区は伊賀良庄の庄域にあり、山本地区の一部も伊賀良庄に入ると考えられている。伊賀良庄は、北条氏滅亡後小笠原氏に引き継がれており、久米ヶ城築城など、この時期に地域の開発が進んだのであろう。

近世

現在の山本地区は、江戸時代は山本村、竹佐村、久米村からなっていた。山本村は東部を東割、南西部を西割といい、それぞれ支配領域が入り組み、別々の支配を受けていた。東山本は竹佐村と同じ高須藩松平領、西山本は近藤氏領に分かれていた。近藤氏の山本陣屋跡は山本西平遺跡の一角に、竹佐村陣屋跡は田府高屋遺跡、森の塚古墳のすぐ近くにあった。

竹佐村と山本村の境に三州街道が通っている。三州街道は、中山道の脇往還とし塩尻と三河を結ぶ街道であった。山本地区は飯田宿と駒場宿の中間に位置し、間の宿として発達していた。また、三州街道と中山道を結ぶ清内路街道の起点としても重要であり、物資輸送によって栄えていた。

墓関係では、山本大塚遺跡で近世の土坑墓が検出されて、山本地区でも類例が増えつつある。



第6図 飯田市山本地区および周辺遺跡

第2章 遺跡の位置と環境

市町村	番号	遺跡名	時期 遺物確認○ 遺構確認◎														備考		
			旧石器		縄文				弥生		古墳		奈良	平安	中世	近世			
			草	草	前	中	後	晩	中	後	前	後							
版	351	大須										○							
	352	日影					○												
	353	箱川中隈					○	○											
	354	箱川麻南					○												
	355	大洞					○												
	356	砂子田					○						○						
	357	箱川長田											○						
	358	堂田					○												
	359	寺屋敷					○												
	360	御堂寺													○				
田	361	古屋敷					○												
	362	芋地洞					○												
	363	三反田					○												
	364	間本					○												
	388	町垣外					○												
	市	389	庄町洞					○											
		71	孤塚古墳															○	
		72	金堀塚古墳															○	
		73	石子原古墳															◎	
		74	森の塚古墳															○	
75		山本大塚															○		
76		塚のこし古墳															○		
82		大洞1号古墳																○	
83		大洞2号古墳																○	
阿		1	七久里					○								○			東台帳 No.3062
	2	権現原					○					○							
	3	前原											○					3072	
	4	的場					○						○					3063	
	5	瀬川沢					○											3044	
	7	向田												○		○		3073	
	8	中原	○				◎					◎		◎	○	○		3067 H27・42・51年調査	
	9	池の平	○												○				
	智	10	鞍掛山															○	
		11	下原					◎					○		○	○			3071 S60調査(H12年分布調査)
12		京田原				○	○	○				○		○	○			3065	
13		京田			○	○	○	○				◎	◎	◎	◎				
村		13	内垣外					◎							○	◎			3074
			前田					○	○										3068
			向山					○						○		○			3069
		14	中隈	◎			○	○	○	◎			○	◎	○	○			石製縄遺品3070 H12・13年
		15	桜原					○							○				3077
		16	かぶき塚					○							○	○			3078
	17	宮の脇										○		○				8723	
	18	清坂					○						○		◎			3079	
	19	水戸脇						○						○	○	◎		H11年試掘調査	
	21	五反田					○						○		◎			3080	
22	古塚					○						○					3084		
23	日向畑				○	○						○					3086		

第4表-2 山本西平・石子原・辻原・赤羽原遺跡周辺の遺跡一覧

第3章 石子原遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概観 (P L 1)

石子原遺跡は、飯田市大字山本南平地籍 4066 - 1・4093 ほかに所在する。谷を隔てて、北に山本西平遺跡、南に辻原遺跡と隣接する。遺跡の範囲は、南北 130 m、東西 400 m と東西に長い丘陵部に立地し、しゃもじのような形である。中央道が、遺跡のほぼ中央を南北に縦断している。中央道部分から西側にかけて丘陵の幅が最も広くっており、遺構が集中する中心部分である。

標高は 630 m から 610 m で、約 20 m の高低差があり、丘陵先端部で国道 153 号方向に急激に落ち込んでいる。遺跡の南北は谷部となり水田として利用されている。

2 調査範囲と調査経過 (第7図、P L 2)

昭和 47 年の調査 (第1章参照) によって、旧石器時代から縄文・弥生・古墳時代、さらに江戸時代を含む複合的な遺跡であることが明らかになっており、同様な遺構遺物の検出が予想された。遺跡範囲は飯田南 J C T 建設部分にあたり、今回の調査で遺跡の主要部分はすべて記録保存されたことになる。

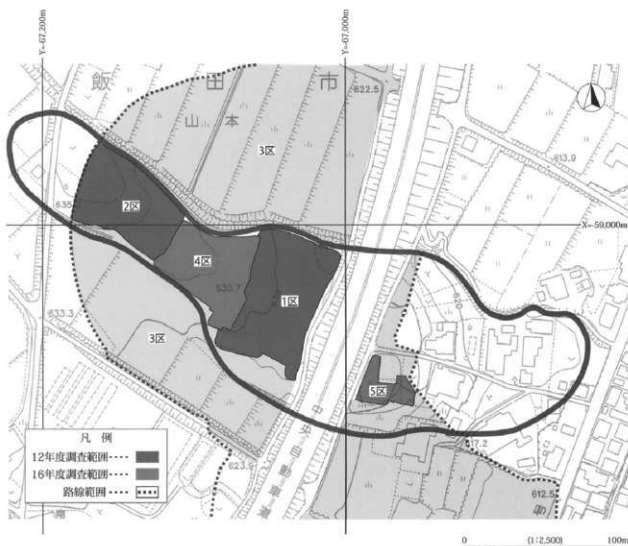
調査は用地買収の関係から 2 年度に分けておこなった (第7図)。便宜的に、平成 12 年度調査区を 1 ~ 3 区、平成 16 年度調査区を 4・5 区とした。1 区は中央道すぐ西側、2 区は調査区の最も西側、3 区は低地部分、4 区は 1 区と 2 区の間、5 区は中央道東側である。

2 年度にわたる調査で検出された遺構は、縄文時代早期から古墳時代の竪穴住居跡 8 軒、方形周溝墓 4 基、石子原古墳周溝、江戸時代墓坑などで、特に押型文土器の良好な資料が得られた。

調査日誌抄

平成 12 年	平成 16 年
5 月 15 日 (月) トレンチ掘削開始。	7 月 21 日 (水) 4・5 地区調査開始。5 区側道沿いにトレンチ設定、手掘りで掘下げ。
5 月 16 日 (火) 重機による 1 区検出開始。	旧石器・縄文・近世遺物が出土。
5 月 23 日 (水) 山本・三穂地区農業委員 20 名視察。	7 月 29 日 (木) 中央道東側 5 区、重機により検出開始。土坑墓と思われる落ち込みと人骨を検出。
5 月 26 日 (金) 業者による基準点測量、杭打ち。	8 月 5 日 (木) 中央道西側 4 区の検出に入る。
6 月 13 日 (火) 谷部 (3 区) トレンチ調査。出水のため写真記録のみ撮る。	8 月 12 日 (木) 竪穴住居跡を検出。
6 月 20 日 (火) 石子原古墳周溝調査。	8 月 20 日 (金) 古墳部分に土層観察用の試掘坑を入れる。
8 月 23 日 (金) 高所作業車により遺構撮影。	8 月 25 日 (水) 4 区検出終了。竪穴、遺物集中区などを検出。遺構精査開始。
8 月 25 日 (金) 飯田市教育委員会課長以下 10 名視察。	8 月 27 日 (金) 墓坑群掘り下げ開始。
8 月 27 日 (日) 現地説明会開催。	9 月 1 日 (水) 業者による基準杭設定。
9 月 14 日 (木) 旧石器テストピットで旧石器検出 (J17)。	9 月 14 日 (火) S M 17 掘下げ、一分金・柄鏡出土。
9 月 19 日 (火) 重機による旧石器面ダメ押し開始。	9 月 15 日 (水) 京都大学霊長類研究所茂原・姉崎
9 月 27 日 (水) 1 区調査区の南側を重機で拡張、方形周溝墓の続きを検出。	

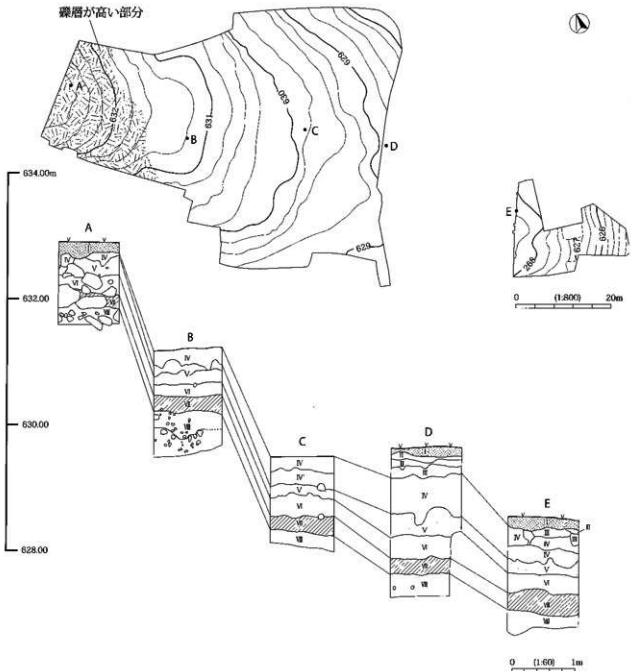
- | | |
|--|---|
| 氏人骨鑑定。 | 11月19日(金) 竹佐中原遺跡等指導委員会。石子原遺跡のホルンフェルス製石器についても検討。 |
| 10月11日(月) 茂原・姉崎氏、再度人骨鑑定。 | |
| 10月14日(金) 報道関係に事前公開。(中日、南信州、信濃毎日、信州日報) | 11月29日(月) 人骨の法要。浄玄寺住職原正純氏に執り行ってもらう。 |
| 10月17日(日) 現地説明会、見学者約90人。 | 11月30日(火) 調査終了式。撤収。 |
| 11月5日(金) 奈良教育大学長友恒人氏ほか院生3名、光ルミネッセンスサンプル採取。松島信幸氏地層指導。 | 12月3日(金) 出土人骨の火葬、納骨(飯田市山本白隠石霊園) |
| 11月18日(木) 5区調査終了。重機による埋め戻し。 | |



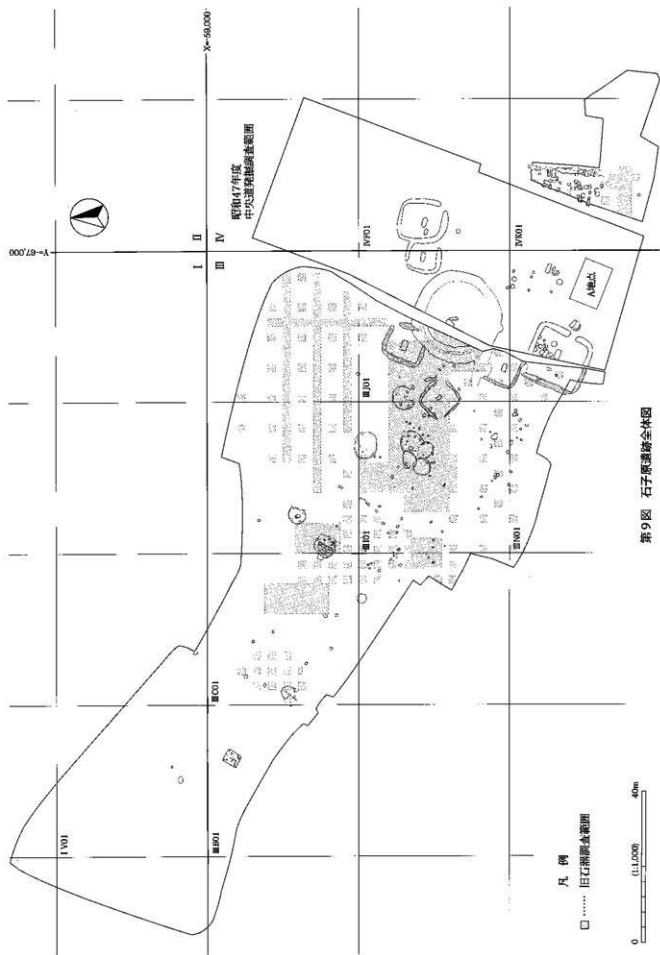
第7図 石子原遺跡の調査範囲

3 基本層序 (第8図、PL2)

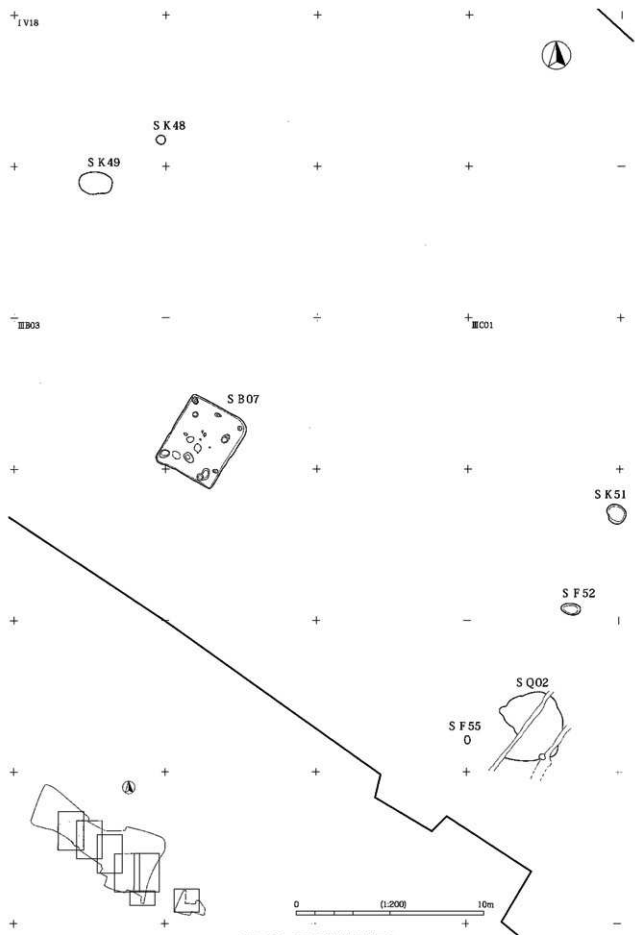
第2章でも述べたとおり、I層からIX層まで統一的に捉えられた基本層序である。ただし、その分布は均一ではなく、遺跡の北東部では礫面が高く、南の1区では安定したⅢ・Ⅳ層が存在する。Ⅲ層は、特に1区中央部から南東部にかけて顕著に認められる。ただし、Ⅲ層とⅣ層は漸移的に変化しており、境界部では明確な区分は困難である。5区でも、安定したⅢ・Ⅳ層が広がるが、斜面部分では失われて赤色風化礫を含む下層部が露出している (第8図)。



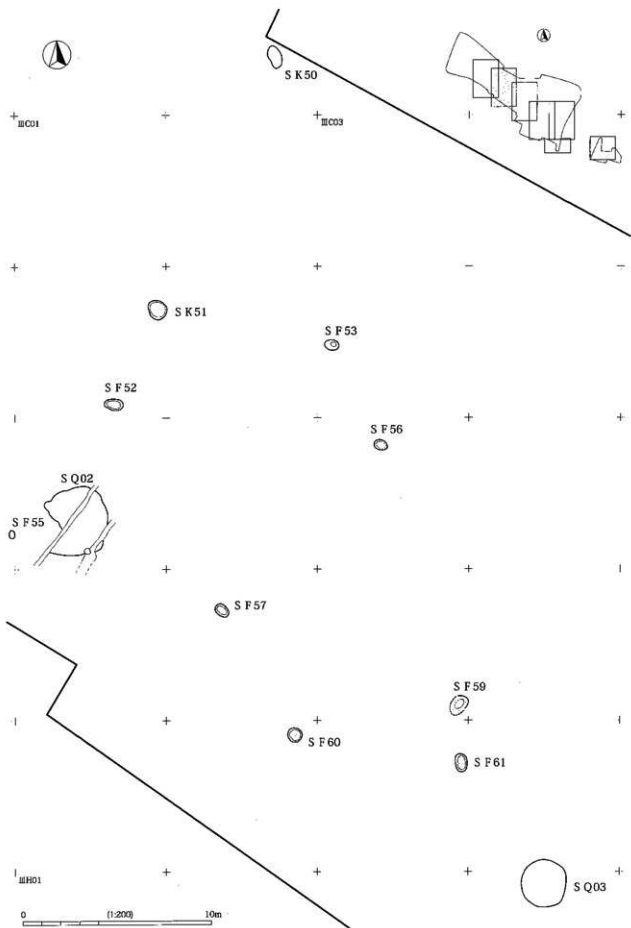
第8図 石子原遺跡の地形図(1:800)および土層断面図(1:60)



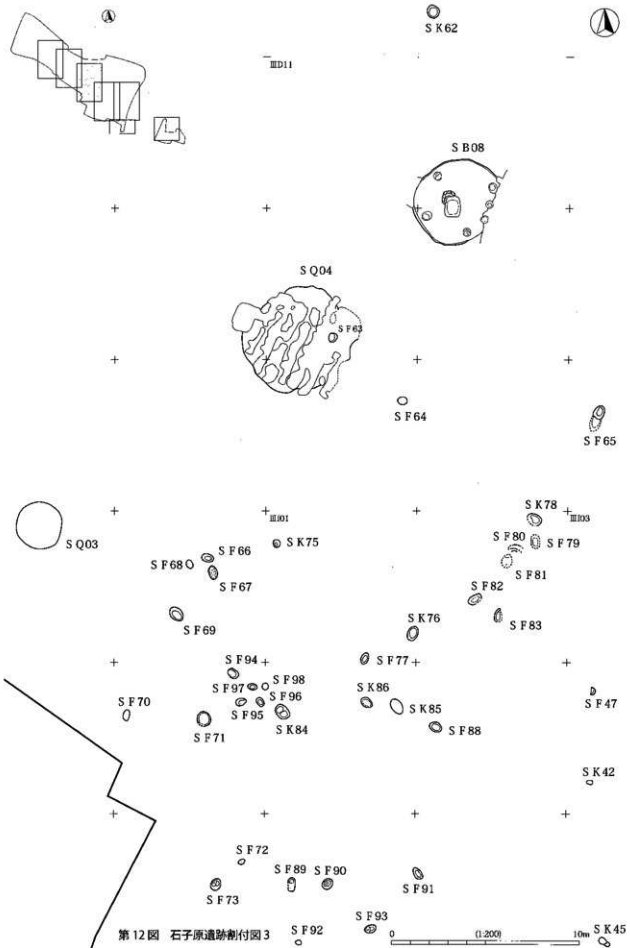
第9図 石子原遺跡全体図



第10図 石子原遺跡附図1

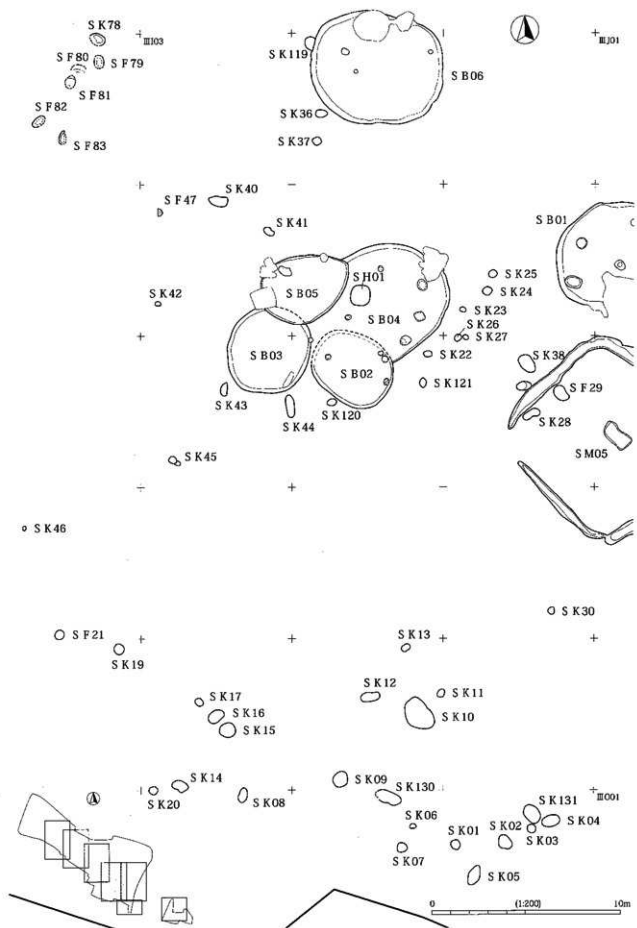


第11図 石子原遺跡附圖2

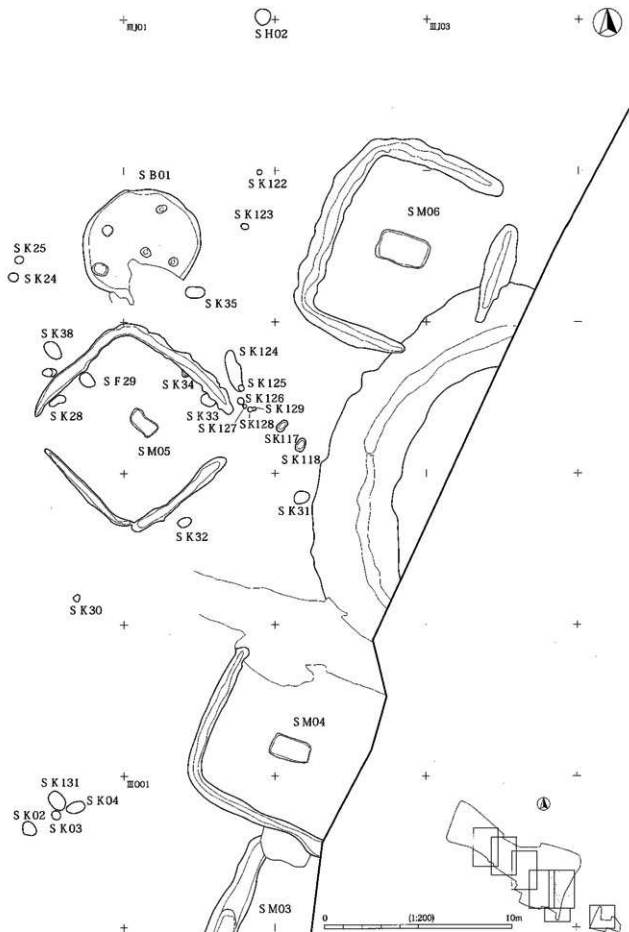


第12図 石子原遺跡附図3

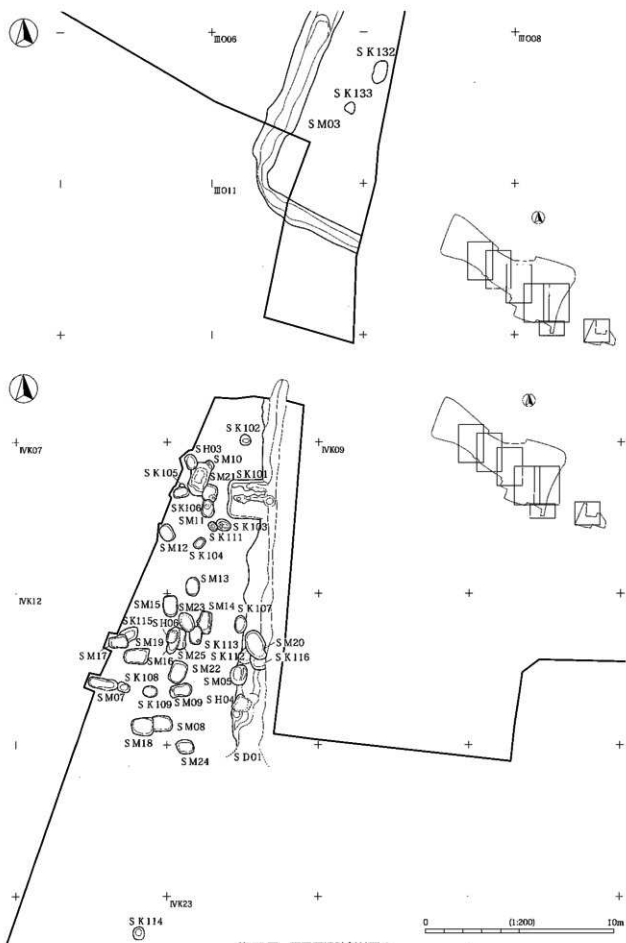
第3章 石子原遺跡



第13圖 石子原遺跡劃分圖4



第14図 石子原遺跡制付図5



第15圖 石子原遺跡附圖6

4 遺跡の年代測定

(1) 地層のルミネッセンス年代

石子原遺跡の調査を開始するに当たって、昭和47(1972)年に中央道路線内で出土し、長野県最古級と評価された旧石器の広がりとその年代を明らかにすることが課題のひとつとなった。今回の調査において、昭和47年出土の旧石器に相当する資料の発見はなかったが、東500mほどに位置する竹佐中原遺跡出土の旧石器資料との関係を明らかにする必要があると考えた。そこで、石器出土層位を統一的にとらえようと、複数人で詳細な肉眼観察をおこない検討した。その結果、石子原遺跡一帯から竹佐中原遺跡にかけて、硬質ローム層(V層)の上位に、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅳ'層が分布するという認識に達した。岩宿文化を代表とする後期旧石器とは趣を異にする竹佐中原遺跡石器群は、主にⅣ層中からの出土であった。昭和47年に発見された本遺跡の旧石器出土層位は再確認できないが、硬質ローム層の上ということから、Ⅳ層あるいはⅣ'層であろうと考えられた。

そこで、層位の遺存状態がよく、旧石器出土地点に近い場所でサンプリングし、光ルミネッセンス年代測定法により年代測定を依頼し実施した。その結果は、次層の通りである。旧石器を包含するⅣ層さらにその下層のⅣ'層の長石に蓄積された放射線量は、およそ11,000年から20,000年分の測定結果が出た。結果をそのまま受け入れれば、導き出される結論として、昭和47年発見の旧石器は11,000年から20,000年前、つまり縄文時代草創期から後期旧石器時代の石器ということになる。

一方、昨今の研究成果によれば、中部山岳地帯では20,000年前には黒曜石製の尖頭器など二次加工によって形態や形状が整えられた石器群文化が展開し、11,000年前には土器使用が始まっているとの見解が出されている。こうした研究成果と昭和47年出土の石子原旧石器の年代評価とはあまりにもかか離れているといえる。

そこで、年代測定結果と旧石器時代研究成果との不整合について、調査担当者としての見解を提示しておきたい。

年代測定に供した長石粒は、旧石器が出土したと考える層中に存在したものである。光ルミネッセンス年代測定は、光が遮断された後に蓄積される放射線量を測定し、年間線量を基に算出した年代値である。測定された年代値が旧石器の年代とするには、次の条件を満たしている必要がある。旧石器に照射される光が遮断されたと同時に測定長石への光も遮断され、光の遮断後、旧石器も測定長石も同じ経歴であることである。この条件が満たされていれば、測定年代値は旧石器の年代であると考えられる。

本遺跡の場合、この条件は満たされているといえるだろうか。本遺跡は中央アルプス山麓の古い扇状地上に立地する。砂礫が小河川によって運ばれて土台をつくり、やがて流水の影響を受けない台地状になる。その上に、雨水などが運ぶ砂や小さな礫、降下する火山灰やレス、さらに植物体などが徐々に堆積することで形成された土地である。そのため旧石器が残された後に、一気にそれらを埋没させたという状況は考えられない環境にあった。さらに、霜柱などによる土壌の攪拌現象や、生物による土壌内粒子の移動現象もあったと思われる。実際、竹佐中原遺跡の場合ATは最大上下幅約70cmほどに拡散していた。測定に供した長石も、細かく軽い粒子であることから大きく移動すると考えられ、そうした経歴を経て結果的に旧石器と同じ層位に落ち着いた可能性は高いといえる。こうした堆積環境や土壌の攪拌現象を考慮したとき、旧石器と測定に供した長石がまったく同じ経歴をもっている蓋然性は低いと考えられ、本測定結果の年代値が、すなわちⅣ層ないしⅣ'層に包含されていた旧石器の年代を示しているとは結論づけられないと考える。

この問題は、竹佐中原遺跡で発見された石器群の年代的位置づけにおいても重要になってくるものであり、今後、他の分析成果も含めて総合的に考察していくように考えている。

石子原遺跡における地層のルミネッセンス年代

長友恒人・小畑直也(奈良教育大学)

下岡順直(日本学術振興会特別研究員)

ルミネッセンス年代測定法には、テフラや焼石など被熱試料を測定対象とする熱ルミネッセンス法(TL法)とレスなど露光した堆積物を測定対象とする光ルミネッセンス法(OSL法)がある。今回の測定は、すべてOSL法を適用した。OSL法には石英を測定試料として青色光を励起光源とするBSL法と、主として長石を測定試料として赤外光を励起光源とするIRSL法がある。今回の測定では、全ての層についてIRSL法を適用した。

(1) 試料処理

2004年11月に遺跡内露頭の第IV層、第IV'層、第V層、第VI層と第VII層を採取して測定試料とした。採取した試料を、水中で洗浄して木根などを除去した後、攪拌して数分間放置し、沈殿物と懸濁液に分離した(水簸)。後者を微粒子法用試料として以下の処理を行った。水簸による懸濁液を数日間放置して、沈殿した微粒の鉱物の試料について、10%過酸化水素水溶液処理で有機物を溶解除去した。液体中で微粒鉱物の沈降速度が粒度によって異なる現象を利用して、アセトン中で約1~8 μ mに粒度を揃えた。最後に20%塩酸溶液で2時間処理して炭酸塩鉱物を除去し、蒸留水で洗浄の後乾燥させた。

(2) 測定

① 蓄積線量測定 IRSL測定は、Daybreak1150TL/OSL装置を用いて測定した。励起光波長は880nm、検出波長は350~600nmである。蓄積線量評価は付加線量法で行い、そのための照射にC₀-60 γ 線を用いた。生長曲線を直線回帰でフィッティングして等価線量を求める場合には、スプラリニアリティー補正の測定を行うが、この場合、蓄積線量は等価線量とスプラリニアリティー補正值の和である。スプラリニアリティー補正のためには人為的なゼロイングが必要であるが、今回、アニールによるゼロイングと太陽光によるゼロイング(ブリーチ)を試みて比較した結果、ゼロイングの完全さと感度変化の少なさから、照度40,000~100,000ルクスのときの太陽光で約8時間露光した試料をスプラリニアリティー補正用とした。

② 年間線量測定 年間線量(以下、「線量率」も同義)を評価する方法として、TL線量計(TLD)素子を用いた直接測定法と γ 線スペクトロメトリーによる間接測定法の2種類がある。今回は、 α 線量率を間接測定で評価し、 β 線量率および γ 線・宇宙線量率は基本的に直接測定で評価した。

- ・直接測定法 β 線量率評価は以下の方法によった。乾燥させた試料を75 μ m程度に粉砕し、プレス機を用いて円盤状に2枚プレス成型した。 α 線を遮蔽するためのポリエチレンシートを介してTLD素子粉末を一層に薄く広げて2枚の円盤の間にサンドイッチ状に挟み込み、15cm厚の鉛ブロック内に埋め込んだ。21日間放置した後、取り出してTLD素子のTL強度を測定し、較正照射したTLD素子粉末のTL強度と比較して年間線量に換算した。

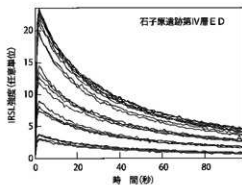
γ 線量率および宇宙線量率の評価は現地において、以下のように行った。厚さ1mm、長さ50cmの銅パイプの先端に5個のTLDカプセルを装着し、試料を採取した現地の地層に打ち込み、周囲の γ 線と宇宙線を吸収させた。約140日間放置した後、取り出してTLD素子のTL強度を測定し、較正照射したTLDカプセルのTL強度と比較して年間線量に換算した。

- ・間接測定法 乾燥させた試料を30g分取り、定形のプラスチックケースに入れて密閉し、これを

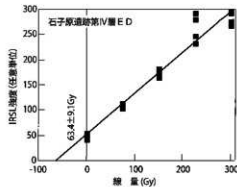
低バックグラウンド鉛と無酸素銅で遮蔽した高純度ゲルマニウム検出器を用いて、2日間 γ 線を測定した。測定結果を、産業技術総合研究所が提供しているJG-1などの岩石標準試料5種類で作成した校正曲線に当てはめて、U、Th、K-40の濃度を求め、それを年間線量に換算した。その際、U系列とTh系列は放射平衡が成立しているものと仮定し、含水率補正を行った。また、 α 線のルミネッセンス効率を10%と仮定した。

- ③ 長石のIRSL信号のフェイディングテストについて 主として長石類のルミネッセンスを測定するIRSL法では、ルミネッセンス強度が経時的に異常な変化を示す可能性があることが報告されている。このことを考慮して、IRSL強度が異常な減衰(アノマラスフェイディング)を示すかどうかをテストした。人為照射後360日までのテスト結果では、各層の試料とも異常な減衰は見られなかった。
- (3) データ解析と結果

IRSL減衰曲線(測定スペクトル)の40~80秒のIRSL信号を積分したものをIRSL強度とした。人為的に与えた付加線量に対するIRSL強度の変化は生長曲線と呼ばれる。測定データの例として、IV層の測定スペクトルと生長曲線を、第16図(a)と(b)に示す。生長曲線の直線フィッティングを外挿して横軸と交わる点が等価線量($63.4 \pm 9.1\text{Gy}$)である。第17図(a)と(b)は第IV層のスプラリニアリティー補正の測定スペクトルと生長曲線である。生長曲線(第17図b)の低線量域はわずかにサブリンアの傾向を示しているので、この場合のスプラリニアリティー補正はマイナスの値($-15.6 \pm 4.0\text{Gy}$)となる。

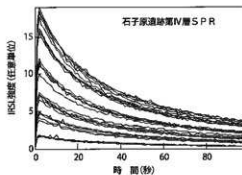


(a) IRSL 減衰曲線

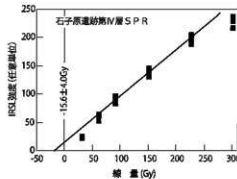


(b) 生長曲線による等価線量評価

第16図 第IV層等価線量の測定結果と解析



(a) IRSL 減衰曲線



(b) 生長曲線によるスプラリニアリティー補正評価

第17図 第IV層スプラリニアリティー補正の測定結果と解析

生長曲線による評価の結果から、第4層の蓄積線量（等価線量とスプラニリアリティー補正線量の和）は $47.8 \pm 9.9\text{Gy}$ である。その他の層の測定データも同様の方法で解析した。

以上の測定結果より、各層の蓄積線量、年間線量、ルミネッセンス年代（IRSL年代）を第5表に示した。

層名	蓄積線量 (Gy)	年間線量 (Gy/ka)	IRSL年代 (ka)
第IV層	47.8 ± 9.9	4.26 ± 0.22	11 ± 2
第IV'層	77.2 ± 11.8	3.78 ± 0.16	20 ± 3
第V層	95.2 ± 24.1	4.01 ± 0.16	24 ± 4
第VI層	100.7 ± 17.9	3.97 ± 0.26	25 ± 5
第VII層	181.8 ± 19.7	3.91 ± 0.19	47 ± 6

測定は、すべて多鉱物微粒子を試料とするIRSL法であり、スプラニリアリティー補正の測定には太陽光でブリーチした試料を用いた。

第5表 測定結果とIRSL年代

(4) 考察

旧石器は、第IV層と第IV'層から出土している。岡村（註1）によれば、「石器群を覆っていたローム層中から」始良丹沢火山灰（AT）が検出され、大竹（註2）は「第5層の最下底部、第6層との境に御岳第I軽石層がブロック状に検出され」と記述している。岡村のいう「石器群を覆っていたローム層」が第III層、第IV層、第IV'層のいずれを指すかが不明であるが、松島（註3）は旧石器文化層の生活面を3万年以内と推定している。また、御岳第I軽石（Pm-1）の年代は約10万年といわれているが、我々が測定したルミネッセンス年代（註4）も約10万年である。ただし、我々がPm-1の試料を採取したのは胸ヶ根市営の台であり、石子原遺跡で我々がサンプリングを行ったセクションでは、ブロック状のPm-1は土壤中に存在しなかった。

ここに報告したIRSL年代は、松島の推定とは大きく矛盾しないが、その他の記述より若い年代を示している。しかし、各地層のIRSL年代測定の結果は、上層から下層まで層序と整合して古くなっており、相対的な年代としては問題がない。考古学的な年代観との齟齬の要因として、(1)可能性としては考えにくい、我々の年代測定法が方法論として系統的な問題を含んでいる、(2)松島が詳細に記述している遺跡の複雑な堆積環境と石器の年代との関係、を考慮する必要があると考えられる。

参考文献

1. 岡村道雄（1978）「長野県飯田市石子原遺跡の再検討」、『中部高地の考古学』、長野県考古学会、pp.9-25.
2. 大竹憲昭（2001）「飯田市石子原遺跡の調査」、第13回長野県旧石器文化研究交流会、pp.62-69.
3. 松島信幸（1973）「遺跡の位置及び周辺の地形と地質」、「石子原遺跡の発掘と、地質の観察」、「石子原遺跡の年代について」、「長野県中央埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田市地内その3—」、日本道路同業名古屋支社・長野県教育委員会、pp.4-15.
4. 小畑直也、長友恒人、下岡順直（2006）、「旧石器遺跡の鍵層となる御岳起源テフラのルミネッセンス年代測定」、日本第四紀学会講演要旨集36、日本第四紀学会、pp.94-95.

(2) 炭化物のC14年代測定 AMS

石子原遺跡でおこなったC14年代測定の試料の内容は、大きくふたつに分かれる。ひとつは、土坑および焼土跡・焼土坑の埋土中に混在していた炭化物を対象としてのもので、その結果は「年代測定結果報告書（AMS測定）石子原遺跡その1」（以下「報告その1」という）にまとめられている。他のひとつは、土坑

出土の土器片に付着していた炭化物を対象としたもので、こちらは「放射性炭素年代測定結果報告書（AMS測定）石子原遺跡その2」（以下「報告その2」という）に記載されている。

遺構・遺物の詳細については、第4・5章に譲るとして、ここでは各試料の由来を検証しながら、年代測定結果に対する所見を述べることにする。

まず、報告その1では各々別の遺構から出土した7点の試料を測定した。いずれの遺構も今回の調査地区のほぼ中央部付近にある。ただし、SK 51、SF 53・57・59はⅢC 01 杭を基点とする40×40mの大地区内に散在するが、SK 84・85、SF 88はⅢI 01を基点とする8×8mの中地区内にまどまる。

試料採取にあたって、焼土をともなった土坑（SF 53・57・59・88）であるか、通常の土坑（SK 51・84・85）かという程度の選択はしたが、遺跡内における遺構の位置や他の遺構との関係を問題にしたわけではない。また、遺構の形状や深さも考慮に入れていない。さらに、試料の出土地点をみると、自然埋没を示す埋土下層から山上した炭化物もあれば、1層に混在していたものもあるなど、遺構との共伴が（＝遺構の廃絶時を明らかに指示している）確実な試料ではない。しかしながら、状況から見て、試料とした炭化物は遺構周辺に散在していたものが、埋没過程で上とともに混在したと判断するのが妥当であろう。したがって、遺構は試料の指し示す年代値よりも新しい時期に埋没したと考えられる。ちなみに、今回試料を提供した7つの遺構のうち、土器片が出土したのはSK 84・85とSF 59だけである。これらは、細片ながら、いずれも立野式期に帰属する。

「報告その1」によると、SK 51 出土のIAAA-42142が $4,140 \pm 50\text{yrBP}$ である以外は、 $9,760 \pm 80\text{yrBP}$ から $9,270 \pm 70\text{yrBP}$ の間にまどまる。SK 84等から立野式期の土器片が出土していること、後に述べる立野式期の土器片付着炭化物のC 14年代測定結果とも整合すること、試料を採取した遺構の周囲には、立野式期の土器片を伴った遺物集中区（SQ 02）や焼土坑（SF 61・93）があることから、これら遺構出土炭化物の年代測定値は、考古学的にも首肯してよいものと考えられる。したがって、遺構が相当期間開口していない限り、試料が出土した遺構は、概ね9,500年を前後するころ埋没したと想定してよい。

一方、SK 51 出土試料は、先にも述べたとおり、 $4,140 \pm 50\text{yrBP}$ である。今回の調査区では、SK 51の東南東約40m地点に縄文時代中期後半の土器をともなう竪穴住居跡（SB 08）がある。したがって、先の測定年代値を示す炭化物が遺跡内にあっても不思議はない。ただ、この測定値をもって、SK 51をただちに縄文中期後半の土坑とするには、考古学的な根拠に乏しい。

「報告その2」は、土器片（第47図No.334）の底部内面に付着していた炭化物を試料としたものである。土器片は、ⅢN 05に位置する楕円形の土坑SK 03から出土した。SK 03からは、試料採取したものを含めて71点の土器片が出土している。それらは、山形文Aや格子目文Aを主体とする立野式の土器群と理解される。

結果は、IAAA-60524が $9,450 \pm 50\text{yrBP}$ 、IAAA-60252は $9,350 \pm 50\text{yrBP}$ と出た。石子原遺跡から出土した縄文時代早期の土器は、焼成があまりの、あるいは混和材の影響が、いずれにせよ脆弱なものが多い。したがって、整理作業の段階ですべての土器片に強化保存剤（TOT）を含浸している。C 14年代測定ではTOT含浸の影響が懸念されたが、測定前の検査によって「TOT含浸処理は、年代測定結果にほとんど影響しない」と結論づけられている。

本遺跡からは、立野式土器型式前後の土器群は出土していないため、C 14測定年代が正しい値を示しているかどうか、考古学的に立証することはむずかしい。他遺跡出土土器などの比較資料を使いながら、立野式土器を絶対年代と型式学的な位置を詰めていく作業が課題となる。

年代測定結果報告書 (AMS 測定) 石子原遺跡その1

(株) 加速器分析研究所

(1) 化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- ② AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001 ~ 1N の水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。その後、90℃で乾燥する。
- ③ 試料を酸化銅 1g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。
- ④ 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (還元) し、グラファイトを作製する。
- ⑥ グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(2) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により 13C/12C の測定も同時に行う。

(3) 算出方法

- ① 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
- ② BP 年代値は、過去において大気中の炭素 14 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950 年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
- ③ 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 X^2 検定を行い測定値が 1 つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- ④ $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_s - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_s$: 試料炭素の ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_s または ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_s

$^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_R または ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{A}_s = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のベレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に [加速器] と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{A}_N$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{ として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_S \text{ として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_0) / ^{14}\text{A}_0] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当する BP 年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

- ⑤ ^{14}C 年代値と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示する。

IAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-42142	試料採取場所 : 長野県飯田市山本 石子原遺跡 S K 51 埋土最下層	Libby Age (yrBP) : 4,150 ± 50 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -24.35 ± 0.00 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -403.5 ± 3.5
	試料形態 : 炭化物 試料番号 : NO1	pMC (%) = 59.65 ± 0.35 $\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -402.7 ± 3.5 pMC (%) = 59.73 ± 0.35
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 4,140 ± 50
IAAA-42143	試料採取場所 : 長野県飯田市山本 石子原遺跡 S F 53 埋土2層	Libby Age (yrBP) : 9,750 ± 80 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -25.35 ± 0.00 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -702.9 ± 2.9
	試料形態 : 炭化物 試料番号 : NO2	pMC (%) = 29.71 ± 0.29 $\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -703.1 ± 2.9 pMC (%) = 29.69 ± 0.29
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 9,760 ± 80
IAAA-42144	試料採取場所 : 長野県飯田市山本 石子原遺跡 S F 57 埋土1層	Libby Age (yrBP) : 9,520 ± 80 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -25.41 ± 0.01 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -694.5 ± 2.9
	試料形態 : 炭化物 試料番号 : NO3	pMC (%) = 30.55 ± 0.29 $\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -694.7 ± 2.9 pMC (%) = 30.53 ± 0.29
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 9,530 ± 80

第6表-1 石子原遺跡の土坑出土炭化物の C14 年代測定

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比		
IAAA-42145	試料採取場所：長野県飯田市山本 石子原遺跡	Libby Age (yrBP)	:	9,570 ± 70
	S F 59 埋土1層	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-25.25 ± 0.01
#843-4	試料形態：炭化物	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-696.0 ± 2.6
	試料番号：NO4	pMC (%)	=	30.40 ± 0.26
#843-4	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-696.2 ± 2.6
		pMC (%)	=	30.38 ± 0.26
IAAA-42146	試料採取場所：長野県飯田市山本 石子原遺跡	Age (yrBP)	:	9,570 ± 70
	S K 84 埋土炭層じり層	Libby Age (yrBP)	:	9,490 ± 70
#843-5	試料形態：炭化物	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-26.37 ± 0.01
	試料番号：NOS	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-693.3 ± 2.5
#843-5	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%)	=	30.67 ± 0.25
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-694.1 ± 2.5
IAAA-42147	試料採取場所：長野県飯田市山本 石子原遺跡	Age (yrBP)	:	9,520 ± 70
	S K 85 埋土3層	Libby Age (yrBP)	:	9,280 ± 70
#843-6	試料形態：炭化物	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-24.81 ± 0.00
	試料番号：NO6	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-684.8 ± 2.6
#843-6	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%)	=	31.52 ± 0.26
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-684.7 ± 2.6
IAAA-42148	試料採取場所：長野県飯田市山本 石子原遺跡	Age (yrBP)	:	9,270 ± 70
	S F 88 埋土	Libby Age (yrBP)	:	9,420 ± 70
#843-7	試料形態：炭化物	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-26.62 ± 0.01
	試料番号：NO7	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-690.6 ± 2.5
#843-7	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%)	=	30.94 ± 0.25
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-691.6 ± 2.5
		pMC (%)	=	30.84 ± 0.25
		Age (yrBP)	:	9,450 ± 70

第6表-2 石子原遺跡の土坑出土炭化物のC14年代測定

放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定) 石子原遺跡その2

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定の意義

縄文時代早期立野式土器が使用された年代を推定する。また、年代測定データの蓄積を図る。

(2) 測定対象試料

S K 03 覆土から出土した土器の底部内面に付着する炭化物2点 (IAAA-60524、IAAA-60525) である。これらの遺構は、表土下の褐色土 (Ⅲ層) または黄褐色土 (Ⅳ層) を検出面とする。試料は、水洗、乾燥後、ポリ袋に入れて保存されたものであるが、強化剤 (TOT) が含浸されている。

(3) 強化剤 (TOT) 含浸処理の影響

年代測定における TOT 含浸処理の影響を検討するため、元素分析装置による CO₂ 量の比較を行なった。ガラス容器で TOT を硬化させ、エタノール処理、アセトン処理、未処理の3通りの処理を実施した。エタノール処理、アセトン処理では、硬化した TOT にエタノールまたはアセトンを加え、10分間超音波洗浄を実施する工程を二度繰り返した。これらの3通りの処理で得られたサンプルを元素分析装置で完全に燃焼し、発生する CO₂ 量を比較した。測定の結果、それぞれ乾燥重量で1%程度の炭素の含有することが判明した。各処理工程での炭素含有率に大きな差は認められないため、本分析では、TOT 除去のための処理工程を実施しないことにした。また、TOT1ml を完全に硬化させると、約50mgの淡黄色半透明の固体が残る。TOTの炭素含有率は固体重量で1%程度であることから、TOT1mlには50mgの1% (0.5mg) の炭素が含まれることになる。分析の対象となった試

料（土器付着炭化物）は、約0.01ml（炭素量で5mg）である。仮に測定試料の炭素量の1%がTOT由来の炭素であるとする、その炭素量は0.05mgである。これは、TOT量（1mlに0.5mgの炭素を含有）に換算すると0.1mlとなり、本来の試料量の約10倍のTOTが含まれたことになる。測定試料にその10倍の体積のTOTが含まれることはあり得ないことであり、1%の炭素混入の可能性さえ考え難い。また、試料の炭素含有率は、No.1の試料が55%、No.2が33%である。この値は、固体TOTの炭素含有率（約1%）をはるかに上回ることから、測定される炭素の由来は、ほとんどが試料本来の炭素であると考えられる。従って、本試料のTOT含浸処理は、年代測定結果にほとんど影響しないと考えられる。

(4) 化学処理工程から(6) 算出方法については、年代測定結果報告書（AMS測定）石子原遺跡その1の(1)から(3)に同じ。

(7) 測定結果

S K 03 覆土から出土した土器の底部内面に付着する炭化物は9,450 ± 50yrBP (IAAA-60524)、9,350 ± 50yrBP (IAAA-60525)の測定値を示した。土器付着炭化物の¹⁴C年代は、由来する樹木の樹齡等が影響し、土器の使用年代を若干遡る可能性がある。また、土器には硬化剤による保存処理が施されていたが、測定結果に影響を与えるものではなく、測定結果も妥当な¹⁴C年代である。近年の¹⁴C年代の結果を踏まえれば、縄文時代草創期と早期の境界は9,500yrBPをやや遡る可能性が高いと考えられる（小林ほか2006）。この点を踏まえれば、石子原遺跡から出土した立野式土器の付着炭化物の¹⁴C年代は、縄文時代早期初頭の年代に相当する。

参考文献

Stuiver, M. and Polach, H. A. (1977) Discussion: Reporting of ¹⁴C data. Radiocarbon, 19:355-363

小林謙一ほか 2006 「縄文時代草創期の炭素14年代測定」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』pp.69-72

IAA Code No.	試料	BP年代および世界の年代値比
IAAA-60524	試料採取場所 : 長野県飯田市山本 石子原遺跡	Libby Age (yrBP) : 9,460 ± 50
	S K 03 出土土器底部付着	δ ¹⁴ C (‰), (加減器) = -20.79 ± 0.96
	試料形態 : 炭化物	Δ ¹⁴ C (‰) = -692.2 ± 2.0
	試料番号 : No. 1	pMC (%) = 30.78 ± 0.20
#1331-1	(参考) δ ¹⁴ Cの補正無し	δ ¹⁴ C (‰) = -689.5 ± 1.9 pMC (%) = 31.05 ± 0.19 Age (yrBP) = 9,400 ± 50
IAAA-60525	試料採取場所 : 長野県飯田市山本 石子原遺跡	Libby Age (yrBP) : 9,350 ± 50
	S K 03 出土土器底部付着	δ ¹⁴ C (‰), (加減器) = -21.86 ± 0.82
	試料形態 : 炭化物	Δ ¹⁴ C (‰) = -687.7 ± 2.0
	試料番号 : No. 2	pMC (%) = 31.23 ± 0.20
#1331-2	(参考) δ ¹⁴ Cの補正無し	δ ¹⁴ C (‰) = -685.7 ± 2.0 pMC (%) = 31.43 ± 0.20 Age (yrBP) = 9,300 ± 50

第7表 石子原遺跡出土土器に付着した炭化物のC14年代測定

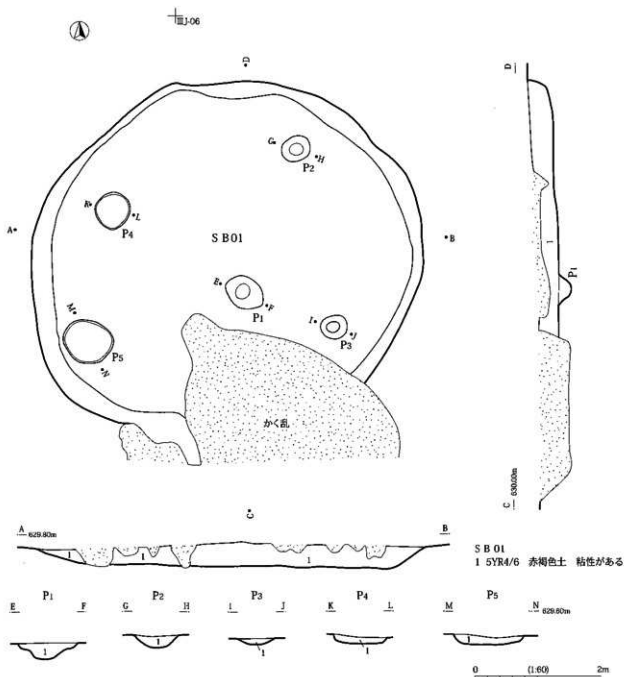
第2節 縄文時代の遺構

1 縄文早期の遺構

(1) 竪穴住居跡

SB 01 (第13・14・18・36・37・53・54図、PL 3・13・24)

位置：Ⅲ区 I 10 から J 06 にかけて位置し、方形周溝墓 SM 05 の北側にあたる。検出：Ⅲ層で検出。Ⅳ層土よりもやや暗褐色味がかかっているがその差は微妙で、トレンチ調査で床面や壁を確定するにとどまった。住居南側はかく乱により大きく破壊されている。構造：円形に近い楕円形を呈し、618 × (490 以上) cm を測る。主軸は N - 100° - W。ピットは 5 基見つかっている。そのうちの P 1 は住居の中

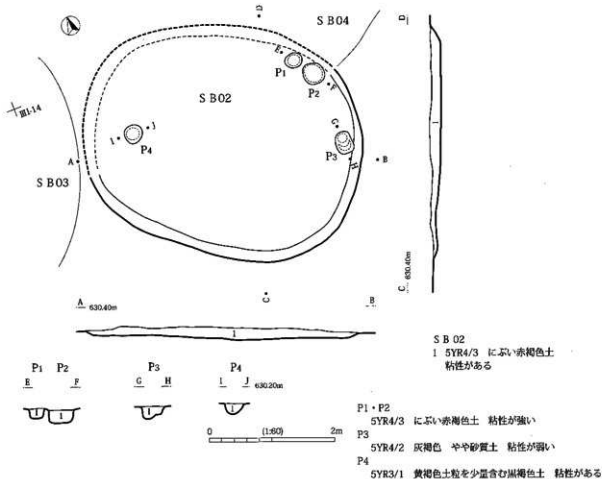


第18図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 01遺構図

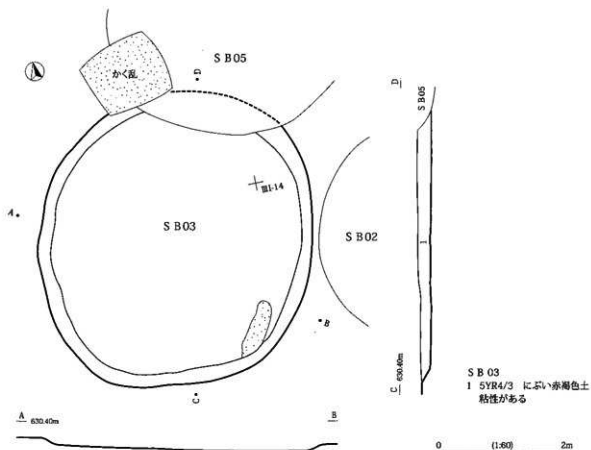
央にあり、残りの4基が柱穴と考えられる。掘り込みは浅く、しっかりした上屋を考えることはできない。床はほぼ平坦で、周囲が徐々に高くなる皿状を呈す。壁は緩やかに立ち上がる。掘り込みはしっかりしており、30～40cm深さを測る。埋土：赤褐色土の単層。ロームに近く、周辺部では識別は難しい。自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：押型文土器、石鏃、磨石などが出土している。住居跡の東側に偏る傾向がある。土器はほとんどが細片で、器形を復元できるものはない。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式と考えられる。

S B 02 (第13・19・37～39・55図、P L 3・13・14・25)

位置：Ⅲ I 14に位置する。検出：Ⅳ層直上でS B 03からS B 05までが互いに切りあうように検出された。土層的にはほとんど区別がつかず、遺物はできるだけ出土地点を残しながら掘り下げた。最終的に、遺物の出土状態などから、S B 04を切り、S B 03とは接するが切りあい関係をもたないと判断した。そのため北側のプランについては一部推定部分がある。構造：プランは小判形を呈し、主軸はN-68°-W。柱穴と考えられるピットは検出されなかった。床面は平坦で軟弱である。壁はだらだらと立ち上がる。埋土：にぶい赤褐色土の単層である。人為的な埋没を示す土層の状況ではない。他の遺構との覆土はほとんど差異がなく、切り分けは困難であった。遺物の出土状況：土器、石器ともかなりの点数にのぼったが、いずれも破片の状態で出土している。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式と考えられる。



第19図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡S B 02遺構図



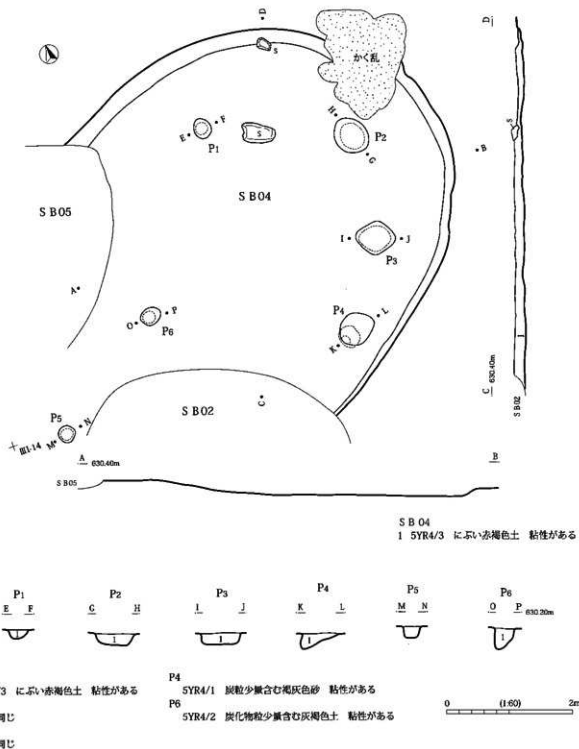
第20図 石子原遺跡縄文早期整穴住居跡SB 03 遺構図

SB 03 (第 13・20・39・40・56・57 図, P L 3・15・25・26)

位置：ⅢI 08・09・13・14 にまたがって検出された。検出：Ⅳ層直上で SB 02、SB 04、SB 05 が互いに切りあうように検出された。そのため住居の北側の壁は判然としない。土層的には他の住居跡とほとんど区別がつかないため、遺物はできるだけ出土地点を残しながら掘り下げ、最終的に、床面のレベル差や遺物の出土状態から SB 04 を切り、SB 05 に切られると判断した。そのためプランについては推定部分がある。遺物の出方からすると北東方向に広がる可能性もある。構造：規模は推定部分もあるが、470×430cm のほぼ円形に近い楕円形である。礫などの出方の共通性からすると、SB 04 と同じような小判形の住居跡になる可能性がある。埋土：にぶい赤褐色土の自然埋没土。遺物の出土状況：住居の東側で多く出土している。土器は細片で、一括したような出土状態ではない。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式と考えられる。

SB 04 (第 13・21・41～43・58～60 図, P L 3・16・17・27・28)

位置：ⅢI 09・14 にまたがって検出された。検出：Ⅳ層直上で SB 02 から SB 05、SH 01 まだが互いに切りあうように検出された。SH 01 は掘り下げ段階で集石の一部が検出されたため、最も新しいと考えられる。SB 02、SB 03、SB 05 の切り合い関係については、土層的にはほとんど区別がつかないため、できるだけ遺物の出土地点を残しながら掘り、最終的に、SB 04 が最も古いと判断した。そのためプランについては推定部分がある。特に、西部は判然としない。耕作によるかく乱を受けている。構造：切り合いにより全体像がつかめない。主軸は N-68°-E と考えられる。小判形のプランで、かなり大型の住居跡である。短軸でも 600cm を測り、長軸では 700cm 以上である。床面はほぼ平坦で、壁に向かって緩やかに立ち上がっていく。貼り床などの明確な床面はない。P 1 と P 2 の間に大型の

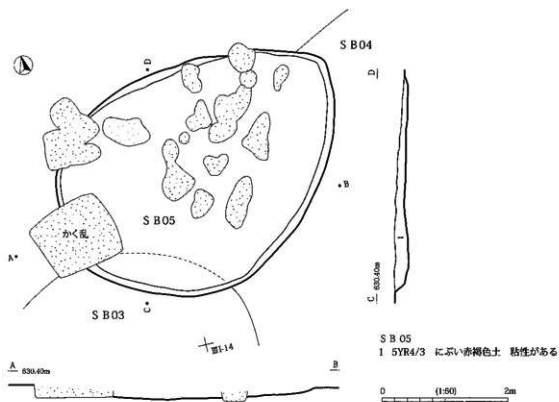


第 21 図 石子原遺跡縄文早期整穴住居跡 SB 04 遺構図

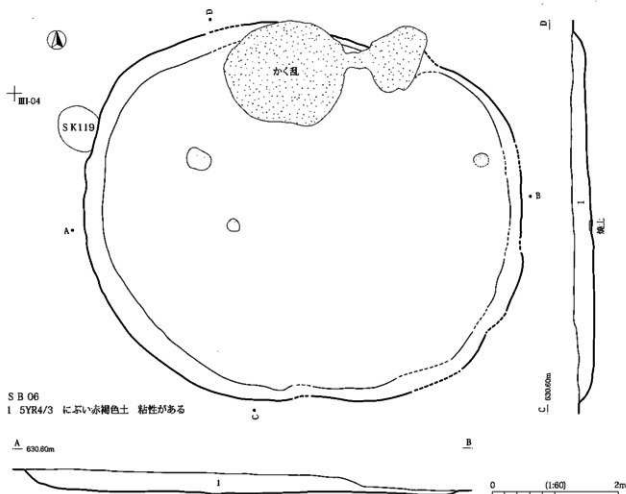
礫がある。埋土：にふい赤褐色土の単層である。人為的な埋没状況を示すものではなく、自然埋没である。遺物の出土状況：ほぼ全域から出土し、遺物の量も多い。磨石 75 (第 60 図) は住居内での接合資料である。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式と考えられる。

SB 05 (第 13・22・43・44・61 図、P L 18・29)

位置：Ⅲ I 08・09 にまたがって検出された。検出：Ⅳ層直上で SB 03、SB 04 と互いに切りあうように検出した。土層的には、地山とほとんど区別がつかず、遺物はできるだけ出土地点を残しながら掘



第22図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 05 遺構図



第23図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 06 遺構図

り下げた。最終的にS B 04を切ると判断した。そのためプランについては推定部分がある。S B 03とは南西隅でわずかに切りあう。S B 03の床を切り込んでおり、土層に変化が見られないことから、本住居跡のほうが新しいと判断した。構造：490×355cmの規模を測り、短軸の最大長は南西側による。主軸方向はN-64°-Eで、卵形のプランを呈す。床面は、耕作によるかく乱で破壊されている部分が多いが、ほぼ平坦になっている。掘り込みは浅く残存部が少ないが、壁は緩やかに立ち上がる。ピットなどの施設はない。ただし北西隅に焼土の痕跡が認められ、かなり熱を受けている。この焼土が本住居跡のものか、新しく掘り込まれた火床かはっきりしない。埋土：にぶい赤褐色土の単層で、自然埋没土と考えられる。遺物の出土状況：土器や石器が、ほぼ全域から出土している。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式と考えられる。

S B 06 (第13・23・44～46・62・63図、P L 4・18・19・29・30)

位置：ⅢⅠ区の北側で検出した。検出：Ⅳ層直上での検出となった。地山との差異はわずかで、プランの確定は困難を極めた。特に東側でははっきりしなかった。トレンチ調査の断面から立ち上がり等を把握して、最終的にプランを確定した。北側で、倒木痕と考えられる不整形な落ち込みがあり、一部破壊されている。構造：主軸方向は、W-10°-Sで、東西方向に長い楕円形を呈す。規模は、690×595cm。大型の竪穴である。床面は、ほぼ平坦であるが周囲にいくほど高くなり、そのまま緩やかに立ち上がる。床面の三ヶ所で焼土を確認しており、中央より西側に寄った位置に地床炉があったと考えられる。ただし、継続的に使ったかは焼土の量が少なく疑問である。柱穴は、検出されなかった。埋土：にぶい赤褐色土の単層で、自然埋没土と考えられる。遺物の出土状況：押型文土器、石器がほぼ全域から出土している。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式と考えられる。

(2) 遺物集中区

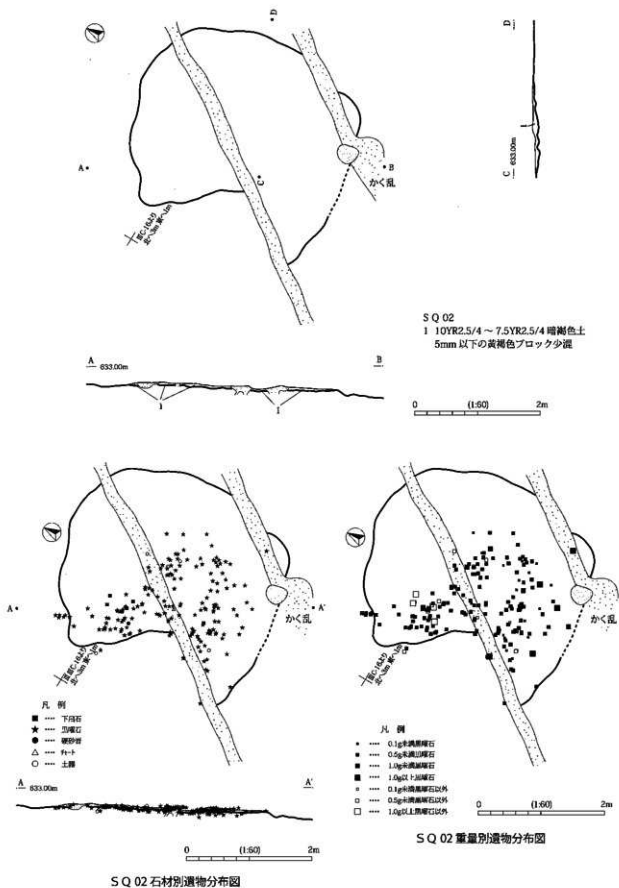
S Q 02 (第10・11・24・46・65図、P L 4・20・31)

位置：ⅢC 11グリッドに位置する。検出：Ⅲ層上面において検出した。検出中に黒曜石の細片がまとまって出土した。地山と異なる暗褐色土の範囲に含まれており、竪穴状の遺構の可能性が高いと考えた。ただし、暗褐色土や遺物の広がり不整形を呈す上に、壁などはすでに失われ本来のプランを捉えることができなかつたため、遺物集中区(SQ)として扱った。規模・形状：遺物の分布範囲は、東西320cm、南北280cmほどの範囲に収束する。特に中心から直径250cmの範囲は黒曜石の細片が特に集中している。住居の残欠とも考えられ、遺物が出土する場所は平坦となっている。集中部の南端部に被熱面が確認されている。柱穴は確認されていない。遺物の出土状況：土器、石器が出土している。土器は、細片がわずかに出土している。石器は、ほとんどが黒曜石で占められるが、下呂石の大型の剥片もみられ、これにチャートがわずかに入る。下呂石は集中部の西側に集中するが、黒曜石はほぼ全域から出土している。ただし、1g以上の剥片は、南側部分にまとまる傾向にある。時期：出土遺物から縄文早期押型文期立野式と考えられる。

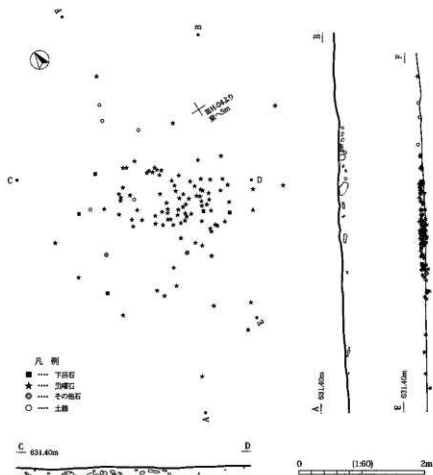
S Q 03 (第11・12・25・65図、P L 4・31)

位置：Ⅲ区のC 24からH 04にかけて位置している。平坦部から斜面へと変換する場所にある。検出：Ⅲ層上面で検出した。他遺構との切り合いはないが、プランをつかむことができなかった。規模・形状：遺物の分布範囲は南北350cm、東西300cmほどの範囲である。平坦部から斜面にかけて分布の頂部、200×150cmの範囲は遺物密度が高い。柱穴、床などの施設は検出されなかった。遺物の出土状況：遺物はほとんど黒曜石の細片である。土器は少なく、破片でしかも磨耗している。最も遺物が集中してみられる範囲は、100cmの範囲で、そのほとんどが、0.1g以下の黒曜石である。大型の原石や剥片は

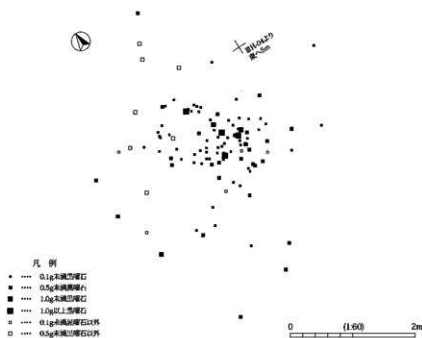
第3章 石子原遺跡



第24図 石子原遺跡縄文早期遺物集中区S Q 02遺構図および遺物分布図

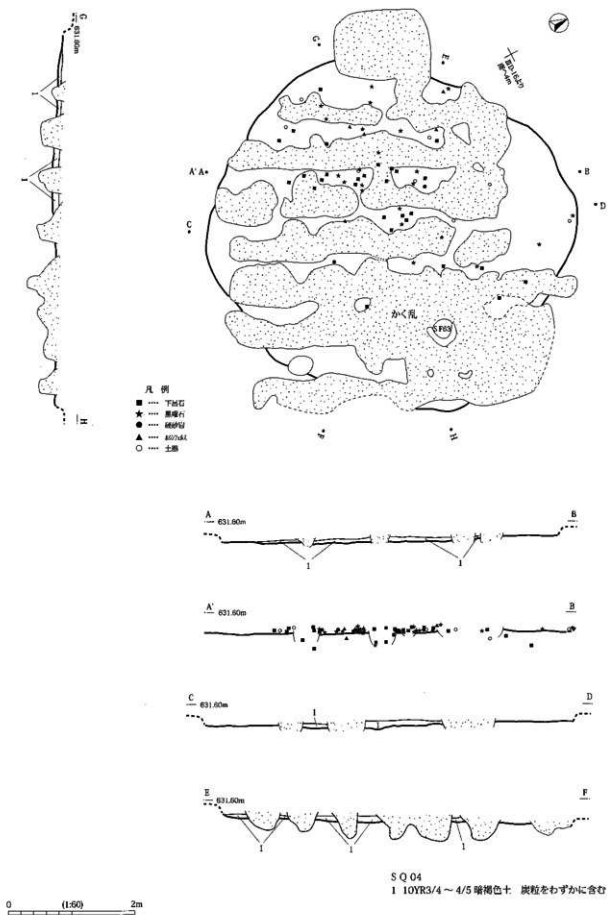


SQ 03 石材別遺物分布図



SQ 03 重量別遺物分布図

第25図 石子原遺跡縄文早期遺物集中区SQ 03 遺物分布図



第 26 図 石子原遺跡縄文早期遺物集中区 S Q 04 遺物分布図

みられず、微細な剥片によって占められていること、微細な加工のある剥片が含まれることなどから、石器の製作を終了して片付けたような状況である。下呂石がわずかに入るが、これもまた0.5g以下の細片である。時期：出土遺物から縄文早期立野式と考えられる。

SQ 04 (第12・26・46・65図、PL 4・20・31)

位置：Ⅲ区のC 20・25、D 16・21 グリッドにかけて位置する。検出：畝状の激しいかく乱を除去しながらプランの精査にあたり、楕円形のプランをつかむことができた。埋土はほとんど残存していない。堅穴住居跡の可能性が高いが、住居としての施設は検出されなかったため、遺物集中区(SQ)として扱った。規模・形状：560×510cmの方形ぎみの楕円形を呈す。主軸方向は、N-57°-Eにとる。床面は、硬化した部分は認められない。残存部のレベルは中央部がやや低いが一定しており、ほぼ平坦であると考えられる。柱穴、炉などの施設は検出されなかった。遺物の出土状況：埋土およびかく乱部分から土器・石器が出土している。ほぼ全域から出土しているが、かく乱がひどく出土状況については何もいえない。かく乱部分から出土した遺物も本来は本遺物集中区に帰属するものと考えられる。SQ 02・03が黒曜石主体で、小型の剥片が多いのに対し、この遺物集中区は下呂石を主体としており、ホルンフェルスや砂岩の剥片も含んでいる。また、1g以上の剥片が多くなっている。土器はすべて破片で、山形文や格子目文の押型文や燃糸文である。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式と考えられる。

(3) 土坑

土坑はその平面形態と規模によって分類することが可能である。平面形態は長軸と短軸の比が1:1.2のものを円形、同じく長軸と短軸の比が1:1.2~1:2.0までを楕円、1:2.0以上を長楕円として、それぞれA類・B類・C類とする。規模は50cm未満のものを小、50cm以上100cm未満のものを中、100cm以上150cmのものを大、150cm以上のものを特大とする。それぞれ、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳとする。この二つの分類を組み合わせて示すことにし、分類不能のものをその他とした。

① AⅠ類土坑(円形小型の土坑)

SK 01、06、17、23、26、27、30、37、46、48、75、122、123、126、127、128の16基が該当する。主なものは次のとおりである。

SK 01 (第13・27・46・66図、PL 20)

位置：ⅢN 05 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：平面形態は円形で、43×43×5cmと非常に浅い。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：いずれも破片であるが、ある程度まとまって押型土器が32点出土している。楕円文、格子目文、市松文、ネガティブ文などが出土している。石器では、打製石斧の折損破片、楔形石器、黒曜石、下呂石の剥片が出土している。時期：出土した遺物から縄文時代早期立野式期と考えられる。

SK 06 (第13・27図)

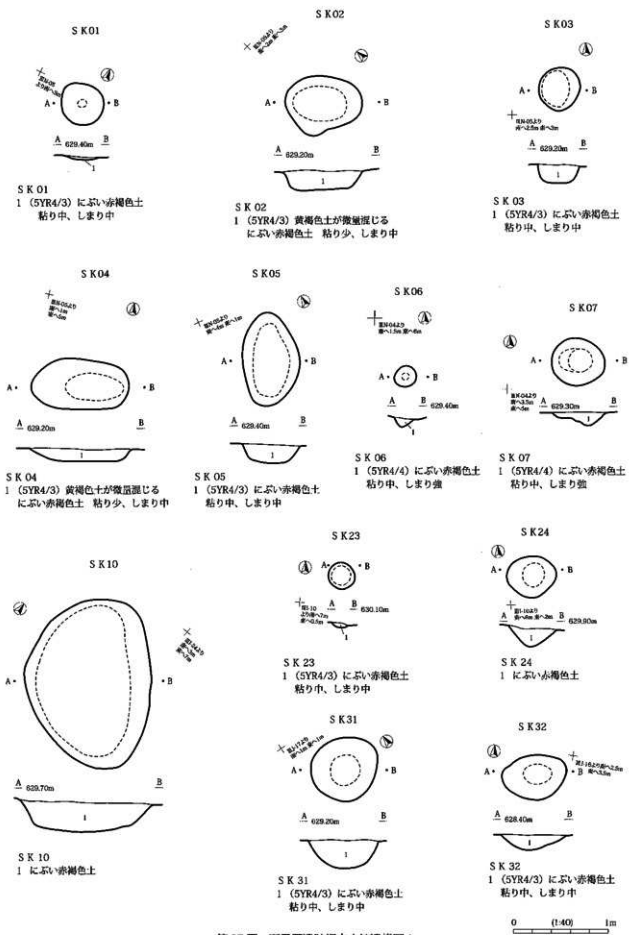
位置：ⅢN 04 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：24×23×10cmの円形、断面はすり鉢状を呈する。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 23 (第13・27図)

位置：ⅢI 10 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：27×24×5cmの円形。断面は皿状を呈す。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 30 (第13・48図、PL 21)

第3章 石子原遺跡



第27図 石子原遺跡縄文土坑遺構図1

位置：Ⅲ I 20 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：32×27×22cm、ほぼ円形を呈す。埋土の状態：自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：繊維含有土器の口縁（第48図345）が出土している。そのほかは細片が7点出土している。そのほとんどを山形文が占める。黒曜石製剥片1点が出土している。時期：縄文時代早期立野式から早期後半と考えられる。

SK 46（第13・28図）

位置：Ⅲ I 17 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：直径26cmほどの円形を呈す。埋土の状態：炭化物粒、褐色土粒を含むふい赤褐色土の単層。遺物の出土状況：遺物の出土は見られない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

SK 48（第10・28図）

位置：I V 18 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面において検出。構造：直径47cmほどの円形を呈す。埋土の状態：灰褐色土の単層である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 75（第12・29図）

位置：Ⅲ I 01 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：ほぼ円形の平面形を呈し、38×35×18cmの規模である。埋土の状態：黄褐色土ブロックを若干含む暗褐色土。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 122（第14・29図）

位置：Ⅲ J 06 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：直径24cmの円形を呈し、深さ28mを測る。埋土の状態：黄褐色土を含む赤褐色土の単層。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 123（第14・29図）

位置：Ⅲ J 06 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：ほぼ円形で、直径34cmを測る。埋土の状態：黄褐色土粒を含む黒褐色土の単層。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。ただし、覆土が黒褐色土であるので縄文中期の可能性も考えられる。

② AⅡ類土坑（中型円形の土坑）

SK 07、09、18、19、24、31、33、62、119、133の10基が該当する。主なものは次のとおりである。

SK 07（第13・27図）

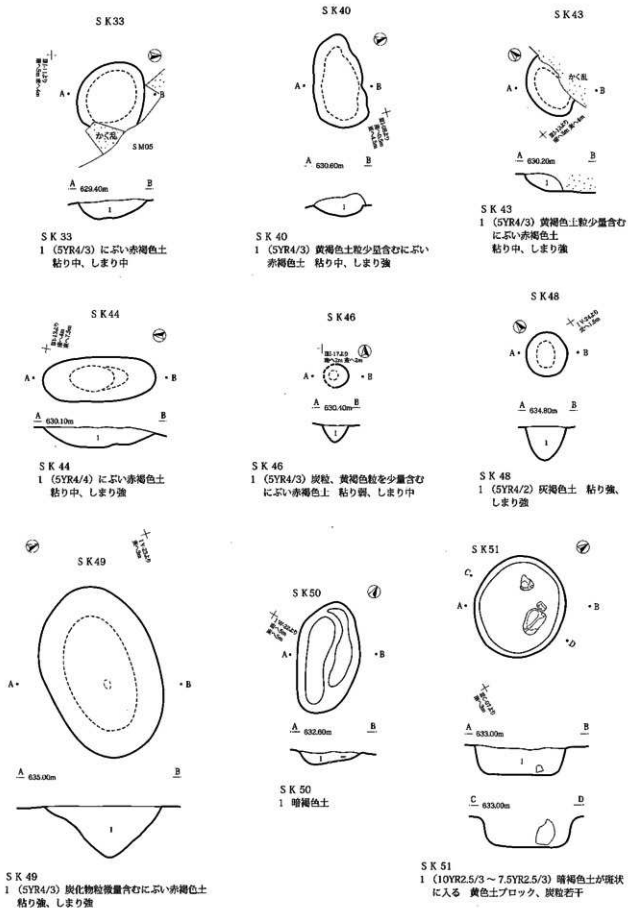
位置：Ⅲ N 04 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：平面形はほぼ円形で、56×53×13cmの規模を有す。すり鉢状の断面形を呈す。埋土の状態：ふい赤褐色土の単層。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 24（第13・27図）

位置：Ⅲ I 10 グリッドに位置する。S B 04の南東に位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：50×45×19cmで、ほぼ円形の平面形態である。埋土の状態：ふい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：格子目文1、不明1の2点出土しているが、いずれも細片である。時期：出土土器からみて、縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

SK 31（第14・27・47図、P L 21）

位置：Ⅲ J 17 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層で検出。構造：72×62×28cm、円形で、断面は船底状を呈す。埋土の状態：ふい赤褐色土の単層で、自然埋没である。遺物の出土状況：格子目文の細片が1点と下呂石の剥片1点が出土している。時期：縄文時代早期立野式期と考えられる。



第28図 石子原遺跡縄文土坑遺構図2

0 (1:40) 1m

S K 33 (第14・28図)

位置：Ⅲ J 11 に位置する。検出：Ⅲ層中でS M 05 に切られるように検出。構造：規模は80×70×18cmで、わずかに楕円形を呈す。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

S K 62 (第12・29図)

位置：Ⅲ D 06 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：ほぼ円形、わずかに南北方向に長く、62×56×10cmの規模である。埋土の状態：暗褐色土の単層。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

S K 119 (第13・29図)

位置：Ⅲ I 04 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：規模76×64×24cmではほぼ円形に近い。断面はすり鉢形である。埋土の状態：黄褐色土粒を一部程度含むにぶい赤褐色土。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

S K 133 (第15・29図)

位置：Ⅲ O 06 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：円形で、直径75cm、深さ16cmを測る。断面は船底状を呈す。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

③ AⅢ類土坑 (大型円形の土坑)

S K 15 (第13図)

位置：Ⅲ I 23 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：108×94×10cmの楕円形に近い円形を呈する。土坑底面は、中央が高くなり浅い掘り方である。埋土の状態：自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

④ BⅠ類土坑 (小型楕円形の土坑)

S K 03、11、25、42、125の5基が該当する。

S K 03 (第13・27・47図、P L 20)

位置：Ⅲ N 05 グリッド付近に位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：48×40×17cmで、南北にわずかに長い楕円形を呈す。断面は船底状である。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：押型文土器が破片の状態で71点出土している。格子目文、楕円文、山形文などが目立つ。石器は黒曜石、下呂石の剥片が1点ずつ出土している。時期：出土した遺物から縄文時代早期立野式期と考えられる。

S K 42 (第13・48図、P L 21)

位置：Ⅲ I 08 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：29×24×12cm、ほぼ円形を呈す。埋土の状態：自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：押型文土器が9点出土しているが、いずれも細片である。格子目、山形、楕円文が出土している。時期：出土土器から縄文時代早期立野式期と考えられる。

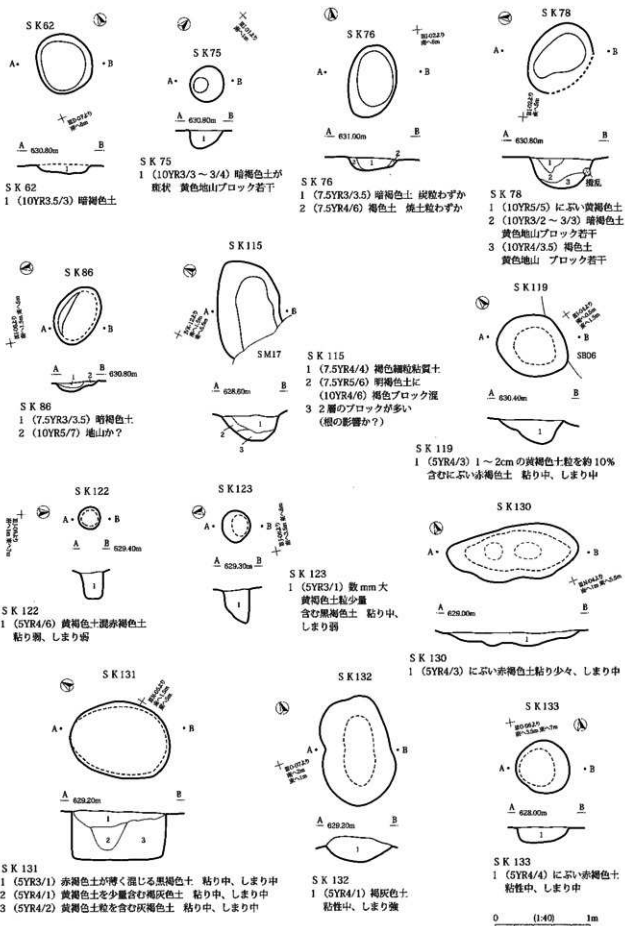
⑤ BⅡ類土坑 (中型楕円形の土坑)

S K 02、05、08、13、14、16、22、32、35、36、38、40、41、43、76、85、86、115、117、118、120、121の22基が該当する。

S K 02 (第13・27・66図、P L 31)

位置：Ⅲ N 05 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：規模は47×39×20cmの不整楕円形を呈す。埋土の状態：黄褐色土粒を含むにぶい赤褐色土。遺物の出土状況：文様の判別しない細片が1点出土している。時期：出土遺物から時期は決めがたいが、周辺遺構の状況などから縄文時代早

第3章 石子原遺跡



第29図 石子原遺跡縄文土坑遺構図3

期押型文期の遺構と思われる。

S K 05 (第 13・27 図)

位置：Ⅲ N 05 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：60×50×19cmの楕円形の平面プランを呈する。断面はタライ形の掘り込みで、比較的直に立ち上がる。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

S K 14 (第 13 図)

位置：Ⅲ I 23 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：規模は 87×56×12cmの楕円形プランをもつ。皿状の掘り方であるが、東側で1段低くなっている。東西方向に長くなっている。埋土の状態：自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：格子目と思われる破片1点が出土している。時期：出土した遺物から縄文時代早期立野式期と考えられる。

S K 32 (第 14・27 図)

位置：Ⅲ J 16 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層で検出。構造：66×48×17cm、楕円形で、断面は船底状を呈す。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

S K 40 (第 13・28 図)

位置：Ⅲ I 08 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：規模 98×50×20cm、やや不整な楕円形を呈す。埋土の状態：自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：不明細片が1点出土している。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

S K 43 (第 13・28・48 図、P L 21)

位置：Ⅲ I 13 グリッドに位置する。検出：かく乱によって東側を失うように検出した。構造：円形あるいは楕円形と考えられる。埋土の状態：黄褐色土粒をわずかに含むにぶい赤褐色土の単層、自然埋没である。遺物の出土状況：7点土器が出土しているが、いずれも細片で楕円文、格子目文、無文の土器などである。黒曜石の剥片2点が出土している。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式期と考えられる。

S K 76 (第 12・29 図)

位置：4区南部のⅢ I 01 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：74×50×14cm、南北に長い楕円形を呈する。断面は船底状である。埋土の状態：1層は炭化物粒を含む暗褐色土。2層が褐色土に焼土がわずかに含まれており、壁はごく弱い被熱を受けている。遺物の出土状況：文様不明の土器片が1点出土している。時期：出土遺物から縄文時代早期立野式期と考えられる。

S K 86 (第 12・29 図)

位置：Ⅲ I 06 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：64×44×6cmの楕円形を呈す。埋土の状態：暗褐色土で、わずかに焼土を含む。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

S K 115 (第 15・29 図)

位置：Ⅳ K 12 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。S M 17 に切られる。S M 17 は褐色土を含むブロック交じりの人為的埋没土であるのに対して、本址はⅣ層に近い褐色土であり、明確に区別できた。構造：(86)×66×26cmとやや不整な楕円形を呈し、船底状の断面形態である。埋土の状態：3層からなるが、いずれも褐色土を主体とする。遺物の出土状況：遺物はない。時期：S M 17 との切り合い関係から江戸以前であることは間違いない。覆土から縄文時代と判断した。

㊦ BⅢ類土坑（大型楕円形の土坑）

S K 04・50・131・132 が該当する。

SK 04 (第13・27・47図、P L 21)

位置：土坑が集中しているⅢN 05 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：103×54×14cm 楕円形を呈し、タライ状の断面形態で、直に立ち上がる。埋土の状態：黄褐色土ブロックを含むにぶい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：格子目文2、不明土器片が2点出土している。格子目文はいずれも同一個体で、大破片である。時期：出土した遺物から縄文時代早期立野式期と考えられる。

SK 50 (第11・28図)

位置：I W 13 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。Ⅳ層中かなりの礫が入り込み、かなり掘り込みにくいところにある。構造：118×66×12cmの規模で、楕円形を呈す。掘り込みは比較的浅く、断面は船底状を呈す。埋土の状態：暗褐色土の単層である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 131 (第13・29図)

位置：ⅢN 05 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：規模106×80×50cmの楕円形を呈す。埋土の状態：3層からなる。1層は赤褐色土を少量含む黒褐色土。2層は黄褐色土を含む褐色土。3層は2層よりも黄褐色土粒を含む灰褐色土である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 132 (第15・29図)

位置：ⅢO 07 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：規模114×76×26cmで不整な楕円形である。埋土の状態：褐色土の単層である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

⑦ BⅣ類土坑（特大で楕円形の土坑）

この土坑には、SK 10、49がある。

SK 10 (第13・27・47図、P L 21)

位置：ⅢI 24 グリッドに位置する。検出：4層上面で検出。構造：平面形は不整な楕円形で、170×126×30cmの大型の土坑である。断面形態は船底状を呈する。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層、自然埋没である。遺物の出土状況：口縁部破片1点を除き胴部破片で、11点の出土がある。格子目文が目立つ。黒曜石製の楔形石器1点、剥片2点が出土している。時期：出土遺物から縄文時代早期押型文期の時期である。

SK 49 (第10・28図)

位置：I V 23 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：規模は182×120×55cmの楕円形を呈する。埋土の状態：炭化物粒を微量含む赤褐色土の単層。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

⑧ CⅡ類土坑（中型で偏平な楕円形の土坑）

SK 45 (第13図)

位置：ⅢI 13 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：かく乱により不明。埋土の状態：自然埋土の状態と考えられる。遺物の出土状況：遺物の出土はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

⑨ CⅢ類土坑（大型で偏平な楕円形の土坑）

この土坑には、SK 12、44、130がある。

SK 44 (第13・28図)

位置：ⅢI 13 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：規模は118×48×20cmで長楕円

形を呈す。埋土の状態：にぶい赤褐色土。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SK 130 (第13・29図)

位置：ⅢN 04 グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。構造：規模は138×54×14cmのやや不整な楕円形を呈す。埋土の状態：にぶい赤褐色土の単層である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

⑩ CⅣ類土坑 (特大で偏平な楕円形の土坑)

SK 124 (第14図)

位置：ⅢJ 11 グリッドに位置する。検出：SK 125に切られるように検出した。構造：規模は210×82×30cmの不整な楕円形を呈す。埋土の状態：自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

⑪ その他の土坑

SK 78 (第12・29図)

位置：ⅢI 02 地区に位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：80×(56)×50cmで、楕円形を呈す。埋土の状態：3層からなる。1層はにぶい黄褐色土。2層は暗褐色土に地山ブロック混り。3層は褐色土に地山のロームブロックを若干含む。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構の状況などから縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

(4) 焼土址・焼土坑

焼土址・焼土坑は、掘り込みがないもの(A類)と大きな掘り込みがあるもの(B類)の2種がある。掘り込みがあるB類は、断面の形状が船底状のaと、一方が深くなるb、明瞭な二段構造になるcの3種に分けられる。

① A類

このタイプには、SF 55・68・70・89・92・98の6基が該当する。本来は掘り込みをもっていた可能性もあるが、ごく浅い掘り込みであろう。

SF 55 (第10・30図)

位置：ⅢC 11 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で、SQ 02に接するように検出。構造：不整な楕円形で、掘り込みはない。被熱による変色範囲は、南北36×東西30cmである。遺物の出土状況：遺物はない。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SF 89 (第12・32図)

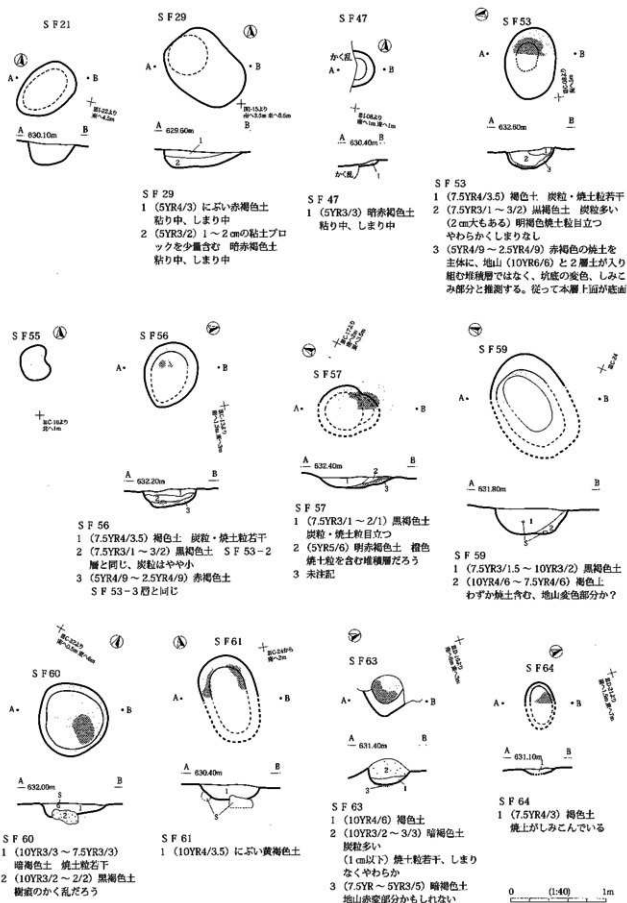
位置：ⅢI 11 グリッドに位置する。検出：かく乱土の除去中に検出。構造：66×40cmで、掘り込みはない。N-4°-E方向に長い楕円形を呈する。土坑底面から側壁にかけて被熱により硬化している。遺物の出土状況：遺物はない。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SF 92 (第12・32図)

位置：ⅢI 11 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：28×22cmで、掘り込みはほとんどない。全面被熱により硬化している。遺物の出土状況：遺物はない。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

SF 98 (第12・32図)

位置：ⅢI 06 グリッドに位置する。検出：かく乱を受けているが、SF 97に並んで4層上面で検出。構造：かく乱を受け全体像が明らかではないが、直径35cmほどのほぼ円形のプランとなるであろう。



第30図 石子原遺跡縄文早期焼土・焼土坑遺構1

掘り込みはなく、全面被熱により硬化している。埋土の状態：暗赤褐色土に焼土が全体に混じりこんでいる。遺物の出土状況：遺物はない。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と思われる。

② B類

Ba類は、SF 21・52・53・56・60・63・64・66・71・77・79・81・88・91・95・96・97の17基、Bb類は、SF 57・59・61・67・69・73・82・83・90・93・94の11基である。特に、SF 93はわずかに集石を伴い、集石炉の残骸とみられる状況である。明確な段構造をもつBc類はSF 29・65の2基がある。

なお、SF 47・72・80は切り合い等によって形状を把握しがたいため、分類できなかった。

ア) Ba類（船底状の掘り込み）

SF 21（第13・30図）

位置：ⅢI 22グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：平面は楕円形で $68 \times 46 \times 22\text{cm}$ の規模である。断面は船底状の掘り方で、長軸がやや東を向く。埋土の状態：上下2層からなるが、記録漏れにより埋土の内容は不明である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周囲の遺構の状況から縄文時代早期の可能性が高い。

SF 53（第11・30図）

位置：ⅢC 08グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：楕円形の平面形態である。規模は $76 \times 50 \times 18\text{cm}$ で、すり鉢状の断面形態を有す。埋土の状態：2層に分層される。いずれにも焼土や炭化物を含み、底面は被熱により赤変している。遺物の出土状況：遺物はない。時期：AMS測定法により $9,750 \pm 80$ の年代値を得ている。縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

SF 66（第12・31図）

位置：ⅢH 05グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造： $(62) \times 38 \times 16\text{cm}$ 、楕円形を呈すると考えられる。土坑底面は被熱により硬化している。埋土の状態：暗褐色土に炭化物粒を含む。遺物の出土状況：遺物はない。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

SF 77（第12・31図）

位置：ⅢI 01グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面において、かく乱を取り除くと単独で検出。構造： $56 \times 36 \times 14\text{cm}$ 、楕円形を呈す。側壁は被熱により硬化している。埋土の状態：炭化物粒を多量に含み、焼土粒わずかに含む黒褐色土である。遺物の出土状況：遺物はない。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

SF 88（第12・32図、P.L 4）

位置：ⅢI 07グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：規模は $62 \times 48 \times 10\text{cm}$ で、平面は楕円形である。土坑底面から側壁にかけて被熱により硬化している。埋土の状態：褐色土で、炭化物・焼土粒を若干含む。遺物の出土状況：遺物はない。時期：AMS測定法により $9,420 \pm 70$ の年代値を得ており、縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

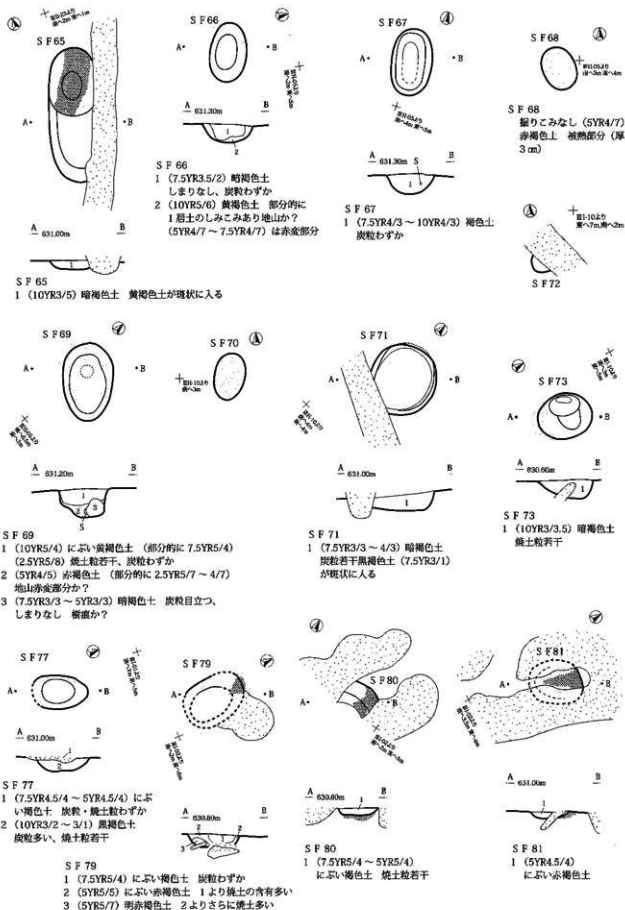
SF 91（第12・32図）

位置：ⅢI 11・12グリッドにかけて位置する。検出：4層上面で検出。埋土の状態：焼土などの量によって分層される。構造： $60 \times 38 \times 8\text{cm}$ 、楕円形を呈す。土坑底面から側壁まで全面被熱により硬化している。埋土の状態：3層に分層されるが、基本的には同一層と考えられる。遺物の出土状況：黒曜石の剥片1点が出土している。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

SF 97（第12・32図）

位置：ⅢH 10グリッドに位置する。検出：かく乱を受けているが、SK 98に並んでⅣ層上面で検出。構造： $48 \times 32 \times 12\text{cm}$ のほぼ円形のプランである。土坑底面から側壁にかけて全面被熱により硬化している。

第3章 石子原遺跡



第31図 石子原遺跡縄文早期焼土址・焼土坑遺構図 2

埋土の状態：暗赤褐色土に焼土が全体に混じりこんでいる。遺物の出土状況：無文と考えられる土器が1点出土している。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

イ) B b類(楕円形で一方が深くなる焼土跡)

S F 57 (第11・30図、P L 4)

位置：Ⅲ C 17 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：楕円形のプランを有す。64 × (50) × 8cmの規模をもち、皿状の断面形態である。土坑底面は特に南側部分で被熱により変色している。埋土の状態：2層からなるが、いずれにも焼土や炭化物を含む。遺物の出土状況：遺物はない。時期：AMS測定法により9,520 ± 80の年代値を得ている。縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

S F 59 (第11・30図)

位置：Ⅲ C 18 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：楕円形のプランと考えることができる。規模は、(120) × (80) × 26cmで、船底状の断面形である。土坑底面から側壁にかけて被熱により変色している。埋土の状態：2層。焼土硬化面の上に黒褐色土がのる。自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：山形文土器の細片が1点出土している。時期：AMS測定法により9,570 ± 70の年代値を得ており、出土遺物とあわせると縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

S F 61 (第11・30・48図、P L 21)

位置：Ⅲ C 23 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：(50) × 58 × 14cm、楕円形の平面形を呈す。断面形は皿状で浅い掘り込みである。土坑底面は被熱により硬化している。埋土の状態：3層。基本的には焼土が混じる褐色土の上に暗褐色土がのる。遺物の出土状況：櫛状、平行線文などの細片が7点出土している。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

S F 67 (第12・31図)

位置：Ⅲ H 05 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：70 × 42 × 10cm、楕円形を呈す。側壁は被熱により硬化している。埋土の状態：褐色土に炭化物粒を含む。遺物の出土状況：遺物はない。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

S F 69 (第12・31図)

位置：Ⅲ H 05 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：82 × 54 × 16cm、楕円形を呈す。土坑底面から側壁にかけて被熱により硬化している。埋土の状態：にぶい褐色土単層である。一部樹痕によりかく乱を受けている。遺物の出土状況：遺物はない。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

S F 73 (第12・31図)

位置：Ⅲ H 15 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：58 × 48 × 20cm、円に近い楕円形を呈す。側壁は被熱により硬化している。一段低くなっているのは樹痕によるかく乱と考えられる。埋土の状態：暗褐色土に焼土を含む単層である。遺物の出土状況：黒曜石、チャート、下呂石の剥片が1点ずつ出土している。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

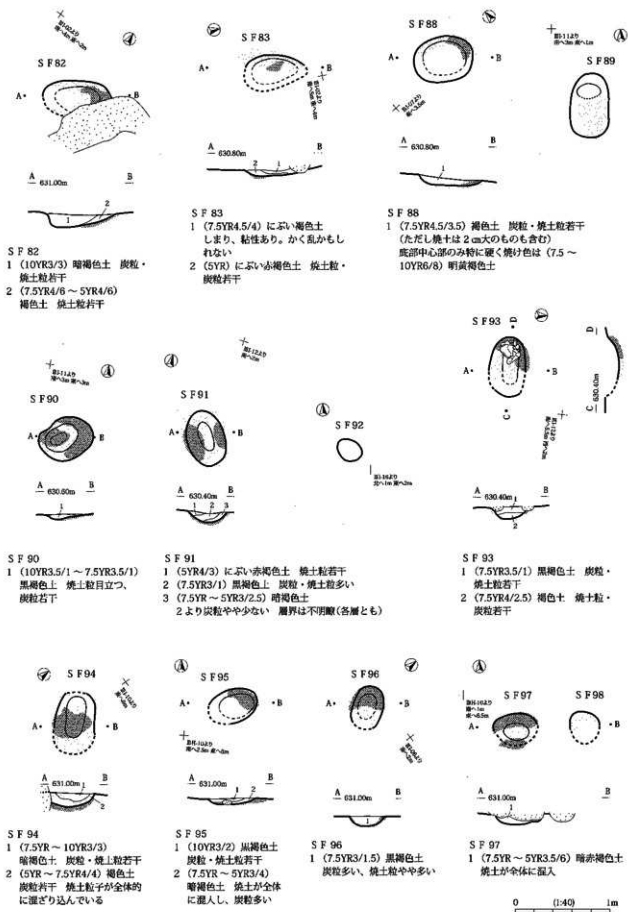
S F 93 (第12・32・48図、P L 21)

位置：Ⅲ I 11 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：64 × 40 × 12cm、船底状の断面形態である。土坑底面から側壁にかけて全面被熱により硬化している。角礫が4点入れられており、集石炉の破壊されたものの可能性も考えられる。埋土の状態：2層からなり、黒褐色土、褐色土いずれにも焼土や炭化物を含んでいる。遺物の出土状況：平行線文、山形文の押型文土器が出土している。下呂石の楔形石器1点、黒曜石の剥片3点が出土している。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

S F 94 (第12・32・66図、P L 32)

位置：Ⅲ H 10 グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：68 × 44 × 16cm、楕円形を呈す。

第3章 石子原遺跡



第32図 石子原遺跡縄文早期焼土址・焼土坑遺構図3

土坑底面から側壁にかけて全面被熱により硬化している。埋土の状態：2層からなる。暗褐色土、褐色土いずれにも焼土炭化物を含んでいる。遺物の出土状況：不明土器片が2点と黒曜石の剥片2点が出土している。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

ウ) Bc類(二段構造)

S F 29 (第13・30・48図、P L 21)

位置：Ⅲ I 15グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：規模88×62×20cmの楕円形の平面形で、底面は北西側がやや深くなる二段構造を有し、皿状に浅く掘り込む。底面から壁にかけて焼けている。埋土の状態：2層からなり、1層はにぶい赤褐色土、2層は1層に粘土ブロックを含んでいる。遺物の出土状況：押型文と思われる破片が3点出土している。磨耗が激しくはっきりしないが、市松文であろう。また無文の土器も出土している。時期：出土した遺物から縄文時代早期立野式期であろう。

S F 65 (第12・31図)

位置：Ⅲ D 23グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で検出。構造：140×(52)×13cm、東側部分をかく乱によって失う。長楕円形を呈す。北側で一段低くなり、土坑底面は被熱により硬化している。埋土の状態：暗褐色土に黄褐色土を含む。遺物の出土状況：9点の土器が出土しているが、いずれも細片である。時期：縄文時代早期押型文期の遺構と考えられる。

(5) 集石炉

集石炉には、方形すり鉢状の断面をもつものと楕円形で船底状の断面形状のものがある。

S H 01 (円形すり鉢状) (第13・33・48・66図、P L 5・22・31)

位置：Ⅲ I 09グリッドに位置する。検出：風化ローム層直上での遺構検出時に礫が露出したことにより検出。S B 04内に位置するが、検出面はS B 04の床面より高く、S B 04を切っている。構造：直径110cmの隅丸方形で確認面からの深さ60cmの土坑中に数～30cmと大小様々な礫が詰まっている。礫の多くは焼けていた。S B 04以外の縄文時代早期住居跡と同時存在した集石炉であると思われる。埋土の状態：埋土は内外2層に分かれ、礫に囲まれた内側が黒色土、外側が周囲の住居跡の埋土に似たにぶい赤褐色土である。遺物の出土状況：縄文時代早期の押型文土器約20点と台石、黒曜石の剥片5点、下居石の剥片1点が出土している。時期：出土土器により縄文時代早期立野式期の遺構である。

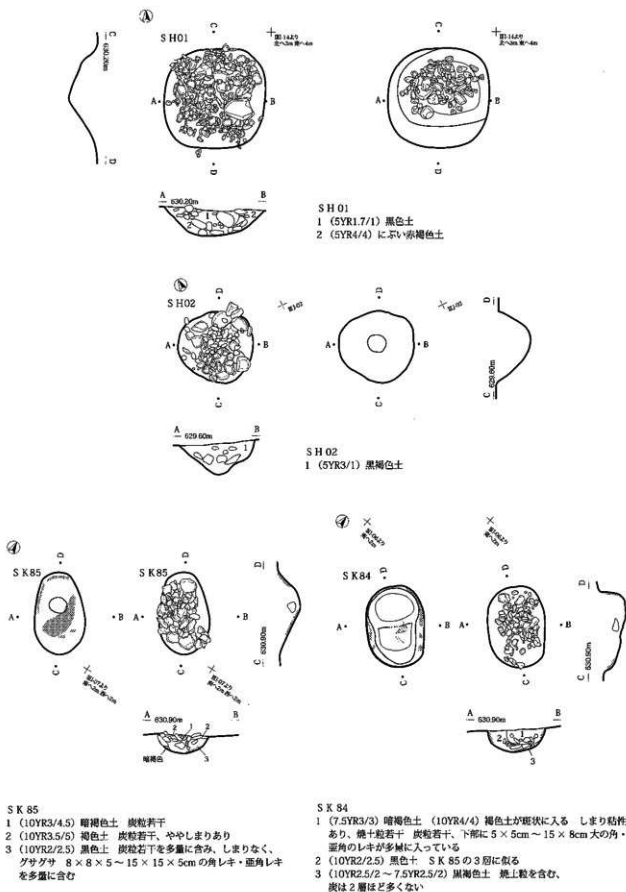
S H 02 (円形すり鉢状) (第14・33図、P L 5)

位置：Ⅲ J 01グリッドに位置する。検出：表土掘り下げ中に一部の礫が露出したことにより検出。構造：直径80cmの円形で、確認面からの深さ35cmの土坑の中に数～25cmと大小様々な礫が詰まっており、焼礫も混じっていた。底面の礫が大きく、周囲が高く中央が窪むように配置されていた。埋土の状態：埋土は黒褐色土。遺物の出土状況：遺物はない。時期：周辺遺構との関係から縄文時代早期立野式期と思われる。

S K 84 (楕円船底状) (第12・33図、P L 5)

位置：Ⅲ I 06グリッドに位置する。検出：Ⅳ層上面で、焼土とわずかな落ち込みを検出。構造：楕円形で、86×60×27cmの規模をもつ。断面は弱い二段の掘り込みをもつ。埋土の状態：3層からなる。1層は7.5YR 3/3暗褐色土に10YR 4/4褐色土が斑状に入り込む。焼土・炭化物を若干含む。下部に5×5cmから15×8cm大の垂角礫を多量に含む。2層は10YR2/2.5黒色土炭化物・焼土を含む。3層は2層より焼土を含み、炭化物は少ない。遺物の出土状況：6点の土器が出土している。文様が判読できるのは2点のみである。黒曜石の楔形石器1点、剥片7点、チャート製剥片1点が出土している。時期：AMS測定法により9,490±70の年代値を得ており、出土遺物と合わせ縄文時代早期立野式期である。

S K 85 (楕円船底状) (第12・33図、P L 5)



0 (1:40) 1m

第33図 石子原遺跡縄文早期集石炉遺構図

遺構名	位置	図	分期	平面形	断面形	埋土	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
SF 21	Ⅲ I 22	30	B a	楕円形	船底状	不明	68	46	22
SF 29	Ⅲ I 15	30	B c	楕円形	底面が二段構造	1: にぶい赤褐色土 2: 暗赤褐色土に粘土塊を含む	88	62	20
SF 47	Ⅲ I 08	30	—	楕円形	皿状	1: 暗赤褐色土	(38)	18	2
SF 52	Ⅲ C 06	—	B a	楕円形	船底状	1: 褐色土に焼土粒混じる 2: にぶい赤褐色土に焼土・炭粒混じる	100	60	8
SF 53	Ⅲ C 08	30	B a	楕円形	すり鉢状	1: 褐色土に焼土・炭粒混じる 2: 黒褐色土に炭粒多量に混じる	76	50	18
SF 55	Ⅲ C 11	30	A	不整形円形	掘り込みなし	なし	36	30	—
SF 56	Ⅲ C 13	30	B a	楕円形	船底状	1: 褐色土に焼土・炭粒混じる 2: 黒褐色土に炭粒に混じる	70	56	14
SF 57	Ⅲ C 17	30	B b	楕円形	皿状	1: 黒褐色土に焼土・炭粒混じる 2: 明赤褐色土に焼土粒混じる	64	(50)	8
SF 59	Ⅲ C 18	30	B b	楕円形	船底状	1: 黒褐色土 2: 褐色土に焼土粒混じる	(120)	(80)	26
SF 60	Ⅲ C 22	30	B a	ほぼ円形	船底状	1: 暗褐色土に焼土粒若干混じる 2: かく乱(黒褐色土)	76	73	14
SF 61	Ⅲ C 23	30	B b	楕円形	皿状	1: 暗褐色土 2: 暗褐色土に多量の炭粒混じる	(50)	58	14
SF 63	Ⅲ D 16	30	B a	円形	皿状	1: 褐色土 2: 暗褐色土に多量の炭粒混じる	(50)	(50)	26
SF 64	Ⅲ D 21	30	B a	楕円形	皿状	1: 褐色土	(50)	33	5
SF 65	Ⅲ D 23	31	B c	長楕円形	底面が二段構造	1: 暗褐色土に黄褐色土を斑状に含む	140	(52)	13
SF 66	Ⅲ H 05	31	B a	楕円形	船底状	1: 暗褐色土に炭粒混じる	(62)	38	16
SF 67	Ⅲ H 05	31	B b	楕円形	底面的一方が やや下がる	1: 褐色土に少量の炭粒混じる	70	42	10
SF 68	Ⅲ H 05	31	A	楕円形	掘り込みなし	なし	44	32	—
SF 69	Ⅲ H 05	31	B b	楕円形	底面的一方が やや下がる	1: にぶい黄褐色土に少量の焼土・炭粒混じる	82	54	16
SF 70	Ⅲ H 10	31	A	楕円形	掘り込みなし	なし	50	32	—
SF 71	Ⅲ H 10	31	B a	ほぼ円形	船底状	1: 暗褐色土に黒褐色土を斑状に含む	76	70	20
SF 72	Ⅲ H 15	31	—	楕円形	不明	不明	34	28	—
SF 73	Ⅲ H 15	31	B b	円に近い 楕円形	底面的一方が やや下がる	1: 暗褐色土に若干の焼土粒が混じる	58	48	20
SF 77	Ⅲ I 01	31	B a	楕円形	船底状	1: にぶい褐色土に若干の焼土・炭粒混じる 2: 黒褐色土に多量の炭粒混じる	56	36	14
SF 79	Ⅲ I 02	31	B a	楕円形	船底状	1: にぶい褐色土に若干の炭粒混じる 2: にぶい赤褐色土に炭粒混じる 3: 明赤褐色土	(72)	(48)	12
SF 80	Ⅲ I 02	31	—	—	皿状	1: にぶい褐色土に若干の焼土粒混じる	—	—	—
SF 81	Ⅲ I 02	31	B a	—	皿状	1: にぶい赤褐色土	44 cm以上	—	—
SF 82	Ⅲ I 02	32	B b	楕円形	底面的一方が やや下がる	1: 暗褐色土に若干の焼土・炭粒混じる 2: 褐色土に若干の焼土混じる	72	38	14
SF 83	Ⅲ I 02	32	B b	楕円形	底面的一方が やや下がる	1: かく乱か(にぶい褐色土) 2: にぶい赤褐色土に若干の焼土・炭粒混じる	(64)	—	—
SF 88	Ⅲ I 07	32	B a	楕円形	皿状	1: 褐色土に若干の焼土・炭粒混じる	62	48	10
SF 89	Ⅲ I 11	32	A	長い楕円形	掘り込みなし	なし	66	40	—
SF 90	Ⅲ I 11	32	B b	楕円形	底面的一方が やや下がる	1: 黒褐色土に焼土・炭粒混じる	56	44	6
SF 91	Ⅲ I 11・12	32	B a	楕円形	すり鉢状	1: にぶい赤褐色土に若干の焼土粒混じる 2: 黒褐色土に多量の焼土・炭粒混じる 3: 暗褐色土に炭粒混じる	60	38	8
SF 92	Ⅲ I 11	32	A	楕円形	掘り込みなし	なし	28	22	—
SF 93	Ⅲ I 11	32	B b	楕円形	底面的一方が やや下がる	1: 黒褐色土に若干の焼土・炭粒混じる。 角レキを4個含む 2: 褐色土に若干の焼土・炭粒混じる	64	40	12
SF 94	Ⅲ H 10	32	B b	楕円形	底面的一方が やや下がる	1: 暗褐色土に若干の焼土・炭粒混じる 2: 赤褐色土に焼土粒が混じる	(68)	44	16
SF 95	Ⅲ H 10	32	B a	楕円形	皿状	1: 黒褐色土に若干の焼土・炭粒混じる 2: 暗褐色土に多量の焼土・炭粒混じる	(54)	34	4
SF 96	Ⅲ H 10	32	B a	楕円形	船底状	1: 黒褐色土に多量の焼土・炭粒混じる	46	32	10
SF 97	Ⅲ H 10	32	B a	ほぼ円形	船底状	1: 暗赤褐色土に焼土混じる	48	32	12
SF 98	Ⅲ I 06	32	A	ほぼ円形	掘り込みなし	なし	34	35	—

第8表 縄文早期焼土址・焼土坑一覧

第3章 石子原遺跡

遺構名	位置	図	分類	平面形	断面形	埋土	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
SK 01	Ⅲ N 05	27	A Ⅰ	円形	皿状	1: にぶい赤褐色土	43	43	5
SK 02	Ⅲ N 05	27	B Ⅱ	不整楕円形	船底状	1: 黄褐色土粒を含むにぶい赤褐色土	47	39	20
SK 03	Ⅲ N 05	27	B Ⅰ	楕円形	船底状	1: にぶい赤褐色土	48	40	17
SK 04	Ⅲ N 05	27	B Ⅲ	楕円形	タライ状	1: 黄褐色土塊を含むにぶい赤褐色土	103	54	14
SK 05	Ⅲ N 05	27	B Ⅲ	楕円形	タライ状	1: にぶい赤褐色土	60	50	19
SK 06	Ⅲ N 04	27	A Ⅰ	円形	すり鉢状	1: にぶい赤褐色土	24	23	10
SK 07	Ⅲ N 04	27	A Ⅱ	円形	すり鉢状	1: にぶい赤褐色土	56	53	13
SK 08	Ⅲ N 03	—	B Ⅱ	楕円形	皿状	—	70	50	6
SK 09	Ⅲ I 24	—	A Ⅱ	円形	船底状	—	82	78	38
SK 10	Ⅲ I 24	27	B IV	不整楕円形	船底状	1: にぶい赤褐色土	170	126	30
SK 11	Ⅲ I 24	—	B Ⅰ	楕円形	皿状	—	45	37	7
SK 12	Ⅲ I 24	—	C Ⅲ	楕円形	皿状	—	107	44	12
SK 13	Ⅲ I 24	—	B Ⅱ	楕円形	—	—	54	44	—
SK 14	Ⅲ I 23	—	B Ⅱ	楕円形	皿状	—	87	56	12
SK 15	Ⅲ I 23	—	A Ⅲ	円形	皿状	—	108	94	10
SK 16	Ⅲ I 23	—	B Ⅱ	楕円形	皿状	—	88	63	5
SK 17	Ⅲ I 23	—	A Ⅰ	ほぼ円形	皿状	—	44	38	8
SK 18	Ⅲ I 22	—	A Ⅱ	ほぼ円形	すり鉢状	—	77	65	25
SK 19	Ⅲ I 22	—	A Ⅱ	ほぼ円形	すり鉢状	—	61	59	20
SK 20	Ⅲ N 03	—	—	ほぼ円形	—	—	45	42	—
SK 22	Ⅲ I 14	—	B Ⅱ	楕円形	すり鉢状	—	52	34	14
SK 23	Ⅲ I 10	27	A Ⅰ	円形	皿状	1: にぶい赤褐色土	27	24	5
SK 24	Ⅲ I 10	27	A Ⅱ	ほぼ円形	すり鉢状	1: にぶい赤褐色土	50	45	19
SK 25	Ⅲ I 10	—	B Ⅰ	楕円形	すり鉢状	1: にぶい赤褐色土	45	37	19
SK 26	Ⅲ I 15	—	A Ⅰ	円形	すり鉢状	—	42	39	22
SK 27	Ⅲ I 15	—	A Ⅰ	円形	すり鉢状	—	29	28	14
SK 28	Ⅲ I 15	—	—	不定形	—	—	110	40	18
SK 30	Ⅲ I 20	—	A Ⅰ	ほぼ円形	すり鉢状	—	32	27	22
SK 31	Ⅲ J 17	27	A Ⅲ	ほぼ円形	船底状	1: にぶい赤褐色土	72	62	28
SK 32	Ⅲ J 16	27	B Ⅱ	楕円形	船底状	1: にぶい赤褐色土	66	48	17
SK 33	Ⅲ J 11	28	A Ⅲ	ほぼ円形	船底状	1: にぶい赤褐色土	80	70	18
SK 34	Ⅲ J 11	—	—	—	—	—	—	—	—
SK 35	Ⅲ J 06	—	B Ⅱ	楕円形	船底状	—	92	66	27
SK 36	Ⅲ I 04	—	B Ⅱ	楕円形	—	—	62	38	22
SK 37	Ⅲ I 04	—	A Ⅰ	円形	—	—	44	42	16
SK 38	Ⅲ I 15	—	B Ⅱ	楕円形	—	—	104	60	18
SK 39	Ⅲ I 15	—	—	—	—	—	—	—	—
SK 40	Ⅲ I 08	28	B Ⅱ	不整楕円形	皿状	1: 黄褐色土粒を含むにぶい赤褐色土	98	50	20
SK 41	Ⅲ I 08	—	B Ⅱ	楕円形	—	—	56	34	16
SK 42	Ⅲ I 08	—	B Ⅰ	楕円形	—	—	29	24	12
SK 43	Ⅲ I 13	28	B Ⅱ	楕円形	—	1: 黄褐色土粒を含むにぶい赤褐色土	67	36	16
SK 44	Ⅲ I 13	28	C Ⅲ	長楕円形	船底状	1: にぶい赤褐色土	118	48	20
SK 45	Ⅲ I 13	—	C Ⅲ	楕円形	—	—	66	33	14
SK 46	Ⅲ I 17	28	A Ⅰ	円形	すり鉢状	1: 炭化物、褐色土粒を含むにぶい赤褐色土	26	26	—
SK 48	I V 18	28	A Ⅰ	円形	すり鉢状	1: 灰褐色土	47	44	34
SK 49	I V 23	28	B IV	楕円形	すり鉢状	1: 炭化物粒を微量含む赤褐色土	182	120	55
SK 50	I W 13	28	B Ⅲ	楕円形	船底状	1: 暗褐色土	118	66	12
SK 51	Ⅲ C 05	28	A Ⅲ	ほぼ円形	タライ状	1: ローム塊、炭化物を含む暗褐色土	104	96	28
SK 62	Ⅲ D 06	29	A Ⅱ	ほぼ円形	皿状	1: 暗褐色土	62	56	10
SK 75	Ⅲ I 01	29	A Ⅰ	ほぼ円形	すり鉢状	1: 黄褐色土塊を含む暗褐色土	38	35	18
SK 76	Ⅲ I 01	29	B Ⅱ	楕円形	船底状	1: 炭化物粒を含む暗褐色土 2: 粘土を含む褐色土	74	50	14
SK 78	Ⅲ I 02	29	—	楕円形	船底状	1: にぶい黄褐色土 2: ローム塊を含む暗褐色土 3: ローム塊を含む褐色土	80	(56)	50
SK 84	Ⅲ I 05	33	B Ⅱ	楕円形	弱い二段盛り状	1: 粘土粒を含む暗褐色土 2: 黒色土 3: 粘土粒を含む黒褐色土	86	60	22/27
SK 85	Ⅲ I 05	33	B Ⅱ	楕円形	—	1: 炭化物を含む褐色土	86	54	26
SK 86	Ⅲ I 06	29	B Ⅱ	楕円形	皿状	1: わずかに粘土を含む暗褐色土	64	44	6
SK 115	IV K 12	29	B Ⅱ	不整楕円形	船底状	1: 褐色土 2: 褐色土粒を含む暗褐色土 3: 2層のブロック多く含む	(86)	66	26
SK 117	Ⅲ J 12	—	B Ⅱ	楕円形	—	—	67	45	14
SK 118	Ⅲ J 12	—	B Ⅱ	楕円形	—	—	70	50	14
SK 119	Ⅲ I 04	29	A Ⅲ	ほぼ円形	すり鉢状	1: 黄褐色土粒を含むにぶい赤褐色土	76	64	24
SK 120	Ⅲ I 14	—	B Ⅱ	楕円形	皿状	—	52	42	6
SK 121	Ⅲ I 14	—	B Ⅱ	楕円形	—	—	50	38	8

第9表-1 縄文土坑一覧

遺構名	位置	図	分類	平面形	断面形	埋土	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
S K 122	Ⅲ J 06	29	A I	円形	柱状	1: 黄褐色土粒を含む赤褐色土	24	22	28
S K 123	Ⅲ J 06	29	A I	円形	柱状	1: 黄褐色土粒を含む黒褐色土	34	30	36
S K 124	Ⅲ J 11	—	C IV	不整楕円形			210	82	30
S K 125	Ⅲ J 11	—	B I	楕円形			28	22	22
S K 126	Ⅲ J 11	—	A I	ほぼ円形			37	33	62
S K 127	Ⅲ J 11	—	A I	円形			29	29	6
S K 128	Ⅲ J 11	—	A I	円形	皿状		29	29	6
S K 129	Ⅲ J 11	—	—	ほぼ円形	すり鉢状		19	16	14
S K 130	Ⅲ N 04	29	C III	不整楕円形	皿状	1: にぶい褐色土	138	54	14
S K 131	Ⅲ N 05	29	B III	楕円形	箱状	1: 赤褐色土を含む黒褐色土 2: 黄褐色土を含む褐灰色土 3: 2層より黄褐色土を含む灰褐色土	106	80	50
S K 132	Ⅲ O 07	29	B III	不整楕円形	皿状	1: 褐灰色土	114	76	26
S K 133	Ⅲ O 06	29	A II	円形	船底状	1: にぶい赤褐色土	75	75	16

第9表-2 縄文土坑一覽

位置: Ⅲ I 06 グリッドに位置する。検出: IV層上面で検出。構造: 楕円形で、86×54×26cmの規模をもつ。断面はすり鉢状の掘り込みをもつ。埋土の状態: 3層からなる。1層(10YR3/4.5)は暗褐色土に炭化物粒を若干含む。2層(10YR3.5/5)褐色土、3層は(10YR2/2.5)黒色土で、非常にやわらかく炭化物粒を多量に含む。3層上面に8×8から15×15cm大の垂角礫を多量に含む。遺物の出土状況: 細片が2点出土している。文様が判読できるものはない。黒曜石の剥片1点が出土している。時期: AMS測定法により9,280±70BPの年代値が出ており、出土遺物と合わせて縄文時代早期立野式期である。

2 縄文中期の遺構

(1) 竪穴住居跡

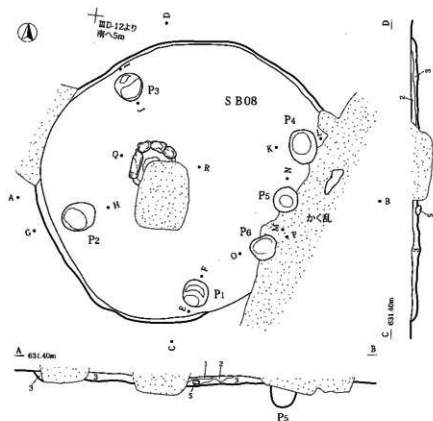
S B 08 (第12・34・52・64図、P L 6・34・35)

位置: Ⅲ D 12から17にかけて位置する。検出: IV層上面で検出。耕作などのかく乱が随所に入り、東側の一部はすでに失われてしまっている。構造: 平面形はやや不整な円形を呈し、主軸をN-73°-Wにとる。規模は(395)×465cmを測る。柱穴は6本検出したが、主柱穴となるのはP1~4まで、P5・6は補助柱穴あるいは入口に関するピットと考えられる。貼り床などは見られず床面ははっきりしない。ほぼ平坦であるが、中央部がわずかにくぼむ。炉は後世のかく乱(江戸時代の墓坑の可能性)により一部を破壊されているが、長方形の石囲い炉で、残存部分で78×65cmを測る。残存する石は4個。長辺に長い石を、短辺に小ぶりの石を使用している。長辺の石は近くの石と接合している。火床面は焼けて硬化している。掘り込みは浅く、壁の残存部は少ないが、緩やかに立ち上がる。埋土の状態: 3層からなる、レンズ状の自然埋没の状況を示している。いずれの層にも細かい炭化物が入る。遺物の出土状況: 遺物の量は多くない。P6から深鉢形土器の底部(第52図7)が出土している。かく乱部分から出土した土器(第52図1)も本址に属すると考えられる。時期: 出土した遺物から縄文中期中葉から後葉への移行期、大門原式の範疇に入るのであろう。

(2) 土坑

S K 51 (第11・28図)

位置: Ⅲ C 06 グリッドに位置する。検出: IV層上面で検出。構造: ほぼ円形でわずかに南北方向に長い。壁は直に掘り込み、断面形はタイライ状を呈す。埋土の状態: 黄褐色ブロック、炭化物粒若干入る。遺物の出土状況: 土器の出土はない。黒曜石の剥片が4点出土している。時期: AMS測定法により4,150±50BPの値を得ており、縄文時代中期後半と考えられる。



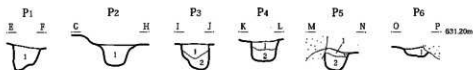
SB 08

- 1 7.5YR3/1 黒褐色土 炭粒をわずかに含む
- 2 10YR3/2 黒褐色土 炭粒若干
- 3 10YR4/3 ~ 4/4 にぶい黄褐色土 2層に似た土が斑状に入る? 炭粒わずか



Q

- 1 10YR3/4 ~ 7.5YR3/4 暗褐色土 炭粒、粘土粒若干目立つ
- 2 10YR4/5 褐色土



P1

- 1 10YR3/3 ~ 3/4 暗褐色土 炭化物わずかに含む
粘性がある

P2

P1と同じ

P3

- 1 10YR3/3 ~ 3/4 暗褐色土 炭化物わずかに含む
やや粘性がある
- 2 10YR4/4 褐色土

P4

P3と同じ

P5

P3と同じ

P6

P1と同じ

0 (1:60) 2m

第34図 石子原遺跡縄文中期整穴住居跡SB 08 遺構図

第3節 縄文時代の遺物

1 縄文早期の土器

(1) 押型文土器の分類

石子原遺跡出土の押型文土器は、胎土に多量の石英粒や長石粒を含む砂質の胎土である。非常に脆い状態で、洗浄も十分にできないような状態であった。したがって、ほぼ全個体について劣化防止の処置した。

全体形状をうかがえるものは皆無であり、小破片で、しかも器面が剥落しているため、文様の判別に苦しみ状態である。特に、市松文は楕円文やネガティブ文との識別が困難な場合が多かった。そこで、文様の分類は最小限にとどめ、文様構成の把握に努めた。原体の復元は条件が悪く、本遺跡だけでは基準になる資料が少ないため、飯田市美女遺跡（飯田市教委 1988）の資料を元にして、一部改変している。

① 山形文

V字状の彫刻を連続させる文様。二単位の文様を山形の頂部にそれぞれ複合させることで、菱形形状の模様作り出すものもある。

山形文A 山の頂部が尖り、比較的振幅が大きな山形をもつ。波形の凸部は細くなる（美女山形文A）。

山形の頂部の間隔は15mm前後のものと22mm前後の2種類がある。谷部と頂部の間隔は7mm前後である。凸部の幅は1～2mm、凹部の幅は3mm前後である。

山形文B 山形文Aと同じように頂部は尖るが、振幅は小さい。山形の頂部の間隔は12mm前後、谷部と頂部の間隔は3～4mmである（美女山形文B）。胎土は堅緻で、本遺跡一般の砂質で脆い土器とは違った印象を受ける。

山形文C 山の頂部は尖らず、振幅もほとんどない。わずかに蛇行する平行線文に近い（美女山形文C・D）。

山形文D 山形文Aと同じような波形であるが、山形の凸部と凹部の幅が広く、頂部は丸くなる。山形が連続せず、「ハ」の字状や「へ」の字状になるものもある。

② 格子目文

二方向に交錯する直線によって構成される文様。ネガティブ文Bとの区別は格子交点が直線的につながるかによって区別する。

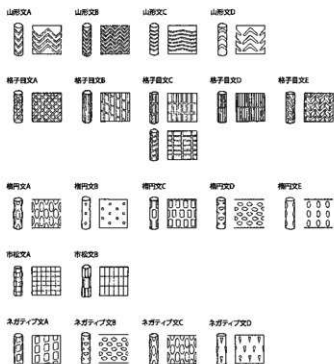
格子目文A 正方形あるいは菱形の格子をもつもので、格子はほぼ直交する。ほとんどが斜行する。斜行格子目文（美女格子目文A）。

格子目文B 平行四辺形の格子をもつもので、格子は直交しない（美女格子目文D・F）。

格子目文C 長方形の格子をもつもので、格子が直交する（美女格子目文B・C・E）。

格子目文D 長狭な長方形の格子目文。

格子目文E 格子目文の変形文。矢羽状を呈したり、格子中央に対角線状の線を入れたりする。山形文などの複合文と考えられる一群。



第35図 押型文の模式図

③ 楕円文

瘤状の模様によって構成される。

楕円文A 一般的な楕円形（美女楕円文A・C・D）。楕円は円形、楕円形、楕円の端部が尖るもの、アメーバー状の不整なものなど、バリエーションがある。模様は市松状に配されるものが多い。原体端部は、波状の押捺がみられる点から、切り落としているものがある。

楕円文B 小型円形（美女楕円文F）の瘤によって構成される。模様は市松状に配される。

楕円文C 俵状の楕円文をもつ。市松文Aとの区別は、周囲が完全に切り離されて独立しているようになっている点にある。

楕円文D 網状楕円（美女楕円文B・E）が市松状に近接して凸部を形成する。

楕円文E 楕円を直線的に配列したものの。

④ 市松文

長方形や正方形を市松状に配した模様。

市松文A 正方形を市松状に配したものの（美女市松文）。石子原遺跡では完全なものは出土していない。

市松文B 長方形を市松状に配したものの。楕円文Cとの区別は、周囲が完全に分離しているかによって区別したが微妙である。

⑤ ネガティブ文

原体の刻み部分が多い文様。

ネガティブ文A 長方形格子目文に近いが、格子が崩れる（美女ネガティブ文B・C）。

ネガティブ文B 網目状の楕円文Dの反転したもの、格子目文に近い。

ネガティブ文C 楕円文Aの反転したもの。

ネガティブ文D 市松文の凹部が細く離れているもの。

(2) 住居跡出土の土器

SB 01（第36・37図、P L 13）

102点 1,022 gの遺物が出土した。埋土内のかく乱も含めると145点 1,271 gの遺物の出土になる。そのほとんどが文様判別不能な遺物である。1～22は住居覆土、23～36が覆土内のかく乱からの出土である。山形文、格子目文を主体としている。このうち図示したのは36点である。

1～4・27は山形文A。1は口縁部破片で端部に刻み目がつく。4条くらいが一つの単位となる。いずれも縦方向密接施文である。

5～11・23・26が格子目文A、9・10・12が格子目文Cである。12を除いて、小ぶりの斜格子目文が主体を占める。

13～16が市松文Bと考えられる。

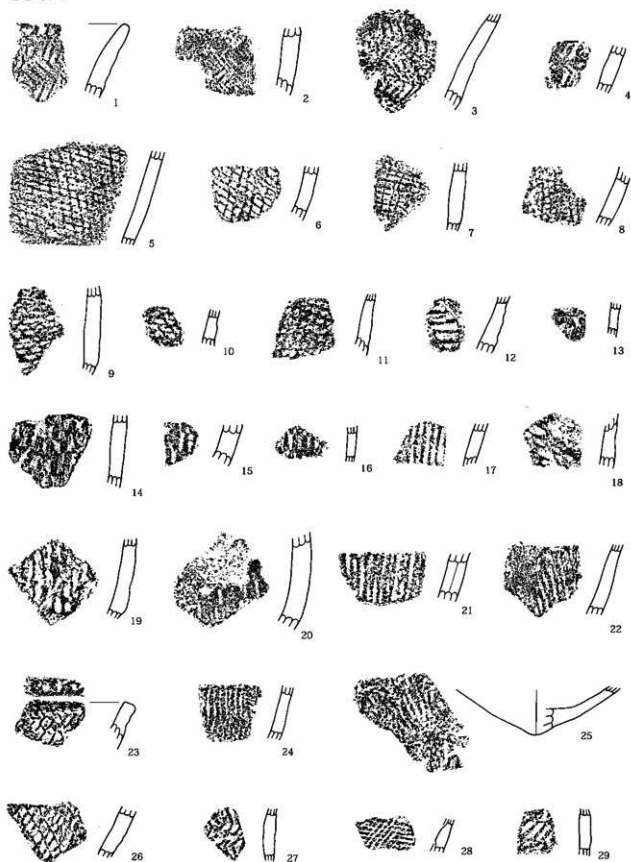
18はネガティブ文A、20はネガティブ文C。横方向施文の体部破片である。

17・21・22・24・25・30は撚糸文である。25は底部であり比較的大きく外開している。撚糸文が放射状に施されている。

28は平行細線による格子目様の模様を作り出している。細線は同時につけられたものでなく、切り合い関係が認められる。二本木遺跡出土の土器（日義村教育委員会 2003 第9図53）に似ており、平行線文の複合した押型文土器とも考えられるとしている。

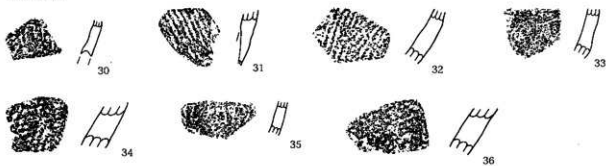
31～36は縄文である。いずれも小形の単節斜縄文である。

SB 01-1

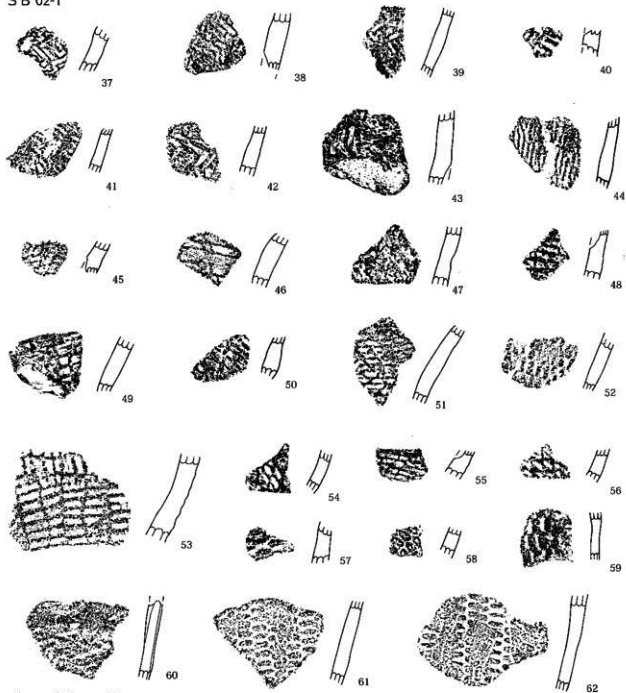


第36図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 01出土土器1

SB 01-2

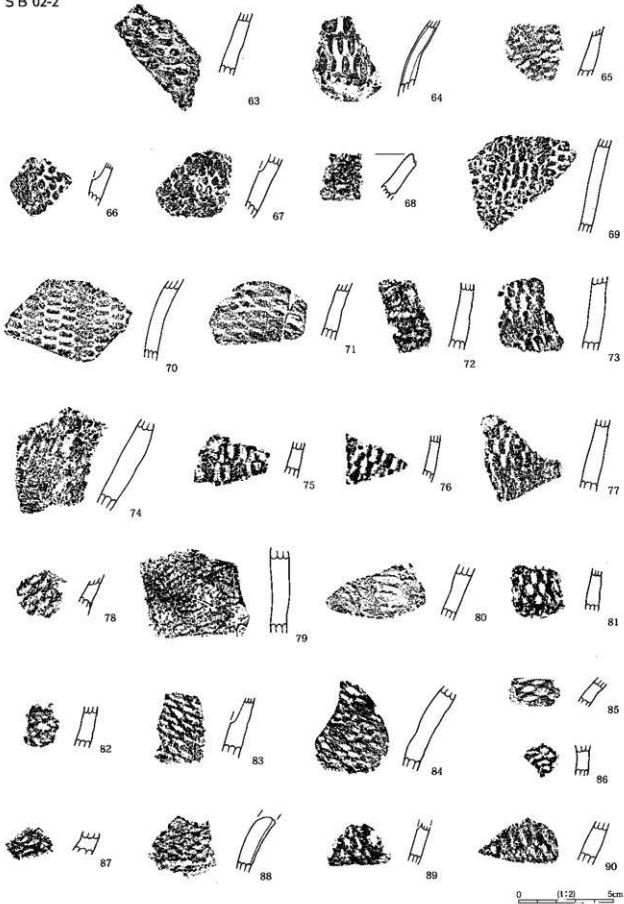


SB 02-1



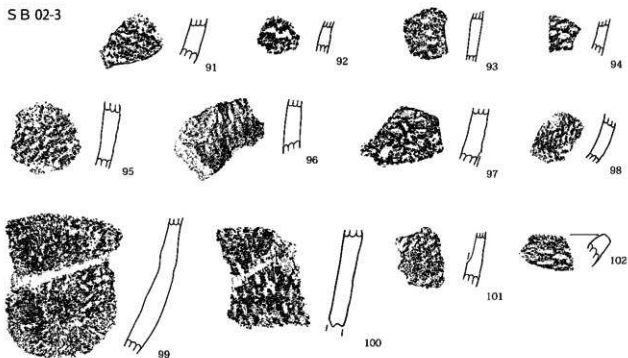
第37圖 石子灰遺跡縄文早期整穴住居跡SB 01出土土器2 SB 02出土土器1

SB 02-2

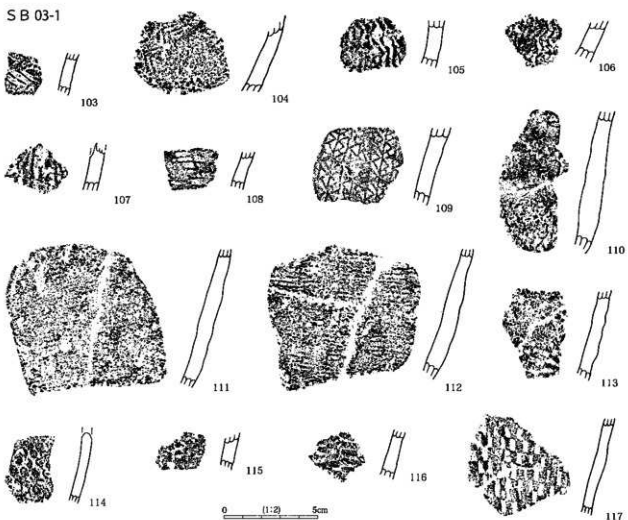


第38図 石子原遺跡縄文早期壱六住層跡SB 02出土土器2

SB 02-3



SB 03-1



第39圖 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 02出土土器3 SB 03出土土器1

SB 02 (第37～39図、PL 13・14)

224点、1,112gが出土している。全体的な傾向としては、楕円文の比率が高く、市松文、ネガティブ文の順になる。37・38・41は山形文、39・40・43は山形文Dである。細片で全体像をうかがうことはできないが、縦方向の密接施文である。97も山形文であろう。

48・49は格子目文A、50・51・54・56・83・88は格子目文B、53は格子目文Cで、同部下半の破片である。長方形の大きな格子目を有し、横方向の次に縦方向に密接施文する異方向の施文である。47も格子目文であろう。格子目文Bの割合が高い。

57・58・66・67は楕円文A、61・62・64・68～70は俵型の楕円文C、60・71は網状の楕円文Dである。72は楕円文と考えられるが、判然としない。61・62・64・69・70は楕円文2単位くらいの比較的短い原体を使用している。63の端部は波状を呈し、原体の短部はカットされていると考えられる。69は、縦方向の施文の後、横方向に短く施文している。

59・75・76・77は市松文Bである。

79はネガティブ文A、74・76・81・94・96・102はネガティブ文D、90～93は、格子目文の崩れたネガティブ文の仲間である。

SB 03 (第39・40図、PL 15)

142点、921gの出土があった。燃糸文の割合が高い。

103・104は山形文A、105・106は山形文Bである。山形文Aの胎土が非常に石英・長石を含みもろいのに対し、山形文Bは、焼成がよく堅緻である。

108・120・121は格子目文B、109は格子目文E、111・112は格子目文D、である。109は、単純な矢羽文ではなく、三角形を組み合わせたような複雑な文様である。111・112は、長狭な格子目紋の可能性が高いが、格子目にならず平行線文の可能性もある。

110・113は楕円文Aと考えられるが110は器面が荒れはつきりしない。114は楕円文D、115は楕円文B、116は楕円文Cである。

117・118・119は市松文Bである。

122・123・124はネガティブ文A、124～127は、ネガティブ文Bである。

128・129・131～135は燃糸文、130は縄文である。

SB 03・04の切り合い (第40図、PL 16)

136～143は、SB 03とSB 04の切り合い部分から出土した土器である。SB 03に帰属する土器が多いと思われるが、SB 04の土器も含まれる。

136・138～140が、山形文、137・141・142がネガティブ文である。

山形文は、山形が大きな山形文AあるいはD(136・138・139)のもの、山形の振幅が短く、山の形が長い山形文C(140)がある。140は、口縁部の破片で、斜め方向の刻み目がつく。

137は、ネガティブ文C、141・143は、ネガティブ文A、142は、ネガティブ文Bで、市松文Bに近い。

SB 03・05の切り合い (第40図、PL 16)

144～148は、SB 03とSB 05の切り合い部分出土の土器である。ほとんどがSB 05に帰属する。

144が格子目文E、で、縦方向の割付線と横方向の山形文が組み合わせられた模様である。145は、山形文、146が格子目文B、147が、市松文Bである。148は縄文である。

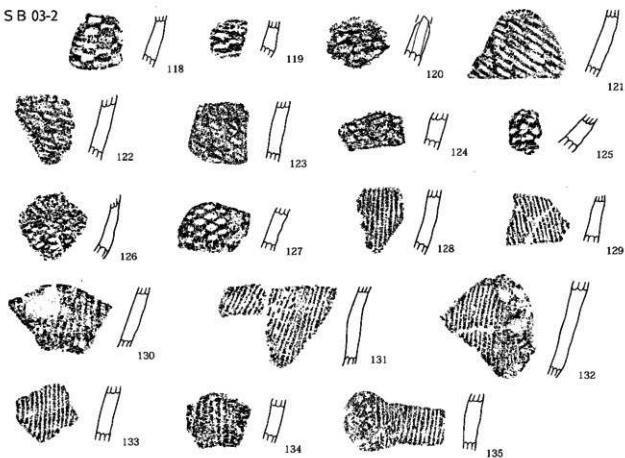
SB 04 (第41～43図、PL 16・17)

675点、4,004gの出土があり、格子目文や山形文が比較的多く出土している。

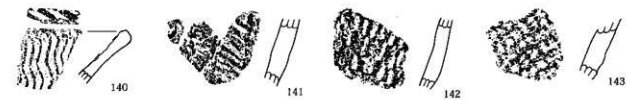
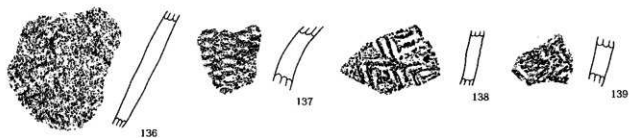
149～155・158～164が山形文A、157・165・214が山形文B、156・163が山形文Dである。

第3章 石子原遺跡

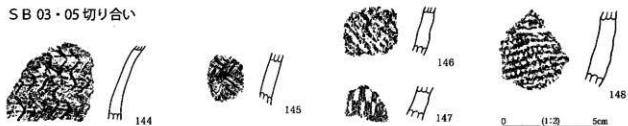
SB 03-2



SB 03・04 切り合い



SB 03・05 切り合い



第40図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 03 出土土器 2 SB 03・04 切り合い出土土器
SB 03・05 切り合い出土土器

山形文Aの149は、4条を1単位に縦方向に密接施文される。山形の山を接するように施文し、菱形の文様を作り出している。157・165は非常に焼成がよく、胎土が精選されている。

166・167・169が格子目文A、168・170～178が格子目文Bである。斜格子目文である格子目文Aは少なく、細長い格子目文B・Cが主体を占める。

179～188が楕円文である。

189～195が市松文である。190は、口縁部に刻み目をもち、胎土が非常に精選されている。本遺跡で主体を占める長方形の市松文と若干異なる。

197～199、206～209、211～213がネガティブ文である。197がネガティブ文D、198・207～209がネガティブ文B、206・210・212・213がネガティブ文Aである。

201・216が撚糸文、217が縄文である。

SB 05 (第43・44図、P L 18)

168点1,157gの出土がある。楕円文、市松文が比較的まとまって出土しているが、格子目文は少ない。

218～222までが山形文、223が格子目文、225～229が楕円文、230～232・242は市松文、224・234～239・243・244がネガティブ文、245が縄文、246は撚糸文である。

山形文は、218～219・222が山形文A、220・221が山形文Bである。218は、口縁部破片で、縦方向の密接施文である。山形の凸部は細く1～2mm、溝間は4mmと広がっている。5条1単位である。

格子目文は、223が格子目文Aである。交差する格子の太さが異なる。

楕円文は、225～228が楕円文D、229が楕円文Bである。225・226はいずれも口縁部破片で、口唇部に縦方向の刻みを入れている。227も口縁部破片であるが、刻みはない。

市松文は、いずれも市松文Bである。

ネガティブ文は、224がネガティブ文A、236～238・243は、ネガティブ文Bある。長石粒や砂粒を含み、非常に器面が荒れている。236は、異方向施文の可能性がある。239・244は、ネガティブ文Dである。

246の撚糸文は、網目状を呈す細片である。

SB 06 (第44～46図、P L 18・19)

487点、3,802gの出土があった。いずれも細片であり、器形のうかがえるものは少なく、器面も荒れているので判別不能のものがほとんどを占める。判別できたものの中では山形文が比較的多く出土している。

247～251・253・254・257は山形文A、255・256・258・283は山形文Dである。247は口縁部破片で、口縁に近く横方向の山形を配してから縦方向に密接施文を行っている。250も横方向と縦方向の異方向施文である。口縁直下の破片であろうか。同一施文具による。

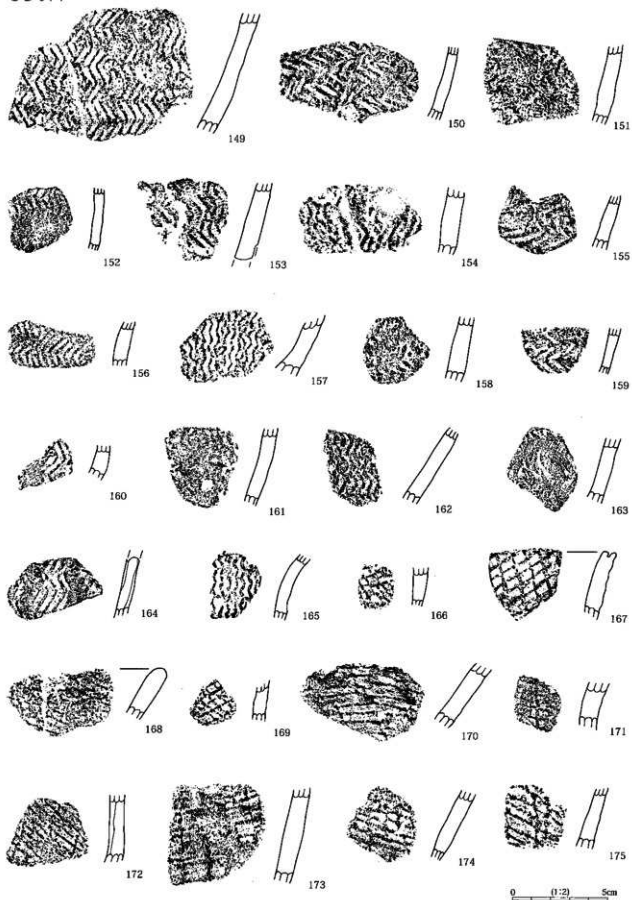
252は格子目文E、259～262は格子目文D、261・264～271は格子目文Aである。283・287・288も格子目文と考えられるが、かなり変形している。254は原体の端部の様子がよくわかる資料で、直線的になっていることから端部の処理はしていない。

272楕円文A、273は楕円文C、274・276は楕円文E、275は楕円文と考えられるが不明である。272は縦方向に直線的に並ぶ楕円文D、小形円形の楕円文、274・276は網状楕円文である。

277～281、306は市松文Bと考えられるが、楕円文に近い。

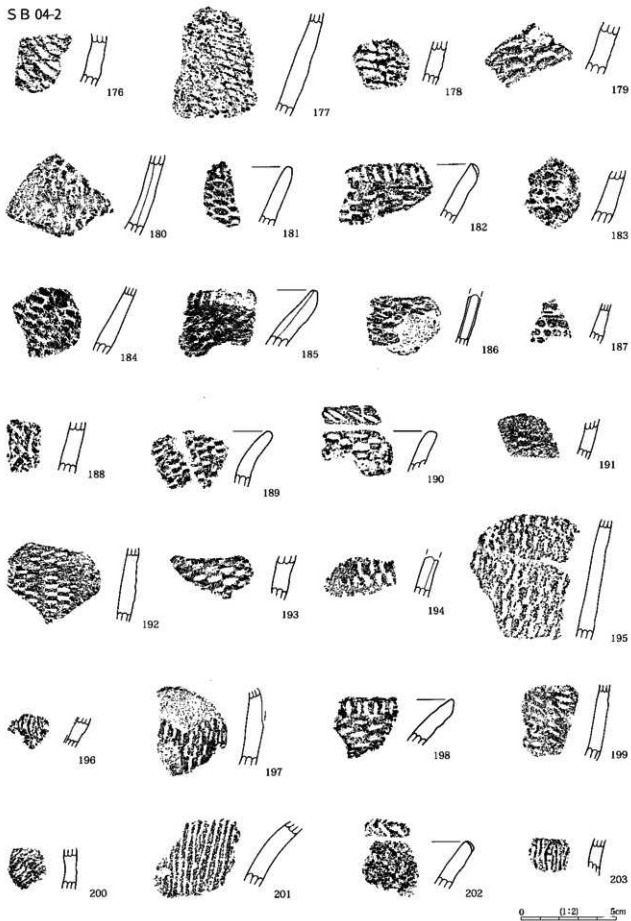
282・289はネガティブ文B、291～294は格子目文に近いネガティブ文Aである。304・305もネガティブ文である。292は口縁端部に刻みをもつ。295・302・303は口縁部の小破片である。295うすく、口縁に縄文を転がすが、体部は無文である。302は口縁部に刻みをもつがやはり無文である。

S B 04-1



第41圖 石子原遺跡繩文早期整穴住居跡S B 04出土土器1

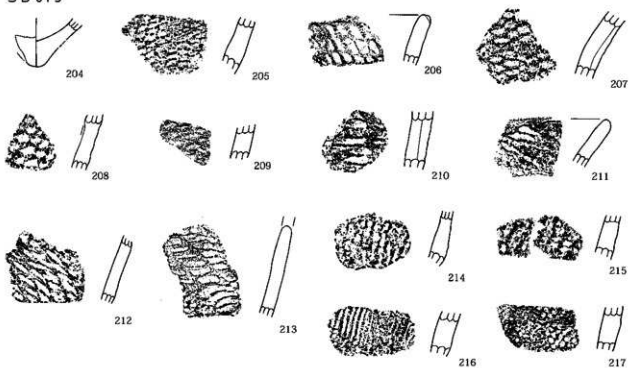
SB 04-2



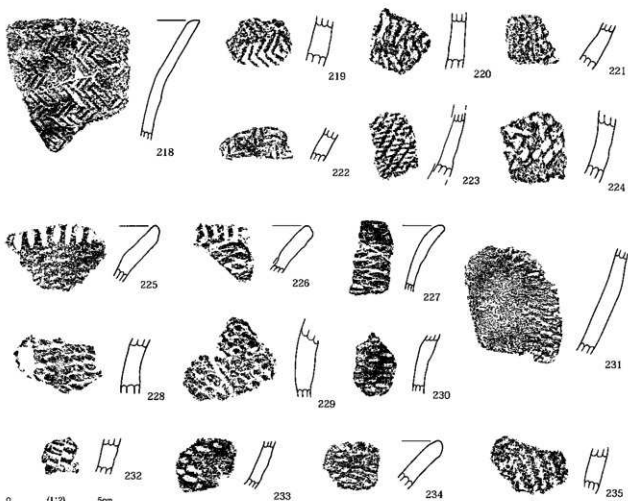
0 1:2 5cm

第42図 石子原遺跡縄文早期壱穴住居跡SB 04出土土器2

SB 04-3

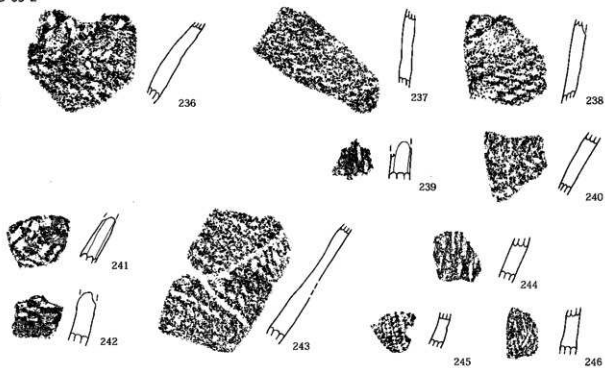


SB 05-1

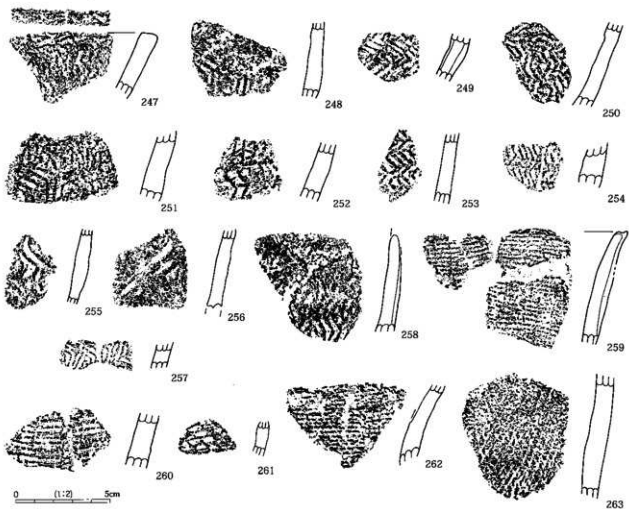


第 43 图 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡 SB 04 出土土器 3 SB 05 出土土器 1

SB 05-2

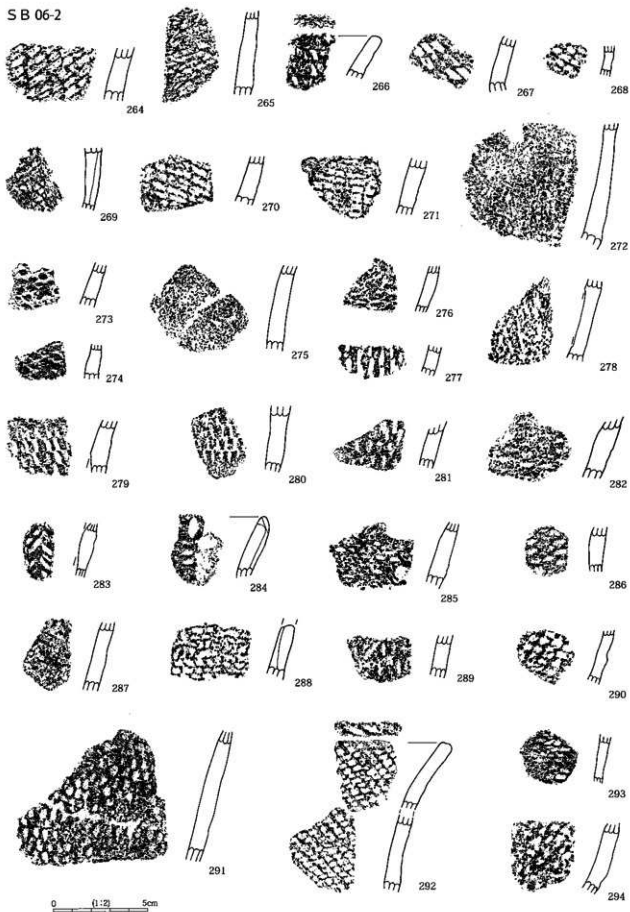


SB 06-1



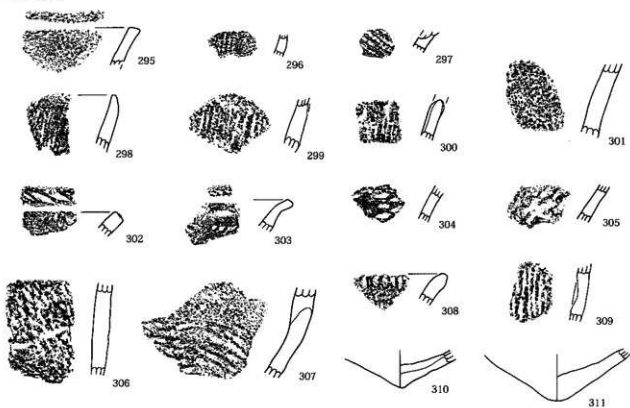
第44図 石子原遺跡縄文早期整穴住居跡SB 05出土土器2 SB 06出土土器1

SB 06-2



第45圖 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 06出土土器2

SB 06-3



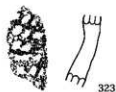
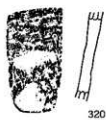
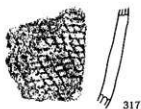
SQ 02



SQ 04



SK 01



0 1:2 5cm

第46図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 06 出土土器 3 遺物集中区出土土器 土坑出土土器 1

303 はやはり口縁部に刻みをもつ。体部は山形文か格子目文などの端部の痕跡がみられる。

263・298～300・309 までは摺糸文である。263 は網目状摺糸文であるが、非常に網が小さく、網状の楕円文に近い。307 は格子目文と考えられるがはっきりしない。

310・311 は底部破片である。

(3) 遺物集中区出土の土器

SQ 02 (第46図、PL 20)

全部で12点出土があったが、図示できたのは312の格子目文Aあるいはネガティブ文Aの可能性のある体部破片1点である。

SQ 03

5点、8gが出土しているが、文様の判別できるものはなく、図示できなかった。

SQ 04 (第46図、PL 20)

21点、183gの出土があった。

314が山形文B、313・315は摺糸文の同一個体破片である。316は、横方向に2条、縦方向に2条の沈線による模様が確認できるが、本址に伴うものかはっきりしない。

(4) 土坑出土の土器

SK 01 (第46図、PL 20)

32点226gの出土がある。図示できたものは8点である。

317は格子目文A、318は格子目文B、319は市松文B、320は上半が市松文B、下半がネガティブ文あるいは格子目文と思われるが、はっきりしない。321・322はネガティブ文と考えられる胴部破片である。323は格子目文A、324は縄文である。

SK 02

不明土器片1点が出土している。

SK 03 (第47図、PL 20)

71点、673gが出土している。格子目文、楕円文がまとまって出土している。

325～327は山形文A、あるいはD、328は格子目文Bで、大形の格子目文である。SK 04の337と共通する格子目の大きさである。329～332・335は格子目文Aである。333は、ネガティブ文Bの小破片である。336はネガティブ文D、334は楕円文A底部破片である。内面には炭化物が付着している。

SK 04 (第47図、PL 21)

2点、183g出土している。337は格子目文で、格子目の大きさは15mm×5mm前後、大形の格子目文Bである。

SK 10 (第47図、PL 21)

11点、98gが出土している。格子目文が多く、図示したもの以外は判別不能である。338・341が格子目文A、339・340が格子目文Bである。

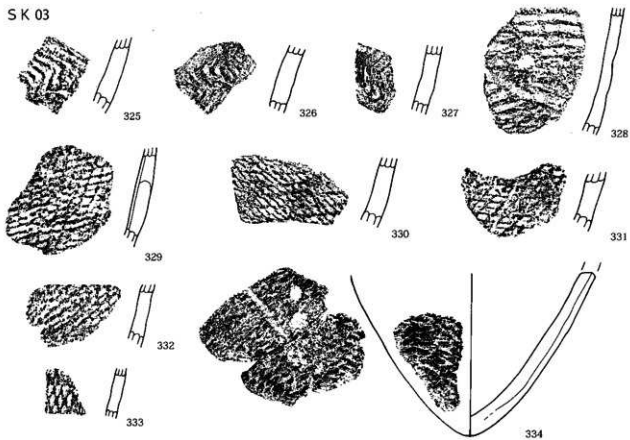
SK 24

格子目文が1点、14g出土している。

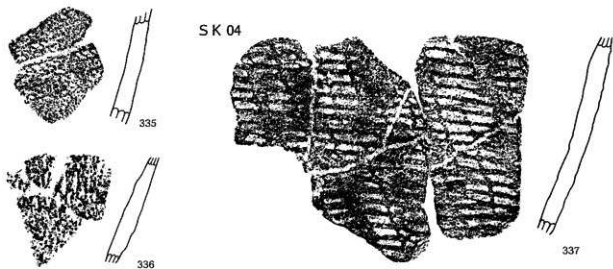
SK 26

2点12gが出土している。いずれも判別不能である。

SK 03



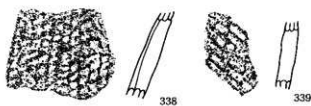
SK 04



SK 31



SK 10



0 (1:2) 5cm

第47図 石子原遺跡縄文早期土坑出土土器2

SK 28

ネガティブ文 1点 2 g が出土している。

SK 30 (第 48 図、P L 21)

7 点 65 g が出土している。山形文がほとんどを占める。図示できた 342～344 は山形文 C で、胎土から同一個体と考えられる口縁部破片である。345 は無紋で、口縁部に刻み目をもつ纖維を含有する破片である。

SK 31 (第 47 図、P L 21)

図示した 346、1 点 9 g が出土している。格子目文の体部破片である。

SK 40

不明細片 1 点が出土しているのみである。

SK 42 (第 48 図、P L 21)

9 点 83 g が出土している。347 は山形文 A、348 は格子目文 A、349・350 は楕円文 A である。

SK 43 (第 48 図、P L 21)

7 点 60 g が出土している。351 は楕円文 D、352 は格子目文である。

SK 59 (第 48 図、P L 21)

353、1 点 19 g が出土している。山形文 A の口縁部である。

SK 65 (第 48 図、P L 21)

7 点 100 g が出土している。354 は市松文 B、355 は格子目文 B、356 は楕円文、357 は格子目文と思われるがはっきりしない。

(5) 焼土址出土の土器

SF 29 (第 48 図、P L 21)

3 点 26 g が出土している。図示できたのは 358 の市松文 B の体部破片である。

SF 60

4 点 24 g が出土している。いずれも細片で、文様の判別できたものはなく、図示できたものはない。

SF 61 (第 48 図、P L 21)

6 点 19 g が出土している。359 は縄文、360 は格子目文 B である。

SF 93 (第 48 図、P L 21)

6 点 28 g が出土している。361 は山形文 A、362 は襷糸文である。

(6) 集石炉の出土の土器

SH 01 (第 48 図、P L 22)

43 点 188 g が出土している。格子目文、ネガティブ文が多く出土している。363～367・374 が格子目文、368 が楕円文 A、369～372 がネガティブ文である。

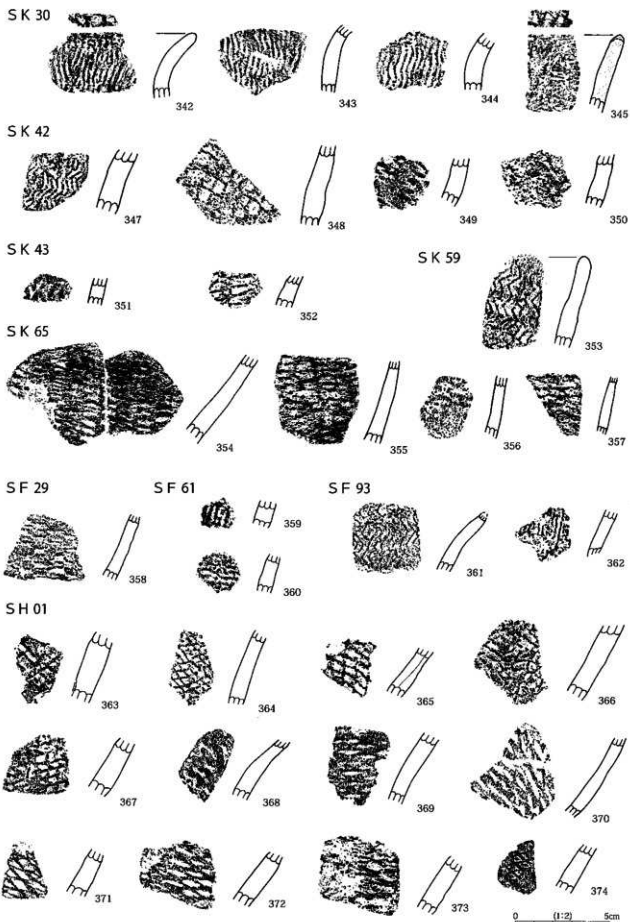
格子目文は、367・374 が格子目文 A、364・366 は矢羽状の格子目文 E、365 は格子目文 B である。ネガティブ文では、371 がネガティブ文 B、369 がネガティブ文 D、370・372 がネガティブ文 C である。370 の胎土は一見して色調も異なり、器壁も薄く、在地のものではない。

SK 84

6 点 38 g が出土している。いずれも細片で、図示できなかったが、格子目文が出土している。

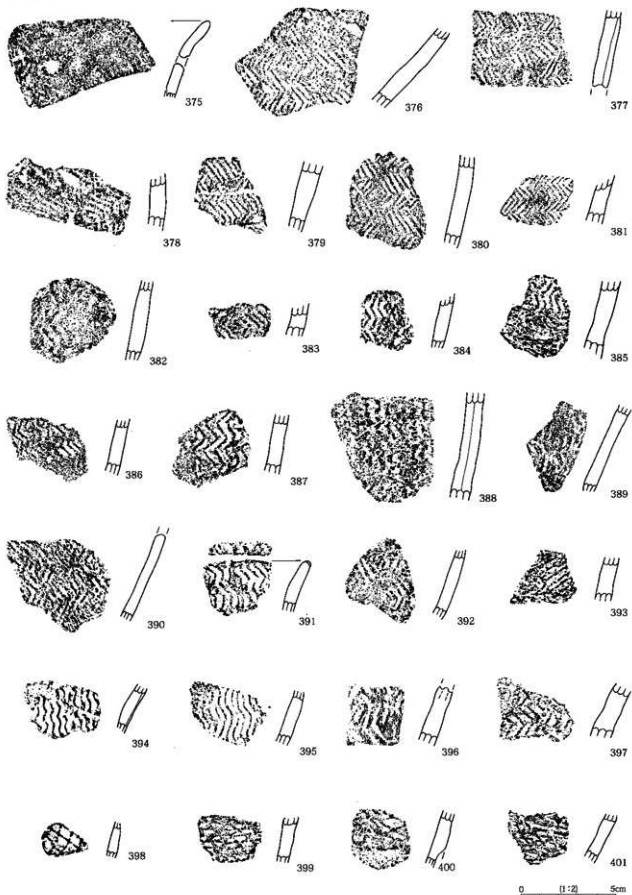
SK 85

2 点 2 g が出土している。いずれも細片で図示できなかった。



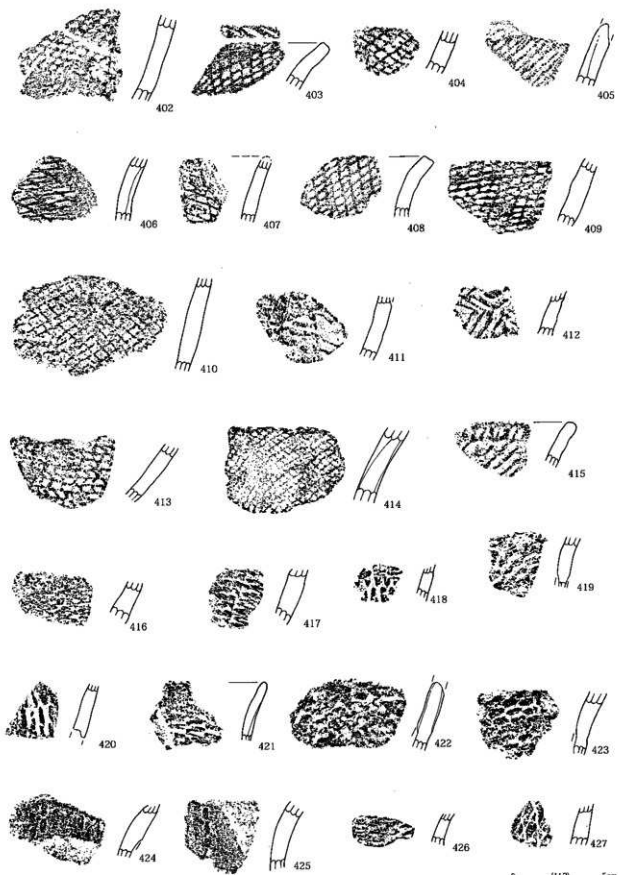
第48図 石子原遺跡縄文早期土坑出土土器 3 焼土址・焼土坑出土土器 集石炉出土土器

遺構外-1



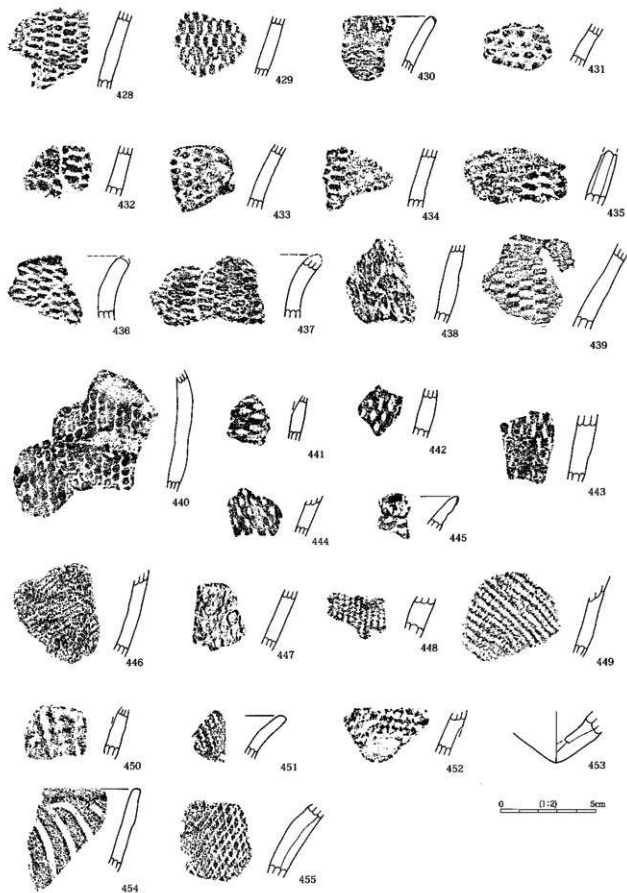
第49圖 石子原遺跡縄文早期遺構外出土土器1

遺構外-2



第50図 石子原遺跡縄文早期遺構外出土土器2

遺構外-3



第51圖 石子原遺跡繩文早期遺構外出土土器3

(7) 遺構外出土の土器 (第49～51図、P L 22・23)

375～397・412が山形文である。375～387・389～392・397までが山形文A、338は山形文Bであるが、他のものとは胎土や焼成も異なり、凹部の溝の幅が広い。394・395も山形文Bである。396・412は山形文Dで、山形が「へ」の字状に切れている。

398～411までが格子目文である。403は口縁部の破片で、斜め方向の刻み目をもつ。

415は横方向の条線がはつきりしないが、格子目文Bであろう。横方向の細かい繊維状の条線が観察でき、基軸に対して斜め方向の切込みを入れたものと考えられる。

416から426・428・430～433、440が楕円文である。431・433は小形の楕円文B、そのほかは、楕円文Cでしめられる。

424・425・440は縦方向に円形の楕円を配した楕円文Eである。424・425は器面が荒れてはつきりしないが、かなり疎に原体に彫刻を施している。440は縦に連続する円形に近い楕円文である。

448から452は縄文である。454は特徴的な黄色っぽい胎土で、焼成も非常によく一見して在地の土器ではない。3条の太くしっかりした沈線をもつ口縁部破片である。早期末の沈線文系の土器であろうか。455は、網目状の撚糸文である。

2 縄文中期の土器

(1) 遺構出土の土器

SB 08 (第52図、P L 34)

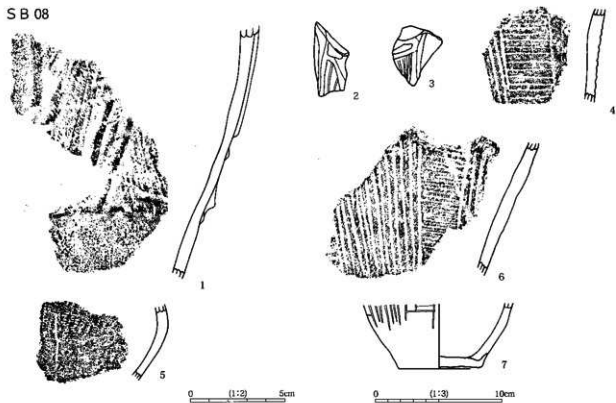
28点、224gの土器が出土している。6点を除いて住居跡内のかく乱出土の遺物である。4・5が埋土、7がP6からの出土である。

1は、深鉢形土器胴部から口縁部の破片で、胴部に近いところでは無文帯を有し、細隆帯が斜行し、その間を細い沈線で充填している。2・3は口縁部突起部分で、1と同一個体と考えられる。4・6はいずれも胴部の破片で、縦方向の平行沈線とはしご状の横線で構成される。7も同様の文様がわずかに確認される胴部下半から底部にかけての破片である。5は縄文地文に縦方向に沈線が垂下する東海地方中富式土器の口縁部破片である。

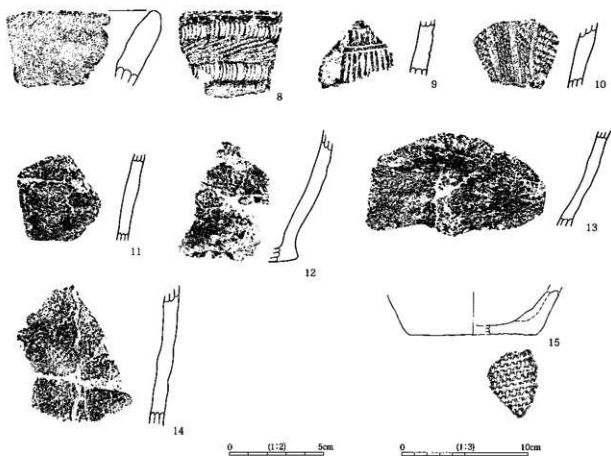
(2) 遺構外出土の土器 (第52図)

8は浅鉢土器の口縁部破片である。口縁内面には縄文を地文とし、連続する爪形文を二条記している。縄文中期五領ヶ台平行期であろう。9は深鉢の体部破片である。平行沈線を配しているが、胎土は非常に精選され、一見して在地のものとは異なる。

S B 08



中期遺構外出土遺物



第52圖 石子原遺跡織文中期竪穴住居跡S B 08出土土器 遺構外出土土器

図版 番号	出土場所	種類	部位	内面 調整 個体 数	重量 (g)	色調		焼成	胎土	管理 番号	注記 番号	備考	
						外面	内面						
36 1	SB01 埴土	深鉢	口	ナデ	1	13	10YR2/3 黒褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成良好	白色岩粒を含む	15	2963	
36 2	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	17	7.5YR2/2 黒褐	7.5YR4/4 褐	焼成良好	白色岩粒多量	21	2977	
36 3	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	22	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	28	3005	
36 4	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR3/3 暗褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	24	2982	
36 5	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	34	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/3 暗褐	焼成良好	白色岩粒多量に含む	1	2116	
36 6	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	11	7.5YR4/4 褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒を含む	2	2118	
36 7	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	11	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR3/3 暗褐	焼成良好	白色岩粒を含む	17	2970	
36 8	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR3/2 黒褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	6	2128	
36 9	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	11	10YR3/4 暗褐	10YR4/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒を含む	14	2962	
36 10	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR6/6 橙	7.5YR3/3 暗褐	焼成良好	白色岩粒を含む	12	2954	
36 11	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	8	5YR3/6 暗赤褐	5YR2/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒を含む	10	2949	
36 12	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR4/8 赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	9	2946	
36 13	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	3	10YR3/4 暗褐	10YR3/4 暗褐	焼成良好	白色岩粒を含む	18	2972	
36 14	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	18	7.5YR3/3 暗褐	5YR4/8 赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	43		
36 15	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	6	5YR4/6 赤褐	7.5YR3/3 暗褐	焼成良好	白色岩粒を含む	16	2966	
36 16	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	8	10YR2/2 黒褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒を含む	8	2941	
36 17	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	8	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR2/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒を含む	7	2129	
36 18	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR6/6 橙	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒を含む	22	2979	
36 19	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	14	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒を含む	27	2997	
36 20	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	2	5YR4/6 黒褐	5YR3/6 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	13	2956	
36 21	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	43	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR5/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒を含む	11	2950	
36 22	SB01 埴土	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR4/3 褐	焼成良好	白色岩粒を含む	3	2122	
36 23	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	口か 筒口縁	ナデ	1	8	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	焼成良好	白色岩粒を含む	35		
36 24	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	10	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐		白色岩粒を含む	30		
36 25	SB01	深鉢	底	ナデ	1	19	10YR6/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐		白色岩粒を含む	26	2990	
36 26	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	11	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	焼成良好	白色岩粒を含む	36		
36 27	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	4	5YR4/6 赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐		白色岩粒を含む	37		
36 28	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	3	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐		白色岩粒を含む	34		
36 29	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	4	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい黄褐		白色岩粒を含む	38		
37 30	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	4	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR3/2 黒褐		白色岩粒を含む	42		
37 31	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/4 暗褐		白色岩粒を含む	40		
37 32	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR3/2 黒褐		白色岩粒を含む	39		
37 33	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	8	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒を含む	31		
37 34	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	28	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	41-2		
37 35	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR4/4 褐	7.5YR4/4 褐		白色岩粒を含む	32		
37 36	SB01 ベルト内かく乱	深鉢	体	ナデ	1		5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	41-1		
37 37	SB02 P130	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR3/4 暗褐	7.5YR3/3 暗褐	焼成良好	白色岩粒多量	199	2501	
37 38	SB02 P58	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	180	2429	
37 39	SB02 P172	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/2 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	209-1	2543	
37 40	SB02 (SB03) P52	深鉢	体	ナデ	1	2	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/2 灰褐	焼成良	白色岩粒混	216	2423	
37 41	SB02 P179	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR5/4 にぶい黄	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	211	2550	
37 42	SB02 P169	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR4/4 褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良	白色岩粒混	208	2540	
37 43	SB02 P112	深鉢	体	ナデ	1	19	2.5YR4/8 赤褐	7.5YR5/3 にぶい黄	焼成良	白色岩粒混	191	2483	
37 44	SB02 P159	深鉢	体	ナデ	1	18	7.5Y3/4 暗褐	5YR3/6 暗赤褐	焼成良	白色岩粒多量	204	2530	
37 45	SB02 P61	深鉢	体	ナデ	1	4	5YR5/6 明赤褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成良	白色岩粒混	181	2432	
37 46	SB02 P309	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR5/4 にぶい黄	7.5YR5/4 にぶい黄	焼成良	白色岩粒多量	437	1499	
37 47	SB02 P35	深鉢	体	ナデ	1	14	5YR4/6 赤褐	7.5YR5/3 にぶい黄	焼成良	1~3mm 大の白色岩粒多量	175	2406	
37 48	SB02 P64	深鉢	体	ナデ	1	5	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR4/4 褐	焼成良	白色岩粒混	183	2435	
37 49	SB02 P194	深鉢	体	ナデ	1	11	7.5YR3/2 黒褐	10YR4/4 褐	焼成良好	白色岩粒少量 きめ細かい	435	1384	

第10表-1 縄文早期実測土器一覧

第3章 石子原遺跡

原 版	番 号	出土場所	器種	部位	内面調整	個体数	置さ (g)	色調		焼成	胎土	管理 番号	注記 番号	備考
								外面	内面					
								色調						
37	50	SB02 (SB 03か) P163	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成不良	白色岩粒・石多 量	217	2534	
37	51	SB02 P17 内	深鉢	体	ナデ	1	12	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒多量	255	SB 02 p17	
37	52	SB02 P191	深鉢	体	ナデ	1	10	5YR3/2 暗赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	438	1381	
37	53	SB02 P162	深鉢	体	ナデ	1	37	2.5YR4/6 赤褐	7.5YR4/6 褐	焼成良好	白色岩粒混	205	2533	
37	54	SB02 P27	深鉢	体	ナデ	1	4	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR4/3 褐	焼成良	白色岩粒混	174	2398	
37	55	SB02 P195	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR3/3 暗褐	焼成良	白色岩粒混	194	2490	
37	56	SB02 P229	深鉢	体	ナデ	1	4	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR2/3 黒褐	焼成良	白色岩粒混	172	2396	
37	57	SB02 P118	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR2/1 黒	焼成良好	白色岩粒混	192	2489	
37	58	SB02 P186	深鉢	体	ナデ	1	3	7.5YR2/3 極暗褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	212	2557	
37	59	SB02 P55	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR3/6 暗赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒多量	178	2426	
37	60	SB02 P192	深鉢	体	ナデ	1	21	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒少混	160	2563	
37	61	SB02 P10	深鉢	体	ナデ	1	26	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	焼成良	石英・白色岩粒混	162	2381	
37	62	SB02 P40	深鉢	体	ナデ	1	28	10YR2/3 黒褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良好	長石粒・雲母混	164	2411	
37	63	SB02 P121	深鉢	体	ナデ	1	13	10YR3/4 暗褐	10YR3/4 暗褐	焼成良	白色岩粒混	166	2492	
37	64	SB02 P5	深鉢	体	ナデ	1	11	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	167	2376	
37	65	SB02 P173	深鉢	体	ナデ	1	6	10R4/6 赤	焼成良	白色岩粒少混	210	2544		
37	66	SB02 P196	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR5/6 明褐	7.5YR4/3 褐	焼成良好	白色岩粒少混	214	2567	
37	67	SB02 P195	深鉢	体	ナデ	1	10	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐	焼成良好	白色岩粒少混 雲母混	213	2566	
37	68	SB02 P62	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR2/1 黒	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	182	2433	
37	69	SB02 P222	深鉢	体	ナデ	1	24	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒少混	161	2593	
37	70	SB02 P42	深鉢	体	ナデ	1	30	10YR6/3 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	焼成良	石英・白色岩粒混	163	2413	
37	71	SB02 P76	深鉢	体	ナデ	1	19	10YR3/4 暗褐	7.5YR4/4 褐	焼成良好	白色岩粒混	165	2447	
37	72	SB02 P77	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR3/6 暗赤褐	7.5YR3/1 黒褐	焼成良	白色岩粒混	184	2448	
37	73	SB02 P92	深鉢	体	ナデ	1	13	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	190	2468	
37	74	SB02 P326	深鉢	体	ナデ	1	31	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒多量	439	1516	
37	75	SB02 P26	深鉢	体	ナデ	1	6	5YR5/6 明赤褐	10YR2/3 黒褐	焼成良	白色岩粒混	173	2397	
37	76	SB02 P11	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR3/4 暗褐	7.5YR4/3 褐	焼成良	白色岩粒多量	169	2382	
37	77	SB02 P198	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR3/2 黒褐	5YR3/3 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	215	2569	
37	78	SB02 P166	深鉢	体	ナデ	1	4	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒・石英 多量に含む	188	2456	
37	79	SB02 P85	深鉢	体	ナデ	1	41	7.5YR3/2 黒褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成不良	白色岩粒・石英 多量に含む	184	1377	
37	80	SB02 P187	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR4/3 褐	焼成良	白色岩粒混	434	1377	
37	81	SB02 P78	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒少混	185	2449	
37	82	SB02 (SB 03か) P164	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR3/3 暗褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	218	2335	
37	83	SB02 P136	深鉢	体	ナデ	1	12	5YR4/6 赤褐	5YR3/1 黒褐	焼成良	白色岩粒混	201	2507	
37	84	SB02 P122	深鉢	体	ナデ	1	20	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒混	196	2493	
37	85	SB02 P172	深鉢	体	ナデ	1	4	10YR7/4 にぶい黄褐	10YR2/1 黒褐色	焼成良	白色岩粒混	209-2		
37	86	SB02 P37	深鉢	体	ナデ	1	2	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR3/3 褐	焼成良	白色岩粒多量	176	2408	
37	87	SB02 P117	深鉢	体	ナデ	1	3	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良	白色岩粒混	193	2489	
37	88	SB02 P127	深鉢	体	ナデ	1	12	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	198	2498	
37	89	SB02 P181	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒少混	433	1371	
37	90	SB02 P309	深鉢	体	ナデ	1	10	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒混	436	1499	
37	91	SB02 P84	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR4/4 褐	焼成良	白色岩粒多量	187	2455	
37	92	SB02 P57	深鉢	体	ナデ	1	3	5YR4/6 赤褐	7.5YR2/4 極赤褐	焼成良	白色岩粒混	179	2428	
37	93	SB02 P16	深鉢	体	ナデ	1	6	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒混	170	2387	
37	94	SB02 P19	深鉢	体	ナデ	1	2	7.5YR3/4 暗褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良	白色岩粒混	171	2390	
37	95	SB02 P168	深鉢	体	ナデ	1	4	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒・石英 多量	207	2539	
37	96	SB02 P134	深鉢	体	ナデ	1	16	7.5YR3/2 黒褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	200	2505	
37	97	SB02 P124	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR4/3 褐	7.5YR2/3 黒褐	焼成良好	石英・白色岩粒混	197	2495	
37	98	SB02 P80	深鉢	体	ナデ	1	4	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒混	186	2451	
37	99	SB02 (SB 03か) P167	深鉢	体	ナデ	1	59	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成不良	白色岩粒・石多 量	219	2538	
37	100	SB02 (SB 03か) P188	深鉢	体	ナデ	1	25	5YR4/6 赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混 雲母混	220	2559	
37	101	SB02 P137	深鉢	体	ナデ	1	5	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR3/2 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	202	2508	
37	102	SB02 P17 内	深鉢	口	ナデ	1	5	2.5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒多量	256	SB 02 p17	
37	103	SB03 P36	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒少混	277	2209	
37	104	SB03 P35	深鉢	体	ナデ	1	21	5YR5/6 明赤褐	5YR4/2 暗赤褐	焼成良	白色岩粒混	276	2208	
37	105	SB03 P49	深鉢	体	ナデ	1	12	2.5YR4/6 赤褐	7.5YR2/1 黒	焼成良	白色岩粒混	281	2222	
37	106	SB03 P25	深鉢	体	ナデ	1	6	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	310	1012	
37	107	SB03 P44	深鉢	体	ナデ	1	6	5YR4/1 褐灰	5YR3/1 黒褐	焼成良	白色岩粒混	311	1035	

第10表-2 縄文早期実測土器一覽

図版	番号	出土場所	器種	部位	内面調整	個体数	重さ(g)	色調		焼成	胎土	管理番号	注記番号	備考
								外面	内面					
39	108	SB 03 P68	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR3/3 暗赤褐	5YR3/3 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	285	2241	
39	109	SB 03 P15	深鉢	体	ナデ	1	30	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR5/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒 1~7mm 大混	270	2188	
39	110	SB 03 P32 33	深鉢	体	ナデ	1	29	5YR3/1 黒褐	5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒 大混 長石混	275	2205 2206	
39	111	SB 03 P59	深鉢	体	ナデ	1	70	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒 2~5mm 大 多混 焼	284	2232	112と 同一
39	112	SB 03 P72	深鉢	体	ナデ	1	70	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	焼成良好	no.284と同じ	286	2245	111と 同一
39	113	SB 03 P32 33	深鉢	体	ナデ	3	29	5YR3/1 黒褐	5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒多混 長石混	274	2205 2206	
39	114	SB 03 P2	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR3/4 暗褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒・霏母 混	221	2556	
39	115	SB 03 P190	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR2/1 黒	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	222	2561	
39	116	SB 03 P41	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR4/3 にぶい褐	5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒混	279	2214	
39	117	SB 03 P73	深鉢	体	ナデ	1	20	5YR5/4 にぶい褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	287	2246	118と 同一
40	118	SB 03 P74	深鉢	体	ナデ	1	10	5YR5/4 にぶい褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	288	2247	117と 同一
40	119	SB 03 P201	深鉢	体	ナデ	1	3	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	223	2572	
40	120	SB 03 P46	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	312	1037	
40	121	SB 03 P5	深鉢	体	ナデ	1	14	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	263	2178	
40	122	SB 03 P21	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	273	2194	
40	123	SB 03 P17	深鉢	体	ナデ	1	13	10YR6/3 にぶい黄褐	7.5YR6/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	272	2190	
40	124	SB 03 P52	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒 霏母混	282	2225	
40	125	SB 03 P79	深鉢	体	ナデ	1	6	5YR5/6 明赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	313	1269	
40	126	SB 03 P37	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒 霏母 混	278	2210	
40	127	SB 03 P53	深鉢	体	ナデ	1	8	2.5YR4/8 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	283	2226	
40	128	SB 03 P7	深鉢	体	ナデ	1	68	7.5YR3/7 黒褐	7.5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒混	264	2180	129・131・ 132・133・ 135と同一
40	129	SB 03 P7	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR3/7 黒褐	7.5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒混	267	2180	
40	130	SB 03 P45	深鉢	体	ナデ	1	15	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR2/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	280	2218	
40	131	SB 03 P7	深鉢	体	ナデ	1	21	7.5YR3/7 黒褐	7.5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒混	266	2180	
40	132	SB 03 P8	深鉢	体	ナデ	1	28	7.5YR3/7 黒褐	7.5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒混	268	2181	
40	133	SB 03 P8	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR3/7 黒褐	7.5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒混	269	2181	
40	134	SB 03 P76	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR3/2 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	289	2249	
40	135	SB 03 P7	深鉢	体	ナデ	1	15	7.5YR3/7 黒褐	7.5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒混	265	2180	
40	136	SB 04 SB 03 P65	深鉢	体	ナデ	1	34	7.5YR4/4 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒多混	440	1255	
40	137	SB 04 SB 03 P66	深鉢	体	ナデ	1	15	5YR3/2 暗赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	441	1256	
40	138	SB 04 SB 03 P71	深鉢	体	ナデ	1	12	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	444	1261	
40	139	SB 04 SB 03 P177	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	焼成良好	白色岩粒混	443	1367	
40	140	SB 04 SB 03 P324	深鉢	口	ナデ	1	7	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒混	446	1514	
40	141	SB 04 SB 03 P67	深鉢	体	ナデ	1	16	7.5YR3/2 黒褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒多混	442	1257	
40	142	SB 04 SB 03 P183	深鉢	体	ナデ	1	14	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	445	1373	
40	143	SB 04 SB 03 P347	深鉢	体	ナデ	1	15	5YR4/8 赤褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	447	1537	
40	144	SB 03-05 切 り合い P35	深鉢	体	ナデ	1	19	10YR3/1 黒褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒・長石 混	299	1026	
40	145	SB 03-05 切 り合い P47	深鉢	体	ナデ	1	5	10YR3/2 黒褐	10YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	300	1038	
40	146	SB 03-05 切 り合い P41	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	301	1032	
40	147	SB 03-05 切 り合い P14	深鉢	体	ナデ	1	5	10YR4/1 褐灰	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	296	1006	
40	148	SB 03-05 切 り合い P29	深鉢	体	ナデ	1	16	2.5YR4/6 赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	302	1020	

第10表-3 縄文早期実測土器一覧

第3章 石子原産地

図版 番号	出土場所	器種	部位	内面 調整	個体 数	重さ (g)	色調		焼成	胎土	管理 番号	注記 番号	備考
							外面	内面					
41 149	SB04 P330	深鉢	体	ナデ	1	80	2.5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混 2~6mm 大長石多混	364	1520	
41 150	SB04 P70	深鉢	体	ナデ	1	23	2.5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR5/6 明褐	焼成良	白色岩粒混	367	1260	
41 151	SB04 P180	深鉢	体	ナデ	1	25	2.5YR3/6 暗赤褐	2.5YR3/6 暗赤褐	焼成良	白色岩粒少混 長石 石英多混	362	1370	
41 152	SB04 P400	深鉢	体	ナデ 磨	1	7	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	409	1590	
41 153	SB04 P87	深鉢	体	ナデ	1	22	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混 4mm 大長石多混	345	1277	
41 154	SB04 P16	深鉢	体	ナデ	1	35	5YR4/2 灰褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	342	1206	
41 155	SB04 P179	深鉢	体	ナデ	1	13	5YR5/6 明赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	369	1369	
41 156	SB04 P331	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR3/2 暗赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	394	1521	
41 157	SB04 P101	深鉢	体	ナデ	1	19	5YR4/6 赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	349	1291	
41 158	SB04 P215	深鉢	体	ナデ	1	12	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒少混	376	1405	
41 159	SB04 P295	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	368	1515	
41 160	SB04 P324	深鉢	体	ナデ	1	6	2.5YR4/6 赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	389	1484	
41 161	SB04 P299	深鉢	体	ナデ	1	12	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	焼成良好	白色岩粒混	390	1489	
41 162	SB04 先行 トレンチ	深鉢	体	ナデ	1	13	5YR4/2 灰褐	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	260	SB04先行 トレンチ	
41 163	SB04 P333	深鉢	体	ナデ	1	17	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	396	1523	
41 164	SB04 P205	深鉢	体	ナデ	1	15	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR6/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	374	1395	
41 165	SB04 P73	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/1 褐灰	焼成非常 に良好		229	2444	
41 166	SB04 P93	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	焼成良好	白色岩粒混	347	1283	
41 167	SB04 P203	深鉢	体	ナデ	1	15	10R4/6 赤	10R4/6 赤	焼成良好	白色岩粒少混	373	1393	
41 168	SB04 P340	深鉢	体	ナデ	1	22	7.5YR5/6 明褐	5YR5/6 明赤褐	焼成不良	白色岩粒 長石、石英多混	397	1530	
41 169	SB04 P81	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良	白色岩粒混	344	1271	
41 170	SB04 P343	深鉢	体	ナデ	1	25	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	焼成良	白色岩粒 長石、石英多混	399	1533	
41 171	SB04 P360	深鉢	体	ナデ	1	11	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	407	1550	
41 172	SB04 P350	深鉢	体	ナデ	1	17	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	焼成良好	白色岩粒混	414	1540	
41 173	SB04 P98	深鉢	体	ナデ	1	35	7.5YR4/2 灰褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	348	1288	
41 174	SB04 P89	深鉢	体	ナデ	1	11	5YR5/6 明赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	346	1279	
41 175	SB04 P190	深鉢	体	ナデ	1	19	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	焼成良	白色岩粒多混 長石多混	360-1	1380	178と 同一個体
42 176	SB04 P390	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒 長石、石英多混	408	1580	
42 177	SB04 P258	深鉢	体	ナデ	1	29	7.5YR3/2 黒褐	10YR6/4 にぶい黄橙	焼成良	白色岩粒混 長石 石英多混	385	1448	
42 178	SB04	深鉢	体	ナデ	1		10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	焼成良	白色岩粒多混 長石多混	360-2	1380	175と 同一個体
42 179	SB04 P367	深鉢	体	ナデ	1	14	2.5YR3/4 暗赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	405	1557	
42 180	SB04 P271	深鉢	体	ナデ	1	21	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/4 褐	焼成良好	白色岩粒混	386	1461	
42 181	SB04 P254	深鉢	体	ナデ	1	7	10R4/6 赤	10R4/6 赤	焼成良好	白色岩粒混	384	1444	
42 182	SB04 P393	深鉢	口	ナデ	1	12	2.5YR3/6 暗赤褐	2.5YR3/4 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	388	1483	
42 183	SB04 P106	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	353	1296	
42 184	SB04 P120	深鉢	体	ナデ	1	14	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混 雲母混	354	1310	
42 185	SB04 P342	深鉢	口	ナデ	1	15	5YR3/2 暗赤褐	5YR3/2 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	398	1532	
42 186	SB04 P361	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒少混	404	1551	
42 187	SB04 P301	深鉢	体	ナデ	1	3	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	391	1491	
42 188	SB04 P233	深鉢	体	ナデ	1	6	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒少混	379	1423	
42 189	SB04 P186	深鉢	体	ナデ	1	12	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良	白色岩粒混	359	1380	
42 190	SB04 P211	深鉢	口	ナデ	1	6	7.5YR3/2 黒褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	381	1441	
42 191	SB04 P253	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR3/1 黒褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	383	1443	
42 192	SB04 P327	深鉢	体	ナデ	1	18	5YR2/3 暗赤褐	2.5YR4/2 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	392	1517	
42 193	SB04 P251	深鉢	体	ナデ	1	12	7.5YR3/2 黒褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	382	1441	
42 194	SB04 P328	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR3/1 黒褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	393	1518	
42 195	SB04 P352	深鉢	体	ナデ	1	45	2.5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒 長石、石英多混 焼成良	401-1	1542	
42 196	SB04 P355	深鉢	体	ナデ	1		7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒混	403-3	1545	203と 同一個体
42 197	SB04 P370	深鉢	体	ナデ	1	16	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR4/4 褐	焼成良好	白色岩粒少混 ぎらめ細かい	406	1560	

第10表-4 縄文早期実測土器一覽

図 源	番 号	出土場所	器種	部位	内面調整	個体 数	重さ (g)	色調		焼成	胎土	管理 番号	注記 番号	備考
								外面	内面					
42	198	SB04 P150	深鉢	口	ナデ	1	10	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	焼成良好	白色岩粒混	225	2521	
42	199	SB04 P291	深鉢	体	ナデ	1	10	2.5YR4/4 にぶい赤	2.5YR3/6 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	387	1481	
42	200	SB04 P355	深鉢	体	ナデ	1		7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	403-2	1545	203 と同一個体
42	201	SB04 P402	深鉢	体	ナデ	1	18	5YR3/3 暗赤褐	5YR3/3 暗赤褐	焼成良	白色岩粒混	410	1592	
42	202	SB04 P143	深鉢	口	ナデ	1	9	5YR4/4 にぶい褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒混	357	1333	
42	203	SB04 P355	深鉢	体	ナデ	1	10	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒混	403-1	1545	196-200 と同一個体
43	204	SB04 P352	深鉢	底	ナデ	1	8	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒 長石・石英多混	402	1542	
43	205	SB04 Pit2内	深鉢	体	ナデ	1	16	7.5YR4/2 灰褐	10YR6/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	257	SB 04 pit2	
43	206	SB04 P179	深鉢	体	ナデ	1	11	5YR3/1 黒褐	5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	370	1369	
43	207	SB04 P55	深鉢	体	ナデ	1	23	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	336	1245	
43	208	SB04 P104	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR4/6 赤褐	5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	352	1294	
43	209	SB04 P424	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	412	1614	
43	210	SB04 P132	深鉢	体	ナデ	1	15	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	355	1322	
43	211	SB04 P178	深鉢	口	ナデ	1	9	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/3 褐	焼成良好	白色岩粒少混	358	1368	
43	212	SB04 P75	深鉢	体	ナデ	1	13	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	230	2446	
43	213	SB04 P202	深鉢	体	ナデ	1	18	2.5YR4/2 灰赤	7.5YR3/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	372	1392	
43	214	SB04 P177	深鉢	体	ナデ	1	13	5YR4 - 6 赤褐	5YR3/1 黒褐	焼成良	白色岩粒混	227	2548	
43	215	SB04 P196	深鉢	体	ナデ	1	12	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/4 褐	焼成良好	白色岩粒混	371	1386	
43	216	SB04 P30	深鉢	体	ナデ	1	23	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	焼成良好	白色岩粒混	340	1220	
43	217	SB04 P35	深鉢	体	ナデ	1	16	2.5YR4/6 赤褐	5YR5/6 明赤褐	焼成良好	白色岩粒混	339	1225	
43	218	SB05 P54	深鉢	口	ナデ	1	35	10YR3/1 黒褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	304	1045	
43	219	SB05 P153	深鉢	体	ナデ	1	11	2.5YR4/6 赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	316	1343	
43	220	SB05 P58	深鉢	体	ナデ	1	11	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	315	1248	
43	221	SB05 P285	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	焼成良	白色岩粒混 長石多混	329	1475	
43	222	SB05 P288	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR3/1 黒褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	330	1478	
43	223	SB05 P161	深鉢	体	ナデ	1	8	2.5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	317	1351	
43	224	SB05 P284	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR4/3 褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	325	1474	
43	225	SB05 P278	深鉢	口	ナデ	1	12	10YR5/3 にぶい黄褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	322	1468	
43	226	SB05 P282	深鉢	口	ナデ	1	6	7.5YR3/2 黒褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混 雲母混	323	1472	
43	227	SB05 P64	深鉢	体	ナデ	1	13	10YR4/1 褐灰	10YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒少混	307	1055	
43	228	SB05 P408	深鉢	体	ナデ	1	17	7.5YR3/1 黒褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	334	1598	
43	229	SB05 P165	深鉢	体	ナデ	1	21	7.5YR3/4 黒褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒長石多混	319	1355	
43	230	SB05 P38	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR3/4 暗赤褐	2.5YR3/3 暗赤褐	焼成非常 に良好	白色岩粒少混	303	1029	232 と同一個体
43	231	SB05 P321	深鉢	体	ナデ	1	48	5YR3/2 暗赤褐	5YR3/6 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	332	1511	
43	232	SB05 P72	深鉢	体	ナデ	1	8	5YR3/4 暗赤褐	2.5YR3/3 暗赤褐	焼成非常 に良好	白色岩粒少混	308	1063	230 と同一個体
43	233	SB05 P62	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR4/3 にぶい赤褐	10YR3/1 黒褐	焼成良	白色岩粒混	306	1053	
43	234	SB05 P406	深鉢	口	ナデ	1	9	5YR3/2 暗赤褐	5YR3/6 暗赤褐	焼成良	白色岩粒混 長石3~5mm大混	333	1596	
43	235	SB05 P171	深鉢	体	ナデ	1	10	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成不良	白色岩粒超多混	320	1361	243 と同一個体
44	236	SB05 P284	深鉢	体	ナデ	1		7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成不良	白色岩粒超多混	326-2	1474	237 と同一個体
44	237	SB05 P284	深鉢	体	ナデ	1	76	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成不良	白色岩粒超多混	326-1	1474	236-238・240 と同一個体
44	238	SB05 P308	深鉢	体	ナデ	1	15	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成不良	白色岩粒超多混	327	1498	237 と同一個体
44	239	SB05 P176	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR3/2 黒褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	321	1366	
44	240	SB05 P284	深鉢	体	ナデ	1		7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成不良	白色岩粒超多混	326-3	1474	237 と同一個体
44	241	SB05 P162	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR4/4 褐	7.5YR4/4 褐	焼成良好	白色岩粒混	318	1352	
44	242	SB05 P283	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒少混	324	1473	
44	243	SB05 P341	深鉢	体	ナデ	1	37	7.5YR4/6 褐	7.5YR4/6 褐	焼成不良	白色岩粒超多混	328-1.2	1531	235 と同一個体
44	244	SB05 P412	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混 灰成良好	335	1602	
44	245	SB05 P76	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR4/6 赤褐	5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒 長石混	309	1067	
44	246	SB05 P306	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	331	1496	
44	247	SB06	深鉢	体	ナデ	1	19	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒を含む	108	536	

第10表-5 縄文早期実測土器一覧

第3章 石子原遺跡

図版 番号	出土場所	器種	部位	内面 調整	個体 数	重量 (g)	色調		焼成	胎土	管理 番号	注記 番号	備考
							外面	内面					
44 248	SB06	深鉢	体	ナデ	1	44	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	94-1	469	251 と 同一個体
44 249	SB06	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/6 明赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	66	230	
44 250	SB06	深鉢	体	ナデ	1	15	7.5YR2/2 黒褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成良	白色岩粒を含む	89	412	
44 251	SB06	深鉢	体	ナデ	1		5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	94-2	469	248 と 同一個体
44 252	SB06	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR4/4 褐	焼成良	白色岩粒を含む	74	273	
44 253	SB06	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR3/2 黒褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	61	218	
44 254	SB06	深鉢	体	ナデ	1	11	5YR4/6 赤褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良	白色岩粒を含む	69	237	
44 255	SB06	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR6/6 褐	7.5YR6/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒を含む	115	580	
44 256	SB06	深鉢	体	ナデ	1	18	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR3/4 暗褐	焼成良	白色岩粒を含む	110	555	
44 257	SB06	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR2/3 黒暗褐	7.5YR3/3 暗褐	焼成良	白色岩粒を含む	48	3174	
44 258	SB06	深鉢	口縁	ナデ	1	29	10YR2/3 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	焼成良	白色岩粒を含む	95	469	
44 259	SB06	深鉢	体	ナデ	1	27	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒を含む	103	511	
44 260	SB06	深鉢	体	ナデ	1	20	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR4/2 灰黄褐	焼成良好	白色岩粒多量	97	484	
44 261	SB06	深鉢	体	ナデ	1	4	10YR2/3 黒褐	10YR3/4 暗褐	焼成良	白色岩粒を含む	121	SB06 pH2 P53	
44 262	SB06	深鉢	体	ナデ	1	25	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒多量	101	506	
44 263	SB06	深鉢	体	ナデ	1	43	10YR3/2 黒褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒多量	78	298	
44 264	SB06	深鉢	体	ナデ	1	20	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR2/3 黒褐	焼成良	白色岩粒多量	75	276	
44 265	SB06	深鉢	体	ナデ	1	17	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒多量	106	526	
44 266	SB06	深鉢	体	ナデ	1	6	10YR2/3 黒褐	10YR3/4 暗褐	焼成良	白色岩粒多量	88	404	
44 267	SB06	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR2/2 黒褐	7.5YR4/3 褐	焼成良	白色岩粒多量	64	226	
44 268	SB06	深鉢	体	ナデ	1	2	5YR3/1 黒褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	62	219	
44 269	SB06	深鉢	体	ナデ	1	8	5YR4/4 にぶい赤褐	10YR6/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒を含む	120	604	
44 270	SB06	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良	白色岩粒を含む	96	477	
44 271	SB06	深鉢	体	ナデ	1	14	10YR3/2 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	焼成良	白色岩粒多量	80	308	
44 272	SB06	深鉢	体	ナデ	1	50	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR6/2 灰黄褐	焼成良	白色岩粒を含む	119	599	
44 273	SB06	深鉢	体	ナデ	1	7	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR3/4 暗褐	焼成良	白色岩粒を含む	73	271	
44 274	SB06	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR4/4 褐	焼成良	白色岩粒を含む	82	356	
44 275	SB06	深鉢	体	ナデ	1	20	5YR3/6 暗赤褐	5YR4/8 赤褐	焼成良	白色岩粒多量	99	493	
44 276	SB06	深鉢	体	ナデ	1	5	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒を含む	45	3163	
44 277	SB06	深鉢	体	ナデ	1	4	10YR6/3 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒を含む	76	277	
44 278	SB06	深鉢	体	ナデ	1	11	7.5YR4/4 褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	86	393	
44 279	SB06	深鉢	体	ナデ	1	14	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒を含む	68	234	
44 280	SB06	深鉢	体	ナデ	1	13	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR3/4 暗赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	56	3196	
44 281	SB06	深鉢	体	ナデ	1	20	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒多量	53	3187	
44 282	SB06	深鉢	体	ナデ	1	16	5YR3/4 暗赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒多量	46	3165	
44 283	SB06	深鉢	体	ナデ	1	3	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR3/1 赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	116	581	
44 284	SB06	深鉢	口	ナデ	1	9	5YR 暗赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒多量	57	207	
44 285	SB06	深鉢	体	ナデ	1	15	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR6/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒多量	114	577	
44 286	SB06	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR3/4 暗褐	5YR3/6 暗赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	44	3156	
44 287	SB06	深鉢	体	ナデ	1	8	5YR3/6 暗赤褐	5YR3/2 暗赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	55	3189	
44 288	SB06	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR2/1 黒	7.5YR2/2 黒褐	焼成良	白色岩粒を含む	60	213	
44 289	SB06	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR2/2 黒褐	焼成良	白色岩粒を含む	58	210	
44 290	SB06	深鉢	体	ナデ	1	6	10YR2/3 黒褐	10YR4/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒を含む	117	595	
44 291	SB06	深鉢	体	ナデ	1	48	7.5YR4/4 褐	5YR3/6 暗赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	118	598	
44 292	SB06	深鉢	体	ナデ	1	31	7.5YR3/2 黒褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	71	239	
44 293	SB06	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良	白色岩粒を含む	113	576	
44 294	SB06	深鉢	体	ナデ	1	20	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR5/6 灰褐	焼成良	白色岩粒を含む	109	552	
44 295	SB06	深鉢	口	ナデ	1	5	10YR2/3 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	焼成良	白色岩粒多量	84	385	
44 296	SB06	深鉢	体	ナデ	1	2	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	124	SB06 P427	
44 297	SB06	深鉢	体	ナデ	1	2	10YR2/3 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	焼成良好	白色岩粒を含む	87	396	
44 298	SB06	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR3/2 暗赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒を含む	52	3185	
44 299	SB06	深鉢	体	ナデ	1	11	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR3/6 暗赤褐	焼成良	白色岩粒多量	67	232	
44 300	SB06	深鉢	体	ナデ	1	4	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR2/2 黒褐 炭化物	焼成良	白色岩粒を含む	59	212	
44 301	SB06	深鉢	体	ナデ	1	20	5YR4/4 にぶい赤褐	10YR4/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒多量	65	229	
44 302	SB06	深鉢	口	ナデ	1	3	7.5YR2/3 黒暗褐	7.5YR4/3 褐	焼成良	白色岩粒を含む	47	3173	
44 303	SB06	深鉢	口	ナデ	1	5	7.5YR2/3 暗暗褐	7.5Y5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒を含む	92	440	
44 304	SB06	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒を含む	49	3176	
44 305	SB06	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成良	白色岩粒を含む	105	517	
44 306	SB06	深鉢	体	ナデ	1	19	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒多量	79	57	307 と整合
44 307	SB06	深鉢	体	ナデ	1	29	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒を含む	72	262	306 と整合
44 308	SB06	深鉢	口	ナデ	1	3	5YR4/2 灰褐	5YR4/1 暗灰	焼成良	白色岩粒を含む	107	528	
44 310	SB06	深鉢	底	ナデ	1	20	7.5YR2/2 黒褐	7.5YR2/2 黒褐	焼成良	白色岩粒多量	54	3188	

第10表-6 縄文早期実測土器一覧

図版番号	出土場所	器種	部位	内面調整	個体数	置寸(g)	色調		焼成	粘土	管理番号	注記番号	備考
							外面	内面					
46 31	SB 06	深鉢	底	ナデ	1	29	5YR5/6 明赤褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒多混	70	238	
46 312	SOQ2 P1	深鉢	体	ナデ	1	1	7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	焼成良	白色岩粒混	552	5298	
46 313	SQ04 P3	深鉢	体	ナデ	3	3個で34	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR7/1 明褐灰	焼成良	白色岩粒混	553		
46 314	SQ04 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	2個で38	10YR7/4 にぶい黄褐	10YR7/4 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒多混	555		
46 315	SQ04 P3	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR7/1 明褐灰	焼成良	白色岩粒混	554		
46 316	SQ04 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR7/6 褐	5YR5/2 灰褐	焼成良	白色岩粒混	556		
46 317	SK 01	深鉢	体	ナデ	1	23	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	480		
46 318	SK 01	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒少混	483		
46 319	SK 01	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒少混	481		
46 320	SK 01	深鉢	体	ナデ	1	14	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒混	479		異方向施文
46 321	SK 01	深鉢	体	ナデ	1	10	5YR3/2 暗赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒多混	485		
46 322	SK 01	深鉢	体	ナデ	1	12	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒少混	484		
46 323	SK 01	深鉢	体	ナデ	1	11	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	478		
46 324	SK 01	深鉢	体	ナデ	1	10	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒少混	482		
47 325	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	14	5YR4/4 にぶい赤褐	10YR4/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒少混	488		
47 326	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	15	5YR4/8 赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒少混	489		
47 327	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	10	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	490		
47 328	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	39	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒混	486		
47 329	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	32	2.5YR4/6 赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混 長石、石英混	487		
47 330	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	29	5YR5/6 明赤褐	10YR4/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒多混 長石、石英多混	494		
47 331	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	29	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR2/1 赤黒	焼成良	白色岩粒混	493		
47 332	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	19	5YR3/3 暗赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒混	492		
47 333	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	3	2.5YR6/8 橙	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	497		
47 334	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	35	2.5YR3/3 暗赤褐	5YR2/1 黒褐	焼成良好 内面に多量の炭化 物付着	白色岩粒混	498		
47 334	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	32	2.5YR3/3 暗赤褐	5YR2/1 黒褐	焼成良好 内面に多量の炭化 物付着	白色岩粒混	499		
47 334	SK 03	深鉢	底	ナデ	1	22	2.5YR3/3 暗赤褐	5YR2/1 黒褐	焼成良好 内面に多量の炭化 物付着	白色岩粒混	500		
47 335	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	34	5YR4/8 赤褐	5YR4/2 灰褐	焼成良	白色岩粒混 長石多混	491		
47 336	SK 03	深鉢	体	ナデ	1	27	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐		白色岩粒多混	63	224	
47 337	SK 04	深鉢	体	ナデ	1	112	2.5YR4/6 赤褐	7.5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒多混 長石、石英多混	501		
47 337	SK 04	深鉢	体	ナデ	1	71	2.5YR4/6 赤褐	7.5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒多混 長石、石英多混	502		
47 338	SK 10	深鉢	体	ナデ	1	33	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	505		
47 339	SK 10	深鉢	体	ナデ	1	11	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒多混 長石、石英多混	503		
47 340	SK 10	深鉢	体	ナデ	1	16	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/2 灰褐	焼成良	白色岩粒多混	504		
47 341	SK 10	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒混	506		
48 342	SK 30	深鉢	口	ナデ	1	16	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	510		
48 343	SK 30	深鉢	体	ナデ	1	18	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	511		
48 344	SK 30	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	512		
48 345	SK 30	深鉢	口	ナデ	1	11	10YR4/1 褐灰	10YR2/1 黒	焼成良好	白色岩粒混 糠混	509		
47 346	SK 31	深鉢	体	ナデ	1	9	2.5YR6/8 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	508		
48 347	SK 42	深鉢	体	ナデ	1	17	5YR4/4 にぶい赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良	白色岩粒混 長石大粒混	514		
48 348	SK 42	深鉢	体	ナデ	1	25	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/2 灰褐	焼成良	白色岩粒多混	513		
48 349	SK 42	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR4/2 灰褐	5YR4/6 赤褐	焼成良	白色岩粒混 石英多混	515		
48 350	SK 42	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR5/6 明赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒多混	516		
48 351	SK 43	深鉢	体	ナデ	1	3	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐	焼成良	白色岩粒混	517		
48 352	SK 43	深鉢	体	ナデ	1	5	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良	白色岩粒混	518		

第10表-7 縄文早期実測土器一覽

第3章 石子原産地

図版	番号	出土場所	器種	部位	内面調整	個体数	重さ(g)	色調		焼成	胎土	管理番号	注記番号	備考
								外面	内面					
48	353	SK 59	深鉢	体	ナデ	1	19	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好 外面に炭化物付着	白色岩粒多混	521		
48	354	SK 65	深鉢	体	ナデ	1	46	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	524		
48	355	SK 65	深鉢	体	ナデ	1	19	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	525		
48	356	SK 65	深鉢	体	ナデ	2	2個 で9	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	522		
48	357	SK 65	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR6/6 褐	焼成良好	白色岩粒混	523		
48	358	SF 29	深鉢	体	ナデ	1	11	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/3 褐	焼成良好	白色岩粒混	526		
48	359	SF 61	深鉢	体	ナデ	1	3	5YR3/6 暗赤褐	5YR3/2 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	528		
48	360	SF 61	深鉢	体	ナデ	1	4	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	527		
48	361	SF 93 P1	深鉢	体	ナデ	1	14	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒多混	530		
48	362	SF 93	深鉢	体	ナデ	1	5	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR2/1 黒	焼成良好	白色岩粒多混	529		
48	363	SH01	深鉢	体	ナデ	1	12	2.5YR4/6 赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	1~5mm 大の 白色岩粒混	247	S H 01	
48	364	SH01	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	244	S H 01	
48	365	SH01	深鉢	体	ナデ	1	9	2.5YR5/8 明赤褐	7.5YR4/3 褐	焼成良好	白色岩粒混	248	S H 01	
48	366	SH01	深鉢	体	ナデ	2	25	2.5YR4/6 赤褐	5YR3/2 暗褐	焼成良好	白色岩粒混	243	S H 01	
48	367	SH01	深鉢	体	ナデ 腹面 磨	1	13	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	焼成良好	白色岩粒混	249	S H 01	
48	368	SH01	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	焼成非常 に良好	白色岩粒混 霰 母混	245	S H 01	
48	369	SH01	深鉢	体	ナデ	1	16	2.5YR4/2 にぶい赤 褐	2.5YR4/2 にぶい赤 褐	焼成良好	白色岩粒混 霰 母混	246	S H 01	
48	370	SH01	深鉢	体	ナデ	1	10	7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	252	S H 01	
48	371	SH01	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	焼成良好	白色岩粒少混	251	S H 01	
48	372	SH01	深鉢	体	ナデ	1	16	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混 霰 石 石炭 霰母混	253	S H 01	
48	373	SH01	深鉢	体	ナデ	1	19	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混 霰 石 石炭 霰母混	254	S H 01	
48	374	SH01	深鉢	体	ナデ	1	6	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒少混	250	S H 01	
49	375	遺構外 P435	深鉢	口	ナデ	1	22	10YR3/2 黒褐	10YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	425	1625	
49	376	遺構外 P439	深鉢	体	ナデ	1	40	5YR4/6 赤褐	7.5YR4/6 褐	焼成良好	白色岩粒混	430	1629	
49	377	遺構外 P436	深鉢	体	ナデ	1	27	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR4/3 褐	焼成良好	白色岩粒混 焼成良好	426	1626	
49	378	遺構外 P390	深鉢	体	ナデ	1	20	5YR5/6 明赤褐	5YR3/2 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	431	1629	
49	379	遺構外 P390	深鉢	体	ナデ	1	13	7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR5/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒少混	432	1629	
49	380	遺構外 P151	深鉢	体	ナデ	1	24	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	421	1341	
49	381	遺構外 P51	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	416	1241	
49	382	遺構外 P52	深鉢	体	ナデ	1	18	5YR5/6 明赤褐	5YR2/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	417	1242	
49	383	遺構外 P53	深鉢	体	ナデ	1	8	5YR5/6 明赤褐	5YR2/3 暗褐赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	418	1243	
49	384	遺構外 P141	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR3/4 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	237	2512	
49	385	遺構外 P216	深鉢	体	ナデ	1	14	2.5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒多混 霰母混	242	2587	
49	386	古墳周溝	深鉢	体	ナデ	1	11	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	小石多混	144	古岡	
49	387	古墳周溝	深鉢	体	ナデ	1	17	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	焼成良好	小石混	148	古岡	
49	388	深鉢	体	ナデ	1	42	10YR6/4 にぶい黄褐	7.5YR4/6 褐	焼成良好	白色岩粒多混	471	5009		
49	389	J06 3060	深鉢	体	ナデ	1	10	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒多混	448	53 石 から実	
49	390	I-001 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	29	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR2/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	564		
49	391	J-B09 かく乱	深鉢	口	ナデ	1	7	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	569		
49	392	J-112 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR6/8 褐	7.5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒少混	567		
49	393	重O-06	深鉢	体	ナデ	1	8	2.5YR3/6 暗赤褐	2.5YR3/6 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒多混	467	2934	
49	394	108 表土	深鉢	体	ナデ	1	12	5YR3/2 暗赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	590		
49	395	出土位置不明	深鉢	体	ナデ	1	10	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR3/2 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	572		
49	396	SQ01 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	12	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR3/2 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	603		
49	397	SQ01 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	17	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	602		
49	398	遺構外 P209	深鉢	体	ナデ	1	1	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	240	2580	
49	399	遺構外 P114	深鉢	体	ナデ	1	9	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒多混	235	2485	401と同一
49	400	遺構外 P133	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	419	1323	
49	401	遺構外 P113	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒混	234	2484	399と同一
50	402	遺構外 P149	深鉢	体	ナデ	1	41	7.5YR3/1 黒褐	5YR5/6 明赤褐	焼成良好	白色岩粒少混 霰母混	420	1339	
50	403	古墳周溝	深鉢	口	ナデ	1	13	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	小石混	156	古岡	

第10表-8 縄文早期実測土器一覧

図版番号	出土場所	器種	部位	内面調査	個体数	重量(g)	色調		焼成	胎土	管理番号	注記番号	備考
							外面	内面					
50 404	古墳南溝	深鉢	体	ナデ	1	10	5YR6/6 橙	7.5YR3/1 黒褐	焼成良好	小石混	149	古厩	
50 405	古墳南溝	深鉢	体	ナデ	1	12	7.5YR6/6 橙	7.5YR2/2 黒褐	焼成良好	小石・赤色風化砂多混	145	古厩	
50 406	古墳南溝	深鉢	体	ナデ	1	15	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良好	小石混	150	古厩	
50 407	ⅢC-10	深鉢	体	ナデ	1	8	5YR4/6 赤褐	10YR6/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒少混	472	5016	
50 408	Ⅱ-12 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	17	2.5YR4/4 にぶい赤褐	10YR5/4 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒多混	566		
50 409	Ⅱ-12 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	27	5YR3/6 暗赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	565		
50 410	ⅢC-23	深鉢	体	ナデ	1	47	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒多混	474	5049	
50 411	Ⅱ-C18 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	15	5YR4/6 赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	568		
50 412	ⅡH-05	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR5/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒混	476	5060	
50 413	Ⅱ13 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	20	5YR5/6 明赤褐	5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒混	584		
50 414	Ⅱ13 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	40	5YR3/2 暗赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	焼成良好	白色岩粒混	586		
50 415	ⅡL-12 かく乱	深鉢	口	ナデ	1	7	5YR6/4 にぶい橙	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	559		
50 416	SQ01 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	12	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒混	600		
50 417	SQ01 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	11	5YR4/1 褐灰	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	605		
50 418	遺構外 P21	深鉢	体	ナデ	1	4	10YR4/1 褐灰	5YR4/2 灰褐	焼成良好	白色岩粒混	231	2392	
50 419	遺構外 P42B	深鉢	体	ナデ	1	5	10YR4/6 赤	10YR4/6 赤	焼成良好	白色岩粒混	424	1618	
50 420	遺構外 P37B	深鉢	体	ナデ	1	5	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	423	1568	
50 421	遺構外 P44	深鉢	体	ナデ	1	7	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	焼成良好	白色岩粒混	290	2217	
50 422	古墳南溝	深鉢	体	ナデ	1	25	7.5YR5/6 明褐	すず付着 7.5YR2/2 黒褐			133	古厩	
50 423	古墳南溝	深鉢	体	ナデ	1	14	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐		小石混	137	P32	
50 424	古墳南溝	深鉢	体	ナデ	1	15	5YR5/6 明赤褐	5YR6/8 にぶい橙		小石少混	152	古厩	
50 425	古墳南溝	深鉢	体	ナデ	1	17	5YR4/6 赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙		小石混	147	古厩	
50 426	遺構外 P46	深鉢	体	ナデ	1	6	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	232	2417	
50 427	古墳南溝	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい褐		小石少混	153	古厩	
51 428	検出箇	深鉢	体	ナデ	4	16	7.5YR2/1 黒	7.5YR3/2 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	593		
51 429	検出箇	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR5/6 明赤褐	5YR2/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒少混	594		
51 430	Ⅱ-e12 かく乱	深鉢	口	ナデ	1	6	5YR3/2 暗赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	575		
51 431	ⅡC-11 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	10	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	570		
51 432	Ⅱ-r05 かく乱	深鉢	体	ナデ	2	11	2.5YR4/2 灰赤	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒多混 焼成良好	562		
51 433	Ⅱ13 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	12	5YR4/6 赤褐	5YR5/6 明赤褐	焼成良好	白色岩粒混 焼成良好	585		
51 434	Ⅱ-o11	深鉢	体	ナデ	1	10	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR3/3 暗褐	焼成良好	白色岩粒混	558		
51 435	Ⅱ土	深鉢	体	ナデ	1	21	5YR6/6 橙	5YR2/1 黒褐	焼成良好 スス付着 内面	白色岩粒少混	592		
51 436	出土位置不明	深鉢	体	ナデ	2	16	5YR2/8 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	573		
51 437	ⅡH-10	深鉢	体	ナデ	1	22	7.5YR3/3 暗褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混	477	5072	
51 438	Ⅱ-o11 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	14	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒混 織物混	563		
51 439	Ⅱ09 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	22	5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR3/6 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒混	581		
51 440	ⅡH-14	深鉢	体	ナデ	1	41	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	焼成良好	響母混	614	2876	
51 441	Ⅱ土	深鉢	体	ナデ	1	4	7.5YR4/2 灰褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒混	236	2486	
51 442	Ⅱ土	深鉢	体	ナデ	1	8	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	241	2586	
51 443	Ⅱk Ⅱ土	深鉢	体	ナデ	1	14	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	591		
51 444	Ⅱ09 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	6	5YR4/2 灰褐	5YR4/6 赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	588		
51 445	Ⅱ09 かく乱	深鉢	口	ナデ	1	2	5YR3/2 暗赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	589		
51 446	Ⅱ-o06	深鉢	体	ナデ	1	21	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR3/2 暗赤褐	焼成良好 スス付着	白色岩粒混	469	2938	
51 447	Ⅱ09 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	10	2.5YR にぶい赤褐	7.5YR6/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒混	587		
51 448	SQ01 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR5/6 明赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	598		
51 449	Ⅱk かく乱	深鉢	体	ナデ	1	20	5YR5/8 明赤褐	5YR2/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	607		
51 450	Ⅱ09 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	7	5YR5/6 明赤褐	7.5YR3/1 黒褐	焼成良好	白色岩粒混	427	1627	
51 451	Ⅱ土	深鉢	口	ナデ	1	3	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR5/3 にぶい褐	焼成良好	白色岩粒少混	596		
51 452	Ⅱ10 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	9	5YR3/3 暗赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	焼成良好	白色岩粒少混	582		
51 453	Ⅱ土	深鉢	底	ナデ	3	133	2.5YR3/6 暗赤褐	2.5YR3/6 暗赤褐	焼成良好	白色岩粒多混	468	2938	
51 454	ⅡC-06	深鉢	口	ナデ	1	14	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	焼成良好	白色岩粒多混	470	5002	
51 455	SQ01 かく乱	深鉢	体	ナデ	1	26	7.5YR3/1 黒褐	10YR4/4 褐	焼成良好	白色岩粒混	601		

(注) 備考欄の番号は図版の番号と一致する

第10表-9 縄文早期実測土器一覽

3 旧石器・縄文時代の石器

(1) 器種分類と石器群の概要

石器群の総点数は4,211点である。この内、縄文時代の石器が4,173点、形態および出土層位から旧石器時代の石器と判断したものが38点である。

旧石器時代の石器と判断したものは、ナイフ形石器1点、台形石器1点、揉錐器1点、貝殻状刃器1点、削器2点、挟入削器1点、搔器1点、二次加工がある剥片1点、微細な剥離がある剥片2点、剥片27点である。ナイフ形石器等の旧石器時代に特徴的な石器以外は出土層位により旧石器時代のものと判断した。しかし、旧石器時代の包含層と認識しているIV層から出土した遺物の中に石鏃と土器が少数含まれており、IV層出土遺物のすべてが旧石器時代の所産であるとは言い難い状況である。旧石器時代の石器と縄文時代の遺物分布範囲は重複しており、出土層位を根拠に旧石器時代の石器と縄文時代の石器を厳密に分離することは困難である。旧石器時代と判断した石器については「(6) 遺構外出土の石器」に詳細を記述し、ここでは縄文時代の石器と判断した石器群の概要を述べる。

縄文時代の石器と判断したものは、石槍1点、石鏃137点、石鏃未成品35点、石匙2点、異形石器1点、削器29点、搔器3点、挟入削器2点、挟入石器2点、楔形石器238点、打製石斧11点、局部磨製石斧3点、横刃型石器64点、刃器20点、礫器9点、不定形石器3点、二次加工がある剥片47点、微細な剥離がある剥片38点、研磨痕がある剥片2点、石核18点、原石16点、剥片2,580点、砕片867点、有溝砥石1点、砥石1点、特殊磨石19点、磨石10点、凹石3点、敲石2点、石皿2点、台石6点である(第12表)。

土器との共存関係から、これらの石器群の大半は縄文時代早期押型文土器に伴うものと考えられるが、S B 08、S K 51など縄文時代中期の遺構があるため、該期の石器を少数含んでいる。

(2) 縄文時代石器の各器種の概要

石槍 1点出土(第66図149)。チャート製。S K 67から出土。

石鏃 137点出土(第53図1~4他)。黒曜石96点、下呂石28点、チャート9点、凝灰岩、水晶、石英岩、流紋岩が各1点である。押型文土器の竅穴住居跡の覆土とS Q 02から比較的多く出土している。欠損品が113点で、欠損率は85%である。

石鏃未成品 35点出土(第56図31・35他)。黒曜石31点、下呂石2点、チャート2点である。先端部を作り出した不整形な三角形を呈するものを石鏃未成品とした。未成品の中には、石鏃製作工程の途上で完成形の石鏃に加工されることが期待される製作途上のものと、製作途上で失敗品として放棄された完成形の石鏃になりえないものが想定される。本遺跡の石鏃未成品は、ほとんどが後者であると判断した。

石匙 2点出土(第70図191・194)。黒曜石1点、下呂石1点である。191がS B 01、194は遺構外より出土した。

異形石器 1点出土(第62図106)。下呂石製。S B 06から出土。

削器 29点出土(第70図195~197・199他)。黒曜石18点、下呂石3点、チャート2点、珪質凝灰岩1点、珪質頁岩1点、ホルンフェルス3点、頁岩1点である。この他に、旧石器時代の削器と判断した珪質頁岩1点、下呂石1点がある。押型文の竅穴住居跡から9点出土した。

搔器 3点出土(第70図192・198他)。黒曜石2点、下呂石1点である。この他に、旧石器時代の搔器と判断したチャート1点がある。出土場所をみると、第66図155はS F 83(Ⅲ102グリッド)、第70図198はⅢ103グリッドで遺跡内の限定された場所から出土しており、旧石器時代の石器群の分布範囲に重複または近接している。第70図192は中央自動車道の東側の5区で出土しているが、5区にも

旧石器時代の石器が確認されている。長野県内において、搔器は旧石器時代から縄文時代草創期や前期初頭に顕著に見られる器種である。押型文期の住居跡から出土しないこと、旧石器時代の遺物分布に重複することを考慮すると、これらの搔器は押型文土器に伴う石器ではない可能性が高い。

挟入削器 2点出土。黒曜石1点、チャート1点である。S B 06と遺構外から出土した。刃部がノッチ状に内湾した削器である。この他に旧石器時代とした玉髓1点がある(第68図158)。

挟入石器 黒曜石製のものが2点出土。いずれもS B 03から出土した欠損品である。挟入部を作り出しているが全体の形状は不明で、石匙のつまみ部の可能性もある。

楔形石器 238点出土(第56図37・38・40・41他)。黒曜石233点、下呂石4点、ホルンフェルス1点である。両極打法による剥離が対峙する二辺に認められるものを楔形石器とした。いわゆる両極石核、両極石器なども含まれる。押型文の竪穴住居跡から101点(42.4%)が出土した。

打製石斧 11点出土(第64図1・2・4)。硬砂岩5点、ホルンフェルス2点、緑色凝灰岩2点、頁岩1点、片麻岩?1点である。縄文時代早期の遺構からの出土例がなく、縄文時代中期のS B 08、古墳時代および近世の遺構内、遺構外から出土している。出土状況から縄文時代早期には存在せず、縄文時代中期の石器であると考えられる。

局部磨製石斧 3点出土(第56図43・第73図217)。緑色凝灰岩2点、粘板岩1点である。押型文の時期の竪穴住居跡(S B 03・05)から2点、方形周溝墓(S M 04)から1点出土した。

横刃型石器 64点出土(第58図61~66他)。硬砂岩54点、緑色凝灰岩5点、ホルンフェルス3点、粘板岩1点、片麻岩1点である。片面に自然面を残した大形の剥片の、刃部に小剥離が見られるものを横刃型石器とした。押型文の竪穴住居跡から38点(59.3%)が出土した。

刃器 20点出土(第56図45他)。ホルンフェルス17点、硬砂岩2点、流紋岩1点である。自然礫を分割して得られた厚手の剥片を素材とし、横刃型石器に比べ大形の調整加工(剥片剥離)が施される石器。一側縁に剥片剥離がなされるものと、求心的な剥片剥離がなされるものがある。前者は自然面を打面とする片面加工であるが、後者は片面加工と両面加工のものが認められる。従来、これらの石器には石核、礫器等の器種名が付されているが、当センター刊行の『山の神遺跡』の分類に従い、刃器とした。しかしながら、石子原遺跡の刃器の使用痕跡は明確ではなく、刃器と分類したものの中に小形の貝殻状剥片を取るための石核を含んでいる可能性があり、今後器種名の再検討が必要である。

押型文土器の竪穴住居跡から12点(60.0%)が出土した。

礫器 9点出土(第54図17・第73図218・220他)。硬砂岩5点、ホルンフェルス2点、凝灰岩1点、石英岩1点である。扁平な楕円形の周縁部に剥片剥離を行っている。大きさ、平面形態、剥片剥離の状態で刃器の一群に類似しており、礫素材と剥片素材との違いがあるものの、両者の中に同一機能の石器が含まれていると想定される。硬砂岩製の礫器の中には、大形の剥片を剥離しているものもあり、小形の横刃型石器の素材剥片を剥離した石核を含んでいる可能性がある。

押型文土器の竪穴住居跡から5点(55.5%)が出土した。

二次加工がある剥片 47点出土(第72図208・210他)。黒曜石39点、ホルンフェルス4点、チャート1点、下呂石1点、水晶1点、石材不明1点である。この他に、旧石器時代と判断したチャート1点がある。微細な剥離がある剥片 38点出土(第53図7・8他)。黒曜石34点、下呂石1点、チャート1点、珪質凝灰岩1点、ホルンフェルス1点である。この他に旧石器時代と判断した下呂石2点がある。

不定形石器 3点出土。黒曜石2点、チャート1点である。不定形であるが、何らかの形状を作り出す意図が見られるものを、二次加工がある剥片と区別して不定形石器とした。

研磨痕がある剥片 緑色凝灰岩2点が出土(第66図147)。S K 01(押型文土器の時期)とS M 03(古墳

時代前期)より出土した。

有溝砥石・砥石 有溝砥石 1点、砥石の破片 1点が出土。いずれも砂岩である。有溝砥石はS Q 01のかく乱部分で出土したもので、11.1cm × 7.7cm × 1.2cmの方形板状礫の中央部に幅0.9cmほどの浅い溝が認められる。

特殊磨石・磨石 特殊磨石 19点(第60図75～78他)、磨石 10点(第55図26他)が出土した。扁平な楕円礫の側縁部に幅1～2cm程度の機能面を有するものを特殊磨石とし、それ以外の磨面を有する石器を磨石とした。特殊磨石は硬砂岩9点、花崗岩7点、安山岩1点、流紋岩1点、石材不明1点で、二側縁に機能面があるものが多い。磨石は硬砂岩3点、花崗岩4点、安山岩1点、流紋岩1点、ホルンフェルス? 1点、石材不明1点である。なお、本遺跡では断面三角形の礫の稜を機能面とした特殊磨石は稀である。

押型文の竪穴住居跡からは特殊磨石 12点(63.1%)、磨石 7点(63.6%)が出土した。

凹石・敲石 凹石 3点(第55図27他)、敲石 2点(第54図16)が出土した。凝灰岩、硬砂岩、花崗岩などが用いられている。

石皿・台石 石皿 2点、台石 6点が出土した。磨耗した機能面が窪むものを石皿、機能面が平らな厚い板状の礫を台石とした。いずれも花崗岩を主体となる石材であり、片麻岩なども用いられている。

石核 18点出土。黒曜石 14点、下呂石 3点、チャート 1点である。10g以下の小形の残核が多く、5g以下のものも9点ある。

原石 16点出土。黒曜石 12点、下呂石 1点、チャート 1点、石英岩 1点、石材不明 1点である。黒曜石は1.7～6.2g、下呂石は5.2g、チャートは20.9gである。残されている原石は非常に小形である。石英岩はS B 01のかく乱より出土し殆ど石器に用いられていない石材であることから、原石であると断定できない。

剥片・砕片 便宜的に、1cm × 1cmより小さく薄いものを剥片、それ以上のものを剥片とした。剥片には両極打法により生じたものも含まれている。剥片 2,579点、砕片 867点が出土した。剥片では黒曜石が約75%、下呂石が約10%、硬砂岩が約5%、ホルンフェルスが約4%、チャートが約2%で他の石材は1%に満たない。砕片では黒曜石と下呂石の比率が高い。

この他に旧石器時代の剥片と判断したものが27点ある。

(3) 住居跡出土の石器(第53～64図、写真P L 24～30)

第12表に遺構別の器種組成を示した。S B 01～S B 06は早期立野式、S B 08は中期中葉から後葉の竪穴住居跡である。

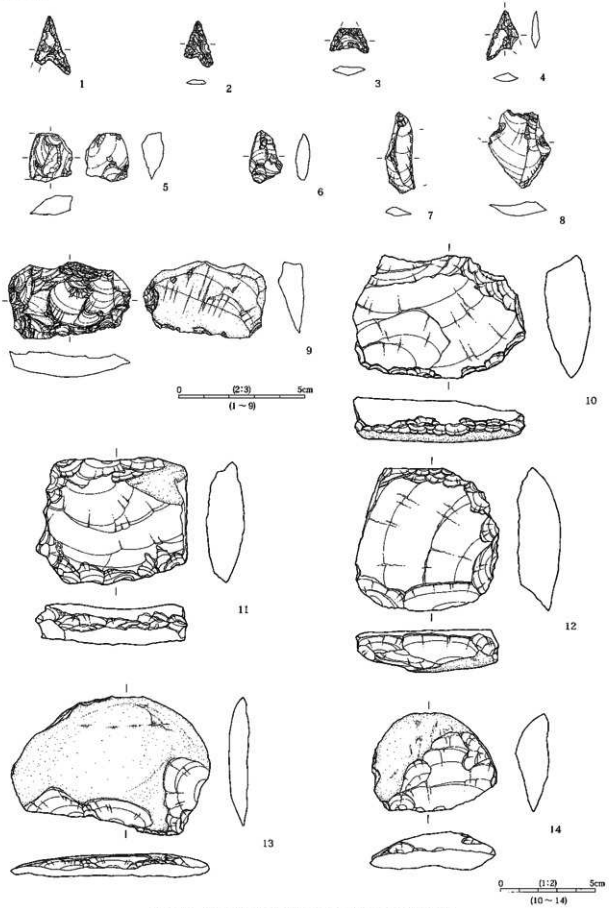
S B 01(第53・54図、P L 24)

1は下呂石、2～4は黒曜石製の石鏃である。5～9は黒曜石で、5が剥片、6が楔形石器、7・8が微細な剥離がある剥片、9が削器である。10～15は砂岩製の横刃型石器で、いずれも片面に自然面を残しており、扁平な楕円礫から剥離した剥片を用いている。10・11は刃部表裏面に剥離がある両刃で、他は片刃である。16は凝灰岩製の敲石で、側面に敲打痕が認められる。剥離部分も敲打により生じた、敲石の欠損品である。17・18はホルンフェルス製の礫器と剥片である。19は硬砂岩製の礫器としたが、上下両端からの両極打法により分割されたものと推定され、右側縁に見られる剥離は刃部作出のための調整加工には見えない。20は片麻岩の台石の欠損品で、上面に磨耗痕が認められる。

S B 02(第55図、P L 25)

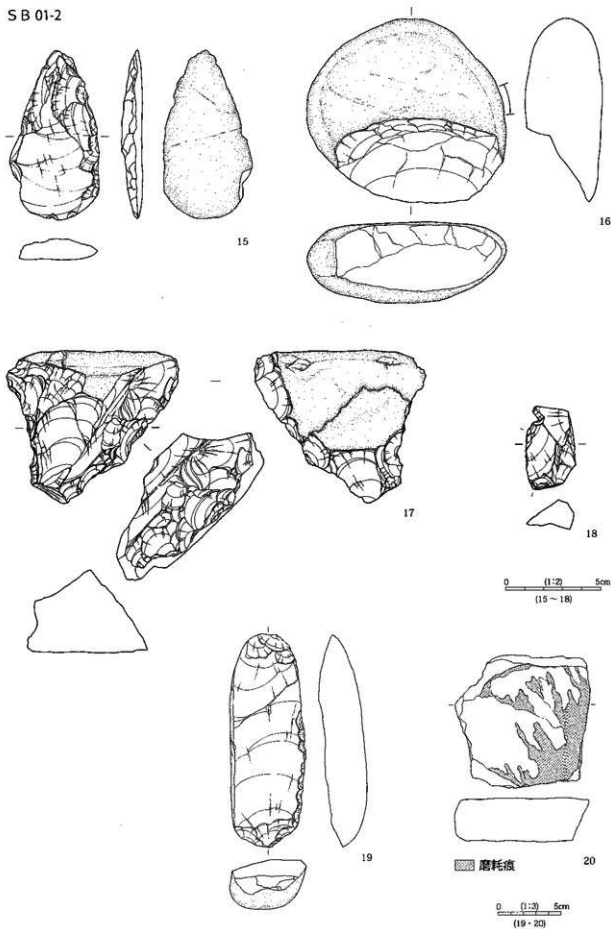
21はチャート、22・23は黒曜石製の石鏃である。22・23は厚さ2mmに満たない薄いものである。

SB 01-1



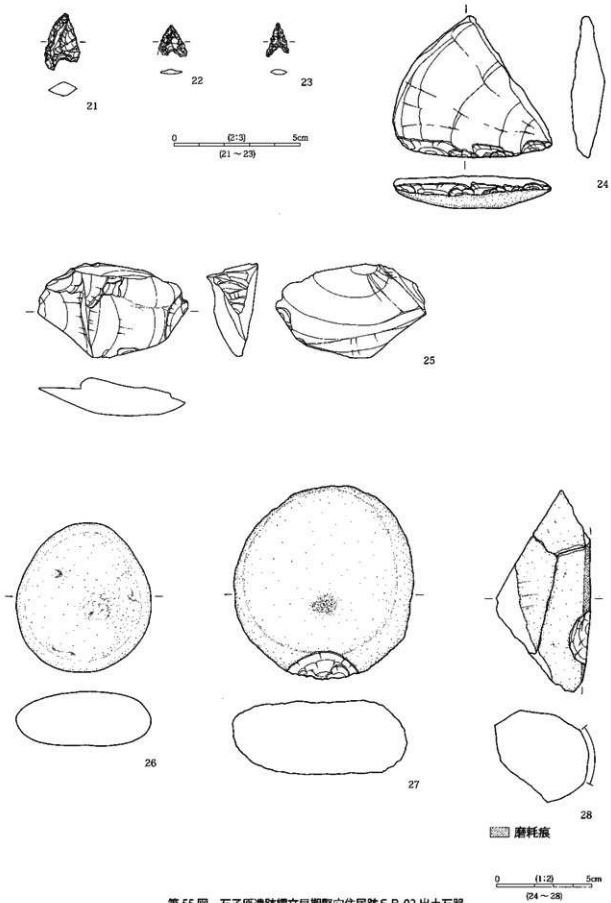
第53図 石子原遺跡縄文早期整穴住居跡SB 01出土石器1

SB 01-2



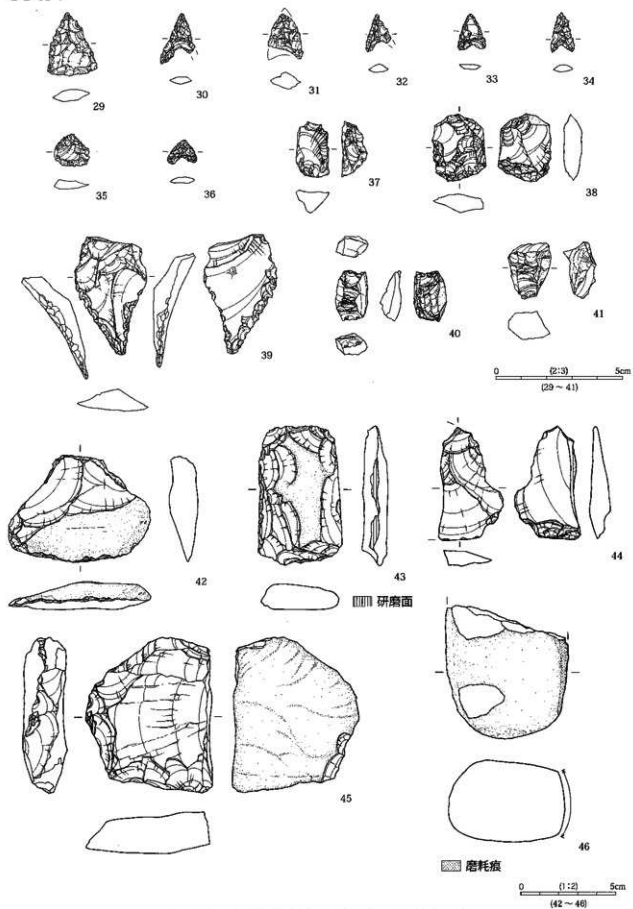
第54図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 01出土石器2

SB 02



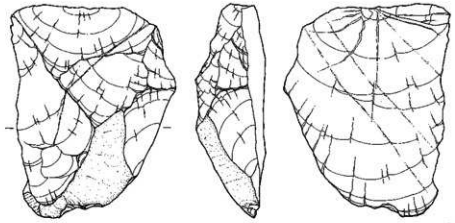
第55図 石子原遺跡縄文早期壑穴住居跡SB 02出土石器

SB 03-1

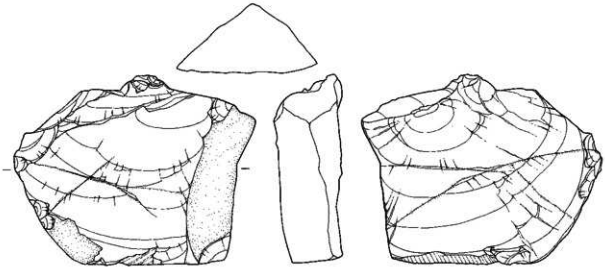


第56圖 石子原遺跡繩文早期竪穴住居跡SB 03 出土石器 1

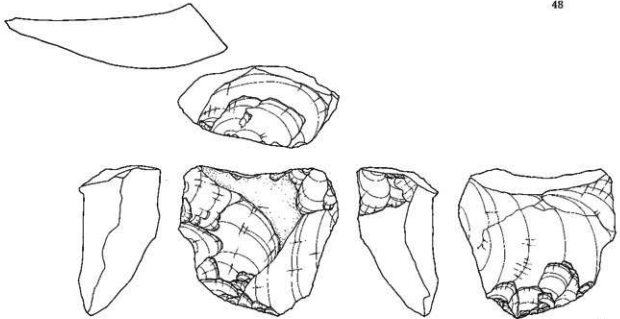
SB 03-2



47



48



49

0 (1:2) 5cm

第57図 石子原遺跡縄文早期整穴住居跡SB 03出土石器2

24 は砂岩製の横刃型石器で、裏面は自然面である。25 はホルンフェルス製の剥片である。26 は硬砂岩製の磨石であるが磨耗痕は明瞭でない。27 は花崗岩製の凹石で表裏面にわずかな窪みが認められる。28 は側面部に機能面がある特殊磨石である。

SB 03 (第 56・57 図、P L 25・26)

29 は下呂石、30・32～36 は黒曜石、31 はチャート製の石鏃および石鏃未成品 (31・35) である。29・34 は鋸歯縁を作り出している。37・38・40・41 は黒曜石製の楔形石器である。39 は下呂石製の削器である。42 は硬砂岩製の横刃型石器である。43 は粘板岩 (頁岩) 製の打製石斧であるが、扁平礫を素材とし、二側面に研磨痕が認められる。側面の研磨後に刃部の剥離がおこなわれており、刃部再生がおこなわれていることを考慮すると局部磨製石斧であった可能性がある。44 は横刃型石器欠損品、45・49 は刃器、47・48 は大形剥片、いずれもホルンフェルス製である。46 は花崗岩の特殊磨石である。

SB 04 (第 58～60 図、P L 27・28)

50・51 は下呂石、52～56 は黒曜石、57 はチャート製の石鏃 (50・52～54・57) と石鏃未成品 (51・55・56) である。58 は黒曜石製の削器で、59 は黒曜石製の微細な剥離がある剥片である。60 はチャート製の削器であるが、素材の剥片は両極打法によって剥離されている。61・63～69・71 は砂岩製、62 は緑色凝灰岩製の横刃型石器で、いずれも片面が自然面である。特に、62 は刃部に磨耗が認められる。70 は硬砂岩製の礫器である。扁平な楕円礫を半削して生じた鋭利な縁辺に微細な剥離が認められることから、横刃型石器と同じ機能の石器であると推定する。72・73 はホルンフェルス製の刃器で、72 は欠損品である。74 はホルンフェルス製の剥片である。75～77 は硬砂岩製の特殊磨石で側面に幅 1.5～2.5cm 程度の帯状の機能面がある。いずれも広い平坦面の中央部に敲打によるわずかな窪みが認められる。78 は花崗岩で表面の風化が著しく機能面の特定はできないが、形状から類推して、75～77 の特殊磨石と同じ石器であると判断した。

SB 05 (第 61 図、P L 29)

79～82 は石鏃、83・84 は微細な剥離がある剥片、いずれも黒曜石製である。85～88 は硬砂岩製の横刃型石器で、いずれも片面が自然面である。89 は安山岩製の特殊磨石、90 は花崗岩で表面の風化が著しく機能面の特定はできないが、形状から類推して特殊磨石であると判断した

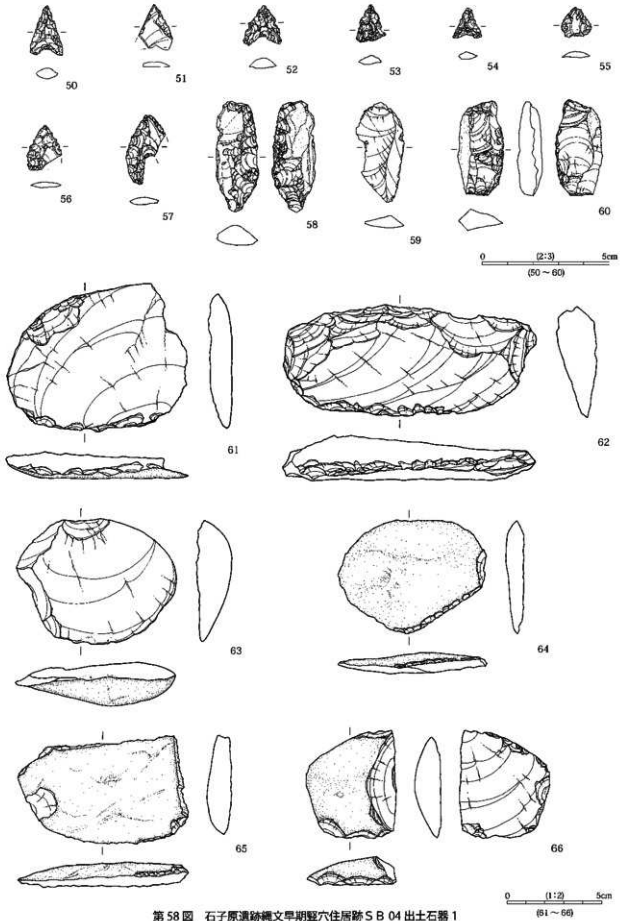
SB 06 (第 62・63 図、P L 29・30)

91～105 は石鏃および石鏃未成品 (100・105) である。96・99 が下呂石、104 が石英、他は黒曜石製である。91・92・96・97・99・103 は厚さ 2mm 程度の薄い石鏃である。106 は下呂石の異形石器である。107 は黒曜石製の削器である。108～110 は砂岩製の横刃型石器である。いずれも片面が自然面である剥片を素材とし、108 の自然面中央部には敲打に窪みが認められる。111～114・116・117 はホルンフェルス製の刃器である。111・113・114・117 は欠損品である。113 は他の刃器に比べ小形で全周にわたり両面から調整加工が施されており、片面加工を主体とする刃器とは別器種と考えることも可能である。115 は無斑晶質安山岩の剥片である。118 は硬砂岩製の磨石、119 は花崗岩製の凹石である。118 は使用痕 (磨痕) が不明瞭で、横刃型石器の石材と共通する硬砂岩であることから、横刃型石器の素材礫である可能性を指摘しておく。119 は風化が著しいが、凹痕が表裏両面に観察される。

SB 08 (第 64 図、P L 35)

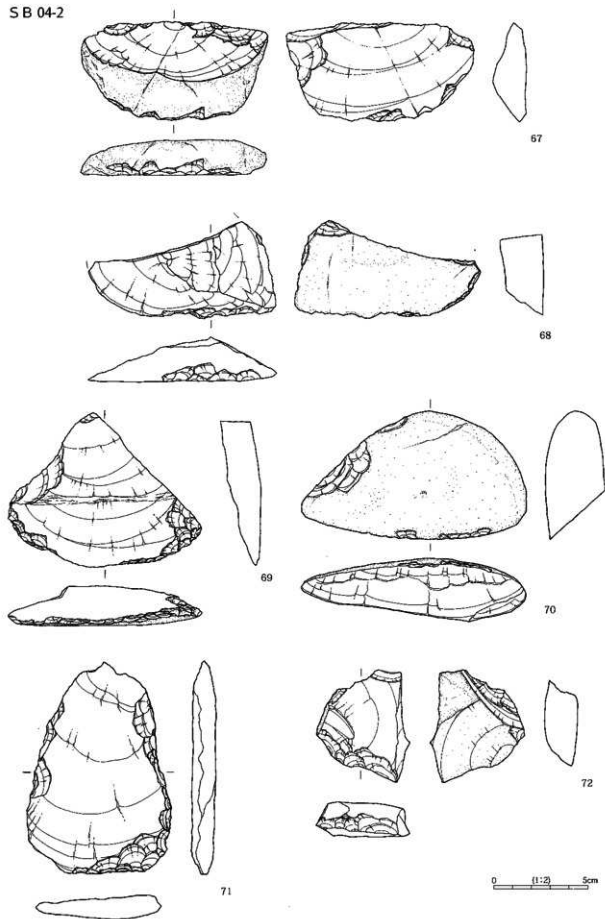
1・4 は砂岩製、2 はホルンフェルス製の打製石斧である。1・4 は片面に自然面を残しており、1 の刃部の剥離面にはわずかな磨耗が認められる。5 は花崗岩製の石皿で、表面中央に磨面が認められ、裏面は部分的に赤色化している。6 は片麻岩の台石である。分厚い板状の礫で、表面の剥落が 5 箇所認められるが、他に使用痕跡は確認できない。

SB 04-1



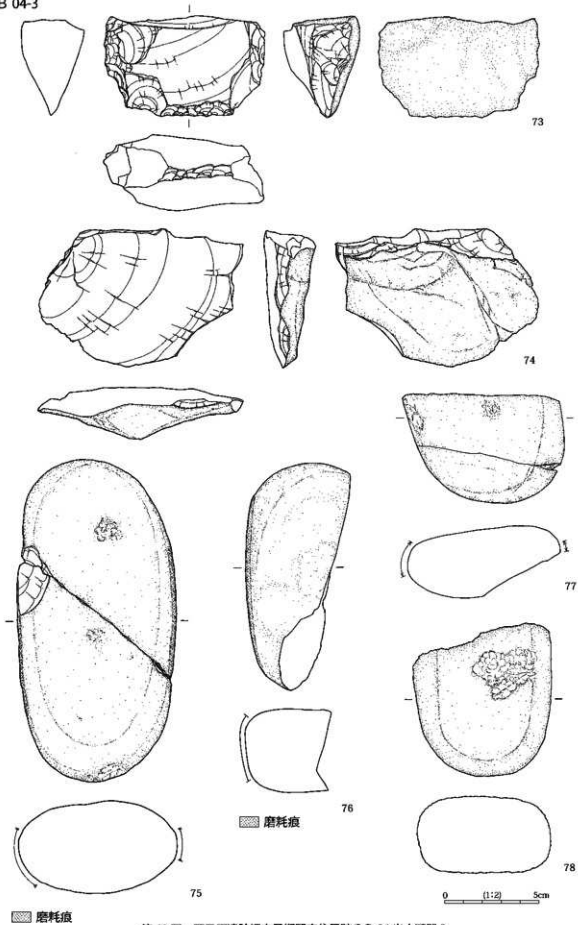
第58図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 04出土石器1

SB 04-2



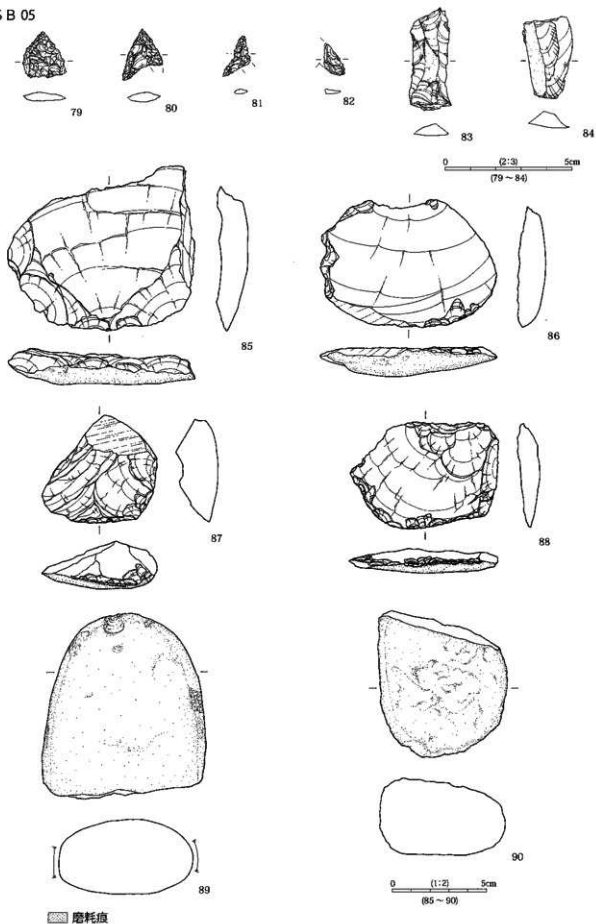
第59圖 石子原遺跡縄文早期竪穴住層跡SB 04出土石器2

SB 04-3



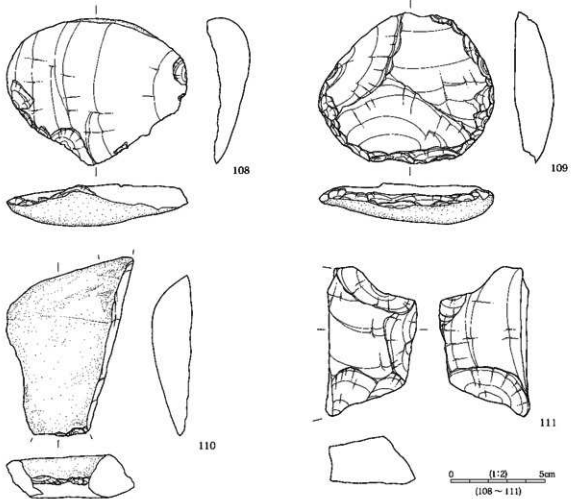
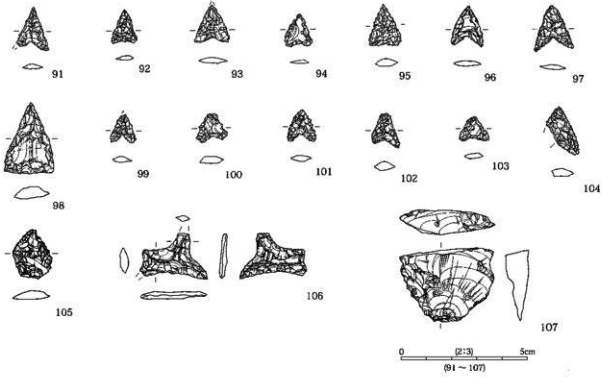
第60図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 04出土石器3

SB 05



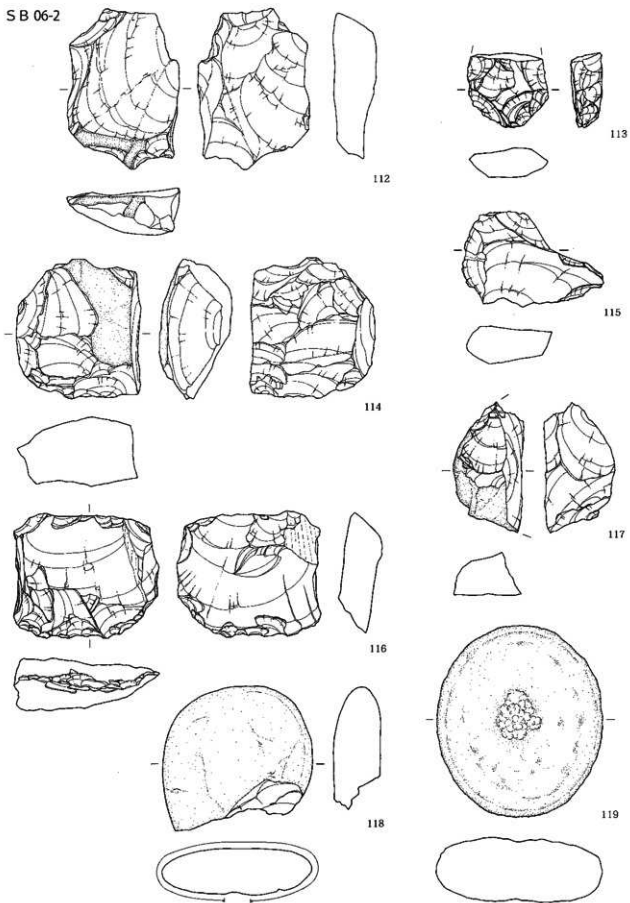
第61圖 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 05出土石器

SB 06-1



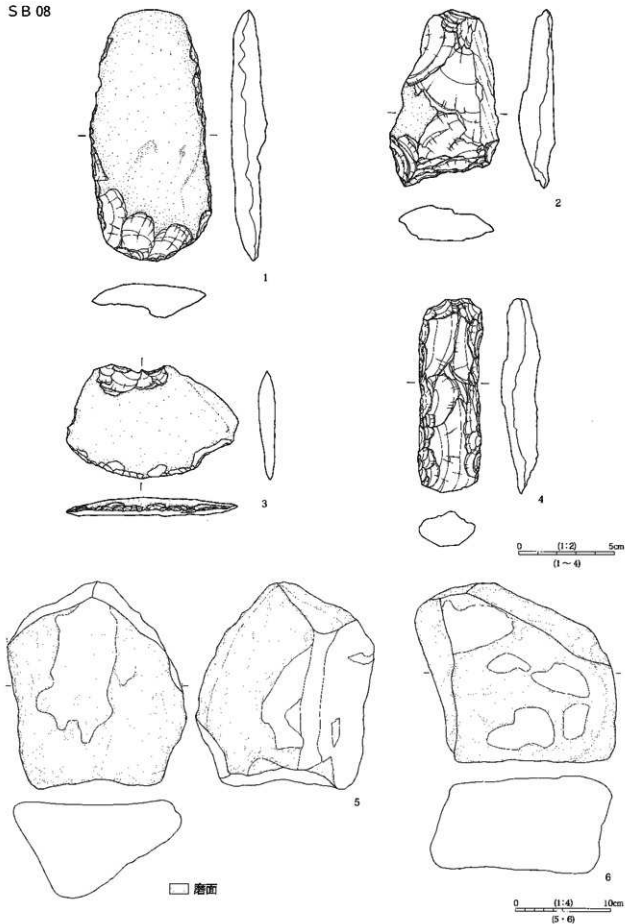
第62図 石子原遺跡縄文早期竪穴住居跡SB 06出土石器1

SB 06-2



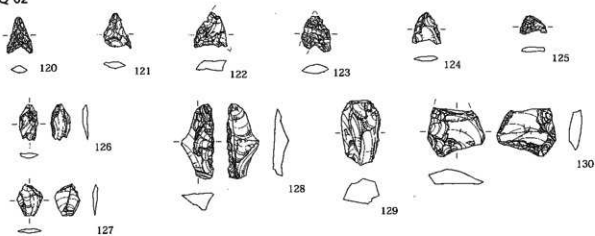
第63圖 石子原遺跡縄文早期整穴住居跡SB 06 出土石器2

SB 08

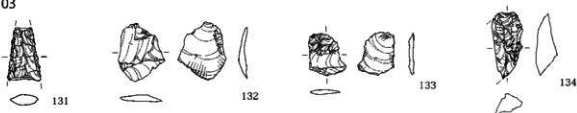


第64図 石子原遺跡縄文中期整穴住居跡SB 08出土石器

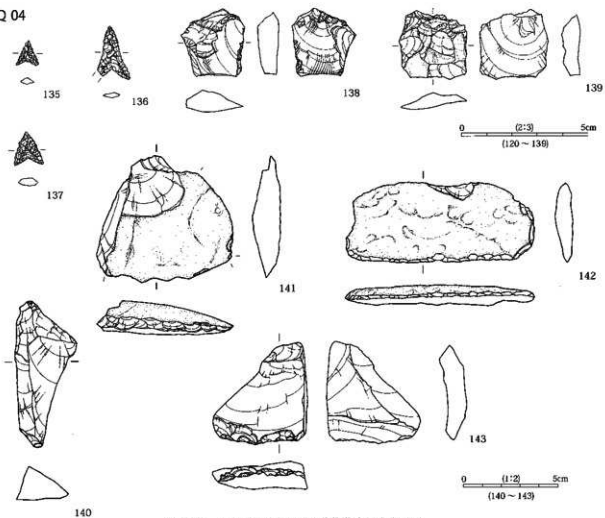
SQ 02



SQ 03

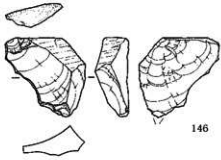
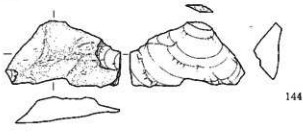


SQ 04



第 65 图 石子原遺跡縄文早期遺物集中区出土石器

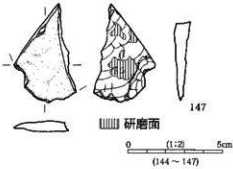
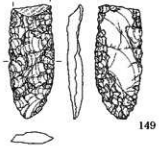
SK 01



SK 02



SK 67



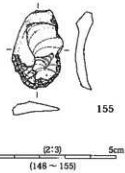
SK 76



SH 01



SF 83



SF 90



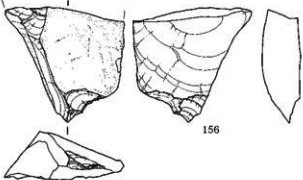
SF 94



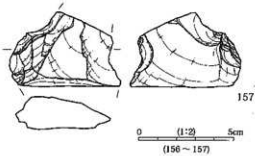
SF 95



SF 04



SF内



第66図 石子原遺跡縄文土坑・焼土址・焼土坑出土石器

(4) 遺物集中区出土の石器 (第65図、P L 31)

第12表に遺構別の器種組成と石材組成を示した。S Q 02・03が黒曜石主体で、小型の剥片・碎片が多いのに対し、S Q 04は下呂石を主体としており、ホルンフェルスや砂岩の剥片も含んでいる。いずれも早期立野式の土器が出土している。

S Q 02

120・124は下呂石、121・123～125は黒曜石製の石鏃である。120・124以外は欠損品である。126は二次加工がある剥片、127・128は剥片、129は楔形石器、いずれも黒曜石である。128は連続的な調整加工の後に、両極打法により剥離された剥片である。130はチャート製の石鏃未成品である。

S Q 03

131は下呂石製の石鏃としたが、有茎尖頭器の可能性がある。132・133は黒曜石製の剥片で、カジリと区別できないが、縁辺に微細な剥離が認められる。134は黒曜石製の二次加工がある剥片で、欠損している。

S Q 04

135・137は黒曜石、136は下呂石製の石鏃である。138は水晶製の二次加工がある剥片、139は下呂石の剥片である。140はホルンフェルス製の剥片、141・142は硬砂岩製、143はホルンフェルス製の横刃型石器である。141は自然面から刃部調整加工が施されており、142は下縁部全体に微細な剥離が認められる。

(5) 土坑・焼土址・集石炉出土の石器 (第66図、P L 31・32)

土坑・焼土跡・集石内の器種組成を第12表に示した。

144～146(S K 01)はホルンフェルス製の剥片である。144は捩理面を打面としている。147(S K 01)は緑色凝灰岩製の研磨痕がある剥片の欠損品である。

148(S K 02)は黒曜石製の二次加工がある剥片である。実測図下面の折れ面に、裏面からの剥離が認められる。正面図右側縁には微細な剥離が認められる。

149(S K 67)はチャート製の石槍で、捩理面で折れている。

150(S K 76)・152(S F 90)・153(S F 94)は下呂石、151(S H 01)・154(S F 95)は黒曜石製の石鏃である。

155は黒曜石製の搔器である。縦長剥片の打点側に刃部を作り出す。また、他の黒曜石に比べ剥離面の傷と風化が著しい。

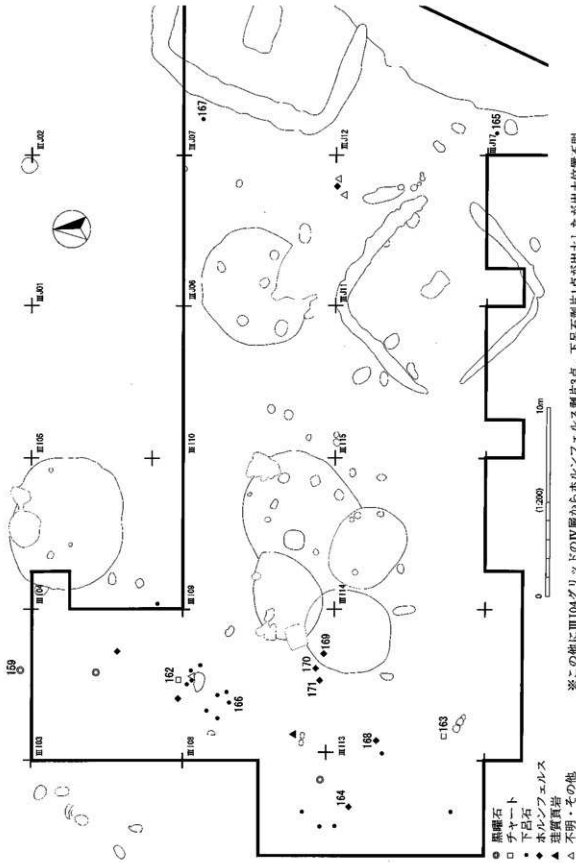
156(S F 04)・157はホルンフェルス製の刃器で、いずれも欠損品であり、156は捩理面が残されている。157はⅢJ 16 S F 内との注記があるが、縄文時代の焼土跡であるのか否か、確認できない。

(6) 遺構外出土の石器

旧石器時代の石器 (第68・69図、P L 32)

Ⅳ層出土の石器と、形態的特徴および分布状況から旧石器時代の可能性のある石器と判断したものを、ここで取り上げる。旧石器時代の石器と判断したものは、ナイフ形石器1点、台形石器1点、採錐器1点、貝殻状刃器1点、削器2点、挟入削器1点、搔器1点、二次加工がある剥片1点、微細な剥離がある剥片2点、剥片27点である。

158・160・161は5区、それ以外は1区で出土した。1区出土の石器群は2又は3個所のまとまり



※この他にIII104グリッドのW層からホルンフェルス製片3点、下呂石製片1点が出土したが出土位置不明

第67図 石子塚遺跡1区旧石器時代遺物分布

が認められる(第67図)。出土層位は、158がI層、159がⅢ層、160～171がⅣ層である。基本的には、Ⅳ層は旧石器時代の遺物包含層であると認識して調査をしたが、Ⅳ層出土とした遺物の中に石鏃と土器が少数含まれており、Ⅳ層出土とした遺物のすべてが旧石器時代の所産であるとは言い難い状況である。また、旧石器時代の石器分布域に接して、Ⅳ層を掘り込んだ縄文時代早期の竈穴住居跡があり、縄文時代と判断した石器の中に旧石器時代の遺物が含まれている可能性がある。

158は玉髓製の抉入削器である。159は黒曜石製のナイフ形石器である。縦長の剥片を素材とし、打面側の二側縁にブランディングを施すが、打面を一部残している。ブランディングがおよばない側縁には微細な剥離が認められる。160は黒曜石の貝殻状刃器である。161は黒曜石の台形石器である。正面図右側縁には表面からの微細な剥離、左側面基部と先端部には裏面からの剥離が認められる。162はチャートの搔器である。打点は明確でないが、自然面を打面とした貝殻状の厚い剥片を素材とする。刃部の調整加工後に刃部裏面におよぶ微細な平坦剥離が認められる。正面図上端部が折れている。163は赤いチャートの二次加工がある剥片で、二側縁が折れており、正面図下端部に加工が認められる。164・167はホルンフェルスの剥片である。164は正面図左側縁が折れ面である。不明確であるが、右側縁に裏面からの剥離が観察される。165・166は下呂石で、165は微細な剥離がある剥片である。166は削器で、縦長の剥片を素材とし、一側縁に両面調整で刃部が形成されている。打面は残されているが、端部が欠損する。168～171はホルンフェルスの剥片である。168・170は自然面を打面とした剥片で、170の正面図左側縁部に微細な剥離が観察され、右側面は剥片剥離の際折れた欠損面である。169は風化が著しく打面が明確に読み取れない。171も風化が著しく、剥離の方向が不明確である。旧石器時代の剥片と判断したものは27点あり、その石材はホルンフェルス12点、下呂石12点、黒曜石2点、砂岩1点である。

なお、図示していないが、黒曜石製の採錐器がⅣ層から1点出土している。

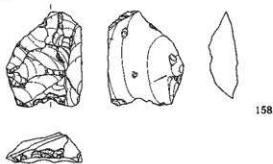
縄文時代の石器(第70～73図、P L 33)

172は流紋岩、173～176・178・184・187・189は黒曜石、179～183・185・190は下呂石、186は水晶、188は凝灰岩の石鏃である。190は長さ1cm、幅0.7cm、厚さ0.15cmと他に比べ非常に小形である。また、流紋岩、凝灰岩、水晶の石鏃は本遺跡では、稀な例である。177・193は黒曜石製の石鏃未成品である。191は黒曜石、194は下呂石の石匙である。191の実測図下縁部のエッジは鈍角であり、刃部は上縁部の調整加工部分である。194は右側縁に調査時の傷があるものの、刃部加工は認められない。192は黒曜石製の搔器である。195は珪質凝灰岩、196はチャート、197・199は下呂石の削器である。なお、195・197・199の側縁部の微細な剥離は調整加工というよりも、使用痕である可能性が高い。198は下呂石の搔器である。

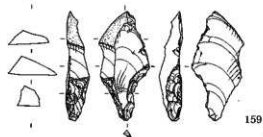
200～216はホルンフェルスで、200・215は刃器、207は主剥離面に調整加工が見られる削器、201～206・208～216は剥片である。201・202・208・210・204の剥片には鋭利な縁辺に小さな剥離が認められる。これらは、連続的な調整剥離ではなく、使用痕である可能性があるが、風化が激しく使用痕であるか否か断定できない。また、212は両側縁が折れており、切断された剥片である可能性がある。

217は緑色凝灰岩の局部磨製石斧である。研磨の方向が明瞭でなく、自然面と研磨面の区別が明確にできないが、やや窪んだ部分も磨耗しており、手持ち砥石による研磨の可能性はある。218は砂岩製の礫器である。表裏両面から調整加工が施されたチョッピングツールで、自然面に凹痕と側縁の敲打痕が認められ、凹石・敲石の機能を有する。219は砂岩製の横刃型石器で、片面全面が自然面である。220は砂岩製の礫器で、片面から調整加工が施されたチョッパーである。221は花崗岩の磨石としたが、表面の風化が著しく、磨痕は観察できない。222は砂岩製の横刃型石器である。

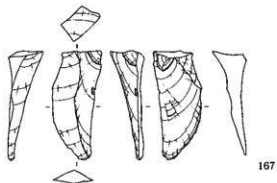
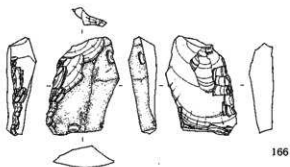
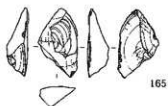
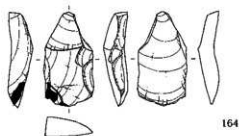
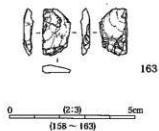
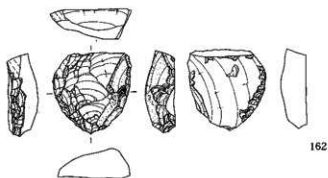
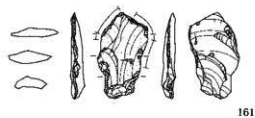
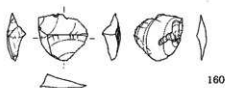
I層



III層



IV層-1

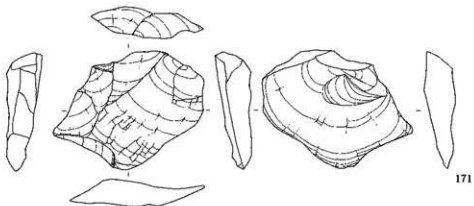
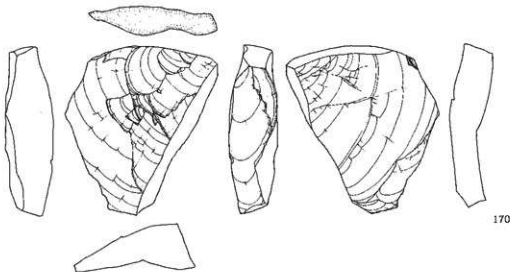
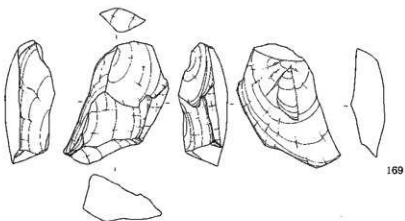
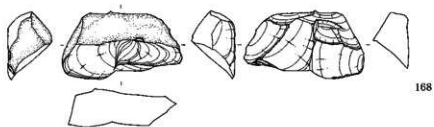


0 (2:3) 5cm
(158~163)

0 (1:2) 5cm
(164~167)

第68図 石子原遺跡旧石器時代の石器1

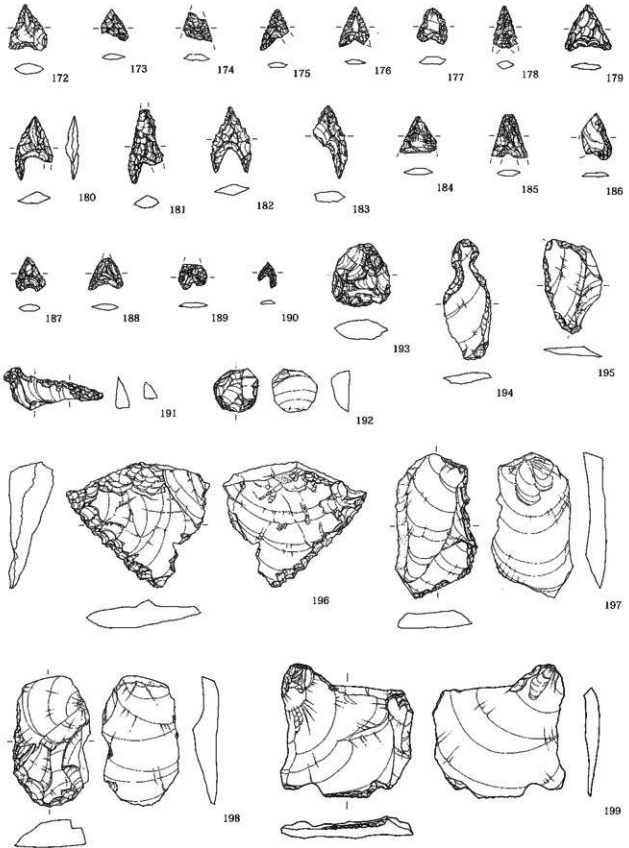
IV層-2



0 (1:2) 5cm

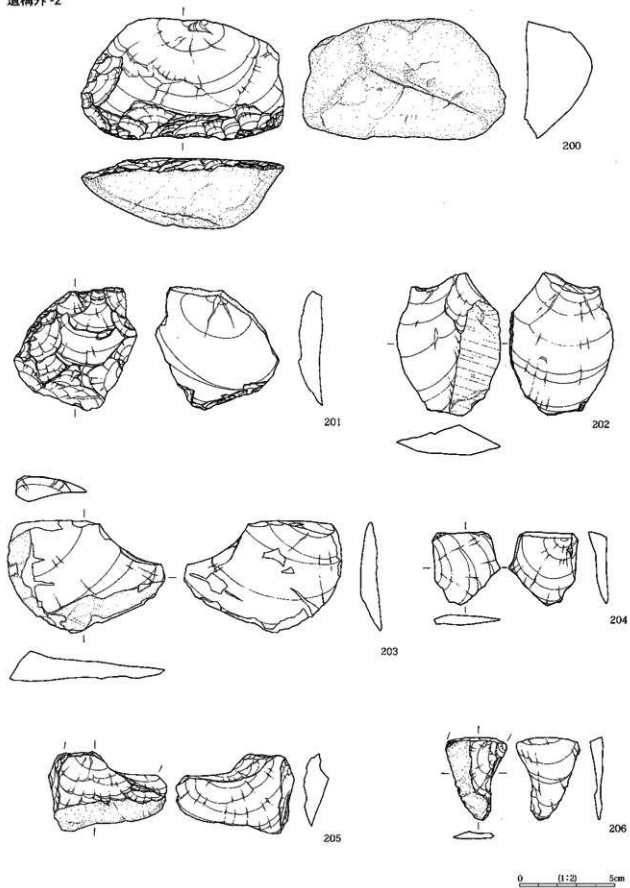
第69図 石子原遺跡旧石器時代の石器2

遺構外-1



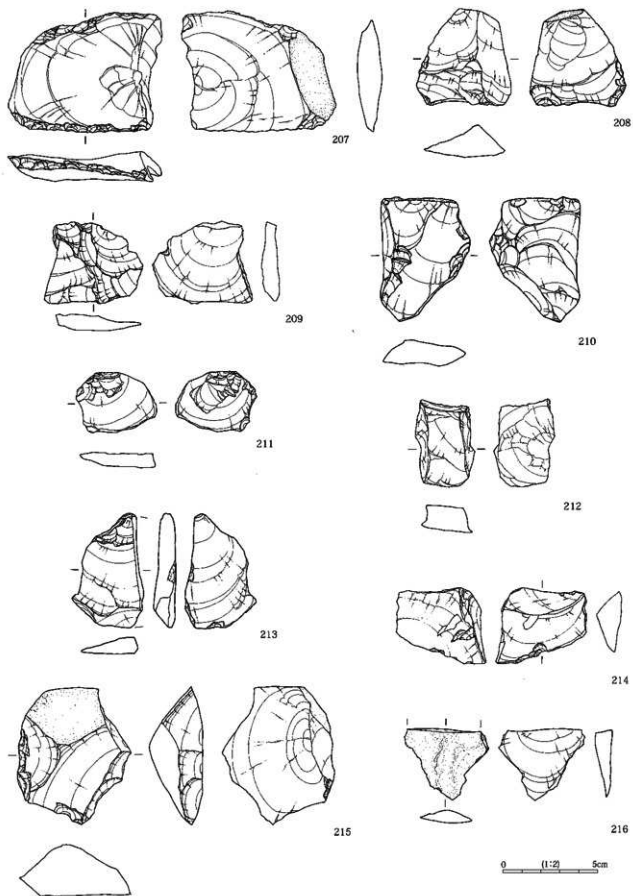
第70図 石子原遺跡遺構外出土石器1

遺構外-2



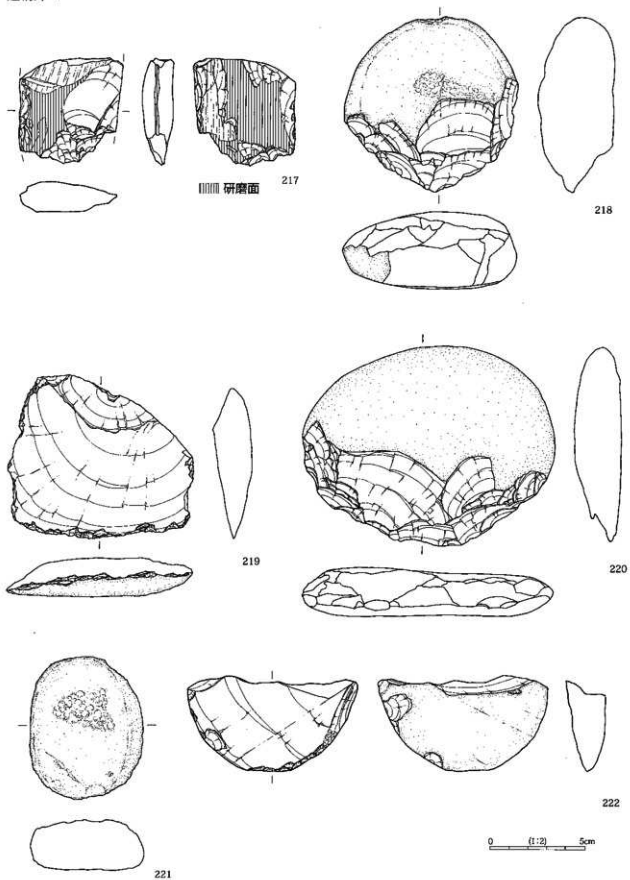
第71圖 石子原遺跡遺構外出土石器2

遺構外-3



第72図 石子原遺跡遺構外出土石器3

遺構外-4



第73圖 石子原遺跡遺構外出土石器4

図版	番号	遺構名	器種名	石材	グリッド名	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上げ 番号	整理 番号	管理 番号	黒曜石 分析番号	備考
53	1	S B 01	石鏃	下呂石			2.35	1.45	0.3	0.56	L 31	3038	113		
53	2	S B 01	石鏃	黒曜石			1.8	1.15	0.2	0.28	L 34	3041	115	187	
53	3	S B 01	石鏃	黒曜石	Ⅲ J06		1	1.5	0.3	0.4	L86	3093	223	193	
53	4	S B 01	石鏃	黒曜石	Ⅲ J06		2	1.3	0.4	0.5	L23	3030	225	189	
53	5	S B 01	剥片	黒曜石	Ⅲ J06		1.5	1.7	0.9	3	L43	3050	221	191	
53	6	S B 01	楔形石鏃	黒曜石	Ⅲ J06		2.1	1.3	0.6	1.5	L2	3009	222	192	
53	7	S B 01	微細な剥片 がある剥片	黒曜石	Ⅲ J06		3.2	1.2	0.4	1.13	L39	3046	116	188	
53	8	S B 01	微細な剥片 がある剥片	黒曜石			3.1	2.5	0.7	3.96	L 25	3032	112	186	
53	9	S B 01	削器	黒曜石	Ⅲ J06		3	4.8	1	15.3	L52	3059	227	196	
53	10	S B 01	横刃型石器	硬砂岩			6.5	9	2.4	163.7	L22	3029	20		
53	11	S B 01	横刃型石器	硬砂岩			6.8	7.9	2.15	149.4	L15	3022	23		
53	12	S B 01	横刃型石器	硬砂岩	Ⅲ J06		7.5	7.5	2.3	164.6	L81	3088	22		
53	13	S B 01	横刃型石器	硬砂岩			7.3	10.4	1.2	105	L 20	3027	111		
53	14	S B 01	横刃型石器	硬砂岩			5.25	6.6	2	69.7	L 6	3013	110		
54	15	S B 01	横刃型石器	硬砂岩			9	4.8	1.1	48.6			120		
54	16	S B 01	鏃	凝灰岩			9.7	10.5	4.2	553.1	L 67	3074	121		
54	17	S B 01	鏃	ホルンフェルス			8	9	4.7	299.6	L23	2161	41		
54	18	S B 01	剥片	ホルンフェルス			4.4	2.6	1.5	14.9	L 33	3040	114		
54	19	S B 01	鏃	凝灰岩			16.9	6	3.9	499.1	L 49	3056	122		
54	20	S B 01	台石	片麻岩			14	14.1	4.6	1660	L24	2162	33		
55	21	S B 02	石鏃	チャート	Ⅲ I14		2.25	1.3	0.5	1.2	L39	61			
55	22	S B 02	石鏃	黒曜石	Ⅲ I14		1.5	1.15	0.17	0.2	L38	62			
55	23	S B 02	石鏃	黒曜石	Ⅲ I14		1.3	0.9	0.18	0.12	L146	2739	10		
55	24	S B 02	横刃型石器	硬砂岩	Ⅲ I14		7.5	8.3	1.7	110.7	L165	2758	17		
55	25	S B 02	剥片	ホルンフェルス	Ⅲ I14		5	7.9	2.7	87.1	L202	2795	45		
55	26	S B 02	磨石	硬砂岩	Ⅲ I14		7.85	7.65	2.9	248.6	S29	2893	190		
55	27	S B 02	凹石	花崗岩	Ⅲ I14		10.2	9.5	3.9	588.5	L171	2764	34		
55	28	S B 02	特殊磨石	不明	Ⅲ I14		10.5	5	4.3	230.2	L201	2794	31		
56	29	S B 03	石鏃	下呂石	Ⅲ I14		2.55	1.95	0.5	2.14	L2	2595	5		
56	30	S B 03	石鏃	黒曜石			2	1.3	0.3	0.37	L36	2288	184		
56	31	S B 03	石鏃未成品	チャート	Ⅲ I08		1.8	1.3	0.7	1.07	L1	56			
56	32	S B 03	石鏃	黒曜石			1.5	1	0.3	0.24	L37	2289	186		
56	33	S B 03	石鏃	黒曜石			1.45	1.1	0.3	0.29	L54	2306	183		
56	34	S B 03	石鏃	黒曜石			1.1	1	0.3	0.32	L49	2301	185		
56	35	S B 03	石鏃未成品	黒曜石			1.4	1.3	0.4	0.65	L36	1104	53		
56	36	S B 03	石鏃	黒曜石			1	1.1	0.25	0.18	L48	1116	51		
56	37	S B 03	楔形石鏃	黒曜石			2.2	1.3	1	2.4	L67	2319	36		
56	38	S B 03	楔形石鏃	黒曜石			2.6	2.1	0.7	4.5	L2	2254	216		
56	39	S B 03	削器	下呂石			6.2	3.8	1.5	20.1	L53	2305	47		
56	40	S B 03	楔形石鏃	黒曜石			2	1.2	0.8	1.8	L8	2260	70		
56	41	S B 03	楔形石鏃	黒曜石			2.2	1.7	1	3.49	L66	2318	35		
56	42	S B 03	横刃型石器	硬砂岩			8.4	8.4	4.3	260.5	L56	2308	126		
56	43	S B 03	局部磨製石 斧	粘板岩			7.4	4.45	1.4	59.7	L62	2314	124		
56	44	S B 03	横刃型石器	ホルンフェルス			5.5	3.4	0.8	15.6	L55	2307	182		
56	45	S B 03	刃器	ホルンフェルス			7.1	6.7	2.2	167.4	L57	2309	44		
56	46	S B 03	特殊磨石	花崗岩			7	6.6	4.3	282.5	L73	2325	187		
57	47	S B 03	剥片	ホルンフェルス	Ⅲ I13		11.3	8.7	3.65	352.7	S13	2341	39		
57	48	S B 03	剥片	ホルンフェルス	Ⅲ I13		10	12.7	3.6	427.3	S21	2349	40		
57	49	S B 03	刃器	ホルンフェルス			5.7	7.45	1.5	59.7	L58	2310	125		
58	50	S B 04	石鏃	下呂石			2	1.3	0.5	0.7	L15	66			
58	51	S B 04	石鏃未成品	下呂石			1.75	1.3	0.2	0.37	L19	1650	84		
58	52	S B 04	石鏃	黒曜石	Ⅲ I09		1.6	1.5	0.4	0.52	L57	1688	85	200	
58	53	S B 04	石鏃	黒曜石			1.5	1.2	0.4	0.41	L60	1791	88	203	
58	54	S B 04	石鏃	黒曜石	Ⅲ I09		1.2	1.1	0.3	0.27	L324	1955	91	205	
58	55	S B 04	石鏃未成品	黒曜石	Ⅲ I09		1.25	1.2	0.25	0.33	L123	1754	179	207	
58	56	S B 04	石鏃未成品	黒曜石			1.8	1.3	0.2	0.43	L101	1732	180	208	
58	57	S B 04	石鏃	チャート			2.7	1.5	0.3	1.03	L296	1927	90		
58	58	S B 04	削器	黒曜石			4.4	1.2	1	5.72	L99	1730	86	201	
58	59	S B 04	微細な剥片 がある剥片	黒曜石	Ⅲ I09		4	1.9	0.85	3.28	L258	1889	104	206	
58	60	S B 04	削器	チャート			1.85	3.7	1	6.31	L2	1633	282		
58	61	S B 04	横刃型石器	硬砂岩	Ⅲ I14		7.9	9.4	1.4	112.1	L216	2809	19		
58	62	S B 04	横刃型石器	緑色凝灰岩	Ⅲ I14		13.3	5.9	2.4	225.5	L172	2765	21		

第13表-1 石器観察表

第3章 石子原遺跡

図版	番号	遺構名	器種名	石材	グリッド名	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上げ 番号	整理 番号	管理 番号	黒曜石 分析番号	備考	
58	63	S B 04	横刃型石鏃	硬砂岩	Ⅲ I09		6.65	8.4	2.3	117.9	P364	1554	101			
58	64	S B 04	横刃型石鏃	硬砂岩			6	7.8	1.1	55.4	L156	1787	102			
58	65	S B 04	横刃型石鏃	硬砂岩	Ⅲ I14		5.7	8.9	1.3	79.7	L173	2766	129			
58	66	S B 04	横刃型石鏃	硬砂岩	Ⅲ I09		5.7	4.7	1.5	41.2	S2	1973	191			
59	67	S B 04	横刃型石鏃	硬砂岩			5.2	9.8	1.85	104.6	L319	1950	192			
59	68	S B 04	横刃型石鏃	硬砂岩			5.4	9.8	2.3	91.6	L229	1860	193			
59	69	S B 04	横刃型石鏃	硬砂岩			8.2	10.2	2.1	138.8	L165	1796	197			
59	70	S B 04	鏃鏃	硬砂岩			6.8	11.8	3.3	266.6	L147	1778	123			
59	71	S B 04	横刃型石鏃	硬砂岩	Ⅲ I14		11.2	7.6	1.3	124.6	L178	2771	32			
59	72	S B 04	刃鏃	ホルンフェルス			6	4.9	1.8	54.7	L26	1657	80			
60	73	S B 04	刃鏃	ホルンフェルス			5.3	8.4	4	207.6	L264	1895	42			
60	74	S B 04	削片	ホルンフェルス			7.3	10.9	2.7	182.8	L161	1792	43			
60	75	S B 04	特殊磨石	硬砂岩	Ⅲ I14		17	8.4	4.9	1048.1	L193	2786	27		管理 No.95 と 接合。計測値は 接合状態の値	
60	76	S B 04	特殊磨石	硬砂岩			12	5.5	4.4	361.6	L339	1970	94			
60	77	S B 04	特殊磨石	硬砂岩			5.85	8.65	3.9	240.9	L262	1893	96			
60	78	S B 04	特殊磨石	花崗岩			8.1	7.4	4	372.1	L228	1859	98			
61	79	S B 05	石鏃	黒曜石			1.9	1.75	0.35	0.84	L94	1162	48			
61	80	S B 05	石鏃	黒曜石	Ⅲ I09		2	1.6	0.4	0.7	L5		67			
61	81	S B 05	石鏃	黒曜石			1.6	1.05	0.2	0.18	L43	1111	52			
61	82	S B 05	石鏃	黒曜石			1.3	0.8	0.2	0.15	L62	1130	54			
61	83	S B 05	発端な剥離 がある削片	黒曜石	Ⅲ I09		4.1	1.15	0.9	3.18	L129	1760	103			
61	84	S B 05	発端な剥離 がある削片	黒曜石			3.3	1.95	0.7	3.61	L288	1919	105			
61	85	S B 05	横刃型石鏃	硬砂岩			8.7	9.8	1.9	159.6	L230	1861	18			
61	86	S B 05	横刃型石鏃	硬砂岩			6.8	9.35	1.6	113	L237	1868	16			
61	87	S B 05	横刃型石鏃	硬砂岩			5.75	6	2.5	72.1	L231	1862	194			
61	88	S B 05	横刃型石鏃	硬砂岩			5.75	7.8	1.3	53.3	L143	1774	196			
61	89	S B 05	特殊磨石	安山岩			9.8	8.7	4	590.4	L236	1867	29			
61	90	S B 05	特殊磨石	花崗岩	Ⅲ I09		7.8	6.95	4.4	337	S72	2043	189			
62	91	S B 06	石鏃	黒曜石			1.8	1.25	0.2	0.33	L353		6	232		
62	92	S B 06	石鏃	黒曜石			1.35	1	0.2	0.17	L364		7	233		
62	93	S B 06	石鏃	黒曜石			1.5	1.4	0.3	0.4	L15	635	166	213		
62	94	S B 06	石鏃	黒曜石			1.35	1.1	0.25	0.27	L6	626	167	214		
62	95	S B 06	石鏃	黒曜石			1.2	1.3	0.4	0.45	L41	661	169	215		
62	96	S B 06	石鏃	下呂石			1.7	1.3	0.2	0.33	L112	732	170			
62	97	S B 06	石鏃	黒曜石			1.8	1.5	0.2	0.36	L158	778	171	216		
62	98	S B 06	石鏃	下呂石	Ⅲ I04		2.8	2	0.5	2.38	L10	630	168			
62	99	S B 06	石鏃	黒曜石			1.2	1.05	0.2	0.14	L131	751	172	217		
62	100	S B 06	石鏃未成品	黒曜石			1.2	1.2	0.3	0.33	L208	828	173	218		
62	101	S B 06	石鏃	黒曜石			1.3	1.1	0.3	0.27	L314	934	175	219		
62	102	S B 06	石鏃	黒曜石			1.4	1.1	0.4	0.4	L337	957	176	220		
62	103	S B 06	石鏃	黒曜石			1	1.2	0.2	0.23	L253	873	177	221		
62	104	S B 06	石鏃	石炭岩			1.4	1	0.4	0.6	L230	850	164			
62	105	S B 06	石鏃未成品	黒曜石			1.9	1.55	0.4	0.99	L62	682	178	222		
62	106	S B 06	異形石鏃	下呂石			1.8	2.6	0.3	0.84	L197	817	165			
62	107	S B 06	削鏃	黒曜石			3.8	2.9	1	9.7	L242	862	11	210		
62	108	S B 06	横刃型石鏃	硬砂岩			7.8	9.4	2.2	137.1	L106	726	12			
62	109	S B 06	横刃型石鏃	硬砂岩	Ⅲ D24		8.6	9.2	2.2	165.7	L57	3257	14			
62	110	S B 06	横刃型石鏃	硬砂岩	Ⅲ I04		9.4	6.7	2.2	138.9	L374		130			
62	111	S B 06	刃鏃	ホルンフェルス			8	4.7	2.5	104.8	L 125	745	74			
62	112	S B 06	刃鏃	ホルンフェルス			8.4	6	2.5	136.3	L90	710	46			
62	113	S B 06	刃鏃	ホルンフェルス			4	4.25	1.6	34.2	L108	728	58			
62	114	S B 06	刃鏃	ホルンフェルス			7.3	6.6	3.8	221.4	L12	3212	37			
62	115	S B 06	削片	無淵晶質安山岩			5	7.45	0.2	53.4	L 339	959	93			
62	116	S B 06	刃鏃	ホルンフェルス	Ⅲ I04		6.6	7.6	2.7	146.3	L93	713	38			
62	117	S B 06	刃鏃	ホルンフェルス			7	3.7	2.3	47.6	L 325	945	76			
62	118	S B 06	磨石	硬砂岩			7.6	7.9	2.5	202.5	L24	3224	13			
62	119	S B 06	凹石	花崗岩	Ⅲ D24		11	8.7	3.4	460.4	L7	3207	26			
64	1	S B 08	打製石斧	硬砂岩			13.3	6.4	1.9	167.4	L1		2			
64	2	S B 08	打製石斧	ホルンフェルス			9.4	5.7	1.9	90.9			1			
64	3	S B 08	横刃型石鏃	緑色凝灰岩			6	9	1	61.8	L5		3			
64	4	S B 08	打製石斧	硬砂岩			10.3	3.4	1.9	74.8	L2		4			
64	5	S B 08	石皿	花崗岩			23.2	18.6	10.2	4900	S-6		238			

第13表-2 石器観察表

図版	番号	遺構名	器種名	石材	グリッド名	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上げ 番号	整理 番号	管理 番号	黒曜石 分析番号	備考	
64	6	S B 08	台石	片麻岩			19	19.4	10.6	5400	S-7		239			
65	120	S Q 02	石鏝	下呂石			1.4	1	0.3	0.25	L106		5276	133		
65	121	S Q 02	石鏝	黒曜石			1.4	1	0.3	0.34	L131		5308	134		
65	122	S Q 02	石鏝	チャート			1.4	1.25	0.4	0.67	L67		5216	136		
65	123	S Q 02	石鏝	黒曜石			1.4	1.2	0.4	0.4	L70		5219	137		
65	124	S Q 02	石鏝	下呂石			1.2	1.1	0.2	0.27	L94		5260	138		
65	125	S Q 02	石鏝	黒曜石			0.7	1.05	0.2	0.13	L80		5230	139		
65	126	S Q 02	二次加工がある 剥片	黒曜石			1.4	0.8	0.2	0.2	L89		5243	247		
65	127	S Q 02	楔形石鏝	黒曜石		遺構埋土	1.2	0.9	0.2	0.2	L62		5211	244		
65	128	S Q 02	楔形石鏝	黒曜石			1.3	3	0.7	1.8	L99		5267	250		
65	129	S Q 02	楔形石鏝	黒曜石			2.6	1.5	1	4.16	L66		5215	135		
65	130	S Q 02	石鏝未成品	チャート			2	2.4	0.6	2.8	L68		5217	245		
65	131	S Q 03	石鏝	下呂石			2.2	1.3	0.4	1.27	L102		5466	57		
65	132	S Q 03	楔形石鏝	黒曜石		Ⅱ層	2.3	1.9	0.3	1	L29		243			
65	133	S Q 03	楔形石鏝	黒曜石		Ⅱ層	1.7	1.5	0.2	0.4	L71		246			
65	134	S Q 03	二次加工がある 剥片	黒曜石		かく乱	2.7	1.7	0.9	1.8			254			
65	135	S Q 04	石鏝	黒曜石		遺構埋土	1	0.9	0.25	0.15			140			
65	136	S Q 04	石鏝	下呂石			2.15	1.25	0.25	0.39	L28		5494	55		
65	137	S Q 04	石鏝	黒曜石		かく乱	1.3	1.15	0.3	0.21			141			
65	138	S Q 04	二次加工がある 剥片	水晶		かく乱	2.7	2.5	0.9	6.7			258			
65	139	S Q 04	楔形石鏝	下呂石		遺構埋土	2.7	2.7	0.8	5.4	L8		5474	255		
65	140	S Q 04	剥片	ホルンフェルス		遺構埋土	7.7	3.25	2.3	36.6	L12		5478	100		
65	141	S Q 04	横刃型石器	硬砂岩		かく乱	6.2	7.15	1.8	76.9			132			
65	142	S Q 04	横刃型石器	砂岩		遺構埋土	9.9	4.2	1.1	53.4	L29		5495	106		
65	143	S Q 04	横刃型石器	ホルンフェルス			5.4	5	1.45	31.4	L2		5468	99		
66	144	S K 01	剥片	ホルンフェルス		Ⅱ N05	3.5	6	1.5	22.9			153			
66	145	S K 01	剥片	ホルンフェルス		Ⅱ N05	4.9	3.8	1	15			154			
66	146	S K 01	刃器	ホルンフェルス		Ⅱ N05	3.2	5.2	1.8	22.1			152			
66	147	S K 01	研磨痕がある 剥片	緑色凝灰岩		Ⅱ N05	5.1	3.2	0.8	9.1			287			
66	148	S K 02	二次加工がある 剥片	黒曜石		Ⅱ N05	1.7	2.5	0.5	1.94			156			
66	149	S K 67	石鏝	チャート		Ⅱ H05	4.6	1.8	0.5	5.14			157			
66	150	S K 76	石鏝	下呂石		Ⅱ I01	1.2	1.45	0.3	0.28			158			
66	151	S H 01	石鏝	黒曜石		Ⅱ I09	1.4	1.2	2.5	0.25			212			
66	152	S F 90	石鏝	下呂石		Ⅱ I11	2.1	1.5	0.3	0.6			159			
66	153	S F 94	石鏝	下呂石		Ⅱ H10	1.4	0.95	0.3	0.21			160			
66	154	S F 95	石鏝	黒曜石		Ⅱ H10	1.4	1.1	0.35	0.32			161			
66	155	S F 83	磨盤	黒曜石		Ⅱ I02	3.1	2	0.7	3.4			214			
66	156	S F 04	刃器	ホルンフェルス			6.1	6.2	2.6	79.8			234			
66	157	J16 S F 覆土	刃器	ホルンフェルス		Ⅱ J16	3.9	5.8	1.7	45.5			215			
68	158	遺構外	鉄入削器	玉髓		5区H	3	3.7	1.2	13.35			332			
68	159	遺構外	ナイフ形 石鏝	黒曜石		Ⅲ D23	Ⅱ層	5.7	2.6	1.2	10.9	3391	91	321		
68	160	遺構外	貝殻状刃器	黒曜石			Ⅳ層	2	1.7	0.7	1.2	34712	5537	323		
68	161	遺構外	台形石器	黒曜石			Ⅳ層	3.3	1.9	0.5	2.6	34709	5534	322		
68	162	遺構外	遺物	チャート		Ⅱ I03	Ⅳ層	3.2	3.1	1.2	13.69	34192	192	319		
68	163	遺構外	二次加工がある 剥片	チャート		Ⅱ I13	Ⅳ層					34135	135	324		
68	164	遺構外	剥片	ホルンフェルス		Ⅱ I12	Ⅳ層	5.1	2.7	1.1	16.68	34152	152	305		
68	165	遺構外	磨盤な剥片 がある剥片	下呂石		Ⅱ J17	Ⅳ層	3.7	2.1	1.1	5.13	34124	124	310		
68	166	遺構外	削器	下呂石		Ⅱ I08	Ⅳ層	5.3	3.8	1.2	22.7	34182	182	320		
68	167	遺構外	剥片	ホルンフェルス		Ⅱ J07	Ⅳ層	5.7	2.6	1.8	12.44	34125	125	309		
69	168	遺構外	剥片	ホルンフェルス		Ⅱ I13	Ⅳ層	3.6	6.3	2	42.9	34133	133	304		
69	169	遺構外	剥片	ホルンフェルス		Ⅱ I08	Ⅳ層	6.5	5.5	2.5	60.14	34186	186	306		
69	170	遺構外	剥片	ホルンフェルス		Ⅱ I08	Ⅳ層	8.7	8.1	2.5	150.23	34187	187	307		
69	171	遺構外	剥片	ホルンフェルス		Ⅱ I08	Ⅳ層	6.3	8.1	1.8	70.34	34188	188	308		
70	172	遺構外	石鏝	流紋岩		Ⅱ I14	1.8	1.5	0.4	0.81	L215		2808	9		
70	173	遺構外	石鏝	黒曜石		Ⅱ J14	Ⅱ層	1.2	1	0.25	0.25	3370	70	144		
70	174	遺構外	石鏝	黒曜石		Ⅱ I08	1.5	1	0.28	0.28	L45		1113	49		
70	175	遺構外	石鏝	黒曜石		Ⅱ I08	1.6	1.1	0.25	0.25	L71		1139	50		
70	176	遺構外	石鏝	黒曜石			1.6	1.2	0.2	0.3			3368	63		

第13表-3 石器観察表

第3章 石子原遺跡

図版	番号	遺構名	器種名	石材	グリッド名	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上げ 番号	整理 番号	管理 番号	黒曜石 分析番号	備考
70	177	遺構外	石盤未成品	黒曜石	ⅢI08		1.4	1.2	0.3	0.4	L31		65		
70	178	遺構外	石盤	黒曜石	ⅢI09	Ⅲ層	1.7	0.95	0.3	0.45	33116	116	148		
70	179	遺構外	石盤	下呂石			1.8	1.75	0.25	0.5		3396	59		
70	180	遺構外	石盤	下呂石	ⅢJ12	遺構覆土	2.5	1.5	0.5	0.8	3A197	197	230		
70	181	遺構外	石盤	下呂石	ⅢI03	かく乱	2.8	1.2	0.4	1			300		
70	182	遺構外	石盤	下呂石	ⅢI14		2.6	1.6	0.45	1	L21		60		
70	183	遺構外	石盤	下呂石	ⅢI18	Ⅲ層	2.9	1.35	0.5	1.06	3322	22	143		
70	184	遺構外	石盤未成品	黒曜石	ⅢI18	Ⅲ層	1.5	1.5	0.2	0.52	3318	18	142		
70	185	遺構外	石盤	下呂石		かく乱	1.7	1.3	0.3	0.52			301		
70	186	遺構外	石盤	水晶	ⅢI13	かく乱	1.8	1.15	0.25	0.5			293		
70	187	遺構外	石盤	黒曜石			1.3	1.15	0.25	0.35	33117	117	149		
70	188	遺構外	石盤	凝灰岩			1.3	1.3	0.3	0.38	横		198		
70	189	遺構外	石盤	黒曜石		Ⅲ層	1.05	1.1	0.2	0.24	3387	87	146		
70	190	遺構外	石盤	下呂石	ⅢC16	かく乱	0.9	0.7	0.2	0.09		5018	296		
70	191	S B 01	石匙	黒曜石	ⅢJ06		2.85	3.1	0.8	2.3	L 88	3095	117		
70	192	遺構外	残器	黒曜石	5区1ト		1.8	1.7	0.8	2.1			295		
70	193	遺構外	石盤未成品	黒曜石	ⅢJ11	かく乱	2.5	2.2	0.8	4.4			292		
70	194	遺構外	石匙	下呂石	ⅢI03	かく乱	4.8	1.95	0.73	4.3			297		
70	195	遺構外	削器	珪質凝灰岩	ⅢI14		3.7	2.3	0.5	2.44	L249	2842	128		
70	196	古墳周溝	削器	チャート			5	5.6	1.1	31.7			69		
70	197	遺構外	削器	ホルンフェルス	ⅢH10	かく乱	3.2	5.8	0.9	17			291		
70	198	遺構外	擦鉢	下呂石	ⅢI03	かく乱	5.3	3	1.1	16.8			299		
70	199	S M 05	削器	下呂石		周溝	7.05	7	1.15	42.2			73		
71	200	S M 03	刃器	ホルンフェルス		周溝	10.6	6.8	3.5	293.9			289		
71	201	遺構外	二次加工がある剥片	ホルンフェルス	ⅢJ11	かく乱	6.5	6.4	1.2	53.5			302		
71	202	遺構外	剥片	ホルンフェルス	トフ		7.6	5.3	1.6	62			290		
71	203	遺構外	剥片	ホルンフェルス	ⅢJ17	かく乱	6	8.2	1.8	74.29			303		
71	204	遺構外	剥片	ホルンフェルス	ⅢJ12		3.9	3.6	0.95	11.9			211		
71	205	遺構外	剥片	ホルンフェルス	ⅢJ12		6.2	4.2	1.3	29.2			206		
71	206	遺構外	剥片	ホルンフェルス	ⅢJ12		3.9	3.2	0.7	6.7			210		
72	207	古墳周溝	削器	ホルンフェルス			6.4	8	1.6	82.9			77		
72	208	古墳周溝	二次加工がある剥片	ホルンフェルス			5.15	4.95	1.7	40.9			82		
72	209	S M 04	剥片	ホルンフェルス		周溝	4.35	5.2	1.1	23.4			204		
72	210	S M 04	二次加工がある剥片	ホルンフェルス		周溝	6.6	4.7	1.3	43.7			75		
72	211	S M 04	剥片	ホルンフェルス		かく乱	3.15	4.2	0.9	14.8			83		
72	212	S M 06	剥片	ホルンフェルス		かく乱	4.6	3.1	1.4	25.4			79		
72	213	S M 05	剥片	ホルンフェルス		周溝	6.05	3.8	1.1	22.1			208		
72	214	遺構外	剥片	ホルンフェルス			4.7	4.05	1.6	24.7			203		
72	215	遺構外	刃器	ホルンフェルス			7.3	6	2.8	113.2	横		200		
72	216	遺構外	剥片	ホルンフェルス	ⅢJ10		3.8	4.55	0.95	11.4			205		
73	217	S M 04	局部磨製石斧	緑色凝灰岩		周溝	5.6	5.5	1.6	72.4			288		
73	218	S D 01	礫器	硬砂岩			9.3	9.3	4.1	426.4	No.1		109		
73	219	遺構外	横刃型石器	硬砂岩	ⅢI09～12		8.7	9.75	2.1	171.3			213		
73	220	遺構外	礫器	ホルンフェルス	4区		10.6	13.3	2.5	494.1			108		
73	221	遺構外	磨石	花崗岩	ⅢJ06		7.5	6	2.75	198.2	L 90	3097	119		
73	222	遺構外	横刃型石器	硬砂岩	ⅢI09		5.1	9	1.8	94.4			201		

第13表-4 石器観察表

(7) 黒曜石の産地同定について

石子原遺跡出土の黒曜石 300 点について産地同定をおこなった。同定試料は S B 01・02・04・06 の縄文時代早期居住跡から出土したものを中心に、S Q 02～04 の土器集中箇所のものを含んでいる。

詳細は望月氏の報告によるが、概略を示せば、同定できた 247 点（全試料の 82.3%）のなかに県外産地の黒曜石は 1 点もない。220 点（89.07%）が和田峠以南に位置する諏訪星ヶ台群（SWHD）であり、和田鷹山群（WDTY）や和田土屋橋南群（WDTM）など和田峠以北のものは 27 点（10.93%）にとどまる。

遺構別にみると、S Q 04 は産地同定可能試料 4 点すべてが諏訪星ヶ台群であるのに対して、S Q 03 は同じく 4 点が和田峠以北の和田芙蓉ライト群もしくは鷹山群と一方にかたよりがある。他の遺構はおおむね遺跡全体の傾向を踏襲しており、諏訪星ヶ台群の比率が圧倒的に多い。

また、器種別では原石・石核は同定可能試料 10 点すべてが諏訪星ヶ台群、石鏃も 25 点中 1 点を除き諏訪星ヶ台群であった。

今回は、肉眼での産地同定や石器等の接合による、蛍光 X 線分析結果の検証をおこなっていない。したがって、分析途上のケアラミスステイクによる判定結果の誤謬を含んでいる場合もありうるが、上記の結果に大きく影響を与えることはなからう。また、表面の風化その他の理由によって同定不可能な試料が 53 点含まれていたが、これらが仮に和田峠以北のものであったとしても、諏訪星ヶ台産の優位は動かしがたい。

なお、分析方法および産地推定方法については割愛した。沼津工業高等専門学校物質工学科「黒曜石研究室」の H P [<http://www.busitu.numazu-ct.ac.jp/mochizuki/home.htm>] を参照されたい。

飯田市石子原遺跡出土黒曜石産地同定について

沼津工業高等専門学校 望月明彦

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田 (WO)	ブドウ沢	WOB D	0	0
	牧ヶ沢	WOM S	0	0
	高松沢	WOT M	1	0.4
和田 (WD)	芙蓉ライト	WDHY	6	2.43
	鷹山	WDTY	7	2.83
	小深沢	WDB K	2	0.81
	土屋橋北	WDT K	0	0
	土屋橋西	WDT N	6	2.43
	土屋橋南	WDT M	5	2.02
	古峠	WDHT	0	0
諏訪	星ヶ台	SWHD	220	89.07
	沖山	TSI Y	0	0
	双子山	TSHG	0	0
	猿嶽山	TSS B	0	0
天城	柏崎 1	AGKT	0	0
	庵宿	HNH J	0	0
	鍛冶原	HNK J	0	0
	黒岩橋	HNK I	0	0
	上多賀	HNK T	0	0
	筑ノ海	HNA Y	0	0
神津島	泉原島	KZOB	0	0
	砂嶺崎	KZSN	0	0
高原山	甘淵沢	THAY	0	0
	七尋沢	THNH	0	0
新津	金津	NTKT	0	0
新築田	坂山	SBI Y	0	0
深浦	八森山	HUHM	0	0
木造	出来島	KDDK	0	0
男鹿	金ヶ崎	OGKS	0	0
	橋本	OGWM	0	0
羽黒	月山	HGG S	0	0
	今野川	HGIN	0	0

エリア	判別群	記号	試料数	%
北上川	折居 1 群	KK01	0	0
	折居 2 群	KK02	0	0
	折居 3 群	KK03	0	0
宮崎	湯ノ倉	MZYK	0	0
	秋保 1 群	SDA1	0	0
仙台	秋保 2 群	SDA2	0	0
	樹岸	SMNG	0	0
色麻	塩沼群	SGSG	0	0
	小泊	KDOK	0	0
倉津	草月上野	UIHT	0	0
	高岡	二上山	TOFK	0
佐渡	真光寺	SDSK	0	0
	金井ニッ版	SDKH	0	0
柳岐	久見	OKHM	0	0
	碑地区	OKMT	0	0
	箕浦	OKMU	0	0
白濁	8 号沢	STHG	0	0
	黒曜の沢	STKY	0	0
	赤石山頂	STSC	0	0
赤井川	曲川	AIMK	0	0
	豊浦	豊原	UTUJ	0
十勝	豊戸	QDAZ	0	0
	安住	TKMM	0	0
名寄	三股	TKMM	0	0
	布川	NYHA	0	0
旭川	高砂台	AKTS	0	0
	春光台	AKSK	0	0
不明産地 1	NK	NK	0	0
	GERO	GERO	0	0
下島石			247	99.99
合計			247	99.99
不可など			53	
総計			300	

第 14 表 出土黒曜石産地組成

第3章 石子原道跡

都道府県	地図No.	エリア	新判別群	旧判別群	新記号	旧記号	原石採取地(分析数)		
北海道	1	白滝	八号沢群 黒曜の沢群		STHG STKY		赤石山山頂(19)、八号沢遺蹟(31)、八号沢(79)、 黒曜の沢(6)、櫻加林道(4)		
	2	上士幌	三股群		KSMH		十三ノ沢(16)		
	3	釧路	安住群		ODAZ		安住(25)、清水ノ沢(9)		
	4	旭川	高砂台群 春光台群		AKTS AKSK		高砂台(6)、南砂台(5)、春光台(5)		
	5	名寄	布川群		NYHK		布川(10)		
	6	新十津川	須田群		STSD		須田(6)		
	7	赤井川	曲川群		AMK		曲川(25)、土木川(15)		
	8	豊浦	豊泉群		TUTI		豊泉(16)		
青森	9	木造	出来島群		KDDK		出来島海岸(34)		
	10	深浦	八森山群		HUHM		八森山公園(8)、六角沢(8)、興崎浜(40)		
秋田	11	男鹿	金ヶ崎群 藤本群		OGKS OGWM		金ヶ崎温泉(37)、藤本海岸(98) 藤本海岸(16)		
山形	12	羽黒	月山群 今野川群		HGG5 HGIN		月山荘前(30)、朝日町田代沢(18)、郷引町中沢(18) 今野川(9)、大綱川(5)		
	13	新津	金津群		NTKT		金津(29)		
新潟	14	新発田	板山群		SBY		板山牧場(40)		
栃木	15	高厚山	甘滝沢群 七尋沢群 鷹山群 小深沢群 土屋橋北群 土屋橋西群 土屋橋南群 美鶴ライト群 古峠群	高厚山1群 高厚山2群 和田峠1群 和田峠2群 和田峠3群 和田峠4群 和田峠5群 WDHY WDHT	THAY TKH1 TKH2 WDTY WDT1 WDBK WDT2 WDTK WDT3 WDTN WDT4 WDTM WDT5 WDHY WDHT	TKH1 TKH2	甘滝沢(50)、桜沢(20) 七尋沢(9)、自然の家(9)		
長野	16	和田(WD)	ブドウ沢群 牧ヶ沢群 高松沢群	男女倉1群 男女倉2群 男女倉3群	WOB0 WOMS WOTM	OMG1 OMG2 OMG3	ブドウ沢(36)、ブドウ沢右岸(18)、牧ヶ沢上(33)、 牧ヶ沢下(36)、高松沢(40)		
			17	諏訪	星ヶ台群	星ヶ峰系	SWHD SWHD	KRM	星ヶ塔第1趾区(36)、星ヶ塔第2趾区(36)、星ヶ台A(36)、 星ヶ台B(11)、水月遺蹟(36)、水月公園(13)、 星ヶ塔のりこし(36)
			18	蓼科	冷山群 双子山群 摺鉢山群	蓼科系	TSY TSSB	TTS	冷山(33)、妻岩峠(36)、妻岩峠東(33)、洗ノ瀨(29)、 美し森(4)、八ヶ岳7(17)、八ヶ岳9(18)、双子池(34) 双子池(26)
	19	神奈川	箱根	芦ノ湯群 畑宿群 風巻岩群 鍛冶屋群	芦ノ湯 畑宿 鍛冶屋A群 鍛冶屋	HNAY HNFU HNKI HNKU	ASY HTJ HKNA KJY	芦ノ湯(34) 畑宿(71) 風巻岩(9) 鍛冶屋(30)	
	21			静岡	上多賀群 柏峠群	上多賀 柏峠	HNKT AGT	KMT KSW	上多賀(18) 柏峠(80)
22	東京	神津島	思兼島群 砂腰崎群 久見群	神津島1群 神津島2群	KZOB KZSN	KOZ1 KOZ2	思兼島(100)、長浜(43)、沢尻湾(8) 砂腰崎(40)、長浜(5) 久見ノバーライト中(30)、久見緑道現場(18)		
島根	24	隠岐	箕浦群 岬群		OKMU OKMT		箕浦海岸(30)、加茂(19)、岸沢(35) 岬地区(16)		
			その他	NK群		NK		中ッ原1G、5G(遺跡群)、原石産地は未発見	

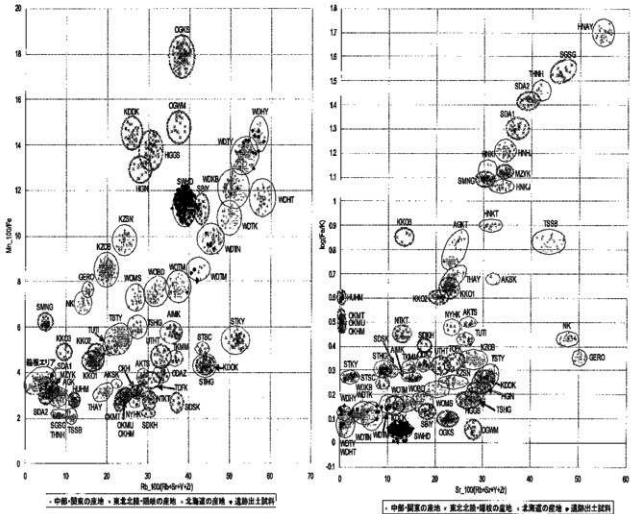
佐々木繁喜氏提供試料(まだ地図には入れていない)

青森	小泊	折戸内群	KDOK	小泊市新瀬内(8)
岩手	北上川	北上折居1群	KX01	水沢市折居(36)、花巻日形田ノ沢(36)、雫石小赤沢(22)
		北上折居2群	KX02	水沢市折居(23)、花巻日形田ノ沢(8)、雫石小赤沢(2)
		北上折居3群	KX03	水沢市折居(5)
宮城	吉岡	瀬ノ倉群	MZYK	宮崎町瀬ノ倉(54)
		色麻	根岸群	SMNG
	仙台	秋保1群	SDA1	仙台市秋保土蔵(17)
		秋保2群	SDA2	仙台市秋保土蔵(35)
	塩竈	塩竈群	SGSG	塩竈市塩竈港(22)

第15表 産地原石判別群(SEIKO SEA-2110L蛍光X線分析装置による)



第74図 黒曜石産地分布



第75図 産地原石判別図

第3章 石子原遺跡

研究室 年簡番番	分析 番号	取上 番号	整理 番号	大地区	出土 遺構	器種	推定産地	備考	判別分析						
									第1候補産地			第2候補産地			
									判別 判別群	判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
MK06-2439	IKO-1	L6	2144	III	110	S801	微細割離剥片	和田土屋橋南群	WDTM	WDTM	12.58	0.98	WOJTM	25.95	0.02
MK06-2440	IKO-2	L14	2152	III	110	S801	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.18	1	WDTN	100.75	0
MK06-2441	IKO-3	L33	2171	III	110	S801	楔形石器	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.02	1	SBIY	59.77	0
MK06-2442	IKO-4	L3	3010	III	J06	S801	微細割離剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.36	1	SBIY	134.09	0
MK06-2443	IKO-5	L7	3014	III	J06	S801	剥片	和田高山群	WDTY	WDTY	9.51	1	WOHY	30.87	0
MK06-2444	IKO-6	L9	3016	III	J06	S801	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.13	1	SBIY	104.15	0
MK06-2445	IKO-7	L11	3018	III	J06	S801	楔形石器	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.53	1	SBIY	55.72	0
MK06-2446	IKO-8	L12	3019	III	J06	S801	微細割離剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2447	IKO-9	L17	3024	III	J06	S801	二次加工剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	19.49	1	SBIY	85	0
MK06-2448	IKO-10	L19	3026	III	J06	S801	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.02	1	SBIY	110.93	0
MK06-2449	IKO-11	L24	3031	III	J06	S801	原石	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2450	IKO-12	L37	3044	III	J06	S801	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.67	1	SBIY	110.99	0
MK06-2451	IKO-13	L42	3049	III	J06	S801	楔形石器	和田土屋橋南群	WDTM	WDTM	7.2	0.97	WOTM	19.56	0.03
MK06-2452	IKO-14	L66	3073	III	J06	S801	剥片	和田土屋橋西群	WDTN	WDTN	5.18	1	WOTM	25.71	0
MK06-2453	IKO-15	L72	3079	III	J06	S801	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	14.34	1	SBIY	77.31	0
MK06-2454	IKO-16	L79	3086	III	J06	S801	剥片	和田土屋橋南群	WDTM	WDTM	3.39	1	WOTM	30.34	0
MK06-2455	IKO-17	L91	3098	III	J06	S801	楔形石器	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2456	IKO-18	P6		III	110	S801	微細割離剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.76	1	SBIY	97.15	0
MK06-2457	IKO-19	P7		III	110	S801	楔形石器	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.08	1	SBIY	123.98	0
MK06-2458	IKO-20	P25		III	J06	S801	楔形石器	和田土屋橋西群	WDTN	WDTN	3.24	1	WDTM	38.5	0
MK06-2459	IKO-21	L8	1639	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.6	1	SBIY	70.3	0
MK06-2460	IKO-22	L12	1643	III	109	S804	剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2461	IKO-23	L18	1649	III	109	S804	楔形石器	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	19.07	1	SBIY	95.41	0
MK06-2462	IKO-24	L20	1651	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.74	1	SBIY	115.72	0
MK06-2463	IKO-25	L31	1662	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.04	1	SBIY	98.6	0
MK06-2464	IKO-26	L32	1663	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.9	1	SBIY	127.64	0
MK06-2465	IKO-27	L35	1666	III	109	S804	微細割離剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.41	1	SBIY	93.23	0
MK06-2466	IKO-28	L38	1669	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	15.66	1	SBIY	109.17	0
MK06-2467	IKO-29	L39	1670	III	109	S804	石核	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.73	1	SBIY	118.2	0
MK06-2468	IKO-30	L40	1671	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.04	1	WDTN	93.55	0
MK06-2469	IKO-31	L41	1672	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	15.12	1	SBIY	130.32	0
MK06-2470	IKO-32	L45	1676	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.88	1	SBIY	119.04	0
MK06-2471	IKO-33	L47	1705	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.17	1	SBIY	91.78	0
MK06-2472	IKO-34	L93	1724	III	109	S804	楔形石器	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.23	1	SBIY	85.45	0
MK06-2473	IKO-35	L94	1725	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.17	1	WDTN	103.35	0
MK06-2474	IKO-36	L95	1726	III	109	S804	石核	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.86	1	WDTN	95.41	0
MK06-2475	IKO-37	L96	1727	III	109	S804	楔形石器	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.56	1	SBIY	109.35	0
MK06-2476	IKO-38	L97	1728	III	109	S804	石核	風化	風化	風化			風化		
MK06-2477	IKO-39	L102	1733	III	109	S804	剥片	和田美吾ライト群	WOHY	WOHY	1.91	1	WDTY	31	0
MK06-2478	IKO-40	L104	1735	III	109	S804	楔形石器	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.83	1	SBIY	106.41	0
MK06-2479	IKO-41	L49	1680	III	109	S804	剥片	和田高山群	WDTY	WDTY	4.47	0.99	WOHY	11.02	0.01
MK06-2480	IKO-42	L50	1681	III	109	S804	剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2481	IKO-43	L51	1682	III	109	S804	微細割離剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.44	1	SBIY	102.06	0
MK06-2482	IKO-44	L66	1697	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.92	1	SBIY	94.42	0
MK06-2483	IKO-45	L70	1701	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	12.43	1	SBIY	136.64	0
MK06-2484	IKO-46	L167	1798	III	109	S804	剥片	和田小深沢群	WDKB	WDKB	3.29	1	WDTK	28.19	0
MK06-2485	IKO-47	L169	1800	III	109	S804	剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2486	IKO-48	L172	1803	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.95	1	SBIY	58.55	0
MK06-2487	IKO-49	L176	1807	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.66	1	SBIY	75.54	0
MK06-2488	IKO-50	L179	1810	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.9	1	SBIY	79.96	0
MK06-2489	IKO-51	L108	1739	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	18.91	1	SBIY	88.59	0
MK06-2490	IKO-52	L109	1740	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.48	1	SBIY	107.07	0
MK06-2491	IKO-53	L110	1741	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.29	1	SBIY	122.25	0
MK06-2492	IKO-54	L116	1747	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.71	1	SBIY	77.8	0
MK06-2493	IKO-55	L150	1781	III	109	S804	剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2494	IKO-56	L159	1790	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.69	1	SBIY	122.16	0
MK06-2495	IKO-57	L162	1793	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.45	1	SBIY	88.58	0
MK06-2496	IKO-58	L163	1794	III	109	S804	剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2497	IKO-59	L214	1845	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.25	1	SBIY	96.44	0
MK06-2498	IKO-60	L221	1852	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.9	1	SBIY	73.61	0
MK06-2499	IKO-61	L184	1815	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.4	1	SBIY	120.59	0
MK06-2500	IKO-62	L188	1819	III	109	S804	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2501	IKO-63	L195	1826	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.9	1	WDTN	77.21	0
MK06-2502	IKO-64	L202	1833	III	109	S804	剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2503	IKO-65	L207	1838	III	109	S804	剥片	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	17.48	1	SBIY	102.97	0

第16表-1 出土黒曜石産地推定結果

研究室 年譜番号	分析 番号	取上 番号	整理 番号	大地区	出土 遺構	器種	推定産地	備考	判別分析						
									判別分析			判別分析			
									判別群	距離	確率	判別群	距離	確率	
MK06-2504	IKO-66	L210	1841	III	IO9	S804	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.94	1	SBFY	83.36	0
MK06-2505	IKO-67	L263	1894	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	7.28	1	SBFY	100.14	0
MK06-2506	IKO-68	L270	1901	III	IO9	S804	原石	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	9.23	1	SBFY	120.08	0
MK06-2507	IKO-69	L281	1912	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	18.69	1	SBFY	152.98	0
MK06-2508	IKO-70	L284	1915	III	IO9	S804	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	10.62	1	SBFY	142.38	0
MK06-2509	IKO-71	P62	1252	III	IO9	S804	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2510	IKO-72	P69	1259	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	13.81	1	SBFY	94.8	0
MK06-2511	IKO-73	L225	1856	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.06	1	SBFY	108.65	0
MK06-2512	IKO-74	L251	1882	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.96	1	SBFY	92.55	0
MK06-2513	IKO-75	L254	1885	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.53	1	WDTN	111.15	0
MK06-2514	IKO-76	L257	1888	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	16.58	1	SBFY	110.23	0
MK06-2515	IKO-77	L323	1954	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.08	1	SBFY	104.45	0
MK06-2516	IKO-78	L328	1959	III	IO9	S804	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2517	IKO-79	L333	1964	III	IO9	S804	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	6.36	1	SBFY	81.11	0
MK06-2518	IKO-80	L334	1965	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	8.82	1	SBFY	83.24	0
MK06-2519	IKO-81	L295	1926	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.59	1	WDTN	87.65	0
MK06-2520	IKO-82	L300	1931	III	IO9	S804	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	15.99	1	SBFY	64.77	0
MK06-2521	IKO-83	L308	1939	III	IO9	S804	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	1.11	1	SBFY	90.09	0
MK06-2522	IKO-84	L325	1956	III	IO9	S804	剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2523	IKO-85	L129	2722	III	II4	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.91	1	WDTN	102.91	0
MK06-2524	IKO-86	L163	2756	III	II4	S804	原石	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2525	IKO-87	L167	2760	III	II4	S804	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2526	IKO-88	L170	2763	III	II4	S804	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2527	IKO-89	L190	2783	III	II4	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	9.3	1	SBFY	61.53	0
MK06-2528	IKO-90	L191	2784	III	II4	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	8.04	1	SBFY	105.73	0
MK06-2529	IKO-91	L1	1632	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	19.62	1	SBFY	87	0
MK06-2530	IKO-92	L154	1785	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.92	1	SBFY	116.37	0
MK06-2531	IKO-93	L27	2620	III	II4	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	3.33	1	SBFY	75.38	0
MK06-2532	IKO-94	L30	2623	III	II4	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	9.81	1	SBFY	129.49	0
MK06-2533	IKO-95	L60	2653	III	II4	S804	剥片	和田土屋橋南群	WDTM	WDTM	6	1	WOTM	26.72	0
MK06-2534	IKO-96	L61	2654	III	II4	S804	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2535	IKO-97	L85	2678	III	II4	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.8	1	SBFY	99.09	0
MK06-2536	IKO-98	L86	2679	III	II4	S804	石核	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	3.55	1	SBFY	119.1	0
MK06-2537	IKO-99	L123	2716	III	II4	S804	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2538	IKO-100	L124	2717	III	II4	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	0.27	1	SBFY	86.43	0
MK06-2539	IKO-101	L60	1691	III	IO9	S804	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2540	IKO-102	L77	1708	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	1.81	1	SBFY	75.82	0
MK06-2541	IKO-103	L80	1711	III	IO9	S804	石核	風化	風化	風化			風化		
MK06-2542	IKO-104	L81	1712	III	IO9	S804	原石	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	3.01	1	SBFY	92.16	0
MK06-2543	IKO-105	L82	1713	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	6.68	1	SBFY	100.65	0
MK06-2544	IKO-106	L145	1776	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	15.06	1	SBFY	136.1	0
MK06-2545	IKO-107	L243	1874	III	IO9	S804	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	0.56	1	SBFY	94.78	0
MK06-2546	IKO-108	L244	1875	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.61	1	SBFY	71.14	0
MK06-2547	IKO-109	L245	1876	III	IO9	S804	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	9.65	1	SBFY	111.17	0
MK06-2548	IKO-110	L267	1898	III	IO9	S804	楕形石器	風化	風化	風化			風化		
MK06-2549	IKO-111	L211	831	III	IO4	S806	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	10.31	1	SBFY	81.51	0
MK06-2550	IKO-112	L232	852	III	IO4	S806	楕形石器	風化	風化	風化			風化		
MK06-2551	IKO-113	L244	864	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	11.81	1	SBFY	113.4	0
MK06-2552	IKO-114	L245	865	III	IO4	S806	剥片	和田土屋橋西群	WDTN	WDTN	4.09	1	WDTM	27.53	0
MK06-2553	IKO-115	L248	868	III	IO4	S806	剥片	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2554	IKO-116	L256	876	III	IO4	S806	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2555	IKO-117	L258	878	III	IO4	S806	楕形石器	和田土屋橋南群	WDTM	WDTM	9.87	1	WOTM	36.91	0
MK06-2556	IKO-118	L259	879	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.64	1	SBFY	98.43	0
MK06-2557	IKO-119	L260	880	III	IO4	S806	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	3.84	1	SBFY	83.64	0
MK06-2558	IKO-120	L263	883	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	1.91	1	SBFY	91.46	0
MK06-2559	IKO-121	L264	884	III	IO4	S806	剥片	風化	風化	風化			風化		
MK06-2560	IKO-122	L269	889	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	0.6	1	SBFY	91.06	0
MK06-2561	IKO-123	L272	892	III	IO4	S806	剥片	和田土屋橋西群	WDTN	WDTN	2.82	1	WOTM	29.87	0
MK06-2562	IKO-124	L296	916	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	7.07	1	WDTN	120.95	0
MK06-2563	IKO-125	L298	918	III	IO4	S806	楕形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.48	1	SBFY	74.46	0
MK06-2564	IKO-126	L19	639	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	24.07	1	SBFY	133.72	0
MK06-2565	IKO-127	L20	640	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	10.94	1	SBFY	106.87	0
MK06-2566	IKO-128	L283	903	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	8.86	1	SBFY	54.53	0
MK06-2567	IKO-129	L285	905	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	7.62	1	SBFY	92.25	0
MK06-2568	IKO-130	L301	921	III	IO4	S806	剥片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	8.17	1	SBFY	102.25	0

第16表-2 出土黒曜石産地推定結果

第3章 石子原遺跡

研究室 年次通達	分析 番号	取上 番号	整理 番号	大地区	出土 遺構	器種	推定産地	備考	判別分析									
									第1候補産地		第2候補産地		判別群		距離		確率	
									判別群	距離	確率	判別群	距離	確率	判別群	距離	確率	
MK06-2569	IKO-131	L302	922	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	15.05	1	SBIY	80.64	0				
MK06-2570	IKO-132	L305	925	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	11.37	1	SBIY	78.35	0				
MK06-2571	IKO-133	P30	235	III 04	S806	石核	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	6.39	1	SBIY	90.4	0				
MK06-2572	IKO-134	L332	952	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	9.83	1	WDTN	70.72	0				
MK06-2573	IKO-135	L335	955	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	7.64	1	WDTN	70.8	0				
MK06-2574	IKO-136	L13	633	III 04	S806	石核	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.23	1	SBIY	118.71	0				
MK06-2575	IKO-137	L14	634	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.57	1	SBIY	97.77	0				
MK06-2576	IKO-138	L29	649	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	3.15	1	SBIY	87.6	0				
MK06-2577	IKO-139	L32	652	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.11	1	SBIY	112.25	0				
MK06-2578	IKO-140	L37	657	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	9.22	1	SBIY	41.9	0				
MK06-2579	IKO-141	L38	658	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.19	1	SBIY	77.93	0				
MK06-2580	IKO-142	L40	660	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.7	1	SBIY	97.23	0				
MK06-2581	IKO-143	L56	676	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	13.44	1	SBIY	114.67	0				
MK06-2582	IKO-144	L59	679	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.9	1	SBIY	85.43	0				
MK06-2583	IKO-145	L60	680	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	6.75	1	SBIY	74.58	0				
MK06-2584	IKO-146	L44	664	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.82	1	SBIY	85.63	0				
MK06-2585	IKO-147	L53	673	III 04	S806	割片	和田英吾ライト群	WDHY	WDHY	2.04	1	WDTY	31.39	0				
MK06-2586	IKO-148	L68	688	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	7.74	1	WDTN	87.04	0				
MK06-2587	IKO-149	L69	689	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.18	1	SBIY	114.64	0				
MK06-2588	IKO-150	L71	691	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	3.63	1	SBIY	75.89	0				
MK06-2589	IKO-151	L74	694	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	6.68	1	SBIY	96.46	0				
MK06-2590	IKO-152	L75	695	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	12.75	1	SBIY	94.65	0				
MK06-2591	IKO-153	L76	696	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	7.55	1	SBIY	85.56	0				
MK06-2592	IKO-154	L78	698	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.46	1	SBIY	64.48	0				
MK06-2593	IKO-155	L79	699	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.26	1	SBIY	82.29	0				
MK06-2594	IKO-156	L63	683	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.83	1	SBIY	95.03	0				
MK06-2595	IKO-157	L66	686	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.1	1	WDTN	87.96	0				
MK06-2596	IKO-158	L81	701	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.24	1	SBIY	64.11	0				
MK06-2597	IKO-159	L88	708	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	23.67	1	SBIY	98.48	0				
MK06-2598	IKO-160	L95	715	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	0.95	1	SBIY	86.75	0				
MK06-2599	IKO-161	L96	716	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.23	1	WDTN	102.03	0				
MK06-2600	IKO-162	L100	720	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	17.02	1	WDTN	146.21	0				
MK06-2601	IKO-163	L116	736	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	14.53	1	SBIY	109.82	0				
MK06-2602	IKO-164	L139	759	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	8.31	1	SBIY	105.92	0				
MK06-2603	IKO-165	L153	773	III 04	S806	割片	和田山山脈	WDTY	WDTY	10	0.98	WDHY	14.97	0.02				
MK06-2604	IKO-166	L163	783	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	19.01	1	SBIY	77.64	0				
MK06-2605	IKO-167	L164	784	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2	1	SBIY	112.73	0				
MK06-2606	IKO-168	L165	785	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	8.31	1	SBIY	83.18	0				
MK06-2607	IKO-169	L166	786	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	16.42	1	SBIY	119.46	0				
MK06-2608	IKO-170	L174	794	III 04	S806	割片	風化	風化	風化	風化	風化	風化	風化	風化	0			
MK06-2609	IKO-171	L179	799	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.41	1	SBIY	103.6	0				
MK06-2610	IKO-172	L185	805	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.29	1	SBIY	116.67	0				
MK06-2611	IKO-173	L191	811	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	16.55	1	SBIY	157.22	0				
MK06-2612	IKO-174	L195	815	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	6.39	1	SBIY	82.56	0				
MK06-2613	IKO-175	L9	3209	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	10.84	1	SBIY	117.83	0				
MK06-2614	IKO-176	L26	3226	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	8.73	1	SBIY	83.08	0				
MK06-2615	IKO-177	L31	3231	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	11.78	1	SBIY	99.32	0				
MK06-2616	IKO-178	L33	3233	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.2	1	SBIY	99.1	0				
MK06-2617	IKO-179	L36	3236	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.33	1	SBIY	71.07	0				
MK06-2618	IKO-180	L38	3238	III 04	S806	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	16.64	1	SBIY	81.7	0				
MK06-2619	IKO-181	L42	3242	III 04	S806	楔形石器	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	0				
MK06-2620	IKO-182	L49	3249	III 04	S806	楔形石器	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	0				
MK06-2621	IKO-183	L53	3253	III 04	S806	石核	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.43	1	SBIY	98.21	0				
MK06-2622	IKO-184	L54	3254	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	4.13	1	SBIY	78.79	0				
MK06-2623	IKO-185	L55	3255	III 04	S806	割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	10.68	1	SBIY	82.84	0				
MK06-2624	IKO-186	L25	3032	III 06	S801	種細鉋刺片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	10.82	1	WDTN	107.93	0				
MK06-2625	IKO-187	L34	3041	III 06	S801	石籠	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.26	1	SBIY	114.14	0				
MK06-2626	IKO-188	L39	3046	III 06	S801	種細鉋刺片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	2.08	1	SBIY	74.76	0				
MK06-2627	IKO-189	L23	3030	III 06	S801	石籠(欠嵐)	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	0				
MK06-2628	IKO-190	L29	3036	III 06	S801	石籠未成品	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	7.62	1	SBIY	95.69	0				
MK06-2629	IKO-191	L43	3050	III 06	S801	割片	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	0				
MK06-2630	IKO-192	L2	3009	III 06	S801	楔形石器	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.91	1	SBIY	98.9	0				
MK06-2631	IKO-193	L86	3093	III 06	S801	石籠	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	0				
MK06-2632	IKO-194	L54	3061	III 06	S801	二次加工割片	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	10.12	1	SBIY	84.72	0				
MK06-2633	IKO-195	L23	3030	III 06	S801	石籠未成品	諏訪屋ヶ台群	SWHD	SWHD	5.18	1	SBIY	68.83	0				

第16表-3 出土黒曜石産地推定結果

研究室 年間通番	分析 番号	取上 番号	整理 番号	大地区	出土 遺構	器種	推定産地	備考	判別分析						
									第1候補産地			第2候補産地			
									判別群	距離	確率	判別群	距離	確率	
MK06-2634	IKO-196	L52	3059	Ⅲ J06	S801	削器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	7.09	1	SBIY	111.77	0
MK06-2635	IKO-197	L32	3039	Ⅲ J06	S801	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	2.66	1	SBIY	98.46	0
MK06-2636	IKO-198	L21	3028	Ⅲ J06	S801	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	7.46	1	WDTN	92.14	0
MK06-2637	IKO-199	L13	2151	Ⅲ J06	S801	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	4.42	1	SBIY	93.49	0
MK06-2638	IKO-200	L57	1688	Ⅲ J09	S804	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	7.63	1	SBIY	91.19	0
MK06-2639	IKO-201	L99	1730	Ⅲ J09	S804	削器	和田山深沢部		WDKB	WDKB	2.32	1	WDTK	19.1	0
MK06-2640	IKO-202	L114	1745	Ⅲ J09	S804	石鏃	推定不可		推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2641	IKO-203	L160	1791	Ⅲ J09	S804	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	12.73	1	SBIY	128.04	0
MK06-2642	IKO-204	L217	1848	Ⅲ J09	S804	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	7.22	1	SBIY	109.58	0
MK06-2643	IKO-205	L324	1955	Ⅲ J09	S804	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	5.32	1	WDTN	110.61	0
MK06-2644	IKO-206	L258	1889	Ⅲ J09	S804	微細剥離削片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	4.08	1	SBIY	118.17	0
MK06-2645	IKO-207	L123	1754	Ⅲ J09	S804	石鏃未成品	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	4.49	1	SBIY	95.09	0
MK06-2646	IKO-208	L101	1732	Ⅲ J09	S804	石鏃未成品	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	7.95	1	SBIY	101.77	0
MK06-2647	IKO-209	L299	1930	Ⅲ J09	S804	石鏃未成品	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	7.38	1	SBIY	74.46	0
MK06-2648	IKO-210	L242	862	Ⅲ J04	S806	削器	推定不可		推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2649	IKO-211	L278	898	Ⅲ J04	S806	石鏃未成品	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	13.57	1	SBIY	112.39	0
MK06-2650	IKO-212	L73	693	Ⅲ J04	S806	石鏃未成品	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	5.61	1	WDTN	94.79	0
MK06-2651	IKO-213	L15	635	Ⅲ J04	S806	石鏃	和田廣山峠		WDTY	WDTY	10.32	0.97	WDHY	14.96	0.03
MK06-2652	IKO-214	L6	626	Ⅲ J04	S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.84	1	WDTN	86.32	0
MK06-2653	IKO-215	L41	661	Ⅲ J04	S806	石鏃	推定不可		推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2654	IKO-216	L158	778	Ⅲ J04	S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	13.82	1	WDTN	103.49	0
MK06-2655	IKO-217	L131	751	Ⅲ J04	S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.02	1	SBIY	70.8	0
MK06-2656	IKO-218	L208	828	Ⅲ J04	S806	石鏃未成品	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	13.52	1	SBIY	86.67	0
MK06-2657	IKO-219	L314	934	Ⅲ J04	S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	7.37	1	SBIY	130.03	0
MK06-2658	IKO-220	L337	957	Ⅲ J04	S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	14.47	1	SBIY	144.65	0
MK06-2659	IKO-221	L253	873	Ⅲ J04	S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	18.92	1	SBIY	113.17	0
MK06-2660	IKO-222	L62	682	Ⅲ J04	S806	石鏃未成品	風化		風化	風化			風化		
MK06-2661	IKO-223	L297	917	Ⅲ J04	S806	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	13.55	1	WDTN	83.4	0
MK06-2662	IKO-224	L43	663	Ⅲ J04	S806	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.9	1	SBIY	108.95	0
MK06-2663	IKO-225	L304	924	Ⅲ J04	S806	石鏃未成品	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	7.56	1	SBIY	92.7	0
MK06-2664	IKO-226	L279	899	Ⅲ J04	S806	未成品	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	9.92	1	SBIY	102.89	0
MK06-2665	IKO-227	L21	641	Ⅲ J04	S806	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	16.91	1	SBIY	122.46	0
MK06-2666	IKO-228	L30	650	Ⅲ J04	S806	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.11	1	SBIY	86.51	0
MK06-2667	IKO-229	L237	857	Ⅲ J04	S806	和田山層様西群		WDTN	WDTN	3.5	1	WDTM	26.33	0	
MK06-2668	IKO-230	L14	3214	Ⅲ D24	S806	石鏃	風化		風化	風化			風化		
MK06-2669	IKO-231	L29	3229	Ⅲ D24	S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	11.41	1	SBIY	124.5	0
MK06-2670	IKO-232	L353			S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	4.53	1	WDTN	90.18	0
MK06-2671	IKO-233	L364			S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	21.04	1	SBIY	150.25	0
MK06-2672	IKO-234	L361		Ⅲ J04	S806	石鏃	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	5.5	1	WDTN	125.03	0
MK06-2673	IKO-235	L75	5223	4区	SQ02	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	4.06	1	SBIY	98.84	0
MK06-2674	IKO-236	L86	5238	4区	SQ02	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.58	1	SBIY	123.2	0
MK06-2675	IKO-237	L109	5280	4区	SQ02	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.86	1	SBIY	78.27	0
MK06-2676	IKO-238	L38	5397	4区	SQ03	微細剥離削片	和田廣山峠		WDTY	WDTY	3.91	1	WDHY	26.84	0
MK06-2677	IKO-239	L40	5399	4区	SQ03	剥片	和田美蓉ライト群		*WDTY	WDHY	7.96	0.96	WDTY	16.89	0.04
MK06-2678	IKO-240	L42	5401	4区	SQ03	剥片	和田美蓉ライト群	ガジリあり	WDHY	WDHY	4.54	1	WDTY	27.1	0
MK06-2679	IKO-241	L45	5404	4区	SQ03	剥片	推定不可		推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2680	IKO-242			4区付72	SQ03	剥片	和田美蓉ライト群		WDHY	WDHY	0.49	1	WDTY	23.14	0
MK06-2681	IKO-243			SQ04	SQ04	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.91	1	WDTN	74.1	0
MK06-2682	IKO-244			SQ04	SQ04	楔形石器	推定不可		推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2683	IKO-245	L57	5524	4区覆土	SQ04	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.64	1	SBIY	101.2	0
MK06-2684	IKO-246	L56	5523	4区覆土	SQ04	微細剥離削片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	9.09	1	SBIY	103.87	0
MK06-2685	IKO-247	L53	5520	4区覆土	SQ04	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	3.17	1	SBIY	98.92	0
MK06-2686	IKO-248	L96	5460	4区3層	SQ03	石鏃	推定不可		推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2687	IKO-249	L47	5514	4区覆土	SQ04	2次加工剥片	推定不可		推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2688	IKO-250	L149	5326	4区	SQ02	楔形石器	和田高松沢部		WOTM	WOTM	8.28	1	WDTM	31.44	0
MK06-2689	IKO-251				S801	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	13.9	1	WDTN	111.72	0
MK06-2690	IKO-252	L5	3205	Ⅲ D24	S806	挟入削器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	5.57	1	SBIY	56.45	0
MK06-2691	IKO-253	L140	1771	Ⅲ J09	S804	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	6.15	1	WDTN	87.34	0
MK06-2692	IKO-254	L76	1707	Ⅲ J09	S804	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	11.4	1	WDTN	82.51	0
MK06-2693	IKO-255	L73	2666	Ⅲ J14	S802	楔形石器	推定不可		推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2694	IKO-256	L4	2597	Ⅲ J14	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	17.3	1	SBIY	91.4	0

第16表-4 出土黒曜石産地推定結果

第3章 石子原遺跡

研究室 年功通番	分析 番号	取上 番号	整理 番号	大地区	出土 遺構	器種	推定産地	備考	判別分析						
									判別群		第1候補産地		第2候補産地		
									判別群	距離	確率	判別群	距離	確率	
MK06-2695	IKO-257	L5	2598	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	6.55	1	SBIY	101.93	0
MK06-2696	IKO-258	L6	2599	Ⅲ 114	S802	剥片	和田箕首ライト群		WDHY	WDHY	4.84	1	WDTY	28.39	0
MK06-2697	IKO-259	L9	2602	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	12.27	1	SBIY	78.99	0
MK06-2698	IKO-260	L10	2603	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	11.33	1	SBIY	95.15	0
MK06-2699	IKO-261	L12	2605	Ⅲ 114	S802	剥片	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2700	IKO-262	L15	2608	Ⅲ 114	S802	剥片	和田土原橋西群		WDTN	WDTN	8.56	1	WDTK	48.93	0
MK06-2701	IKO-263	L16	2609	Ⅲ 114	S802	剥片	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2702	IKO-264	L20	2613	Ⅲ 114	S802	原石	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2703	IKO-265	L29	2622	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	12.65	1	WDTN	113.51	0
MK06-2704	IKO-266	L42	2635	Ⅲ 114	S802	剥片	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2705	IKO-267	L47	2640	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	10.08	1	SBIY	129.16	0
MK06-2706	IKO-268	L48	2641	Ⅲ 114	S802	剥片	和田嵐山群		WDTY	WDTY	7.8	1	WDHY	16.37	0
MK06-2707	IKO-269	L55	2648	Ⅲ 114	S802	剥片	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2708	IKO-270	L57	2650	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	4.99	1	WDTN	76.86	0
MK06-2709	IKO-271	L63	2656	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.83	1	SBIY	66.08	0
MK06-2710	IKO-272	L66	2659	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	16.96	1	SBIY	106.78	0
MK06-2711	IKO-273	L67	2660	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	9.96	1	SBIY	98.01	0
MK06-2712	IKO-274	L69	2662	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	11.09	1	SBIY	59.14	0
MK06-2713	IKO-275	L70	2663	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	2.23	1	SBIY	87.28	0
MK06-2714	IKO-276	L72	2665	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	6.66	1	SBIY	93.88	0
MK06-2715	IKO-277	L74	2667	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	12.55	1	SBIY	91	0
MK06-2716	IKO-278	L75	2668	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	4.85	1	SBIY	96.17	0
MK06-2717	IKO-279	L76	2669	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	12.82	1	SBIY	123.17	0
MK06-2718	IKO-280	L78	2671	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	12.37	1	WDTN	121.92	0
MK06-2719	IKO-281	L79	2672	Ⅲ 114	S802	原石	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	6.82	1	SBIY	77.01	0
MK06-2720	IKO-282	L96	2689	Ⅲ 114	S802	石楨	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2721	IKO-283	L97	2690	Ⅲ 114	S802	剥片	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2722	IKO-284	L106	2699	Ⅲ 114	S802	剥片	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2723	IKO-285	L107	2700	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	6.76	1	SBIY	108.24	0
MK06-2724	IKO-286	L127	2720	Ⅲ 114	S802	舞臺剝片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	11.44	1	SBIY	64.51	0
MK06-2725	IKO-287	L135	2728	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	8.69	1	SBIY	66.52	0
MK06-2726	IKO-288	L143	2736	Ⅲ 114	S802	楔形石器	和田嵐山群		WDTY	WDTY	11.5	1	WDHY	20.53	0
MK06-2727	IKO-289	L152	2745	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	13.45	1	SBIY	75.07	0
MK06-2728	IKO-290	L161	2754	Ⅲ 114	S802	剥片	風化		風化	風化			風化		
MK06-2729	IKO-291	L164	2757	Ⅲ 114	S802	楔形石器	風化		風化	風化			風化		
MK06-2730	IKO-292	L182	2775	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	5.68	1	SBIY	107.58	0
MK06-2731	IKO-293	L183	2776	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	2.87	1	SBIY	107.62	0
MK06-2732	IKO-294	L188	2781	Ⅲ 114	S802	石楨	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	3.7	1	WDTN	113.02	0
MK06-2733	IKO-295	L189	2782	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	16.26	1	SBIY	107.35	0
MK06-2734	IKO-296	L118	2711	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	12.68	1	WDTN	147.89	0
MK06-2735	IKO-297	L200	2793	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	6.21	1	SBIY	82.57	0
MK06-2736	IKO-298	L203	2796	Ⅲ 114	S802	剥片	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可			推定不可		
MK06-2737	IKO-299	L208	2801	Ⅲ 114	S802	楔形石器	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	11.25	1	SBIY	108.42	0
MK06-2738	IKO-300	L213	2806	Ⅲ 114	S802	剥片	諏訪星ヶ台群		SWHD	SWHD	9.56	1	SBIY	88.43	0

- 【凡例】 左表： 1 「研究年功通番」および「分析番号」は沼津高専望月研究室が付した
 2 「取上番号」および「整理番号」は埋文センターが付した
 右表： 1 「判別群判別群」は判別方法によって推定された産地。判別分析と結果が異なるときは「*」をつけて示す
 2 「判別分析」は推定された産地の第1候補と第2候補を示した
 3 「判別群」は候補産地の記号を示す。判別方法による産地と遺構は一致する。
 4 「距離」は基點から候補産地までのマハラノビス距離を示す。値が小さいほど候補産地と類似性が高い。
 5 「確率」は試料が候補産地に属する確率を示す。1に近いほど類似性が高い。

第16表-5 出土黒曜石産地推定結果

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

SB 07 (第10・76・82図、P.L 6)

位置：ⅢB 04に位置し、わずかにⅢB 03およびⅢB 09にかかる。検出：Ⅳ層直上で検出。南西方向に緩やかに傾斜するため、南西側では壁がほとんど残存しない状況であった。構造：主軸をN-30°-Eにとる。規模は、400×345cmの南北方向に長い長方形のプランである。柱穴またはピットは、P 2・4・6・11が主柱穴と考えることができるが、やや不整形な配置となる。壁際によるP 1・3・5・6も建て替えによるものと考えられる。炉は明確でないが、住居中央やや南西側に焼土群がある。いずれかが炉となるものと考えられる。脇に添石(S 4)がある焼土箇所は、炉になる可能石が最も高い。床面は平坦で、明確な貼り床はない。埋没：単層で自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：ほとんど遺物は出土していない。鉄製品が南西隅付近の壁際から、モモの核が北壁中央の壁際から出土している。本址に帰属するのは土師器製の小破片のみである(第82図1)。そのほか押型文土器が1点と石器が出土している。時期：遺物が少なく時期決定が困難であるが、住居形態やわずかな遺物から古墳時代前期と考えられる。

2 方形周溝墓

昭和47年の調査で3基の方形周溝墓が確認され、それぞれ1号方形周溝墓から3号方形周溝墓まで番号が付けられている。今回の調査では、3号方形周溝墓の残りの部分が検出されたのでSM 03とし、重複がないように遺構番号を付した。

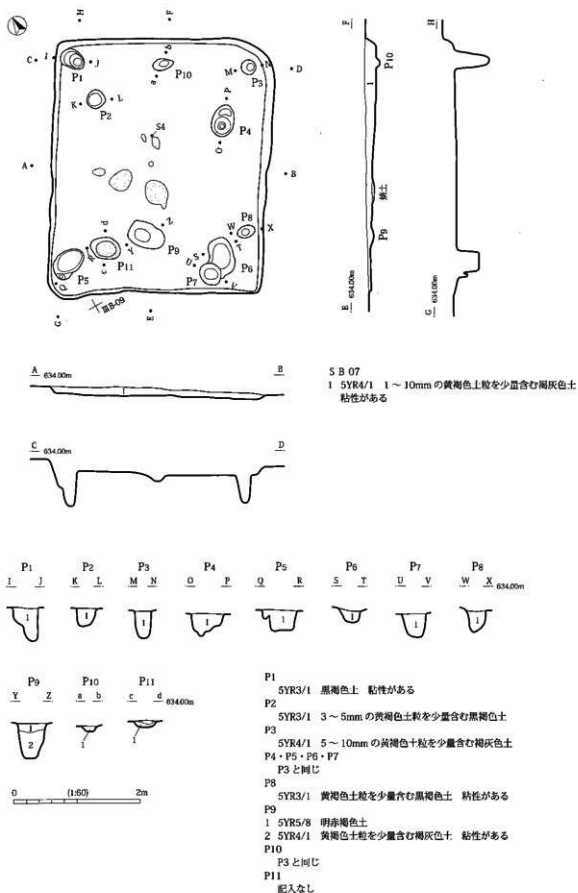
SM 03 (第15・77図、P.L 7)

位置：ⅢO 01～03、ⅢO 06～08、ⅢO 11～13に位置する。検出：調査区の南東部で検出。SM 04との関係はかく乱によってつかめなかった。接するか、あるいは溝を一部共有するようにつくられたと考えた。形状・規模：南北13.6m、東西方向は今回の調査で約8mを調査した。復原推定長は16mほどになる。方形を呈し、東側中央に陸橋部をもち、そのほかは全周するタイプである。主軸はN-72°-Wで、他の方形周溝墓と方向が一致する。主体部：昭和47年の調査で2基確認されている。墓坑1は280×160×42cm、墓坑2は、その北にあって、260×160×22cmで、木炭や木棺を示すような記述はなく、素掘りと考えられる。埋没：黄褐色土粒を含むにぶい褐色土、黒褐色土、赤褐色土の3層からなる。いずれも自然埋没の様相を呈す。遺物の出土状況：縄文押型文土器・石器が主体を占め、方形周溝墓に帰属すると考えられる遺物は皆無である。時期：弥生時代の遺構、遺物はまったくない。SB 07とほぼ同時期の遺構の可能性が高く、古墳時代前期と考えられる。

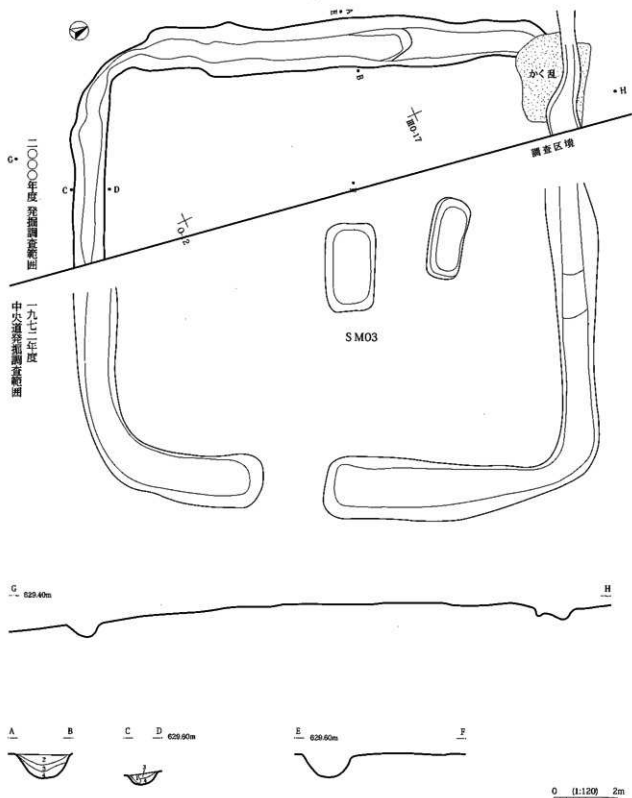
SM 04 (第14・78図、P.L 7)

位置：ⅢJ 21、22、ⅢO 01,02にかけて位置する。検出：Ⅲ層中で検出。北側の溝は道路により完全に破壊されており、南壁と西壁の一部を検出したにとどまった。47年度調査では確認されていなかった方形周溝墓で、わずかに残る未調査部分で曲がるものと考えられる。北側は道路によるかく乱で、溝は検出されなかったが、この道路部分に北側の溝がくるとであろう。形状・規模：東西9m以上、南北やはり9m程度と考えられる。方形を呈すものと考えられる。主体部：中央やや南寄りに位置する。東西方向に長く220×120×30cmの長方形を呈すが、東壁はかく乱によってほとんどが失われている。墓坑底では、掘り込みや炭化物の痕跡は認められず、棺を想定できるような痕跡は確認できなかった。埋没：上層から黄褐色土粒を含む褐色土、黒褐色土、明赤褐色土の3層からなる。遺物の出土状況：

第3章 石子原遺跡



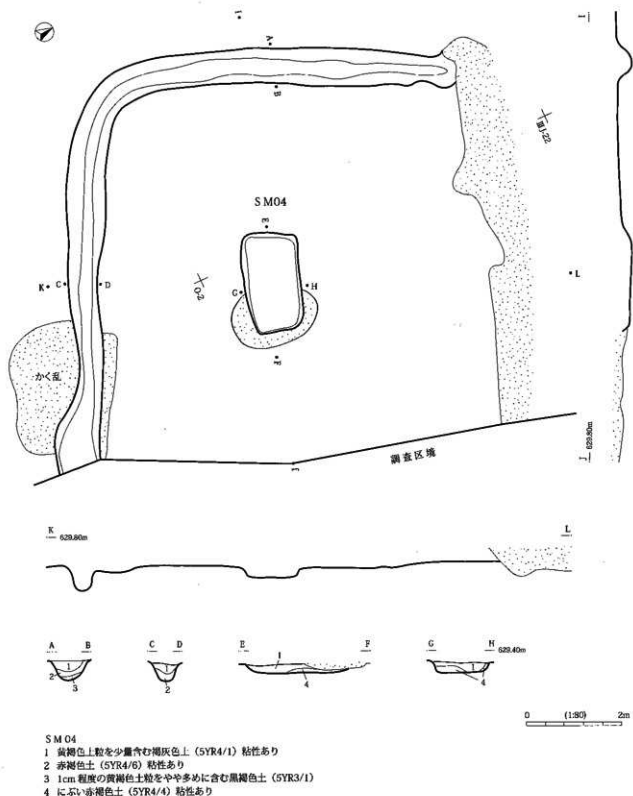
第76図 石子原遺跡古墳時代型穴住居跡SB 07 遺構図



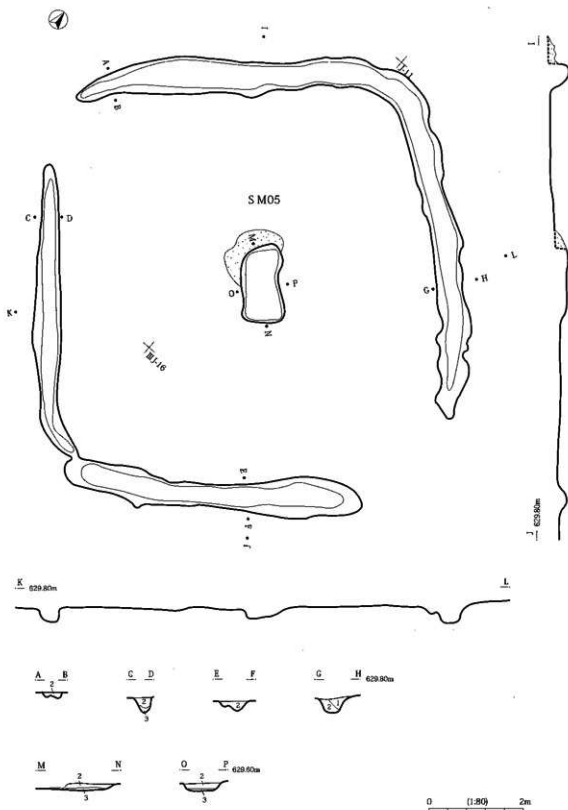
SM 03

- 1 黄褐色土粒混じりの褐灰色粘質土 (5YR4/1) =かく乱。
- 2 2~3mmの黄褐色土粒を少量含むにぶい赤褐色土 (5YR4/3)
- 3 2~3mmの黄褐色土粒を少量含むにぶい黒褐色土 (5YR3/1)
- 4 明赤褐色土 (5YR5/6)

第77図 石子原遺跡古墳時代方形周溝墓SM 03 遺構図



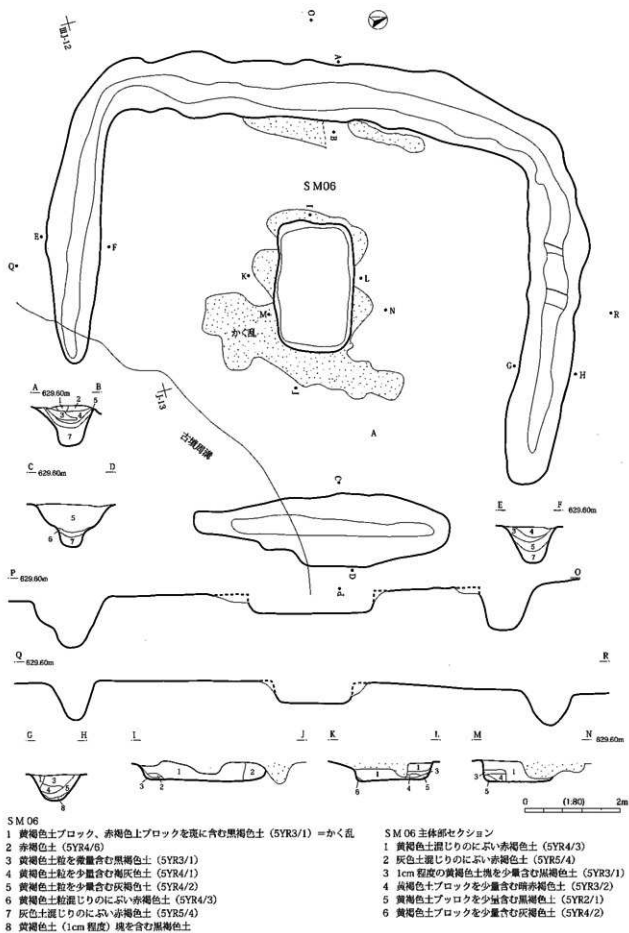
第78図 石子原遺跡古墳時代方形周溝墓 S M 04 遺構図



SM 05

- 1 黄褐色土ブロック、赤褐色土ブロックを底に含む黒褐色土 (5YR3/1) = かく乱
- 2 赤褐色土を微量含む黒灰色土 (5YR4/1)
- 3 赤褐色土凝じりにぶい赤褐色土 (5YR4/3)

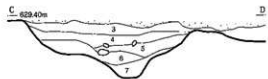
第79図 石子原遺跡古墳時代方形筒溝墓SM 05 遺構図



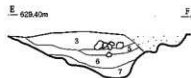
第 80 図 石子原遺跡古墳時代方形周溝墓 SM 06 遺構図



↑F-12

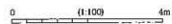


↑F-17



- 石原遺跡
 1 黒、黄褐色土層を含む灰褐色土 (SYR4/2) から成る
 2 中や強粒がかった灰褐色土 (SYR4/2) 結核あり
 3 灰褐色土 (SYR4/2) 結核あり
 4 3.2の中や強粒の褐色土 (SYR4/1) 結核あり
 5 比較的赤褐色土 (SYR4/3) 結核あり
 6 黒褐色土 (SYR3/1) 結核あり
 7 灰褐色土層に少量褐色土を混じった赤褐色土 (SYR5/3) 結核あり

↑G-02



2000年度
発掘調査範囲

1972年度
中央道発掘調査範囲

第81図 石原遺跡古墳遺構図

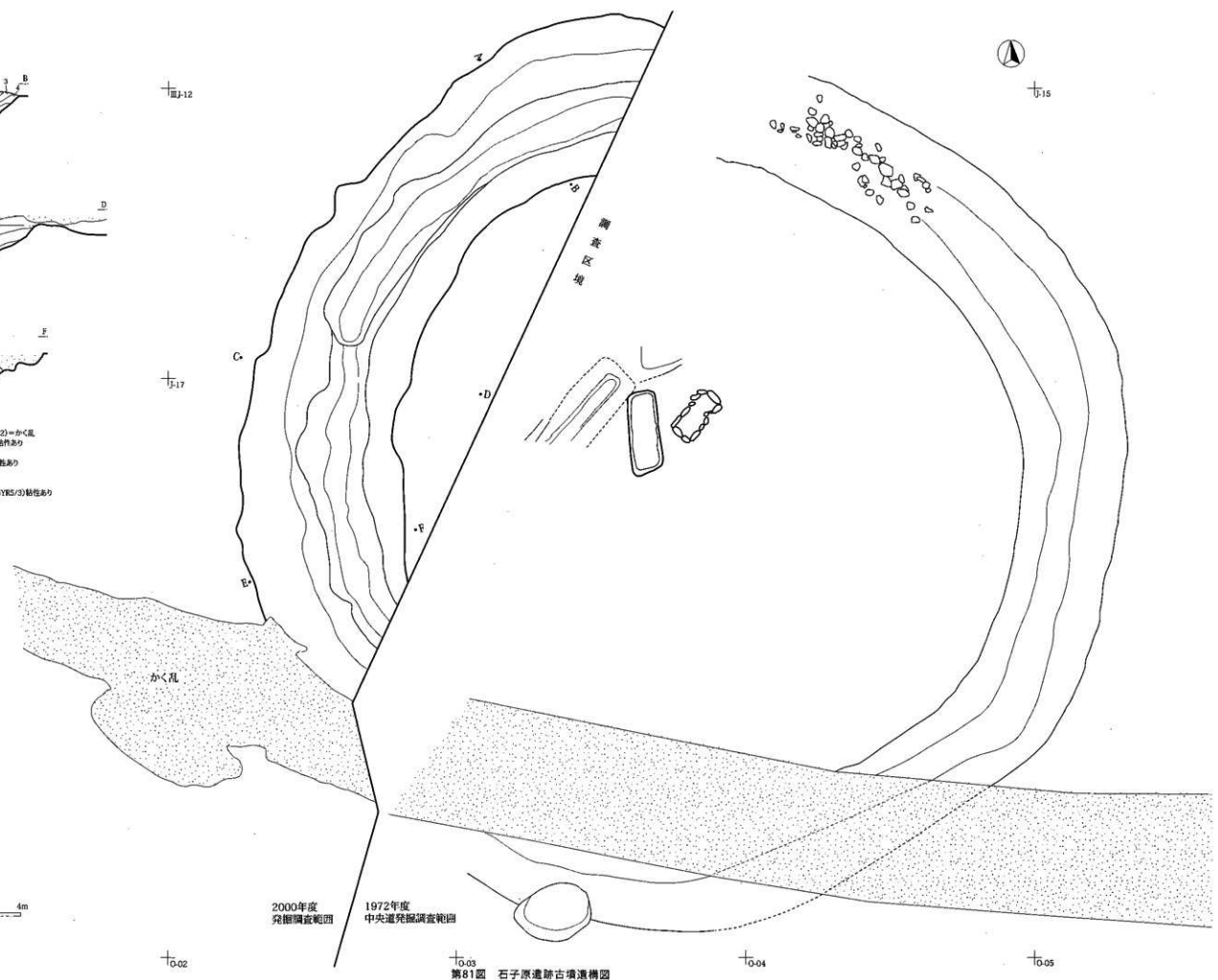
↑G-03

↑G-04

↑G-05



↑F-15



遺構 No.	位置 (グリッド)	形態	主軸方向	周溝規模 (m)		主体部 (cm)	出土遺物・備考	
				主軸方向	直交方向			深さ
1号方形周溝墓		隅丸方形	N63W			0.4~0.8	墓坑1: 270×126×40 墓坑2: 172×80×34	ガラス小玉2
2号方形周溝墓		隅丸方形	N80W	10	9.8	0.47~0.69	300×172×34	骨片、木炭多い
3号方形周溝墓	Ⅱ O01~03 Ⅱ O06~08 Ⅱ O11~13	方形	N72W	13.6	16	~0.72	墓坑1: 280×160×42 墓坑2: 260×160×22	なし
4号方形周溝墓 S M 04	Ⅱ J21, 22 Ⅱ O01, 02	方形	N58W	9以上	約9	~0.66	220×120×(30)	なし
5号方形周溝墓 S M 05	Ⅲ I10, 15, 20 Ⅲ J06, 11, 16	隅丸方形	N43W	9.6	9.2	~0.35	160×83×24	なし
6号方形周溝墓 S M 06	Ⅲ J02, 03, 07, 08, 12	方形	N68W	10.8	11.3	~0.4	272×170×40	棒状の鉄製品

第17表 方形周溝墓一覧

縄文時代の土器・石器が出土しているが、本址に帰属する遺物は皆無である。時期：S M 03と主軸方向が一致し、溝を共有する可能性も考えられるためS M 03に前後してつくられたと考えられる。古墳時代前期と考えることができる。

S M 05 (第14・79図、P L 7)

位置：Ⅲ I 10・15・20、Ⅲ J 06・11・16グリッドに位置する。検出：Ⅲ層中で検出。部分的にかく乱が入るが、単独で検出した。形状・規模：9.6×9.2mとほぼ隅丸方形を呈す。主軸方向は、N-43°-Wで、北西方向に向く。陸橋部は2箇所、西側コーナーと東側コーナーで溝が切れる。溝の掘り方はU字状を呈し、最も深いところで35cmを測る。主体部：主軸方向はほぼ溝の方向と一致する。160×83cm規模の長方形を呈す。埋没：自然堆積である。遺物の出土状況：弥生時代の遺構、遺物はまったくなく、縄文時代早期の土器、石器が出土している。時期：S B 07とほぼ同時期の遺構の可能性が高く、古墳時代前期と考えられる。

S M 06 (第14・80図、P L 7)

位置：Ⅲ J 02・03・07・08・12グリッドに位置する。検出：竊状かく乱が何条も入る中、Ⅲ層中で検出された。南東コーナー部分を石子原古墳の周溝によって切られている。形状・規模：南北方向11.3m、東西方向10.8mのほぼ方形を呈す。主軸はN-68°-Wと東西方向に向く。北東コーナーに陸橋部をひとつもつタイプと考えられ、南東コーナーの周溝は、切られているが本来は全周していたと考えられる。溝は、台形の掘り込みをもち、部分的ではあるが二段になっている。主体部：主体部は中央やや西寄りに位置し、上面はかく乱を受けており、下層部分のみが残存していた。主軸の方向は溝よりさらに西に振る。規模は272×170cmの東西に長い長方形を呈す。深さは、最も深いところで40cmを測る。主体部の埋土は、5層に分層でき、底面から10cmほど垂直に土層の分かれているところがあり、棺を据えた痕跡がうかがえる。また、北壁上半が赤く焼けている。埋没：5層からなる。自然埋没である。遺物の出土状況：主体部から棒状の鉄製品が出土している。その他は、縄文時代押型文土器・石器・剥片などが出土している。時期：本址に帰属するのは鉄製品のみであり、時期を決したが、遺構の配置などからS B 07と同時期である遺構の可能性が高く、古墳時代前期と考えられる。

3 古墳

石子原古墳 (第14・81・83図、P L 8・34)

検出：調査前は南北16.8m、東西13.8m、高さ0.9mの円墳と周知されていた。昭和47年にそのうちの東側2/3が調査されており、今回の調査は西側周溝のみの調査であった。一部かく乱がみられたが、

特徴ある埋土で検出は容易だった。SM 06を切る。周溝：幅 340～420cm、深さ 120cmで、中央が一段深く掘り窪められている。周溝の直径は南北約 24m、東西約 28mである。埋没：1層灰褐色土、2層は1層より暗めの灰褐色土、3層は1層と同じ、4層黒褐色土で、1層下部でこぶし大の礫が集中的に出土した。自然埋没土と考えることができる。遺物の山土状況：遺物は土師器高杯、須恵器甕、土師器甕が出土している。また、周溝南端部の溝底近くで、炭化した木製品が出土した。主体部：昭和 47年の調査で4基の墓坑が見つかっている。墓坑1は石組みの箱式石棺、墓坑2は隅丸長方形の素掘り土坑で蓋付須恵器短頸壺、刀子などが出土している。墓坑3は直刀、鉄鏃、朱塊などが出土している。実測図を見ると細長く段状になっており、割り竹形木棺と考えることができる。墓坑4は長方形の掘り込みで、朱塊が検出された。墓坑1と3はほぼ軸をそろえ、墓坑2のみ45度軸がずれている。時期：出土遺物は、内面を黒色処理した高杯（第83図4、5、6）、赤彩され脚部に透かしを有する高杯（同8）、土師器甕（同10）などが出土しており、5世紀末から6世紀初頭の時期を示している。これは、墓坑2から出土した蓋付須恵器短頸壺とほぼ一致する。

4 古墳出土の土器（第83図、P L 34）

古墳の周溝から出土している。出土量は少なく、いずれも破片であり、特別な遺棄の状況は確認されなかった。

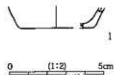
1は坏底部で、ほぼ平坦に手持ちヘラ削りを行い、その後ナデている。内面は赤彩されている。2も坏底部から体部にかけての破片で、内面は黒色処理される。

3～5は坏あるいは高杯の口縁部である。いずれも黒色処理され、ていねいなミガキがみられる。6は高杯で、口縁部を欠く。内面黒色処理をして、ていねいなミガキがみられる。7は高杯の脚部である。8は高杯の口縁部と体部の破片である。内外面赤彩された痕跡が残り、脚部の小破片には透かしの痕跡が認められる。4孔の透かしと考えられる。

9は、須恵器甕で、底部か体部にかけての破片である。肩部には5条1単位の波状文が廻っている。底部には十字窯印が認められる。6世紀の初頭の様相である。

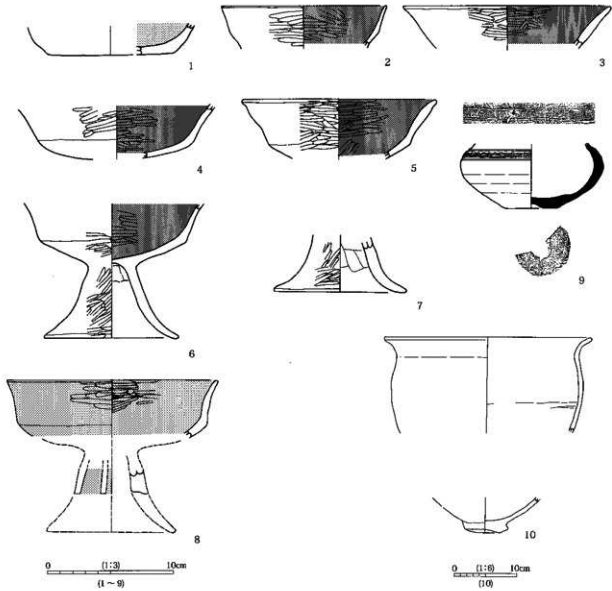
10は土師器甕の底部と口縁部から胴部にかけての破片である。底部は厚く高台状に高くなっている。

SB 07



第82図 石子原遺跡古墳時代整穴住居跡SB 07 出土土器

古墳周溝



第83図 石子原遺跡古墳出土土器

第5節 近世の遺構と遺物

1 墓 坑

墓坑はまず底面の平面形で形態分類をおこなった。

A墓坑：長楕円形 短軸長軸の比が1：2以上の墓坑

B墓坑：長楕円形 短軸長軸の比が1：2未満の墓坑

C墓坑：B墓坑の内、不整長方形を呈し、短辺の長さが異なり、わずかに台形を呈す墓坑

また、底面の長軸の長さにより次のとおり分類した。

I類：150cm以上 II類：150cm未満95cm以上 III類：95cm未満

さらに、集石を伴うものをSとし、上面に集石があるS1、人骨直上に集石があるS2に分けた。

A～C墓坑は、いずれも棺桶を想定できるような人骨の出土状況を示していない。人骨は、京都大学霊長類研究所茂原信生氏、姉崎智子氏（平成16年時）に依頼し、出土状況等を含めて現地を観察、鑑定をおこなった。（第6節6項193頁参照）

(1) 素掘りの墓坑

A I墓坑はSM07・10・16の2基がある。SM16についてはプランが不確定なところもあり、B墓坑に属す可能性もある。

B II墓坑には、SM08・09・11・13・15・22・23・24・25などがある。また、B III墓坑は、SM12・21、SK106・107・108などがある。

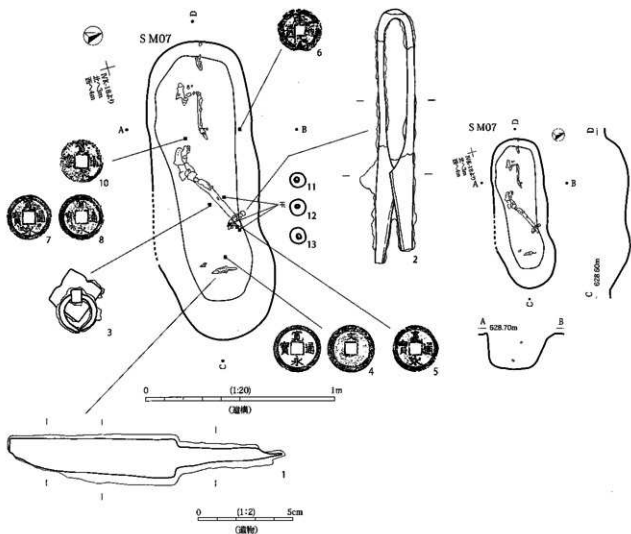
C II墓坑には、SM14・17・18・19などがある。

SM07（第15・84・93図、P.L9）

地区と位置：5区西端部IV K12グリッドに位置し、墓坑群の南西部にあたる。検出：Ⅲ層上面で検出。試掘トレンチで検出中に黒色土中から刀子（第84図1）が出土し、さらにその周辺から寛永通宝などが出土したため、遺構の存在が予想された。黒色土中では検出できず、Ⅲ層まで下げて検出した。1/3ほど調査区外にかりかり拡張した。層位：3層に分層したが、基本的には単層の人為埋土の状況土である。3層は、骨の影響による変色部分である。墓坑の規模・形態：長方形から長楕円形をしている。掘り込みは浅い。長軸157×短軸57×深さ21cmを測る。遺物の出土状況：足元から刀子が出土しており、大腿骨周辺から数珠の珠が3個出土している。まとまって出土しているというよりは、珠が飛び散っているような出土状況である。出土銭貨は寛永通宝で、埋土上面から人骨の下までかなりのレベル差をもって出土し、散在的な出土状況である。埋葬状況：西側に頭位を向ける伸展葬である。骨盤から大腿骨にかけて残りがよい。頭蓋骨は、一部墓坑外にはみ出るように出土しており、ほとんどが散逸している。下顎骨の一部が出土している。深さなどから棺の想定は不可能であり、直葬と考えられる。

SM08（第15・85・93図、P.L9）

地区と位置：5区北西部IV K12～13グリッド、墓坑集中箇所の南側に位置する。検出：表土直下、Ⅲ層下部で検出。SM18と切りあう。一部、桑の根の影響を受けている部分があり、全体的にははっきりしない部分があった。SM18との切り合いは、本址の埋土のほうが黒く、黒色土と褐色土のブロックが混じることから明らかに異なっており、平面的にも確認することができた。また、掘り下げでも、頭蓋骨が、SM18のプランに入り込むように出土していることから本址がSM18より新しいことは明らかである。層位：基本的には単層の人為的に埋め戻された土である。非常にやわらかい暗褐色

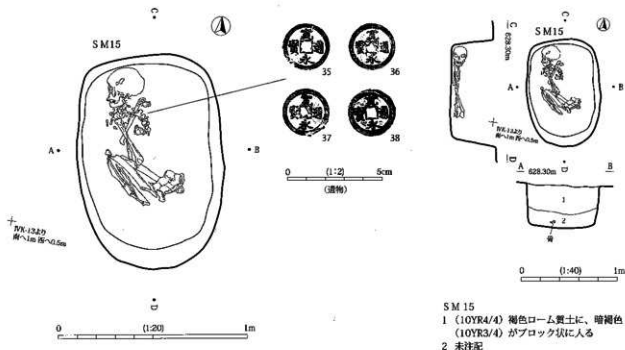


第84図 石子原遺跡江戸時代墓坑S M 07 遺構図および遺物出土状況図

土細砂質土に、粘質で硬い黄褐色ローム質土ブロック混じる。下部は、骨の影響により変色している。墓坑の規模・形態：墓坑の上・下とも長方形に近い楕円形となっている。長軸 131 × 短軸 82 × 深さ 36cm を測る。遺物の出土状況：胸部付近に集中して見られる。キセルは雁首を口に近いほうにして吸い口を足のほうに向けておかれている。水晶製の珠は上腕骨の下から出土しており、装身具との関連が考えられるが、確かではない。銭貨は 2 点出土しており、いずれも寛永通宝である。埋葬状況：頭位を西に向ける、側（仰）臥屈葬である。

S M 09 (第 15・88 図、P L 9)

地区と位置：5 区南部 IV K 13 グリッド、墓坑集中箇所の南側に位置する。S M 22 の南、S M 08 の北にある。検出：S M 22 に接するが、Ⅲ層中で検出。ただ、柿の根の影響を受け、かなりかく乱された状態での検出であった。層位：炭化物を混じるやや粘質の暗褐色土の単層である。墓坑の規模・形態：長方形に近い楕円形のプランをもつ。掘り込みはごく浅く、残存状況は非常に悪い状態であった。長軸 121 × 短軸 68 × 深さ 11cm を測る。遺物の出土状況：遺物の出土は見られない。埋葬状況：頭位を西に向ける屈葬と考えられる。やや北側寄りに体を横たえ、足を折りたたみ胸から離れるように埋葬している。頭蓋骨後頭部が残存していることから、顔を上に向けて埋葬したと考えられる。棺の想定は深さから不可能であり、直葬と考えられる。



第 86 図 石子原遺跡江戸時代墓坑 S.M. 15 遺構図および遺物出土状況図

SM 11 (第 15・88 図、P.L. 9)

地区と位置：5区北東部IV K 08 グリッド、墓坑集中箇所の北側に位置する。検出：Ⅲ層下部で検出。SM 21 と切りあう。切りあい関係は明確には捉えることができなかったが、埋葬の状態から本址が切ると判断した。単一の墓坑である可能性もある。層位：単層、10 Y R 暗褐色 3/4 細砂質土に非常にやわらかい黄褐色ローム質土がブロック状に入る。墓坑の規模・形態：長方形に近い楕円形を呈す。長軸(96)×短軸 69×深さ 16cm で、非常に掘り込みが浅く、遺存状況はよくない。遺物の出土状況：遺物は出土していない。埋葬状況：腕骨、脛骨の骨幹部が墓坑南側で出土しており、北側で、頭蓋骨片が出土していることから北頭位と考えられる。また、墓坑の規模、脛骨の出土状態から屈葬と考えることができる。

SM 12 (第 15・88 図、P.L. 9)

地区と位置：5区北西部IV K 07～08 グリッド、墓坑集中箇所のほぼ北部に位置する。検出：Ⅲ層下部で検出。層位：10 Y R 褐色土にロームブロックを含む土を基本として、2層は人骨による変色部分。10 Y R 暗褐色を呈す。墓坑の規模・形態：長方形に近い楕円形を呈す。長軸 92×短軸 72×深さ 43cm。壁は直に近く、底面は平坦である。底面のほうは長方形を呈す。遺物の出土状況：遺物の出土はない。埋葬状況：かなりよい遺存状態である。頭位を北側に向ける屈葬位の状態で埋葬された。棺の想定は墓坑の大きさから不可能で、直葬と考えられる。

SM 13 (第 15・88 図、P.L. 10)

地区と位置：5区北西部IV K 08 グリッドで、墓坑群のほぼ中央に位置する。検出：Ⅲ層下部で、切り合いはなく、単独で検出。層位：10 Y R 黒褐色土 3/2、暗褐色土 3/4、黄褐色 5/8 がほぼ同じように混じる。下へ行くにしたがって黄褐色土のブロックが多くなる。墓坑の規模・形態：長軸 98×短軸 84×深さ 36cm の長方形に近い楕円形を呈す。遺物の出土状況：遺物は出土していない。埋葬状況：頭部を北に向け、顔は上に向け、足を折りたたむ屈葬位の状態で埋葬されている。長方形の対角線にあたる向きを、埋葬方向にして埋葬している。

SM 14 (第 15・88 図、P.L. 10)

地区と位置：5区北西部IV K 13グリッドの北西部にあたる。墓坑群のほぼ中央部に位置する。検出：Ⅲ層下部で、SK 113を切るように検出。埋土の違いや人骨の出土状況から明らかに本址のほうが新しい。層位：10 Y R暗褐色3/4細砂質土に暗褐色3/2のブロックが混じる単層である。墓坑の規模・形態：隅丸長方形で浅い掘り方で、長軸122×短軸73×深さ23cmを測る。北辺よりも南辺のほうが長く、全体として台形の平面プランを呈する。遺物の出土状況：遺物は出土していない。埋葬状況：頭位をほぼ北に向ける屈葬である。

SM 15 (第15・86・98図、P L 10)

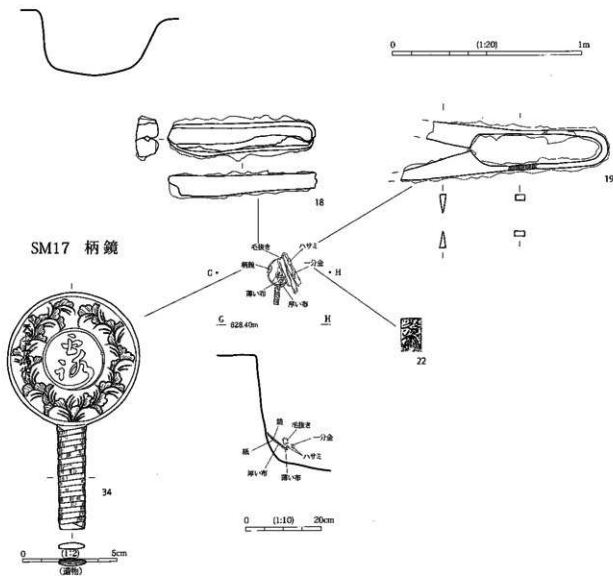
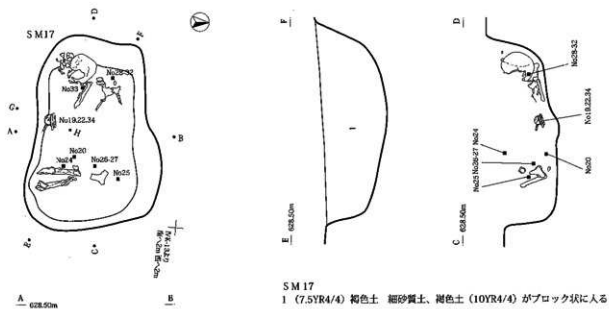
地区と位置：5区の北西部IV K 13グリッドの北西部、一部IV K 12グリッドにかかる。墓坑群の中央部に位置する。検出：Ⅲ層下部で検出。層位：10 Y R褐色ローム質土4/4に暗褐色3/4細砂質土がブロック状に入る。墓坑の規模・形態：長軸114×短軸77×深さ49cmの規模で、長方形に近い楕円形である。壁はほぼ垂直に近く掘り込まれ、底面は緩やかな船底状になるが、ほぼ平坦と考えてよい。遺物の出土状況：銭貨が胸の辺りの骨の下から出土している。薄い紙とやや粗い繊維の布で包まれた状態で6枚重ねたまま出土した。これが胸に置かれたものか、当初から遺体の下にあったかは不明。いずれにしても副葬された品である。埋葬状況：北に頭位をもち、顔を西に向けた、北頭西顔の典型例である。腕、足ともに折り曲げた状態で、体に密着させるような状態で横向きに埋葬されている。

SM 16 (第15・88図、P L 10)

地区と位置：5区の北西部IV K 13グリッドの北西部に位置する。墓坑集中箇所のほぼ中央部SH 06の上面、SM 23に接する。検出：Ⅲ層下部で検出。SH 06との切り合いは、骨の出土状況や集石との関係から明らかに本址のほうが新しい。検出段階でやや不整に南側に飛び出した部分があり、当初同一遺構と考えていたが、SM 16の出土人骨がほぼ1体分あり、別遺構と考えたほうがよくSM 25とした。層位：10 Y R暗褐色3/4細砂質土に褐色土4/6のブロックが入る。墓坑の規模・形態：SM 25、SH 06と切り合い、十分にその範囲を把握することができなかった。推定長軸146×短軸65×深さ12cmほどと考えられる。ただし、屈葬であるので、長軸はもう少し短くなることが予想される。遺物の出土状況：遺物は出土していない。埋葬状況：下顎骨が下を向いていることから、下向きに埋葬されている。腕、足ともに折り曲げた状態である。頭位は、南向きであり、例外的な頭位の方向である。下向きの埋葬方法とともに墓坑群の中では異質な存在である。腕と足の骨の間が開いており、別の個体の可能性もあるが、同一個体とするとかなり身長が高かったと考えることができる。

SM 17 (第15・87・94図、P L 10)

地区と位置：5区の北西部IV K 12グリッドにある。墓坑群の南西部に位置する。検出：Ⅲ層下部で検出。試掘トレンチ掘り下げ中にその存在を確認したが、半分は調査区外に延びており拡張した。SK 115を切るが、本址の埋土とは明確に区別することができ、ブロックの混入がみられた。層位：7.5 Y R褐色4/4細砂質土に、10 Y R褐色土ロームブロックが入る。墓坑の規模・形態：やや不整な長方形を呈し、足側部分がやや長く台形状になっている。長軸103×短軸70×深さ40cmを測る。比較的浅い墓坑である。遺物の出土状況：豊富な副葬品が出土している。銭貨は足、頭部付近から出土している。またレベルもまちまちで、かなり高いところから出土しているものもある。腕の下から出土した33は寛永通宝で布痕がついている。25も寛永通宝である。28～32は、5枚が紙か布に包まれた状態で出土している。26・27は、2枚重ねで、薄い布に包まれている。銭貨以外では、「天下一上嶋作」の銘をもつ柄鏡、はさみ、元文一分判金、毛抜き形鉄製品がまとまって出土している。サイコロもこの付近から出土した。これらは、墓坑南壁中央やや浮いた状態で出土している。鏡は薄い布、厚い布、紙の順で、三重に巻かれた状態で出土している。特に、鏡面側で遺存状態がよく、ほぼ全面に渡って遺存していた。鏡



第 87 図 石子原遺跡江戸時代墓坑 S M 17 遺構図および遺物出土状況図

を覆う紙は、文書あるいは手紙の反故紙と考えられ、文章としては判読できないものの文字の一部を確認することができた。埋葬状況：頭部を西に向け、顔を右に向け、足を折り曲げる側臥屈葬である。ただし、SM 13・15・14 など北頭位の墓坑の屈葬とは異なり、足を胸から離し、体に対して直角に足を折り曲げるような状態の屈葬となっている。下顎骨は土圧でつぶれた状態で検出している。墓坑の形、人骨の位置などから、棺の想定は不可能である。

SM 18 (第 15・85・98 図、P L 11)

地区と位置：5区北西部、墓坑集中部分の南端部に位置する。IV K 12 グリッドの南東部に位置する。検出：IV層上面で検出。SM 08 と切り合い、さらに根のかく乱などがあり、平面的につかむのは困難だった。層位：10 Y R 褐色ローム質土にぶい黄褐色土 4/3、暗褐色土 3/4 細砂質土がブロック状に入る。非常にやわらかい。墓坑の規模・形態：隅丸長方形を呈す。頭側側の辺よりも足側の辺がわずかに長くなっている。長軸 116 × 短軸 83 × 深さ 62cm を測る。遺物の出土状況：2 方所から副葬品が出土している。頭蓋骨と大腿骨のほぼ中間、胸あたりに底面よりわずかに浮いた状態で、毛抜きに銭貨が挟まれたような状態で出土している (第 85 図 45～50)。銭貨は 6 枚重ねである。もう 1 点は、北壁際にかなり浮いた状態でやはりこれも 5 枚重ねの状態でも出土している (同 40～44)。埋葬状況：頭蓋骨を西に向けた仰臥屈葬と考えることができる。骨の依存状態が悪く即断できないが、SM 08 と同じように胸から足を離して、体に対して直交させるような状態での埋葬姿勢と考えることができる。

SM 19 (第 15・88 図、P L 11)

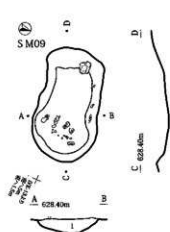
地区と位置：5区の北西部、墓坑集中箇所の南西部に単独で位置する。IV K 12 グリッドの中央やや南に位置する。検出：III層下部で検出。単独で切り合いは認められないが、かく乱が一部入り込んでいる。層位：7.5 Y R 明褐色ローム質土に褐色土 4/4 がブロック状に、灰の影響による黒褐色土 2/2 がバンド状 (根のかく乱か) に入る。墓坑の規模・形態：不整な長方形で、足側の辺が頭部側の辺よりも広がる。長軸 134 × 短軸 84 × 深さ 56cm を測る。掘り込みは直に近く、底面はほぼ平坦である。遺物の出土状況：鉄製品が出土している。副葬されたものではないようである。埋葬状況：西に頭位を向ける仰臥屈葬である。ひざを立てている点で他の屈葬例と異なっているが、足を胸から離すという点では、SM 08 や SM 17 などと共通する。底面は長方形をしていること、ひざを立てた状態であるので棺の想定も可能であるが、現時点では直葬と考えておく。出土鉄製品があるが、L 字状に曲がった棒状のものであるので、釘になる可能性が残っている。

SM 21 (第 15・88 図)

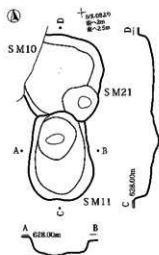
地区と位置：5区の北西部、墓坑集中箇所の北側に位置する。IV K 08 グリッドのほぼ中央やや西寄りに位置する。検出：III層下部で検出。SM 10、SM 11 と切りあう。埋土はロームの混じる暗褐色土で平面的には新旧の判断はできなかった。SM 11 とは骨の出土状況から本址のほうが古いと判断した。SM 10 とはほとんど接するような切りあい関係である。判断は難しいが、浅い掘り込みであることや SM 10 の出土遺物などから本址のほうが新しいと判断した。SM 10 → SM 21 → SM 11 の順になる。層位：10 Y R 暗褐色土細砂質で非常にやわらかい土に、黄褐色土 5/8 ローム質土サクサクやわらかいやや大きめのブロックが入る。墓坑の規模・形態：矩形に近い隅丸長方形の平面プランをもつ土坑で、掘り込みは浅い。底面は船底状の掘り込みである。長軸 (88) × 短軸 (79) × 深さ 16cm を測る。遺物の出土状況：遺物はない。埋葬状況：出土人骨はいずれも細片であり不明である。

SM 22 (第 15・89・98 図、P L 11)

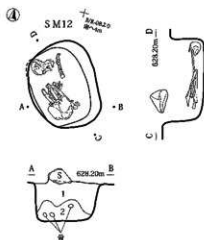
地区と位置：5区北西部、IV K 13 グリッド西側中央に位置する。墓坑群の南部に位置する。検出：III層下部で検出。SM 09 に接するが、単独で存在する。層位：2層からなり、いずれも埋めもどされた



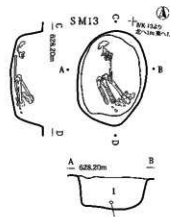
SM 09
1 (10YR3/4) 暗褐色土 やや粘質土 黄褐色 (10YR5/8) ブロック混 炭化物混 焼けた骨



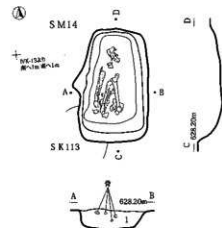
SM 11
1 (10YR3/4) 暗褐色土 細砂質やわらかい 黄褐色 (10YR5/8) ブロック混 (サクサク)



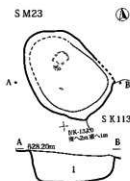
SM 12
1 (10YR4/4) 褐色土 細砂質土 やわらかい ロームブロック (5mm 大かたい) 混 炭化物少混
2 (10YR3/4) 暗褐色土 細砂質土 (骨による変色部分)



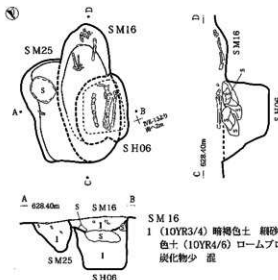
SM 13
1 (10YR3/2) 黒褐色土 (10YR3/4) 暗褐色土 (10YR5/8) 黄褐色土ブロックが同じように混じる細砂質土 下に行くにしたがって黄褐色ブロックが多くなる



SM 14
1 (10YR3/4) 暗褐色土 細砂質土 暗褐色 (10YR3/2) ブロック混



SM 23
1 (10YR3/4) 暗褐色土に (10YR3/2) 黒褐色土 (10YR4/6) 褐色土 ローム+30%混 炭化物(上層)に多い



SM 16
1 (10YR3/4) 暗褐色土 細砂質土に褐色土 (10YR4/6) ロームブロック混 炭化物少 混



SM 19
1 (7.5YR) 明褐色ローム質土に、褐色 (10YR4/4)、灰による黒褐色土 (10YR4/4) がブロック状に入る

0 (1:40) 1m

第88図 石子原遺跡江戸時代墓坑遺構図1

土である。1層は10 Y R 褐色 4/4 細砂質粘質土に、暗褐色 3/4、黄褐色 5/8 ブロックを10%含む。2層は黄褐色 5/8 ブロックに、褐色 5/6 ローム質ブロックを30%含む。墓坑の規模・形態：丸丸長方形で、南西部の角がやや崩れた形となっている。長軸 121 × 短軸 86 × 深さ 67cm を測る。遺物の出土状況：大定通宝（第98図61）が頭蓋骨の南、胸の辺りで出土している。6枚重ねて布か紙に覆われた状態で、鉄分の付着が見られる。埋葬状況：頭位を北に向ける屈葬である。足は胸につけるように埋葬するタイプで、顔を西に向けて側臥の状態に埋葬している。大腿骨のレベルから石が2個足元に入れられている。

SM 23（第15・88図、P L 11）

地区と位置：5区の北西部、墓坑集中箇所のほぼ中央に位置する。グリッドはIV K 13 北西寄りに位置する。検出：Ⅲ層下部で検出。墓坑の集中する部分でSK 113 と切り合い関係をもつ。プラン、切り合いともに不確実な部分が多い。掘り下げ段階で、SK 113 の埋土に本址の埋土の落ち込みがみられたので、SK 113 を切ることが確認された。層位：10 Y R 暗褐色 3/4 に、黒褐色土 3/2 褐色 4/6 ローム質土を30%程度混在する。炭化物が上層に多く含まれる。墓坑の規模・形態：不整な楕円形を呈す。長軸 106 × 短軸 77 × 深さ 41cm を測る。中央部はやや掘り過ぎの感がある。遺物の出土状況：出土遺物はない。埋葬状況：土坑の規模から頭部を北に向ける屈葬と考えられる。頭蓋骨の西側に歯があることから、右向きで埋葬された可能性がある。

SM 24（第15・89・98図、P L 11）

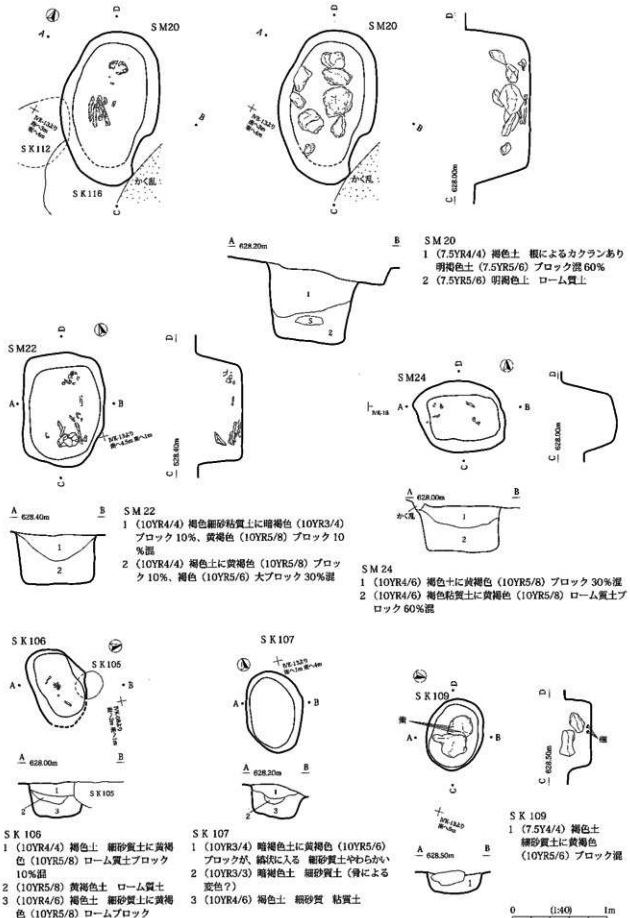
地区と位置：5区北西部、墓坑集中箇所の最南端に位置する。IV K 18 グリッドとIV K 13 グリッドの境に位置する。検出：Ⅲ層下部で検出。上面にかく乱土がのり、それを除去した段階で検出することができた。層位：掘り込みはⅢ層からみられ、IV層に達している。埋土は2層で、ブロックの混入に差がみられるが、基本的には同一層である。1層は10 Y R 褐色粘質土 4/6 に、黄褐色 5/8 ブロックが30%混在する。2層はブロックの混入が60%と多くなる。墓坑の規模・形態：長軸 97 × 短軸 76 × 深さ 65cm を測る。やや不正な丸丸方形を呈し、底はほぼ長方形を呈す。底面は、中央がやや深くなる緩やかな船底状を呈す。遺物の出土状況：2点出土している。キセルは遺体の胸あたり、ほぼ底面につくように出土している。そのほか不明鉄製品が出土している。埋葬状況：頭位を西に向ける屈葬である。足の状態は碎片であり、詳しい埋葬状態はうかがい知ることができない。

SM 25（第15・88・98図）

地区と位置：5区の北西部、IV K 13 グリッドの北西部に位置する。墓坑集中箇所のほぼ中央部SM 16、SH 06 と切り合い、SM 23 に接する。検出：Ⅲ層下部で検出。SM 16、SH 06 との切り合いは、骨の出土状況や集石との関係から明らかに本址のほうが古い。層位：10 Y R 暗褐色 3/4 細砂質土に褐色土 4/6 のブロックが入る。墓坑の規模・形態：ほとんどがSM 16 やSH 06 に切られ、全体像をつかむことができない。遺物の出土状況：鉄製品が石の下から1点出土している。埋葬状況：わずかに人骨の一部が出土しているだけで、不明である。

SK 106（第15・89図）

地区と位置：5区の北西部、IV K 08 グリッドの西寄りに位置する。墓坑群の北端部にあたる。検出：Ⅲ層下部で、SK 105、SM 10 と接するように検出。SK 105 の埋土は本址よりも黒く、明らかに切ることがわかった。SM 10 とは、切り合い関係ははっきりしなかった。層位：3層からなる。1層は10 Y R 褐色 4/4 細砂質土に黄褐色 5/8 ブロックが入る。2層は黄褐色ロームブロックがバンド状に入る。3層は1層よりも黄色味が強いが1層と同一層と考えられる。いずれも埋め戻された土である。墓坑の規模・形態：長軸 92 × 短軸 56 × 深さ 44cm、平面形は長方形に近い楕円形である。底面は緩やかな船底状を呈す。遺物の出土状況：出土遺物はない。埋葬状況：南西方向に頭位をもつ、屈葬と考えられ



第 89 図 石子原遺跡江戸時代墓坑遺構図 2

る。規模から小児埋葬と考えられる。

SK 107 (第13・89図)

地区と位置：5区の北西部、墓坑集中箇所の東に位置する。IVK 13の中央やや北寄りにある。検出：Ⅲ層下部で検出。SD 01に接するがほとんど切り合い関係はない。層位：3層からなる。1層は10 Y R 暗褐色 3/4 に黄褐色 5/6 ブロックが竊状に入る。細砂質でやわらかい。2層は基本的には1層と同じ。骨の影響による変色と考えられる。3層は10 Y R 褐色土でやや粘質土である。墓坑の規模・形態：長軸87×短軸60×深さ36cmの、楕円形のプランをもつ。底面は緩やかな船底状を呈す。遺物の出土状況：出土遺物はない。埋葬状況：頭位を南に向ける屈葬と考えられる。人骨の鑑定結果、土坑の規模からも小児の埋葬であることがわかる。

(2) 集石をともなう墓坑

B I S 2 類墓坑に SM 20、B II S 1 類に SH 05、B III S 1 類が SH 03、04、06、B III S 2 類は SK 109がある。

SM 20 (第13・89・98図、P L 11)

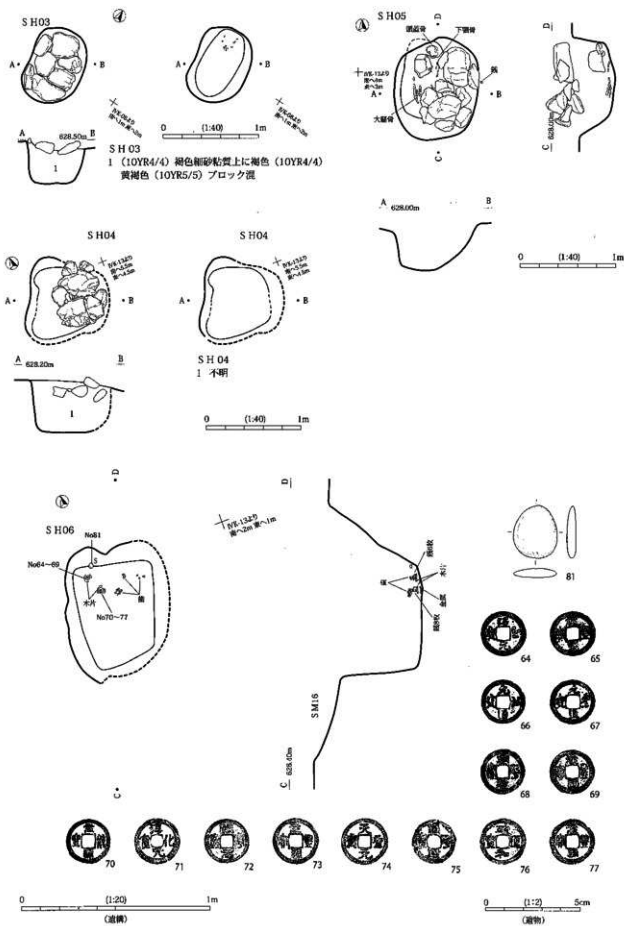
地区と位置：5区の北西部、中央東側、IVK 13グリッドの中央部に位置する。検出：SD 01、SK 112、SK 116と切りあうように検出された。SK 112は炭化物を含む焼けた骨が出土しており、明らかに土層に違いがみられた。SK 116との切り合いもブロックの混入具合で区別ができ、本址が切っている。SK 116→SM 20→SK 112の順になる。層位：1層は7.5 Y R 褐色土 4/4。根によるかく乱あり。明褐色土ローム質ブロックが60%混在している。2層は7.5 Y R 明褐色 5/6 ローム質土。堆積が水平ではなく傾いているので、東側に土を盛ってそれを埋め戻した可能性がある。墓坑の規模・形態：長軸162×短軸102×深さ81cmの長楕円形を呈す。遺物の出土状況：銭貨のみの出土であるが、いずれも近接して出土している。人骨の胸あたりに置かれた状態か、遺体の下に置かれたと考えられる。第98図51～54は4枚重ね、55、56は単独であるが、本来は一括して収められたもので、合わせると6枚の出土になる。埋葬状況：頭位を北に向ける。足を体につけるような屈葬である。遺体を安置した直後か、わずかに埋め戻した後、頭から腰にかけて石を載せ、さらに腕や足に石を乗せるように2列に石を配置し、さらに埋め戻している。嚴重に埋葬していることから、若くして死んだなど死因に問題があったことが推測される。

SH 03 (第13・90図、P L 11)

地区と位置：5区の北西部、墓坑群の北端に位置する。IVK 08グリッドの北西部に位置する。検出：トレンチ調査時にSM 10に接するように集石を検出。前後関係は、本址の集石がわずかにSM 10にかかるので、本址が新しいと判断した。層位：10 Y R 褐色 4/4 細砂質土に、暗褐色土 4/4、黄褐色 5/8 ロームブロックが混じる。埋め戻された土である。墓坑の規模・形態：長軸80×短軸57×深さ55cmを測る。長方形に近い楕円形を呈す。上部の集石は、25cmから40cm程度の石を7個組み合わせ、墓坑を覆うように隙間なく敷き詰めている。石材は花崗岩を主として、片麻岩が入る。遺物の出土状況：出土遺物はない。埋葬状況：頭位を北西に向ける屈葬と考えられるが、骨の遺存状況が悪く不明である。規模から小児埋葬と考えられる。

SH 04 (第13・90図、P L 11)

地区と位置：5区北西部、IVK 13グリッドに位置する。墓坑集中箇所の南東部、墓坑上部に集石をもつ墓坑が集中する箇所にある。検出：SD 01内に集石を検出した。集石が検出されたことから本址のほうが新しいと判断した。墓坑の規模・形態：長軸91×短軸88×深さ88cm不整な矩形を呈す。上



第90図 石子原遺跡江戸時代墓坑遺構図3

第3章 石子原遺跡

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	横軸比	埋葬方向	墓坑形状	埋葬方法	頭位	性別	年齢	遺物	骨
SM 07	157	57	21	2.75	W-8-S	A I	伸葬	西	不明	成人	刀子、はさみ、寛永通寶7、引き手金具	頸・脊椎・骨盤・大腿骨・腕
SM 08	131	82	36	1.60	W-4-N	B II	屈葬	西	男	老齢	燗瓶、寛永通寶2、玉	頭蓋骨・大腿骨・腕
SM 09	121	68	11	1.78	W-13-S	B II	屈葬	西	男?	成人	なし	頭蓋骨・大腿骨
SM 10	190	95	56	2.00	N-19-E	A I		北	一		天目茶碗、元豊通寶	腕2体
SM 11 (96)	69	16	1.39	N-6-E	B II	屈葬	北	不明	不明	不明	なし	骨片
SM 12	92	72	43	1.28	N-34-W	B III	屈葬	北	男	成人	なし	頭蓋骨・腕・足ほぼ全命
SM 13	98	84	36	1.17	N-2-W	B II	屈葬	北	女	成人	なし	頭蓋骨・腕・大腿骨・腕
SM 14	122	73	23	1.67	N-5-W	C II	屈葬	北	男	成人	なし	頭蓋骨・腕・大腿骨・腕
SM 15	114	77	49	1.48	N-8-W	B II	屈葬	北	女	成人	寛永通寶5、不明古銭1、深い紙、布	全身
SM 16 (146)	(65)	12	2.24	S-14-E	A I	屈葬 うつ伏せ	南	男?	成人	なし	なし	顎・腕
SM 17	103	70	40	1.47	W-2-S	C II	屈葬	西	女	老齢	鏡、毛抜き、はさみ、銅銭9 (寛永通寶9)、一分金、サイコロ、布	頭蓋骨・腕
SM 18	116	83	62	1.40	W-2-S	C II	屈葬	西	不明	成人	寛永通寶他11、毛抜き	頭蓋骨・腕・大腿骨
SM 19	134	84	56	1.60	W-2-N	C II	屈葬	西	男	成人	なし	頭蓋骨・大腿骨
SM 20	162	102	81	1.59	N-18-W	B I S2	屈葬	北	不明	不明	寛永通寶6	頭蓋骨・大腿骨
SM 21 (88)	(79)	16	1.11	N-18-E	B III	不明	不明	不明	不明	不明	なし	骨片
SM 22	121	86	67	1.41	N-17-E	B II	屈葬	北	不明	成人	元永通寶他6	頭蓋骨・大腿骨
SM 23	106	77	41	1.38	N-23-W	B II	屈葬	北	不明	幼児	なし	頭蓋骨
SM 24	97	76	65	1.28	W-3-S	B II	屈葬	西	不明	少年?	燗瓶、鉄製品断片	頭蓋骨・四肢骨片
SM 25 (106)	(55)	32	1.92	N-2-E	B II	不明	不明	不明	不明	不明	刀子形鉄製品	四肢骨骨幹部
SH03	80	57	55	1.40	N-10-W	B III S1	屈葬	北西	男?	幼児	なし	歯
SH04	91	88	88	1.03	N-18-E	B III S1	屈葬 うつ伏せ	北	不明	不明	なし	頭蓋のみ
SH05	103	87	58	1.18	N-5-S	B II S1	屈葬	北	男	成人	寛永通寶1	頭蓋骨・上腕骨
SH06	73	55	56	1.33	N-13-E	B III S1	屈葬	北	不明	幼児	元豊通寶他8、縮型元寶他6、板材、黒い小石	歯
S K 106	92	56	44	1.64	W-12-S	B III	屈葬	南西	不明	幼児	なし	歯・頭蓋骨・四肢骨
S K 107	87	60	36	1.45	S-8-W	B III	屈葬	南	不明	幼児	なし	歯・顎
S K 109	73	61	26	1.20	W-5-S	B III S2	屈葬?	不明	不明	不明	なし	歯

第18表 江戸時代墓坑一覧

面には、大きな石を2個とやや小さな石を使って、蓋状に石を密集させて並べている。遺物の出土状況：墓坑内からの出土遺物はない。集石から銭貨が1点出土している。埋葬状況：骨はほとんど出土しなかった。残存しているものでは頭骸骨と思われる骨片が出土しているだけで、埋葬体位を推定できる材料はない。周囲の墓坑の状況から、北頭位の屈葬と考えられる。

SH 06 (第13・90・99図、P L 12)

地区と位置：5区の北西部、IV K 13グリッドの北西部にあたる。墓坑集中箇所の中央部に位置する。検出：SM 16として検出。人骨の下に集石があり、SM 16の下部構造と考えたが、土層断面の状況から、下の墓坑につくものと考え、SH 06として調査した。層位：10 Y R暗褐色3/4細砂質土に褐色4/6ロームブロックが30%入る。墓坑の規模・形態：隅丸の方形を呈す。長軸73×短軸55×深さ56cm小型の墓坑である。底はほぼ平坦になっている。遺物の出土状況：銭貨と板材、用途不明の黒い石が出土している。いずれも頭部の右側に置かれるように出土している。銭貨は、6枚重りのものと8枚重りのものがあり、いずれの銭貨の下にも板材があり、一方からは鉄製の金具が出土している。棺材というよりも、副葬品を取めた箱のようなものと考えられる。わずかに浮くように出土しているがほぼ底面からの出土である。埋葬状況：人骨の遺存状況が悪く、はっきりしない部分があるが、墓坑の規模や歯の出土位置から北頭位の屈葬で、小児埋葬と考えられる。

S K 109 (第13・89図)

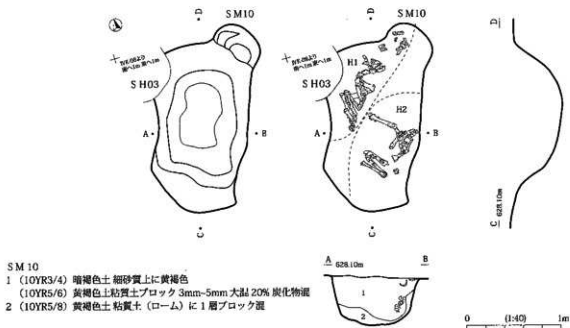
地区と位置：5区の西部、IV K 12グリッドの東側に位置する。墓坑集中部分の南側部分に位置する。検出：

Ⅲ層下部で検出。層位：単層。7.5 YR 褐色 4/4 細砂質土に、黄褐色ブロック 5/6 混入する。墓坑の規模・形態：長軸 73 × 短軸 61 × 深さ 26cm、楕円形の平面プランをもつ。底面は平坦である。墓坑上面に、30cm 大の礫が 2 個並べように入れられている。遺物の出土状況：遺物は出土していない。埋葬状況：西頭位と考えられるが、骨の依存状態が悪く、歯のみの出土ではっきりしない。歯の出土位置は、中央部からわずかに西に寄っている。墓坑の規模から考えて、小児の墓坑と考えられる。

(3) 馬埋葬の墓坑

SM 10 (第 13・91・99 図、P L 12)

地区と位置：5 区北西部、墓坑集中部の北端に位置する。西側で SH 03 や SK 106 と切りあうように位置する。東側で SM 11・21 と接する。検出：暗褐色土に褐色ブロック、炭化物の混入具合などで切り合いをたどった。切りあう部分が少なく明確に線引きはできなかったが、本址を SM 21、SH 03 いずれもが切ると判断した。SM 21 とはブロックの混入具合、SH 03 とは集石の関係などからである。層位：3 層下部で検出した。埋土は 2 層で、いずれも褐色ブロックを含む埋め戻し土である。墓坑の規模・形態：やや不整形な長方形を呈すが、北側に突出部がある。すり鉢状に中央部が一番深くなる。長軸 201 × 短軸 100 × 深さ 51cm の規模である。遺物の出土状況：埋土 1 層から天目茶碗片、元豊通宝 (第 99 図 83) が出土している。副葬されたという感じの出土状況ではない。埋葬状況：2 頭の馬が埋葬されている。南側を H 1、北側を H 2 として調査した。比較的骨の依存状態はよかったが、骨端部についてはつかめていない。H 1：頭部を東に向け、体は北方向に向いている。首を折り返したような状態である。H 2：H 1 同様頭を東に向け体は北方向に向いている。土層の状況から同時埋葬と考えられる。



第 91 図 石子原遺跡江戸時代馬墓遺構図

2 土坑

SK 101 (第13・92図)

位置:IVK 08 グリッドに位置する。検出:SD 01 と切りあうように方形の落ち込みが検出された。構造:残存部分で長軸 215 × 200 × 42cm、軸をほぼ東西方向 N - 86° - W にとる。断面はほぼ垂直に立ち上がる竪穴状を呈す。溝状の落ち込みがあり、本址の前に墓坑が作られていたものを本址が破壊した可能性がある。本址から出土した人骨は古い墓坑から遺されたものであろう。埋土の状況:1 ~ 3層に分層されるがいずれも褐色ブロックを含む暗褐色土で、人為的に埋めもどされている。遺物の出土状況:出土遺物はない。人骨が数点出土している。時期:埋土の様子から近世と考えられる。

SK 102 (第13・92図)

位置:IVK 03, 08 に位置する。検出:IV層上面で単独で検出されたが、一部かく乱を受けている。構造:わずかに東西方向に長いがほぼ円形で、すり鉢状の断面をもつ。58 × 52 × 26cm の規模である。埋土の状況:暗褐色土に褐色ブロックが入り、人為的に埋めもどされている。遺物の出土状況:出土遺物はない。時期:周辺の遺構との関係や埋土の様子から近世と考えられる。

SK 103 (第13・92図)

位置:IVK 08 グリッドに位置する。検出:SK 111 と接するように検出されたが切り合い関係はない。構造:76 × 54 × 30cm の規模で、楕円形の平面形を呈す。人骨の出土はなかったが、規模など類似遺構の形態から幼児用の墓坑の可能性も考えられる。埋土の状況:2層からなる。いずれも褐色土ブロックを含む人為埋土の状況土である。遺物の出土状況:出土遺物はない。時期:埋土の状況から近世と考えられる。

SK 104 (第13・92図)

位置:IVK 08 グリッドに位置する。検出:IV層上面で検出。構造:66 × 44 × 24cm の規模をもつ。楕円形の平面形である。SK 103 同様小児用の墓坑である可能性が考えられる。埋土の状況:褐色土ブロックを含む人為的な埋土である。遺物の出土状況:出土遺物はない。時期:埋土の状況から近世と考えられる。

SK 105 (第13・89図)

位置:IVK 08 グリッドに位置する。検出:SK 106 を切るように検出。構造:ほぼ円形、(34) × 30 × 14cm で小型の土坑である。埋土の状況:褐色土ブロックを含む人為的な埋土の状況である。遺物の出土状況:出土遺物はない。時期:埋土の様子から近世と考えられる。

SK 108 (第13・92図)

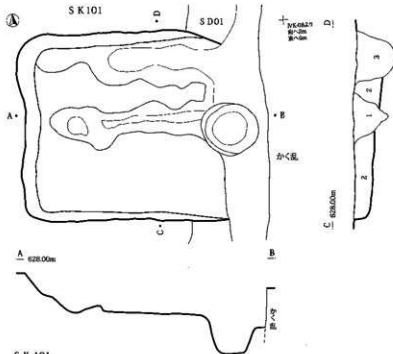
位置:IVK 12 グリッドに位置する。検出:SM 07 に接するように検出された。埋土の違いから SM 07 に切られると判断した。構造:62 × 46 × 30cm、楕円形の平面形である。出土した骨は細片であり、直接焼いたというよりも灰を処理した穴といった性格であろうか。埋土の状況:1層は炭化物、焼骨などを含む褐色土層。2層は褐色土なる。遺物の出土状況:出土遺物はない。焼けた骨が数点出土しているが、人かどうかは不明。時期:埋土から近世と考えられるが、後世のかく乱の可能性もある。

SK 111 (第13・92図)

位置:IVK 08 グリッドに位置する。検出:IV層上面において SK 103 に接するように検出された。構造:平面形は楕円形で、規模は 52 × 38 × 21cm。埋土の状況:暗褐色土に褐色土ブロックを含む人為的な埋土。炭化物が混在する。遺物の出土状況:遺物はない。時期:周辺遺構の様相と埋土から近世と考えられる。

SK 112 (第13・92図)

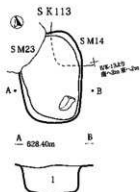
位置:IVK 13 グリッドに位置する。検出:SD 01、SM 20 と切り合う。本址の埋土には、炭化物が



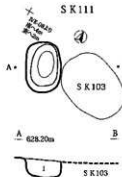
- SK 101
 1 (10YR3/4) 暗褐色土 細砂質(サラサラ)炭化物少混 褐色(10YR4/6)ブロック
 φ 5mm ~ 10mm 大 5%混
 2 (10YR3/4) 暗褐色土 細砂質(1層より粘質) 褐色(10YR4/6)ブロック 50%混
 5mm ~ 30mm 大
 3 (10YR) 暗褐色土 細砂質 しま状に褐色ブロックが入る、下層に多い



- SK 114
 1 (10YR4/3) にぶい黄褐色 粘質シルト~
 細砂質土に黄褐色(10YR5/8) ローム質
 土 30%混



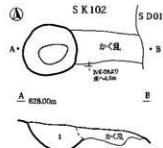
- SK 113
 1 (10YR3/3) 暗褐色土 細砂質土
 炭化物混(10YR4/6) 褐色土ブ
 ック 5mm ~ 3mm 大 5%混



- SK 111
 1 (10YR3/4) 暗褐色土 5mm 大
 ブロック混 炭化物混



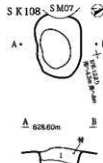
- SK 103
 1 (10YR4/4) 褐色土(細砂質やわらかい)
 に褐色(10YR4/6) ブロック混 10%
 2 (10YR4/4) 褐色土に褐色(10YR4/6)
 ブロック 30%混



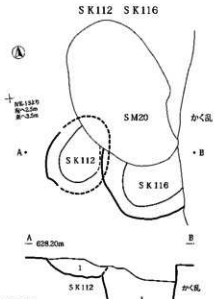
- SK 102
 1 (10YR3/4) 暗褐色土 5mm 大 褐色(10YR4/6)
 小ブロック 30%混 下層に 5mm 大の大ブロック
 混雑砂質非常にやわらかい



- SK 104
 1 (10YR4/4) 褐色土に
 褐色(10YR4/6) ブ
 ック 1cm ~ 5cm 大、
 50%混入、やわらかい
 細砂質土



- SK 108
 1 (7.5Y5/6) 褐色土炭
 化物 5mm 大 灰混
 焼けた骨あり
 2 (7.5Y5/6) 褐色土
 ローム質 粘質土
 やわらかい



- SK 116
 1 (10YR4/6) 褐色土
 ローム質土(3層)

第 92 図 石子原遺跡江戸時代土坑遺構図

0 1:40 1m

多量に入るので本址が一新らしいことがわかる。構造：直径80cmほどの不整な円形、深さ20cmである。SK 108と同様炭化物と焼骨が伴う。埋土の状況：炭化物を多量に含む暗褐色土の単層である。遺物の出土状況：出土遺物はない。時期：埋土の状況から近世と考えられる。

SK 113 (第13・92図)

位置：IV K 13グリッドに位置する。検出：SM 14、SM 23に切られるように検出された。埋土や人骨の出土状況からSK 113が切られる。また、SM 23にも同様に切られると判断したが、根拠に欠ける部分もある。構造：やや不整な長方形を呈す。96×62×31cmの規模である。埋土の状況：暗褐色土に褐色ブロック、炭化物が入る。人為的な埋土と考えられる。遺物の出土状況：出土遺物はない。時期：周匝の墓坑と同様な埋土、形態を有し、近世の遺構と考えられる。

SK 114 (第13・92図)

位置：IV K 22グリッドに位置する。検出：IV層中で検出。構造：円形の平面形で、66×56×58cmと深い。埋土の状況：人為的に埋めもどされた土である。遺物の出土状況：出土遺物はない。時期：調査区の西に単独で存在し、埋土も他の土坑と若干異なる。近世の遺構集中区であるので、一応、近世と考えた。

SK 116 (第13・92図)

位置：IV K 13グリッドに位置する。検出：SM 20、SK 112に切られる。構造：102×58×56cmの規模をもつ。埋土の状況：褐色土の単層である。遺物の出土状況：出土遺物はない。時期：人骨の残存とも考えられる風化した骨が出土しており、墓坑の可能性が高い。

3 溝 址

SD 01 (第13図、P L 12)

地区と位置：5調査区の北部を南北に走る溝である。IV K 03・08・13にかかる。検出：Ⅲ層下部で検出。溝の東側部分は、家の擁壁の建設の際破壊されており、全容ははっきりしない。暗褐色土の落ち込みである。層位：水の流れた痕跡はまったく認められない。土取りなどの痕跡の可能性も考えられる。溝の規模・形態：南北方向に直線的に延びる。北側は調査区域外へ、南側は、畑境の段差によりかく乱とともに収束してわからなくなる。東西19m以上、幅は残存部で1.5m、推定幅は3m程度と考えられる。深さは0.4mほどで、V字型の断面形である。遺物の出土状況：溝北端部に裸とともに多量の陶器の遺棄がみられた。陶器はいずれも破片で、接合例も少なく、破損した状態で遺棄されたものと思われる。3地点において、馬の骨が出土している。No.1地点では、上顎骨がほぼ完全な状態で出土している。No.2地点では、大型獣の四肢骨が出土しており、No.3地点では、馬の歯が出土している。陶器は北端部に集中して出土している。いずれも集石の中から破片の状態で検出された。馬の頭骨の横からの出土である。時期：出土陶器から江戸時代末期と考えられるが、遺物の集中箇所は調査区域外にも広がっており、必ずしも陶器の時期が溝の時期と一致するとは限らない。

4 遺構出土の遺物

SM 07 (第93図、P L 36・38)

鉄製品では、1は刀子で、先端部分を欠くがほぼ完形に近い。鞘に収められており、木質部が残存していた。2はハサミで、刃先は折れているが、ほぼ完形である。刃を閉じた状態で錆付いている。3は引き出しなどの引き手金具と考えられる。小型の金具なので手箱の引き手と考えられる。

銭貨が7枚出土している。4は背面に「文」字をもつ新寛永、5～8は「ハ」貝の新寛永、9は「ス」貝の古寛永である。6は康寧通寶と考えられる。

出土遺構	器種											重さ (g)	
	茶碗	碗(蓋)	皿	土瓶	徳利	灯明皿	片口	すり鉢	鍋	天目茶碗	壺		一輪挿し
SM 10										1			
SD 01	38	7	4	26	12	6	2	7	8	1	2	1	5573.6

第19表 江戸時代陶器出土数一覧

出土遺構	源來銭				寛永通寶				不明・その他	合計
	北宋銭	南宋	明銭	清銭	1期 古寛永	2期 文	3期 新寛永	不明		
SM 07				1	1	1	4			7
SM 08					2					2
SM 10	1									1
SM 15					5				1	6
SM 17		1			3		5	1		10
SM 18	5				6					11
SM 20					6					6
SM 22	1	2	2						1	6
SH 05	1									1
SH 06	12	1	1		1					15
遺構外								2		2
合計	20	4	3	1	1	23	1	9	3	67

第20表 遺構別出土銭貨一覧

11～13は数珠玉である。材質は不明である。

SM 08 (第93図、P L 36)

14・15は寛永通寶である。「ス」貝の古寛永である。

16は雁首と吸い口がセットで出土しており、羅字キセルと考えられる。雁首部分は楕形の火皿をもち、羅字との接合部に肩をもつタイプである。接合痕は左側にある。吸い口は小口部分をわずかに欠くが、ほぼ遺存している。やはり左側に接合部がある。

17は水晶製の玉である。本来は球状であったものを、破損後に再利用したものであろう。

SM 15 (第98図、P L 36)

6枚出土している。不明1点を除きいずれも「ス」貝の古寛永である。

SM 17 (第94図、P L 36・38)

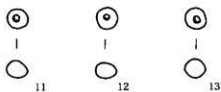
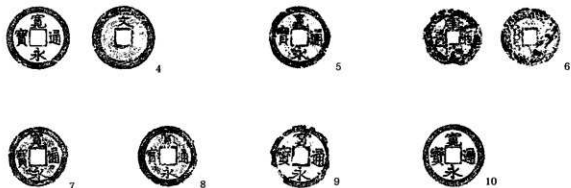
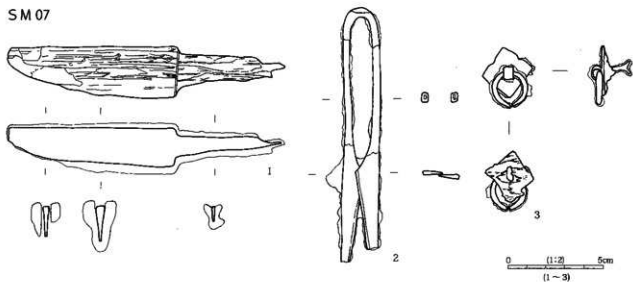
鉄製品では化粧道具などを中心に、建具類なども出土している。18は毛抜きと考えられる。先端部に向かってわずかに膨らむ。ただし、中に木質部が入っており、帯止めなどの金具の可能性も考えられる。19はハサミで、刃先は折れているが、ほぼ完形で出土している。握りの部分には有機質の付着が見られる。何か巻きつけられている。20は長方形で、中央に穿孔され、上半に木質部が付いている。右端部には小口部分が見えており、これ以上延びることはない。刃物類の取手であろうか。21は金具の一部と考えられるが、不明である。

銭貨は、金貨が1枚、銅銭は10枚出土している。22は金貨で、かなり磨耗しており使用されている。光次の横に「文」の文字がかすかに読み、元文一分金である。重さ3.3gである。24は太□□寶と読める。25～33は寛永通寶である。25・30が「ス」貝の古寛永、27・29・32・33は「ハ」貝の新寛永である。

34は径7cm、柄長5.6cmの手鏡である。銅製鋳製。鏡背文様は内帯に「露」の字を配し、その最終面のはらいをそのまま一周させ、團円としている。さらにその外帯の左右に唐草文を配している。唐草文は、ほぼ左右対称に見えるが微妙に異なっている。地は砂目地である。左側に「天下一上嶋作」の銘を鋳出している。柄には藤をていねいに巻きつけている。唐草文麗字入図柄鏡といえる。

木製品では23のサイコロが1点出土している。10×8×7mmと非常に小型である。角が風化しているが、立方体というよりも直方体に近い形状である。目は1を除いて、目の数だけ掘り込みを入れ

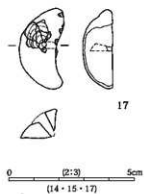
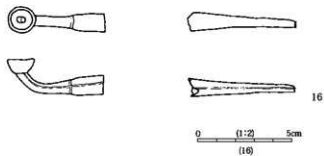
SM 07



SM 08

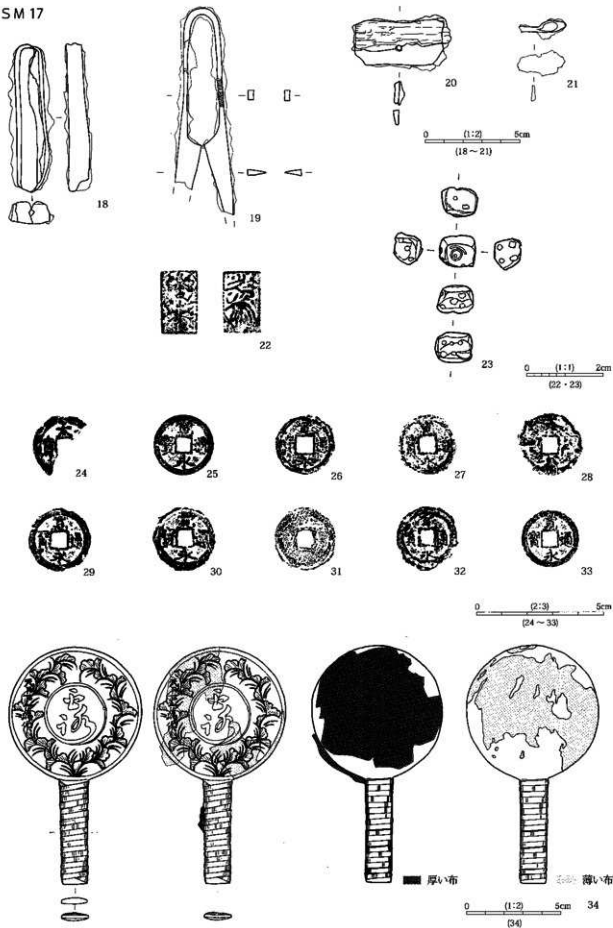


SM 08



第93図 石子原遺跡江戸時代出土遺物1

SM 17



第94図 石子原遺跡江戸時代出土遺物2

ているが、1は螺鈿状の細工を施してあり、二重に縁が廻っている。

布については、信州大繊維学部との協力を得て分析を行った。銭貨付着の布については、良好な結果を得ることができなかった。手鏡に付着した繊維は「苧麻」との分析結果を得ている。

石子原遺跡 繊維分析結果報告書

信州大学繊維学部大学院 後藤卓真、新田勇紀

分析装置：フーリエ変換型赤外分光光度計 IRPrestige-21 (SHIMADZU)

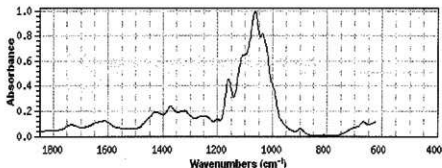
測定条件：波数範囲 4000-700 cm^{-1} 分解能 4 cm^{-1} 積算回数 50 回

手鏡に付着していた繊維は、江戸時代であることから「大麻が苧麻」ということが限定できる。この苧麻(第95図)、大麻(第96図)を中心にスペクトルデータベースとの比較を行なったところ「苧麻」の可能性が非常に高いと考えられる。

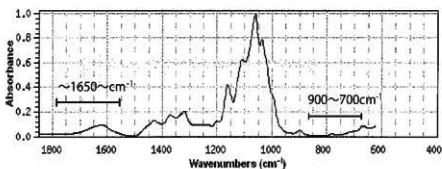
苧麻と大麻の大きな違いは 1650 cm^{-1} 付近のアミド基の吸収である。苧麻がピーク一つに対して大麻は2つのピークをもっている第97図に示す手鏡の繊維片の赤外吸収スペクトルは 1650 cm^{-1} のアミド基のピークが一つであった。よって、時代背景およびこの吸収から苧麻の可能性が非常に高いと考えられる。

寛永通宝の付着繊維については、赤外吸収スペクトルのノイズが大きくピークを判断するのが困難であったため同定にはいたらなかった。スペクトルを綺麗に出すために測定条件を考慮する必要がある。

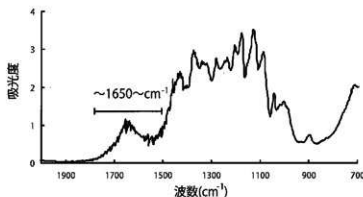
加えて狭い範囲での繊維については数 μ ではあるが採取して他の分析装置との結果を比較検討する必要がある。



第95図 苧麻の赤外吸収スペクトル



第96図 大麻の赤外吸収スペクトル



第97図 手鏡付着繊維の赤外吸収スペクトル

SM 18 (第98図、P L 36～38)

銭貨は錆付いた状態で2個所から出土している。40～44と45～50である。40～44は渡来銭、45～50は寛永通寶で、古寛永が5枚、新寛永が1枚出土している。41は熙寧元寶(真書)、40・42・43は元豐通寶(行書)、44は祥符通寶と考えられる。

SM 19 (第98図、P L 38)

57はL字状に曲がった棒状の鉄製品である。

SM 20 (第98図、P L 37)

6枚が出土している。いずれも古寛永(51～56)である。

SM 22 (第98図、P L 37)

6枚まとまって出土した。58は永樂通寶、61は大定通寶で、金銭と明銭で構成される。

SM 24 (第98図)

62は雁首部分で、吸い口は検出されなかったので破損品を副葬した可能性がある。雁首部分は、深い碗形の火皿をもち、首部分が比較的長く垂直に立ちがある。小口部分を欠く。このほか板状鉄製品の小破片で、器種は不明がある。

SM 25 (第98図)

63は小型のハサミである。

SH 06 (第99図、P L 37・38)

5枚(64～68)と8枚(69～76)のかたまりで出土した。内容は、紹聖元寶(64)、元祐通寶(66)、元豐通寶(67)、治平元寶(篆書)(68)、淳化元寶(71)、熙寧元寶(72)、元豐通寶(73)、天聖元寶(74)、政和通寶(76)で、いずれも北宋銭である。

木片が2点出土しているが、いずれもSH 06の墓坑内部で隣接して出土しており、同一製品の一部分と考えられる。78は3.7×2.3cm、79は3.6×3.1cmの大きさである。いずれも漆の膜のような黒色の付着がみられる。また、異なる材質を張り合わせているように、木目の方向が異なっている。このことから、棺桶の材を構成するようなものではなく、小形の箱などの一部分と考えられる。

81は粘板岩の小さな石で、加工は何もないが、他の遺物と共存していることから副葬したものと考えられる。

SM 10 (第99図、P L 37)

銭貨と天目茶碗破片が出土している。83は元豐通寶と読める。行書で書かれている。84は天目茶碗の口縁部を欠く体部破片である。体部は直線的に立ち上がる。17世紀ごろの形態である。

SD 01 (P L 12)

日用雑器全般が出土した。いずれも瀬戸美濃系の幕末に属すもので、茶碗、碗、蛇の目高台をもつ皿、片口、すり鉢、土瓶、徳利、一輪挿し、灯明皿などがある。出土器種数は第13表にある。

5 遺構外出土の遺物

銭貨が3点出土している。第99図85は天聖元寶、86・87は寛永通寶の破片である。

このほか銅製品として、かく乱層からキセルが2点出土している。88は雁首部分で、火皿は比較的深い碗形を呈す。緩やかなカーブを描きながら小口に続く。わずかに折れにより変形している。このほか、図示しなかったが、陶製の雁首も出土している。火皿と首部分の境が明瞭でなく、皿形の火皿である。小口部分を欠く。首部分はやや扁平で、側面に渦巻状の模様を配している。

SM 15



35



36



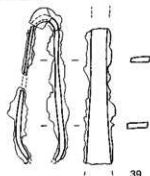
37



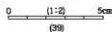
38



SM 18



39



40



41



42



43



44



45



46



47



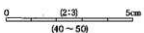
48



49



50



SM 20



51



52



53



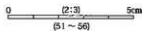
54



55



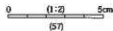
56



SM 19



57

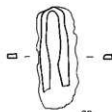


SM 24

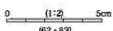


62

SM 25



63



SM 22



58



59



60



61

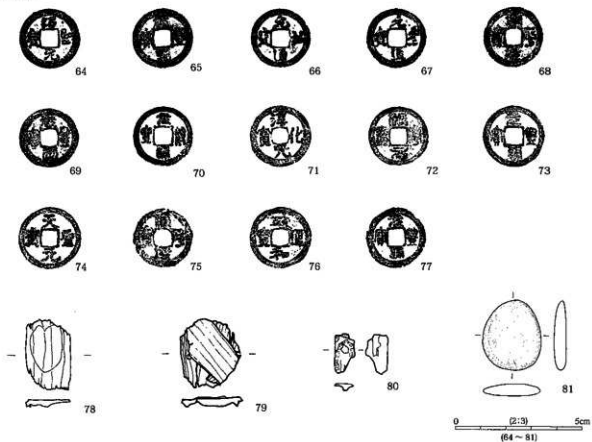


第98図 石子原遺跡江戸時代出土遺物3

図版	番号	遺構名	材質	名称	最大長(外径)(cm)	最大幅(内径)(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	取上げ番号	管理番号
93	4	SM07	銅	寛永通寶	2.5	2	0.1	2.7	No.2	22
93	5	SM07	銅	寛永通寶	2.45	1.95	0.15	3.5	No.3	23
93	6	SM07	銅	康寧通寶	2.3	1.6	0.1	2.5	No.5	24
93	7	SM07	銅	寛永通寶	2.37	1.9	0.1	2.9	No.7-2	26
93	8	SM07	銅	寛永通寶	2.4	1.9	0.1	2.4	No.7-3	27
93	9	SM07	銅	寛永通寶	2.5	1.95	0.12	2.7	28	
93	10	SM07	銅	寛永通寶	2.3	1.9	0.1	2.4	No.7-1	25
93	14	SM08	銅	寛永通寶	2.45	1.95	0.12	3.1	No.1	29
93	15	SM08	銅	寛永通寶	2.5	1.95	0.1	3	No.2	30
99	83	SM10	銅	元豊通寶	2.42	1.9	0.1	2.7	No.1	33
98	35	SM15	銅	寛永通寶	2.5	2	0.15	2.8	No.1-1	34
98	36	SM15	銅	寛永通寶	2.45	1.9	0.15	3.3	No.1-2	35
98	37	SM15	銅	寛永通寶	2.45	2	0.12	4.4	No.1-3	36
		SM15	鉄?	不明			0.2		No.1-4	37
98	38	SM15	銅	寛永通寶	2.4	2	0.1	2.8	No.1-5	38
		SM15	銅	寛永通寶	2.5	2	0.15	4.2	No.1-6	39
94	22	SM17	金	元文一分金	1.1	0.9		3.3	No.4	93
94	24	SM17	銅	太平通寶	-2.35	-1.8	0.12	-0.7	No.1	40
94	25	SM17	銅	寛永通寶	2.5	1.85	0.1	3.6	No.2	41
94	26	SM17	銅	寛永通寶	2.35	1.9	0.1	2	No.3-1	42
94	27	SM17	銅	寛永通寶	2.35	1.9	0.1	2.5	No.3-2	43
94	28	SM17	銅	寛永通寶	2.5	1.9	0.1	3.1	No.8-1	44
94	29	SM17	銅	寛永通寶	2.45	2	0.1	2.8	No.8-2	45
94	30	SM17	銅	寛永通寶	2.45	1.9	0.1	2.9	No.8-3	46
94	31	SM17	銅	寛永通寶?	2.45	1.9	0.1	3.2	No.8-4	47
94	32	SM17	銅	寛永通寶	2.4	1.85	0.1	2.5	No.8-5	48
94	33	SM17	銅	寛永通寶	2.28	1.8	0.12	2.5	No.11	49
98	40	SM18	銅	元豊通寶	2.45	1.9	0.1	2.6	No.1-1	50
98	41	SM18	銅	康寧元寶	2.35	1.9	0.12	3.2	No.1-2	51
98	42	SM18	銅	元豊通寶	2.4	1.9	0.1	2.7	No.1-3	52
98	43	SM18	銅	元豊通寶	2.4	2	0.1	3.3	No.1-4	53
98	44	SM18	銅	祥符通寶	2.45	1.8	0.1	2.3	No.1-5	54
98	45	SM18	銅	寛永通寶	2.45	1.95	0.1	3.7	No.2-1	55
98	46	SM18	銅	寛永通寶	2.45	1.95	0.1	3.1	No.2-2	56
98	47	SM18	銅	寛永通寶	2.4	1.9	0.1	3.7	No.2-3	57
98	48	SM18	銅	寛永通寶	2.5	2	0.1	3.2	No.2-4	58
98	49	SM18	銅	寛永通寶	2.5	2	0.12	4.8	No.2-5	59
98	50	SM18	銅	寛永通寶	2.4	1.9	0.11	3	No.2-6	60
98	51	SM20	銅	寛永通寶	2.45	1.95	0.1	3.1	No.1	61
98	52	SM20	銅	寛永通寶	2.47	1.95	0.13	4.1	No.2-1	62
98	53	SM20	銅	寛永通寶	2.5	2	0.17	4.9	No.2-2	63
98	54	SM20	銅	寛永通寶	2.5	2	0.17	3.9	No.2-3	64
98	55	SM20	銅	寛永通寶	2.5	2	0.11	3.1	No.2-4	65
98	56	SM20	銅	寛永通寶	2.45	1.9	0.11	2.8	No.3	66
98	58	SM22	銅	永樂通寶	2.2	1.95	0.09	1.2	No.1-1	67
98	59	SM22	銅	慶元通寶	2.22	1.9	0.1	2.2	No.1-2	68
98	60	SM22	銅	永樂通寶	2.5	1.95	0.15	3.9	No.1-3	69
98	61	SM22	銅	大定通寶	2.4	2.1	0.1	2.3	No.1-5	71
		SM22	銅	不明	-2.45	-1.85	0.15	-2.6	No.1-4	70
		SM22	銅	聖宗元寶	2.35	1.8	0.1	2.9	No.1-6	72
99	82	SH05	銅	皇宋通寶	2.4	2.1	0.1	1.8	74	
99	64	SH06	銅	紹聖元寶	2.38	1.8	0.1	2.4	No.2-1	75
99	65	SH06	銅	元豊通寶	2.4	1.8	0.15	4.6	No.2-2	76
99	66	SH06	銅	元祐通寶	2.35	1.85	0.11	3.5	No.2-3	77
99	67	SH06	銅	元豊通寶	2.37	1.8	0.1	2.7	No.2-4	78
99	68	SH06	銅	治平元寶(篆書)	2.35	1.85	0.1	3	No.2-5	79
99	69	SH06	銅	元豊通寶	2.38	1.7	0.11	3.2	No.2-6	80
99	70	SH06	銅	元符通寶(篆書)	2.4	1.9	0.1	2.7	No.3-1	81
99	71	SH06	銅	淳化元寶	2.45	1.9	0.1	2.5	No.3-2	82
99	72	SH06	銅	熙寧元寶(篆書)	2.37	2	0.11	3.6	No.3-3	83
99	73	SH06	銅	元豊通寶(篆書)	2.42	2	0.1	3.1	No.3-4	84
99	74	SH06	銅	天聖元寶	2.5	2	0.1	3.8	No.3-5	85
99	75	SH06	銅	治平元寶(篆書)	2.31	1.8	0.12	3.1	No.3-6	86
99	76	SH06	銅	政和通寶	2.48	2	0.1	2.7	No.3-7	87
99	77	SH06	銅	元豊通寶	2.41	1.8	0.1	3	No.3-8	88
99	85	耕土	銅	天聖元寶	2.45	2	0.1	-1.7		90
99	86	耕土	銅	寛永通寶	2.38	1.9	0.1	-1.5		92
99	87	耕土	銅	寛永通寶	2.5	2	0.1	-1.4		94

第21表 出土銭貨一覽

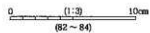
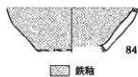
SH 06



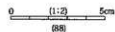
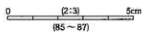
SH 05



SM 10



遺構外出土遺物



第 99 図 石子原遺跡江戸時代出土遺物 4

遺構番号	性別	年齢区分	備 考
SM 07	不明	成人(熟年)	やや高齢、大白歯の咬合面の一部平坦化。
SM 08	男性	成人(老齢)	下顎歯は脱落して歯槽が閉鎖、やや扁平な大臼歯。
SM 09	男性?	成人	左右の側頭骨強。顔は上を向いていたらしい。
SM 11	不明	不明	保存状態不良。
SM 12	男性	成人(熟年)	推定身長164センチ、M3萌出、下顎のM2、M3は生前脱落。
SM 13	女性	成人(青年?)	咬耗少ない。歯石あり。推定身長約165センチ。
SM 14	男性	成人(青年?) 20歳代	顕著な歯石あり、顔はやや右下向き、咬耗少ない、推定身長160センチ。
SM 15	女性	成人	推定身長152.7センチ。
SM 16	男性?	成人(青年?)	うつ伏せに埋葬、咬耗少ない。
SM 17	女性	成人(老齢)	左下顎歯はすべて脱落。上顎歯に歯石の沈着顕著。
SM 18	不明	成人(青年?)	整齊、M3萌出完了、ただし咬耗はほとんどない。
SM 19	男性	成人(壮年~熟年)	M3萌出。咬耗はかなり進んでいる。
SM 20	不明	不明	保存状態悪く性別・年齢ともに不明。
SM 22	不明	成人	M3萌出。M2はやや咬耗している(象牙質の露出)。
SM 23	不明	幼児(11~13歳)	混合歯列、M2の萌出中。
SM 24	不明	少年?	少なくとも15歳以上、咬耗は少なくともさほど高齢ではない。
SH 03	男性?	幼児(10歳程度)	
SH 05	男性	成人	うつ伏せに埋葬されている。M3萌出するも咬耗が少ない。歯石あり。
SH 06	不明	幼児	歯のみ(混合歯列)。
SK 101	不明	成人	他からの流れ込みか。顎蓋片(後頭部)と四肢骨片のみ。
SK 106	不明	幼児(6歳以上)	側頭骨體部と歯のみ。
SK 107	不明	幼児(6~10歳)	頭蓋骨の一部、下顎骨、混合歯列。
SK 109	不明	不明	歯の破片数点のみ。
SK 112	不明	不明	頭蓋骨後頭部、左右大臼歯、左右磨骨。
SM 10		成獣と老獣	ウマ(1体分ともう一体の下顎骨)。
SD 01-No.1			ウマ成獣(6~7歳)、犬歯がない(メス?)。
SD 01-No.2			大型陸生獣四肢骨片(約5センチ)。
SD 01-No.3			ウマ成獣(下顎骨M1またはM2)。

第22表 江戸時代墓坑出土骨一覽

第6節 成果と課題

1 縄文時代早期の遺構と集落について

(1) 住居跡

平面形は円形のもものと小判形のものがある。基本的には円形のプランで、東海以西にみられる同じ時期の住居平面プランと同類と考えられる。

規模はもっとも大きなSB 04が短軸で6m、長軸は7mある。SB 01は6.18×(4.9以上)m、SB 06が6.9×5.95mで大型の部類に入るのに対して、SB 03:4.7×4.3m、SB 05:4.9×3.55m、SQ 04:5.6×5.1mのような小型住居がある。比較的大型の住居跡が多いのが特徴である。飯田市の美女遺跡(飯田市教委1998)では、6mから7mの住居跡と3mから4mの住居跡がみられ、共通するあり方である。

住居内の施設としては、一時的な炉と考えられるものはあるが、恒久的な炉と認定できるようなものは認められない。柱穴ははっきりしない。屋外に焼土坑が多くある点を考慮すれば、基本的には屋外炉が中心となっている。

(2) 集石炉と焼土坑

集石炉と焼土跡(火床)、焼土坑(炉穴)が本遺跡では混在している。

焼土坑には、船底状の断面をもつもの、一方が深くなるものおよび段構造を有するものの3タイプがある。これらは連続してつくられており、この分布の中にSK 84・85の集石炉が含まれる。焼土坑と形態的に近似しており、焼土坑の中には集石炉として使われたものもあると考えられる。

集石炉は、SK 84・85のように楕円形で二段の掘り方をもつ土坑に小型の礫を入れたタイプのものと、SH 01・02のようにすり鉢状の掘り方をもち、底面に比較的大きな礫を並べ、その上に礫を入れるタイプがある。SH 01が住居と切り合うことや二種類の集石炉の分布が異なることから、前者から後者へと変遷が考えられる。

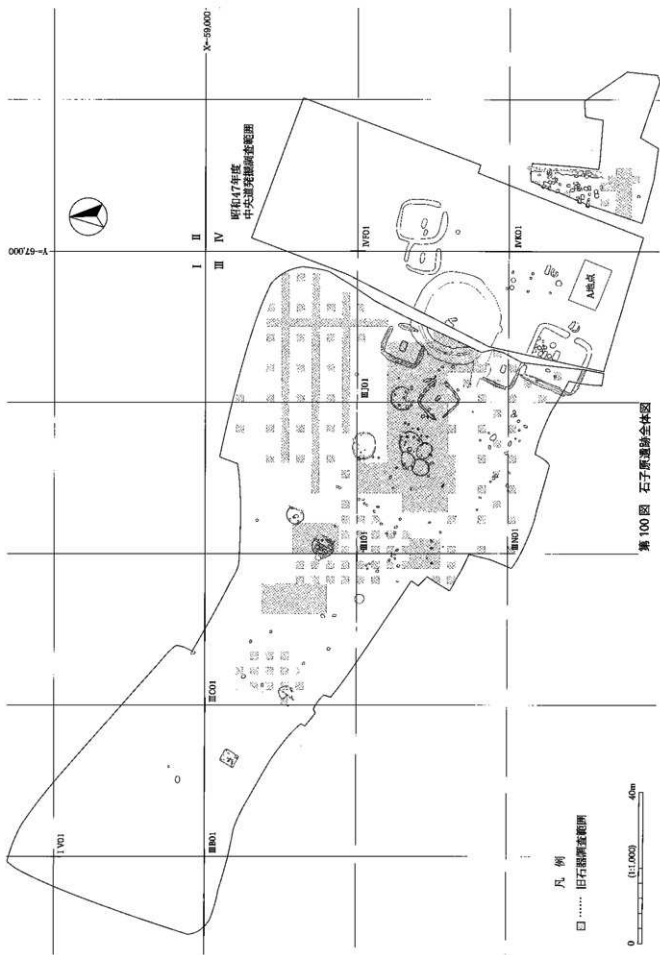
近隣の遺跡をみると、飯田市美女遺跡では、集石炉と炉穴が混在しており、煙道付炉穴となる可能性のあるものが検出されている。飯島町赤坂遺跡(遠那1973)では集石炉がみられる。集石炉の北側には小竪穴が並び、焼土が検出されていることから、炉穴との並存も想定される。三つ木遺跡(林1984)では立野式期の竪穴2基と12基の集石炉のほか多数の集石が検出され、集石炉が卓越している。

他県の例をみてみると、三重県の大鼻遺跡(三重県埋文センター1994a)、西出遺跡(三重県埋文センター1994b)、奈良県の大川遺跡(山添村教委1989)のあり方と異なる。大鼻・西出遺跡は炉穴のみで集石炉をともなっておらず、煙道付炉穴も検出されている。一方、大川遺跡は焼土をともなう土坑があるものの、集石炉のみである。両者の混在が立野期の特徴といえる。

(3) 集落の分布(第100図)

立野式期の集落構成は、住居、集石炉、火床、焼土坑(炉穴)および土坑からなる。遺構ごとの内訳は、住居跡6軒、遺物集中区3箇所、集石炉4基、焼土坑41基、土坑は中期に属するものもわずかに含まれるが73基である。ただし、方形周溝墓から中央道本線部分にかけての一带に縄文時代早期の遺物が分布している。これまでの調査では確認されていないが、縄文時代早期の住居などの遺構があった可能性もある。

確実に認定できた住居跡は6軒であるが、遺物集中区のうち2箇所は住居とみてよい。つまり8軒の



竪穴住居が2ないし3期の間に存在していたことになる。一時期に限ってみれば2から4軒程度で集落を構成していたと考えられる。

住居は馬背状の丘陵の中央部に、集石炉、火床および焼土坑（炉穴）は住居から一定の空白地帯を置きながら周囲に分布する。特に、東から南側にまとまって存在する。S Q 02の周囲にはS F 52からS F 61が広がり、S Q 03やS Q 04の南側にはS F 64からS F 71、S F 74からS F 83、S F 94からS F 96と3つのグループがまとまる。さらに、S B 01から06の南側にはS F 21・72・73、S F 89～93が分布している。南東の緩やかな斜面に分布する。これ以东は焼土坑の分布は希薄となり、これら焼土坑群に代わってS H 01・02が分布する。これら集石は平坦面に築かれている。

土坑は住居群の南側に分布し、これもまた、10mほどの空白部分をおいて分布している。焼土跡とはほとんど重なることがなく、その東側に分布がしている。

遺構のありようから少なくとも2期に分けることが可能である。S H 01・S B 02・03・04・05と切り合い関係をもつS B 04がもっとも古く、遺構の配置などからS H 01と関連があると考えられるS B 06、同じくS H 02と関連があると考えられるS B 01が新しくなると思われる。S B 02・03・05については切り合い関係を十分つかむことができなかった。

参考文献

- 岡谷市教育委員会 1987 『縄沢押型文遺跡調査研究報告書』
 飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』
 日本道路公団名古屋建設局、長野県教育委員会 1974 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 昭和48年度』
 林 茂樹 1984 『三つ木遺跡の押型文土器と摺糸文土器』『中部高地の考古学Ⅲ』
 遠部藤麻呂 1973 『上伊那郡赤坂遺跡における押型文土器と遺構』『長野県考古学会誌』16
 三重県埋蔵文化財センター 1994a 『大岸遺跡』
 三重県埋蔵文化財センター 1994b 『一般国道42号松阪・気多バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』

2 石子原遺跡の押型文土器群について

本遺跡で観察された立野式土器の特徴を述べる。

山形文：山形文は、基本的に3種類、山形文A、山形文B、山形文Cである。山形文Aが、立野式にともなう山形文で、小ぶりの山形文Bは、明らかに胎土が異なり焼成もよい。また山形文Cもまた、他地域に起源をもつ山形文と考えられる。

格子目文：格子目文は、正格子目、あるいは斜格子目文と呼ばれる格子目文Aの割合が低く、長方形の格子目文Bの割合が高いことである。岐阜県中津川市落合五郎遺跡（中津川市教委1998）や静岡県菊川町（現菊川市）三沢西原遺跡（菊川町教委1985）に類例がみられ、東海地方との関係を強くうかがわせる。

楕円文：まず、楕円文自体の比率が低く、主体とはならない。また、市松状の楕円の配置をするものがほとんどで、斜格子目の割り付けをもつものである。列状に配されるのは1点のみである。

市松文：長方形の市松文を主体としている。正方形のものは確認できなかった。

押型文以外の土器：摺糸文、縄文、繊維を含む無紋土器が出土している。摺糸文は、非常に細い原体を使用しており、網目状の摺糸文もみられる。

口縁部形態：口縁部は、コの字状の口縁部をもつものⅠ類、と口縁部が斜めに切り落とされ先端が尖るⅡ類、先端が丸くなるものⅢ類がみられる。口縁部端部の刻みは、斜め方向の刻みを入れるものと縦方向の刻みを入れるものがある。縦方向の刻みはⅡ類に特徴的である。楕円、市松文、ネガティブ施文の土器に刻みをもつものが多い。おそらく、口縁部縄文の代用として斜め方向の刻みと考えられ、Ⅱ類

口縁部を強調した縦方向の刻みに変化したと考えられる。もっとも古いSB04では、3種類が確認される。SB06の山形文は、I類口縁部であるが、口唇部に山形文を施し、口縁部端にも横方向の山形を狭く施文している例がある。

器形：全体形状をうかがえるものはなかったが、口縁部に屈曲が強く外開するものと直線的に外開するものの2種類が認められる。

文様構成：文様構成は基本的には口縁部縦方向十、胴部横位をとると考えられるが、全体像を知りえる破片はない。異種併用の文様構成はみられず、異方向施文のみである。

胎土の特徴：石英・長石・雲母を多量に含み、混和材の割合が高く、非常にもろい。色調は、赤褐色を基調としている。混和材の少ない粘土を土器の表面に塗るものもみられる。

石子原遺跡出土の押形文土器は、以上の特徴から、立野遺跡出土の押形文の文様や構成に近似し、立野式であることに異論はないであろう。

立野式の特徴としてあげられているのは、次のi)からvii)である。

- i) 器壁が厚い。
 - ii) 胎土に石英、長石、雲母の微粉末を混和材として入れる。
 - iii) 押形文の原体に文様を彫刻し、回転押捺された土器面には凹文様として表現される市松文、ネガティブ文がある。
 - iv) 原体に文様を陰刻し、土器表面に凸文様として表現される格子目文、山形文、楕円文等があり、格子目文は斜格子目文、山形は山が大きく、凸部が細く、凹部が中広、楕円文は原体に縦刻みのものが特徴的である。凸文様のものは口縁部から縦位密接施文が多い。横位や横位+縦位となるものもある。
 - v) 口縁部と口縁部端部に刻み目がつくものがある。
 - vi) 押形文のほかに縄文や燃糸文の土器が伴出する。
 - vii) 燃り糸文の中に細くて縦位密接施文と極細の燃糸による網目状文がみられる。
- いずれの条件にも合致している。

立野式の変遷については、下伊那に美女遺跡、立野遺跡、隣接する木曾では稻荷沢遺跡（日義村教委2003）、二本木遺跡（日義村教委2003）、最中上遺跡（上松町教委1993）など発掘調査や報告書が増加し、矢野健一（矢野1993a, 1993b）や長野県考古学会のシンポジウム（神村・馬場他1995）などの成果によりいくつかの段階に分けることが可能となってきた。しかし、判別不能な土器が多く文様組成の比率などを明らかにすることができず、また、十分な検討をおこなうこともできなかったことから立野式における位置づけは今後の課題としておきたい。

参考文献

- 中津川市教育委員会 1988 『落合五郎遺跡発掘調査報告書』
 静岡県菊川市教育委員会（現菊川市）1985 『三沢西原遺跡』
 馬場保之 1995 「立野遺跡出土の立野式土器について」『長野県考古学会誌』77・78
 飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』
 日義村教育委員会 2003 『木曾 稻荷沢遺跡（付・二本木遺跡）』
 上松町教育委員会、木曾郡町村会 1993 『木曾郡上松町 最中上遺跡』
 矢野健一 1993a 「押型土器の起源に関する新視点」『研究紀要』第2号 三重県埋蔵文化財センター
 1993b 「押型土器の起源と変遷—いわゆるネガティブな楕円文を有する押型土器群の再検討—」『考古学雑誌』第78巻第4号
 神村 透 1995 「立野式土器その四十有余年—型式観、編年観の軌跡」『長野県考古学会誌』77・78

3 石子原遺跡の石器群について

(1) 旧石器時代の石器群

中央道西宮線建設にともなう調査報告(長野県教委 1973 A)で、石器群のうち「押型文土器伴出?」と提示されている資料がある。すなわち、押型文土坑群付近(B地点)と古墳マウンド下の包含層から出土したホルンフェルス(玄武岩と報告されている)の石器群である。報告書は「その出土状態からみると、押型文土器との関連が強いのであるが、同時期のほかの遺跡からはこの種の石器は出土しておらず、石器製作技術も特殊であるので、直ちに同時期とすることにためらいをもつ。旧石器時代のものである可能性も強い」と記述している。

また、旧石器時代の報告(長野県教委 1973 B)で、岡村道雄氏は上記の石器群について、B地点と古墳マウンドから押型文土器が出土していることから押型文土器にともなう石器群の可能性があり、としながらもその編年の位置はまったく不明であり、A地点の石器群との共通性がないことから、A地点とは「異なった時期の所屬と考えられる。」とだけ記載しており、旧石器時代の石器である可能性を完全に否定していない。そして、この石器群の特徴を「安山岩、黒雲母片岩石英が使用されている。礫、礫片、大型剥片を素材とするチョッピング・ツールが利器の三分の一を占める。」としている。

今回の報告で刃器としたものは、B地点および古墳マウンドから出土した「チョッパー」、「チョッピング・ツール」の石器の特徴と石材が類似している。本報告書では、出土状況からこれらを押型文土器にともなう石器群としているが(註1)、隣接する竹佐中原遺跡の旧石器時代の石器群と石材が共通する。また、今回の調査で旧石器時代の包含層であるIV層からはホルンフェルス製の剥片が出土している。飯田市内では、縄文時代の石器石材としては稀な石材であることから、ホルンフェルス製の石器群が旧石器時代の石器であるとの指摘もある。

ホルンフェルス製の石器群に関する問題は、隣接する竹佐中原遺跡の旧石器時代石器群にかかわる問題でもあり、本報告では問題の提示をするにとどめておく。

石子原遺跡の旧石器時代の関連資料は、中央道西宮線で調査されたA地点の旧石器時代の石器群、今回出土した黒曜石ナイフ形石器及びホルンフェルスと下呂石を中心とした石器群、さらに、今回の調査でも同類のものが出土した時期不明とされる中央道西宮線B地点のホルンフェルス製石器群の三群である。これらの詳細な検討は、現在整理作業を進めている竹佐中原遺跡の報告書の中でおこなう予定である。

(2) 押型文土器群にともなう石器群

今回の発掘調査区では、立野式押型文土器が主体となり、石器の大半がこれにともなうものである。ただし、縄文時代中期の竪穴住居跡も1棟検出されており、石器群の中には中期の石器も含まれている。第3節3項での検討に基づき、早期押型文土器にともなう石器を、石礫および石礫未成品、削器、異形石器、楔形石器、局部磨製石斧、横刃型石器、刃器、礫器、二次加工がある剥片、微細な剥離がある剥片、特殊磨石、磨石、凹石、敲石、台石・石皿であるとし、それ以外の器種は早期以外の石器であると判断した。なお、押型文土器の竪穴住居跡覆土出土の石器組成を第23表に示した。剥片、碎片、石核を除く石器は313点であり、これらは、石子原遺跡押型文土器(立野式)の純粋な石器群ととらえることができる。

中央道西宮線建設にともなう発掘調査(昭和47年)では、旧石器時代と縄文時代の石器が報告されている。縄文時代押型文土器にともなう石器では「横刃形石器」、「局部磨製石斧」、「小形の磨石斧(磨製石斧)」、「周辺を磨いた板状の石器」、「特殊磨石」、「砥石」、「矢柄研磨器(有溝砥石、曾根形コア(楔形石器)、打石礫(石礫)、スクレイパー(削器)、石匙をあげている(註2)。詳細な出土点数は不明であるが、横刃形石器が多いと報告されている。このほかに遺構外から出土した「打石斧(打製石斧)」、「横刃形石器」、「磨石」を報

遺構名	石		未製品	石匙	削器	扶入削器	扶入石匙	異形石匙	楔形石匙	局部磨製石斧	横刃型石匙	刃器	礮器	二次加工がある剥片	微細な剥離がある剥片	剥片	砕片	石核	原石	特殊磨石	磨石	凹石	敲石	石皿	台石	合計
	石	石																								
SB01	7	3		1	1				14	7	1	3	2	10	107	7		2		1		1	1	1	169	
SB02	3	1						7	3				2	4	110	16	2	3	2	1	1				155	
SB03	8	1		2		2	15	1	3	2			1	112	15			1	1						164	
SB04	8	5		3			20		15	2	1	2	4	208	22	5	3	4	1					1	304	
SB05	5			1			4	1	5				2	2	87	7		1	2	1					118	
SB02~SB05	1																		2						3	
SB06	18	6	1	2	1		1	41		5	7	1	8	2	311	64	3		1	2	1				475	
合計	50	16	1	1	9	1	2	1	101	2	38	12	5	16	23	935	131	10	9	12	7	2	1	1	2	1388

第23表 押型文期の竪穴住居跡覆土出土石器組成

告している。遺構外からは、中期、後期の土器も出土しており、報告書では、出土した「打石斧」（打製石斧）は中期以降の石器であることを示唆している。また、押型文土器にともなう「石匙」を報告しているが、実測図をみる限り、刃部加工が認められず3cmに満たない小形石器であることから、石匙とは認めがたい。石子原遺跡の調査では、石匙が押型文にともなうと考えられる状況は認められない。石匙が早期の石器組成に含まれるか否かという点を除けば、石子原遺跡の早期押型文の石器器種組成にかかわる見解は、前回の調査とおおむね整合する。

(3) 押型文土器にともなう石器群の石材組成について

立野式期の遺構出土の石器を中心に、早期押型文にともなう石器群の石材組成についてまとめる（第24・25表）。石子原遺跡で使用される石材は、遠方より運び込まれたもの（遠隔地石材）と、地元で調達されたもの（在地石材）とがある。石材は器種により使い分けがなされている。大形剥片石器（横刃形石器、刃器）と礮器では、硬砂岩・ホルンフェルスが主に使用され、磨石類、台石・石皿では、硬砂岩・花崗岩、安山岩が使用される。これらの石材はいずれも天竜川水系で採取できる在地石材である。これに対し、小形剥片石器（石匙、削器類、扶入石器、楔形石器、二次加工がある剥片、微細な剥離がある剥片）では、黒曜石を主体とし、下呂石、チャート、頁岩、石英岩が使用されており、遠隔地石材である黒曜石と下呂石が主体を占める。以下に主な石材の本遺跡での特徴と産出地について簡単に触れておきたい。

① 下呂石（ガラス質黒雲母流紋岩）

下呂石は岐阜県下呂市湯ヶ峰山（1,067m）周辺の露頭や転石として産出する。玻璃（ハリ）質安山岩などの石材名で報告されているものもある。

本遺跡で出土する下呂石には縞状のものと縞の入らない緻密なものの2種類がある。縞模様は長石が風化により、縞模様が目立ってくる。

竪穴住居内での占有率は約5パーセントであるが、SQ 04（立野式期の遺物集中個所）のように60パーセントを超えるものもある。ちなみに、神坂峠を挟んだ岐阜県中津川市落合五郎遺跡では、押型文期の竪穴住居跡内から出土した石匙の3分の2が下呂石である。

下呂石を獲得するには木曾川・飛騨川流域の転石を利用するか、直接湯ヶ峰山の露頭から入手するしかない。遺跡内出土の剥片を観察すると、ごくわずかであるが円礮の自然面を残した剥片が見受けられる。

② 黒曜石

石材の中でもっとも使用頻度が多い石材である。肉眼で確認した中でも、黒く輝くもの、縞状のもの、

第3章 石子原遺跡

器種 石材	器種																合計										
	石鏡	石器未成品	未製品	石匙	削器	抉入削器	抉入石器	異形石器	楔形石器	尾節磨製石斧	横刃型石種	刃器	礮器	二次加工がある剥片	繊細な剥片がある剥片	剥片		砕片	石核	原石	特殊産石	磨石	凹石	敲石	石皿	台石	
チャート	3				1											12	2										18
ホルンフェルス											2	10	1			30											43
安山岩																5				1	1						7
下呂石	5	1			1			1	1						1	55											65
花崗岩																					4	3	2		1	1	11
凝灰岩												1			1									1			3
硬砂岩											34	2	2		54						5	2					99
硬砂岩?																											1
黒曜石	41	15	1	1	6	1	2	100						15	23	759	127	10	8	1							1109
石英岩	1												1			7			1								10
粘板岩										1																	1
不明																4				1	1						6
頁岩				1												1											2
頁岩?																2											2
片麻岩										1						3	2									1	7
無珪晶質安山岩																1											1
緑色凝灰岩										1	1					1											3
合計	50	16	1	1	9	1	2	1	101	2	38	12	5	16	23	935	131	10	9	12	7	2	1	1	2		1388

第24表 押型文明の竪穴住居跡覆土出土の器種別石材組成

器種 遺構名	器種																合計								
	黒曜石	下呂石	チャート	珪質凝灰岩	珪質頁岩	ホルンフェルス	メノウ?	無珪晶質安山岩	安山岩	多孔質安山岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	玉髓	硬砂岩	硬砂岩?	砂岩		水晶	石英岩	頁岩	粘板岩	片麻岩	花崗岩	流紋岩	不明
SB 01	103	31				6		1		1	2			14				3	2			1	2	3	169
SB 02	118	7	2			6			1					12							6	2		1	155
SB 03	129	8	1			11						1		9				1	1	1		2			164
SB 04	256	5	2			9					1			26								2		1	304
SB 05	81	5	13			2		1		1				11							1	2		1	118
SB 02~SB 05	1													1	1										3
SB 06	420	9	1			9		1	4					26				3	1			1			475
SB 08	2					1					1			5							1	3			13
SF 60	1																								1
SF 73	1	1	1																						3
SF 83	1																								1
SF 91	1																								1
SF 93	3	1																							4
SF 94	2	1																							3
SH 01	6	1												1								1			9
SK 01	3	1				3					2			2		1									12
SK 02	1																								1
SK 03	1	1																							2
SK 10	3																								3
SK 26	1																								1
SK 31	1	1																							1
SK 38	1																								1
SK 43	2																								2
SK 51	4																								4
SK 76	1																								1
SK 84	8	1	1																						10
SK 85	1																								1
SK 86	1	2																							3
SQ 02	356	13	6											1											376
SQ 03	127	5										1													133
SQ 04	62	113				12				1				5											192
遺構外(旧石器を含む)	1513	195	54	2	2	96	1		7	2	12	3	2	108		1	2	12	8	9	2	5	5	4	2045
合計	3208	402	81	2	2	155	1	1	15	2	18	7	2	221	1	2	2	21	12	10	11	20	5	10	4211

第25表 出土地点別石材組成

透明度の高いものなどいくつかの産地が推定できる。他の石材に対し、少数ではあるが、原石や石核が認められる。立野式期の遺構内から出土した黒曜石 300 点の分析結果は、諏訪屋ヶ台群が 220 点と圧倒的に多く、和田高松沢群、和田小深沢群、和田鷹山群、和田土屋嶺西群・南群、和田芙蓉ライト群が 27 点、その他は、測定不能であった。分析の詳細は「131 頁「黒曜石の産地同定について」を参照していただきたい。

③ ホルンフェルス

刃器、礫器の主体的な石材である。風化によって暗褐色を呈すが、内面は黒色の石で、石英岩脈の縞模様特徴的である。隣接する竹佐中原遺跡出土の旧石器と共通する石材で、一見するとその差異は見出すことができないほどである。ただ、風化の度合いなどに若干の違いがみられるものがある。このホルンフェルス製の石器が出土する遺跡は阿知川流域に多くみられる。神坂峠を挟んだ落合五郎遺跡など岐阜県側でもホルンフェルス製の石器が報告されているが、実見はしていない。

④ 硬砂岩

同時期の美女遺跡などと比較すると刃器、礫器などは少なく、大形の剥片を素材とした横刃型石器、特殊磨石の主体的な石材である。天竜川で採取できる。

⑤ 片麻岩・花崗岩

特殊磨石、磨石、台石などに利用される。阿知川、天竜川で採取できる。

⑥ その他

少数ではあるが、チャート、無斑晶質安山岩などは、産地が不明であるが当該期の希少石材として注意しておきたい。

(4) 周辺地域の押型文土器にともなう石器の器種組成について

第 26 表に、周辺遺跡の押型文土器にともなう器種組成を示した。当該期の竪穴住居跡の覆土一括資料、または、押型文土器の純粋な包含層（厳密には他時期の土器を若干含む）の一括資料における器種組成である。遺跡別器種組成の数値は、筆者が、各遺跡の報告書の実測図と記載内容から器種を判断し、石子原遺跡器種分類に換算した数値であり（註 3）、器種組成の傾向をみる程度の資料であることをご理解いただきたい。以下に各遺跡の器種組成の概要を記す。

遺跡名	所在地	器種																合計	文献								
		石核	石核未成品	有尖礫器	未製品	礫器	形器	横刃型石器	刃器	礫器	挿入刃器	異形石器	楔形石器	磨製石斧	打製石斧	二次加工がある剥片	微細な剥片がある剥片			礫り切り用石器	砥石(有溝砥石を含む)	特殊磨石	磨石	凹石	敲石	石皿	台石
石子原遺跡 (早期竪穴住居)	長野県 飯田市	50	17		1	0	1	9	38	12	5	1	2	1	102	2	16	22	0	12	7	2	1	1	2	304	本書
美女遺跡 (早期竪穴住居)	長野県 飯田市	72			3	1	2	65	415	○			17	9	1	320	246	18	29	83	5	2	1288+a		文献12		
落合五郎遺跡 (早期包含層: III d層)	岐阜県 中津川市	21	2		1	1	30	14	30	39			42	2	5	47	48	1	10	18	35	19	6	371	文献7		
鳥林遺跡 (早期竪穴住居)	長野県 千曲市	32			1		12	29					37	1	2	○		2	7	21		1	145+a		文献9		
向林遺跡 (早期竪穴住居)	長野県 茅野市	22	13		2		6	1	3				51	1				1	14	6	6			126	文献14		
碓氷遺跡 (IV次調査包含層)	長野県 岡谷市	372	123		14	2	1	22	○	6			314	3		269		22	67	4	9	6	28	1262+a	文献15		
向隆台遺跡 (3号竪穴住居)	長野県 塩尻市	10			6		18	32					54	2	1	41	8	1	17	21	7	6	6	230	文献8		

○は存在するが、出土点数が不明なもの

第 26 表 押型文期の石器器種組成

① 美女遺跡（長野県飯田市）

押型文立野式期の竪穴住居跡 12 棟と同時期の土坑多数が検出された。遺跡全体で土器の主体は押型文土器であるが、それ以外に、早期後半、前期、中期後半、後期、晩期終末の土器が出土している。

報告書に掲載された表から集計したものであるが、集計表の器種別の点数が本文の記載内容と整合しない部分もあり（註4）、石子原遺跡との対比が困難である。しかしながら、石子原遺跡と同時期の石器群であり、重要な比較データである。なお、当該期の住居覆土からは押型文期の土器が主体となるが、早期後葉から前期後葉の土器が平均 6.7% 混入していると報告されている。

細部については検討できていないが、美女遺跡の石器群は、器種組成が石子原遺跡と類似しており、硬砂岩製の横刃型石器が卓越すること、石籬などの小形剥片石器には黒曜石が多く一定量の下呂石が含まれていることなど石子原遺跡と石器群の様相が類似している。ただし、石子原遺跡にホルンフェルス製の刃器が一定量存在するのに対し、美女遺跡では刃器に相当する石器は硬砂岩を用いており、ホルンフェルス製石器が認められないようである。

② 落合五郎遺跡（岐阜県中津川市）

石子原遺跡とは神坂峠（恵那山）を挟んで、直線で 22 km の距離にある。縄文時代前期の包含層の下層から押型文土器を主体とした早期前半の単純な遺物包含層（ⅢD層）が検出された。剥片、破片、石核を除いた石器が 371 点出土している。大形石器では、砂岩、ホルンフェルスを用いた横刃型石器、刃器、礫器が多数出土している。小形剥片石器では、下呂石を主体とし、黒曜石、チャートが用いられ、石材組成は石子原遺跡に類似する。小形の板状の砥石が多数出土している点が、石子原遺跡と異なる。

③ 鳥林遺跡（長野県千曲市）

石核、剥片、破片を除いて約 1000 点の石器が出土している。押型文土器を主体としているが、早期沈線文、早期末～前期前葉、中期加曾利 E 式、後期堀之内式土器が約 1 割混在している。押型文以外の石器が混在することから、表には立野式期の 2 棟の竪穴住居内から出土した石器の器種組成を示した。「打製石斧」1 点は、一側縁の加工のみであり前期以降に認められる打製石斧とは異なり、石子原遺跡で横刃型石器としたものに近い。

竪穴住居内から刃器が出土していないが、遺構外で 7 点の刃器（頁岩、安山岩など）が出土している。また、竪穴住居出土石器の石材組成を示すことができないが、遺跡全体の出土石器をみると、大形剥片石器では頁岩と安山岩が主体であり、小形剥片石器では黒曜石を主体とし、チャートが次いで多い石材となる。

④ 向林遺跡（長野県茅野市）

表には、立野式押型文期の竪穴式住居 9 棟の器種組成を示した。大形剥片石器では、横刃型石器と刃器が少数認められる。石材組成の詳細は不明であるが、小形剥片石器の大半は黒曜石である。

⑤ 樋沢遺跡（IV次調査）（長野県岡谷市）

樋沢式を主体とする遺跡である。平成 10 年度に調査された包含層の出土石器の点数を示した。包含層には早期沈線文系土器、条痕文系土器を少数混在している。小形石器では黒曜石が 97% を占め、チャートがわずかに認められ、数点の下呂石が出土していることが記載されている。石籬が他遺跡に比べて多くみられるが、372 点中 163 点が土壌水洗により検出されたものであり、土壌水洗をおこなっていない遺跡と直接対比できないことも注意しておきたい。また、87 点の局部磨製石籬が存在しており、石子原遺跡では局部磨製石斧が 1 点も出土していないのと対照的である。

横刃型石器、刃器、礫器については、実測図等の掲載がなく、詳細は不明であるが、I 次～III 次調査の報告も参考にすると、これらの器種がいずれも少数ではあるが出土していることが確認できる。その他の器種組成についても石子原遺跡と同じとみてよいが、組成率に違いがあるようである。

⑥ 向陽台遺跡（長野県塩尻市）

種式式土器を主体とする第3号住居跡の器種組成を示した。小形石器では黒曜石が大半を占め、チャートがわずかに認められる。石鏃では局部磨製が1点含まれる。石鏃が他遺跡に比べ多く出土しているが、いずれも剥片端部にわずかに調整加工を施し尖端を作り出した、旧石器時代採掘器に類したものであり、棒状の錐部をもつものは認められない。黒曜石以外の不定形石器と報告されているものの中に、横刃型石器、刃器、礫器の類が認められるが、これらの器種は石子原遺跡に比べると少量である。

⑦ 山の神遺跡（長野県大町市）

表には掲載していないが、細久保式を主体とする遺跡である。小形剥片石器では、チャート、頁岩、黒曜石を主体とする。チャート製と石英製の異形部分磨製石器が41点出土しており、上記の押型土器の遺跡とは異なる器種組成を示す。頁岩を主体的に用いた横刃型石器、刃器、礫器が多数出土している点に注意したい。これらの器種は、山の神遺跡では「刃器」「搔器」と報告されているものである。また、有溝砥石が7点出土している。

(5) 今後の課題

石器研究における障害として小栗氏が「石器自身の器種分類にあたっては統一された基準が確立されておらず、報告者ごとに分類・記載方法がまちまちである」（小栗1983）とし、それから20年近く過ぎた近年においても、会田氏が指摘するとおり「統一的な名称の設定は叫ばれているが遅々として進んでいない」（会田2000）状況である。長野県周辺の中部高地においても、押型土器にともなう石器資料が多数調査・報告されている。しかしながら、器種分類および石材名称の不統一や遺構単位の器種組成・石材組成が詳細に報告されないなど、立野式にともなう石器群を明らかにできるような比較検討は進んでいない。20年以上前の課題が現在に積み残されている状況である。膨大な縄文時代の石器が発掘されている現在、石器が史料となりうるために、器種分類、石材名称の統一をおこなわなければならない。

石子原遺跡は早期押型土器にともなう純粋な石器群を抽出するための良好な遺跡である。立野式期に限定した石器群として、他遺跡との比較検討をできる資料を提示したつもりであるが、石器製作技術にかかわる資料操作（接合作業など）はほとんどおこなっていないなど残した課題も多い。

本遺跡の整理作業で残した課題のひとつに、刃器、礫器、横刃型石器などホルンフェルス製石器の時期の問題がある。石器製作技術を理解することで、器種分類を再度整理し、押型土器にともなう石器群の特徴を明らかにする必要がある。

註1. 近年の押型土器にともなう石器群の研究で、押型土器にともなう礫器を論じるものがみられる（角張2003、池谷2003、萩2001・2003、町田2003）。

註2. 長野県教育委員会1973 A・Bでの器種名を「」で示し、本報告書の器種名称と異なる場合は（ ）内に本報告書の器種名を示した。

註3. 原典の報告書の器種分類をもとに、報告書の記載内容から、石子原遺跡の器種組成に換算したものである。器種名を変更した器種について、換算の根拠を以下に記す。以下の記述で、「」内の器種名が原典の報告書の器種名、括弧がない器種名は本遺跡での器種名である。

①→ 美女遺跡：集計表の「微細剥離」の内、硬砂岩、緑色岩を横刃型石器、黒曜石、珪岩、玻璃質安山岩（下呂石）を微細な剥離がある剥片とした。集計表の「搔器」（削器の誤りか）には削器、刃器、横刃型石器が含まれ、硬砂岩、緑色岩を刃器、横刃型石器とし、珪岩、黒曜石、チャート、下呂石などを削器とした。「石核」の中には刃器が含まれる。「石核」24点の内1点の黒曜石を除いては、硬砂岩、緑色岩など刃器と同じ石材であり、実測図のみ限り、石子原遺跡の刃器にあたるものが確認されるが、点数が把握できないため石核とした。

②→ 落合五郎遺跡：「斧状石器」を礫器、「礫器様石器」を刃器、「スクレイパーⅠ型」の内、砂岩、ホルンフェルス、頁岩を横刃型石器、その他の石材を削器とした。「スクレイパーⅡ型」を使用痕がある剥片、「スクレイパーⅢ型」を模

形石器とした。

- ③→ 鳥林遺跡：「刃器1種」を微細な刻線がある剥片、「刃器2種」を削器、「剥片A」を楔形石器、「大形刃器」を横刃型石器、「礫器」を刃器とした。
- ④→ 向林遺跡：「礫器1類」を刃器、「両極打法による砕片」を楔形石器、「磨石Ⅰ・Ⅱ類」を磨石、「磨石Ⅲ・Ⅳ類」を特殊磨石とした。
- ⑤→ 樋沢遺跡Ⅳ次調査・向陽台遺跡：「不定形石器」（チャート、黒曜石製）は①類を削器または搔器、②類から④類を二次加工がある剥片、⑤類を微細な刻線がある剥片とした。「砥石」のうち厚い板状のものを台石とした。頁岩、砂岩、凝灰岩の「不定形石器」を横刃型石器、刃器、礫器とした。
- 註4. 掘削と削器について、本文の各石器の記載器種名と86頁～89頁の集計表の点数が整合しない。また、集計表では礫器が記載されていないが、本文の記載では礫器が複数報告されている。

引用・参考文献

- 1 長野県教育委員会 1973 A 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一飯田市市内 その2ー』
- 2 長野県教育委員会 1973 B 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一飯田市市内 その3ー 石子原遺跡の旧石器』
- 3 八木光則 1976 「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』28-4
- 4 小葉一夫 1983 「縄文時代早期後半における石器群の様相」『研究論集』Ⅱ
- 5 斉藤幸恵 1987 「押型文系土器文化の石器群とその性格」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』
- 6 岡谷市教育委員会 1987 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』
- 7 中津川市教育委員会 1988 『落合五郎遺跡発掘調査報告書』
- 8 塩尻市教育委員会 1988 『一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 9 長野県埋蔵文化財センター 1994 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13ー更埴市内・長野市内その1ー』
- 10 鶴田典昭 1995 「押型文土器及び微糸文土器にともなう石器」『長野県考古学会誌』77・78
- 11 町田勝則 1995 「中部日本における縄文時代石器文化の黎明」『長野県考古学会誌』77・78
- 12 飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』
- 13 神村 透 1999 「特殊磨石・折損特殊磨石・スタンプ形石器」『信濃』51-10
- 14 茅野市教育委員会 1999 『向林遺跡』
- 15 岡谷市教育委員会・塩尻市教育委員会 2000 『樋沢遺跡』
- 16 会田 進 2000 「縄文時代早期の「石摺り石」（いしずりいし）ーいわゆる「穀摺り石」の形態分類と使用痕の分析」『樋沢遺跡』岡谷市教育委員会・塩尻市教育委員会
- 17 荻 幸二 2001 「縄文時代早期の大分平野出土の礫器に関する一考察」『FRONTIER』No.3 海部考古学研究会
- 18 角張淳一 2003 「礫核石器分析遠望」『利根川』24・25
- 19 池谷勝典 2003 「礫核石器の使用痕」『利根川』24・25
- 20 荻 幸二 2003 「縄文時代早期の大分平野出土の礫器に関する一考察（2）」『利根川』24・25
- 21 町田勝則 2003 「礫器に関する論文3編を読んで」『利根川』24・25
- 22 長野県埋蔵文化財センター 2003 『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書2ー大町市内その1ー山の神遺跡』

4 古墳時代の方形周溝墓

方形周溝墓は昭和47年の調査も含めて、全部で6基見つかっており、地形的にみても周辺に広がらないことから、この周溝墓群が6基からなることがわかる。

それらはいずれも方形の平面形をもつが、陸橋部の位置や数などが異なり、3つの形態に分類が可能である。A類は陸橋部を2箇所もち、方形周溝墓は規模も小さく、主体部を西側に向ける。A類は2号方形周溝墓とSM05で、陸橋部はちょうど左右対称の位置にある。陸橋部をひとつもつタイプ、これは辺の中央部に陸橋があるC類と、コーナーにくるB類に分けられる。B類は中型の規模をもつ。やはり主体部を西に向ける。B類方形周溝墓は1号方形周溝墓、SM06、SM4で、SM4は全体像がはっきりしないが、規模や陸橋部から本類に属すと思われる。SM06と1号方形周溝墓もまた、陸橋部の位置は左

右対称になっている。C類は最大規模をもち、やはり主体部を西に向ける。SM 03が本類に属す。

これら6基の方形周溝墓は、隣接する2基ずつが群をなすように展開している。このことから、2系列の墓群が存在していることがわかる。さらに、これらの方周溝墓が古墳を取り巻くような分布を見せる。1号方形周溝墓と2号方形周溝墓、SM 05とSM 06、SM 04とSM 03(3号方形周溝墓)である。

1号方形周溝墓は2号方形周溝墓の周溝を共有あるいは壊すようにつくられており、2号方形周溝墓から1号方形周溝墓への連続的な流れをつかむことができる。A類方形周溝墓からB類方形周溝墓への変遷を確認できる。またSM 06は石子原古墳の周溝に破壊されており、古墳よりも明らかに先行することがわかる。SM 05とSM 06は溝の共有こそみられないが、隣接して構築されており、1号方形周溝墓から2号方形周溝墓への変遷と同じように、A類方形周溝墓とB類方形周溝墓がセットとなり、同様に変遷するものと考えられる。SM 04とSM 03についても、溝を共有するかのようにSM 04からSM 03(3号方形周溝墓)への連続的な移行をとらえることができる。B類方形周溝墓から規模を拡大しながらC類方形周溝墓へ変遷していったものと考えられる(第101図)。

A類方形周溝墓から規模を拡大しながらB類へ、さらに古墳に匹敵するような規模をもつC類へと変遷していると考えられ、さらに、石子原古墳につながるものと考えられる。

時期であるが、縄文時代押型文期の遺物を除けば遺物はほとんど出土しておらず、時期の決定が難しい。そこで、下伊那地域の方周溝墓を山下の分析(2001)をもとに概観する。石子原古墳の時期は、出土遺物から6世紀前半と考えられるので、この時期までには方周溝墓も終焉を迎えていることは確かである。

A類は埴原遺跡群1・2号や下原V号、黒田垣外5号、城2号、田圃SM 11・20、八幡原2号、はりつけ原SM 2などで検出されており、弥生時代後期後半を中心に古墳時代前期にみられる。

B類は瑠璃寺前、角田原1・2号、埴原遺跡群南原、恒川B、黒田垣外8・9号、田圃SM 07、八幡原11・14・24号、小垣外1号および宮の先I・Ⅲなどで検出されている。やはり、弥生時代後期後半を中心に古墳時代前期にみられる。

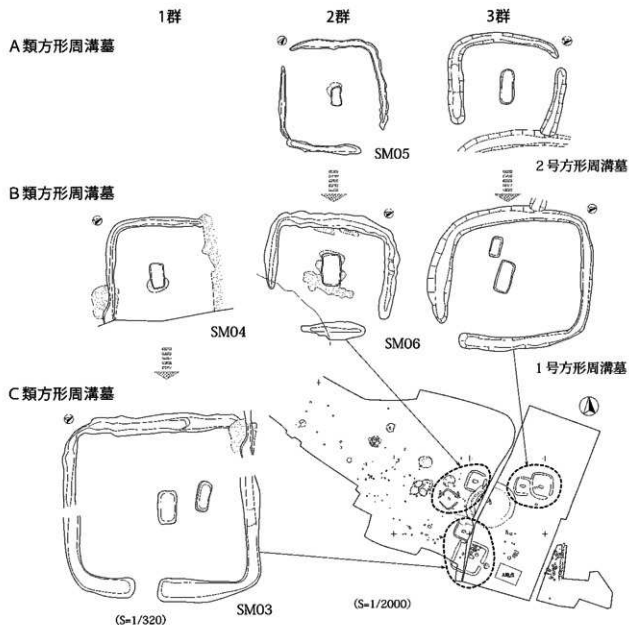
C類は的場、出原西部、広庭、田村原、伊久間原、埴原、黒田垣外、ミカド、楯爪、権現堂、田井座、天伯、清水、田圃、八幡原、滝沢井尻およびはりつけ原などで確認されている。下伊那地方でもっとも普遍的にみられる方周溝墓である。時期のはっきりしないものが多いが、やはり弥生時代後期後半から古墳時代にかけてみられる。はりつけ原遺跡はC類の割合が高い。黒田垣外遺跡(飯田市教委2001)の方周溝墓1の主体部は木炭棺であり、石子原遺跡の2号方形周溝墓と共通する。

弥生後期にはA・B・C類の方周溝墓がみられ、古墳時代中期まで続いており、形態から時期を限定することはできない。

山下の成果(2002)によれば、「古墳時代は、集落から離れたところに墓域を確保し、前方後方墳と似た立地を示す」ことが明らかにされている。このことから、古墳時代と考えられる住居の存在や集落から離れた高いところに立地する点を考慮するならば、古墳時代と考えることができる。ただし、主体部の規模から、伸展帯を想定できるような規模ではないので、古墳時代としてもそれほど下らないものと考えられる。

参考文献

- 長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田市市内 その2—』
 飯田市教育委員会 2001 『黒田垣外遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・見城垣外遺跡』
 山下誠一 2001 『飯田盆地における周溝墓の動向』『飯田市美術博物館研究紀要』第11号
 2002 『飯田盆地における周溝墓再論』『飯田市美術博物館研究紀要』第12号



第101図 方形周溝墓形態別変遷図

5 近世墓群について

(1) 墓坑の形態

墓坑底面の平面形でその形態分類をおこなった。

A類 長楕円形 長軸比1:2.0以上の墓坑

B類 長楕円 長軸比2.0以下の墓坑

C類 不整長方形 短辺の長さが異なりわずかに台形を呈す墓坑

長軸が150cm以上の墓坑をI群、150cm以下95cm以上をII群とした。95cm以下をIII群とした。また、集石をともなうものをSとし、上面に集石をもつものをS1、人骨の直上にもつものをS2とした。I群は成人、II群は幼児を埋葬したと思われる。

A I類墓坑 … SM 07、SM 10、SM 16

B I S 2土坑 … SM 20

B II 類墓坑 … SM 08, SM 09, SM 11, SM 13, SM 15, SM 22, SM 23, SM 24, SM 25

B II S 1 類土坑… SH 05

B III 類墓坑 … SM 12, SM 21, SK 106, SK 107, SK 108

B III S 1 類墓坑… SH 03, SH 04, SH 06

B III S 2 類墓坑… SK 109

C II 類墓坑 … SM 14, SM 17, SM 18, SM 19

A類からC類までいずれも墓坑も棺桶を想定できるような人骨の出土状況を示しておらず、素掘りの墓坑と考えることができる。

(2) 埋葬形態

伸展葬A 墓坑A類に対応する埋葬方法。良好な事例はないが、SM 07が唯一の例である。

屈葬A B類墓坑に対応する埋葬方法。足を折り曲げ胸につけるようにした埋葬形態。

屈葬B B類・C類墓坑に対応する埋葬方法。正座の状態をそのまま横のようにした埋葬方法。墓坑の掘り方にも影響を与えている。

屈葬C C類墓坑に対応する埋葬方法。屈葬Bに類似するが、ひざを立てた状態で埋葬する方法、B類のバリエイションのひとつと考えられる。

屈葬D B類墓坑に対応する埋葬方法。屈葬であるが、うつ伏せの状態で埋葬した特異な形態。集石をとまなうものもあり、死因など特別な場合が想定される。

(3) 墓坑群の時期

近世墓出土の遺物は、銭貨を中心に鉄製品と若干の石製品などがともなう。陶器類の出土はなく、時期の決定には銭貨を中心に考えなければならない。銭貨は、渡来銭と寛永通宝が出土している。渡来銭は、北宋銭を中心として、明銭、清銭が出土している。

出土銭から大きく、3期に分けることができる。

1期は、渡来銭のみで構成される。SM 22, SH 06, (SM 10) などがある。元豊通宝などの北総銭、永楽通宝などの明銭などが入る。1608年には永楽通宝使用禁止令、1670年には渡来銭使用禁止令などが出されており16世紀から17世紀と考えることができる。

2期は、渡来銭と古寛永あるいは、古寛永で構成される。SM 18, SM 08, SM 15, SM 20, SM 25 などがある。SM 18が代表的で、SM 18からは二つのまとまりで銭貨が出土している。ひとつは、元豊通宝3、熙寧通宝1、祥符通宝1の5点構成、もうひとつは古寛永の6点構成である。17世紀後半と考えられる。

3期は、古寛永と新寛永、清銭で構成される。SM 07, SM 13, SM 17 などがある。SM 07からは、清銭と「文銭」を含む新寛永が出土している。古寛永がわずかに含まれる。SM 17からは、元文一分金が出土している。また、SM 17からは鏡が出土している。鏡の鏡面指数（鏡面/総長）は、0.78と鏡面の占める割合がかなり大きくなっている。前田洋子の分類（1977）によればV類に分類される値で、江戸時代後期の作となる。又、銘の「天下第一嶋作」からは、天下第一を使用していることから、「天下第一」銘使用禁止の触書（1682年）以前の作と1772年の復活以後のいずれかと考えられる。鏡面指数などから江戸時代後期の可能性がある。中野政樹の鏡師名寄（1973）によると、上島和泉守、上島和泉、上島和泉守藤原久共、上島越後守、上島山城守藤原金広などの銘が見える。上島越後守は大阪の鏡師である。以上のことから3期は、18世紀以降と考えられる。

伸展葬A

SM07



屈葬A

SM13



屈葬B

SM17



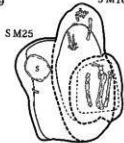
屈葬C

SM19



屈葬D

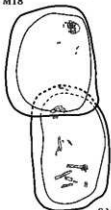
SM16



SM12



SM18



SM15



SH05



SM14



SM08

SM24



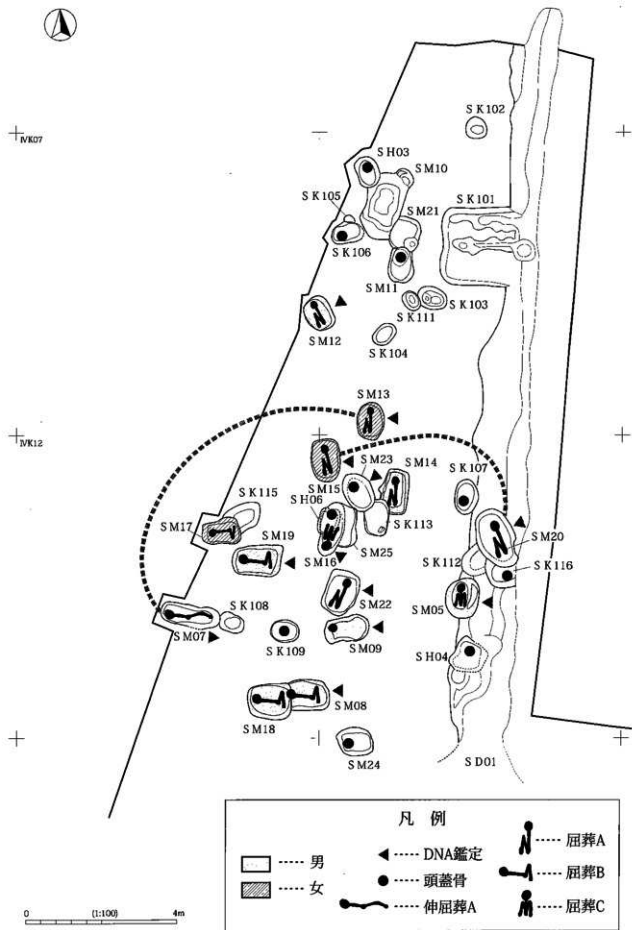
SM22



SM20



第102図 埋葬形態分類図



第103図 石子原遺跡5区遺構配置図

(4) 墓坑の変遷

B・C類墓坑が、1期から3期まで継続し、A類墓坑が遅れて出現する。ただし、A類墓坑はSM07のみであり、一般的ではない。このため、B・C類墓坑というきわめて近似した形態の墓坑で占められる。埋葬方法も、側臥屈葬を基本とし、棺桶などはともなわない。屈葬には、墓坑の形態によって若干の違いを見せる。屈葬Aは、B類墓坑に、屈葬BはC類墓坑に対応する。この埋葬方法の違いは、時期差というよりも集団の違いを表すと考えられ、屈葬Aは北側に、屈葬Bは、西に頭位をとる（第103図）。また、頭位方向にも違いがみられる。屈葬Aは北に、屈葬Bは、西に頭位をとる。この埋葬方法に違いは、副葬品にも現れており、屈葬Bは、副葬品をともなうのに対して、屈葬Aは、副葬品がないか、あっても銭貨のみの場合が多い。屈葬Dは、うつ伏せに埋葬される特異な埋葬方法であり、死因に何らかの原因が求められる。また集石をともなう墓坑には、小型の幼児埋葬のものが多くみられる。

副葬される六道銭は、1期から認められ、SM22は、6枚、SH06は、8枚と6枚の二つのまとまりで副葬されている。2期になるとSM18は6枚、SM20もまた6枚となる。3期になるとSM07が7枚、SM17が9枚となるが、ばらばらな出土状態になり、6枚1セットとして埋納されていない。

下伊那地方の墓坑は、飯田市北の原遺跡・開善寺境内遺跡・月の木遺跡・細新遺跡など江戸時代後半期の遺構の様相が明らかになっており、今回の調査によって、江戸時代の前半期の様相が明らかになったといえる。

(5) SM17の被葬者と墓坑群の性格

被葬者については明らかにできる史料は残念ながら皆無である。そのため、出土遺物や墓坑群の性格など考古学的に迫らざるをえない。

出土遺物としては非常に豊富な内容をもっているが、そのうち2点、金貨の副葬、柄鏡などの化粧道具のセットを副葬しているということである。

金貨をともなう例としては、東京都港区三井家墓所10号（東京都港区教委1992）から慶應長一分金、同じく港区長岡藩主牧野家墓所1号墓（東京都港区教委1986）から元文一分金2、3号墓から元文一分金3点出土している。これらの例は、いずれも旗本・大名クラスの例である。北九州市の宗玄寺跡（北九州市文化事業団1995）の例では、壙棺埋葬の81号墓から慶應長一分金が1点出土している。宗玄寺は禅宗の寺であり武士階級の墓と考えられている。これらの事例と本遺跡の17号墓を比べると、埋葬施設をもたないことなどから、階級的に優位に立っていたとはみなすことはできない。むしろ、他の墓坑と同様で区別することができない。このことから階層的な差異は見出せず、単に経済的な差異であったのであったと考えられる。塩尻市の矢口遺跡では、検出面からであるが、一分金の模造品が出土していることや、江戸遺跡でも一分金出土例が増えつつあることから、一分金を埋納する風習はある程度広がっていたものと考えられる。

第2点として、墓坑群の性格であるが、DNA鑑定の結果血縁関係が認められることや、頭位方向や埋葬形態にまとまりがみられ、数集団による集団墓と考えられる。墓の埋葬形態などの共通性はこのことを示している。このことから、旅の途中で急死した身分の高い人であるという可能性はかなり低いものと考えられる。

こうしたことから考えられる被葬者像は、人骨から高齢の女性であるということ、一分金などの副葬品から経済的に優位にたった農民あるいは商人層であろうと考えられる。また、一分金を覆っていた紙に書かれた文字から識字層であった可能性もある。

前田洋子 1977 「柄鏡の変遷—古屋コレクション及び大阪府立博物館所蔵の資料を中心として」『大阪府立博物館研究紀要』第9冊

中野政樹 1973 「和鏡」『美術撰集』第7巻

東京都港区教育委員会 1992 「麻布本村町屋跡遺跡調査略報 安産社 三井家墓所の調査 安産社 近藤藤泉墓の調査」『港区文化財調査集録』第1集

東京都港区教育委員会 1986 「港区三田済海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書」

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1995 「宗玄寺跡」

6 長野県飯田市の石子原遺跡から出土した人骨と馬骨

奈良文化財研究所 茂原信生
群馬県立自然史博物館 姉崎智子

石子原遺跡は、長野県飯田市の山本地区の古い扇状地にある遺跡で、平成16年に三遠南信自動車道の建設に際して長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。この遺跡は昭和47年にも発掘されたことがあり、旧石器時代から古墳時代にわたる遺跡であることが確認されていた。本報告で扱うのは新たな発掘調査で出土した江戸時代の人骨と馬骨である。人骨を出土した墓坑は24基発見されているが、ある程度の形態学的な情報が得られたのは20墓坑である。

なお、いくつかの墓坑から発掘された人骨の間にどのような遺伝的な関係があるか、もしそれらが明らかにできれば埋葬や形態の分析にも資するところ大であると思われるので、これらの人骨のDNA分析を科学博物館の篠田博士に依頼した。これに関しては別項に掲載されている。

(1) 人骨について

人骨は、出土する寛永通宝や一分金などの副葬品により主に江戸後期(17～18世紀後半?)のものと考えられている。人骨は保存状態があまり良くないが、頭蓋骨が残っているものも含まれ、概観的な観察は可能であった。墓坑は確認されたが観察可能なほどの人骨が残っていないものもあった。なお、DNAの調査もあわせて行っている。

それぞれの特徴の記載を墓坑順にまとめている。なお、出土人骨の概要は第27表にまとめた。

S H 03 男性の幼児と推測される。下顎骨の一部と歯が残っている。歯は歯冠だけが残っている。乳歯が認められ混合歯列である。第1大臼歯(M1)が萌出しているので少なくとも6歳以上であろう。第3大臼歯の歯冠が歯槽内でかなり形成されているので10歳程度であろう。歯が比較的大きいので男性の可能性が高い。

S H 05 成人の男性と推測される。うつ伏せに埋葬されている。残存部位は、下顎骨を含む頭蓋骨一部である。第3大臼歯の萌出は完了しているが、あまり磨耗していない。顎の形状から男性と思われる。歯石がかなりついている。四肢骨では左上腕骨が残っている。

S H 06 歯冠だけが残存している。乳歯が混じる混合歯列である。性別は不明である。

S K 101 後頭骨の外後頭隆起部と頭蓋冠の一部の骨、ならびに5cmほどの四肢骨片が出土している。頭蓋の外後頭隆起はやや発達しているので成人であろう。性別は不明である。

S K 106 性別不明である。幼児である。頭蓋の左側頭骨錐体部と歯、ならびに部位不明の四肢骨片が残っている。やはり乳歯の残った混合歯列であり、第1大臼歯は萌出しているので現代人に照らして考えると少なくとも6歳以上にはなっている個体である。

S K 107 6～10歳程度の幼児と考えられる。残存する部位は、下顎骨を含む頭蓋骨一部である。歯は、下顎の右(DI1・2, DC, Dp3・4, M1)が残っており、やはり永久歯と乳歯の混合歯列である。第1大臼歯の萌出は完了しているが、第2大臼歯は萌出しておらず、歯槽内にある。第3大臼歯は歯槽内で形成中である。性別は不明である。

S K 109 歯の破片が数点残っているだけである。ヒトの歯であるが詳細は不明である。

S M 07 成人であろう。残存している部位は、左下顎骨と下左第2大臼歯・第3大臼歯である。ともにやや咬耗が進んでいて、一部が平坦化している。左右寛骨、右大腿骨近位部～骨幹部が残る。大坐骨切痕の大部分が破損しているため性別は不明。さほどの高齢ではない(やや高齢というべきか)。